
—蘇芳— (Caesalpinia sappan)

茜 新衛門

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

一蘇芳一 (Caesalpiniassappan)

【Nコード】

N0997X

【作者名】

茜 新衛門

【あらすじ】

地方で開かれたロックイーズン選抜大会で優勝したラティーフはレイステン都市の闘技場で選手として出場することになる。

ルーサーは敷かれたレールの上をひたすら走ってきている。

勉強に勤しみ身体を鍛え自分の見た目と添うように完璧に振る舞い演じていたが

国ではルーサーを帰国させる評議会は開かれず先送りにされ苛立っている。

レイステン市長に招かれたロックイーゼン競技会でラティーフを見て大ファンになった。

一途なルーサーはラティーフが選手生活を辞めたと知り、後を追いかける。

峡谷の町バッファロー

良く晴れわたった空の下。

いつもは村の子供の遊び場になっている広場にはごろ石に板を渡しただけの簡単な台ができて

迷路を作るようににわか露天が立ち並んでいる。

都会から遠く離れた山間の集落では月に一度の市場が村民の社交場でもある。

国の北側に聳えるカヤンデル山脈は氷河が溶けていく筋もの水の流れが岩と土を削り下へ下へと流れ深い深い峡谷をあちらこちらと作り、谷の僅かな傾斜地に点点と分散して人々は住み着いている。

比較的住人の多いバッファローの村では一ヶ月も前からこれまで村民が見たこともない珍しいポスターが市場の軒先の柱に巻きつけられて話題になった。

ポスターには都会で有名なロックイーズンの競技者が美しい肢体を跳躍させて見せ付け村人の目を引く。

バッファローではレースと言えばは牛や馬が時には鶏や豚アヒルがするものだと思っていた。

村人は人が走り飛ぶスポーツに驚きスカウトされる参加者を募ったポスターの噂はとんでもない速さで村から村に伝わり自他共に認めるすばしこい若者達が集まり市場を一層賑わしていた。

ポスターを貼った興行主オーケシユストはレイステンの大都市で有名な男。

土地の有力者をおだて上げロックイーズンの宣伝と選手獲得を約束し

ロックイーゼンに出られるだけの運動能力の有る人間を発掘するのを目的に来ている。

だが広い荒地と山並みを越えすぎて

人間のいない秘境にまで足を伸ばしたのではと後悔し始めてもいる。

確かに村長は絶景の美しい村だと電話で言ったが

絶壁の崖の道は緑色の苔に覆われて美しく、人が歩く場所ではないというのがオーケシュストの感想だ。

「顔は望んじやいねえ。必要なのは体力だ。跳躍力だ。瞬発力だ。パワーだ。こんな田舎まで来たんだ一人ぐらいましなのがいるだろう？はん？顔が良くて運動能力の優れた奴なんて都会にはごろごろいるさ、だがな奴らはすぐに故障しちまう。それによろ顔だけがい奴ってのはすぐに飽きられちまう。色々と普通なのから不細工なのまでいなきや顔の良い奴が目立たないだろう？まったくもってここには文明の利器ってのは無いのかね。サウナにでも浸かってる気分だぜ」

段々畑の真ん中に大きなキャンピングカーを止めて
ターフの影で折りたたみ椅子にふんぞり返って市場に来た人々をオーケシュスト等は見下ろしている

手持ち無沙汰を説明するようにじつとりと汗ばんだあごを拭い緑深い山並みをあきれ返って眺める。

都会に無い奇想天外の顔を期待していたのに集まったのは素朴で冴えない容姿を持った若者ばかりである。

オーケシュストの問いかけに取り巻きのひとり、ディレクターであるビルは愛想笑いを浮かべてうなずいて見せる。

選考会が終わるまでは自分の意見は控えているつもりだ。

左右の山が押し寄せている峡谷の中腹には珍しく平たい土地がありその一番上の見晴らしの良い場所に陣取って募集要項を満たした若者達の予選会を観賞する。

いまどき秘境に行っても猿人のような村人など望めるわけが無いとビルは思っている。

万が一面白い素材がいれば競技にメリハリが出来ると淡い期待もある。

しかし並んでいる候補者は誠実そうな普通の若者が緊張した顔つきで待っている。

ざわざわとしている人の固まりは道からはみ出るほど膨れ上がり、列の中を村長の手下が駆け回り必要な書類を提出させては書き足らぬ箇所を呼び戻しては尋ねて書類の穴を埋める・・・を繰り返している。

人の固まりは歯並びと首の太さ、身長で選り分けられて半分以上に減り、案内人の号令で百人足らずの人間が市場を突き切り段々畑の間をぬって登って行き

一塊にまとまると鋭い笛の音に合わせて駆け下る。

市場を一周して沢への道をひたすら全速力で駆けおりていった。

「おお。着物の裾を翻して走っていったな。磨けば光る原石が何人居るだろうか。これだけが楽しみでキャラバンについてきているんだが」

オーケシュストの言葉にかかるくうなづいて手元の書類からテントの中を吹きぬける風と峡谷の向こう側にビルは目を向ける。

村長の手下が泥だらけになりながら集めた書類を持ってきている。

谷は春を迎えて木々の緑が迫ってくるように美しい。

市場では沢に下りていった参加者に注意を払う者はわずかで皆久しぶりの市に集まってきて品物の値踏みに余念がない。

「なあこれもうちちょっとないか？あとな五本あればちゃんとまとまっって一つの瓶に一杯になるんだがな」

「すまねえな。今年の春はこれで精一杯だで。なんと言ってももう山族が下りてこねえからの話にならねえわ」

「そーいやあー最近姿見ないなあ」

「わしん所も欲しいものがあるだが。もう手にはいらねかなあ」

「うんだなあ」

二人の村人の視線の先は峡谷の奥。険しい山肌が連なりその奥に又ケラスの峰々が続いている。

恐らく山族の村はその向こうにあると思われた。

市場の喧騒に負けない騒がしい声が下の沢から大きくなってきている。

耳ざとく村長が、

「ほう！もう帰ってきたがや。早いがな」と叫び、

腕時計を見て満面の笑顔になる。

市場にいる人々は沢から上がってくる人影の登場を待った。

「何！もう戻ってきたか。おい又コーディネーターが走路を短くしてるんじゃないのか？」とはオーケシユスト。

テントの中で椅子から立ち上がったオーケシユストに合わせてビルやその取り巻きもぶつとりと絶ち切れた市場の端を見つめる。

参加者の身内の叱咤激励の大声がはつきりきこえる。

その声にひきつけられて市場の人々も手を止めて道路の縁を見つめ

ている。

人々の見守る中に先頭を走る農作業着の一人の女性が現われた。その後からつばを飛ばしながら声援している人が現われ一步一步と大地を踏みしめる足元の怪しい男達が駆け上ってきていた。

広場の中央の壇上に村長の手下に誘導され優勝した女性が汗まみれの顔を手で拭いている。

「あんた！いいね！一番だよ！」と村長の明るい声。
街から来たキャラバン隊に優秀な人材を提供できると村長は鼻が高い。

村長は参加者全員に順位をつけて戻ってきた手下に指示を出して小さな板舞台の周りに集めると
仰々しく一番に戻ってきた女性を横に村長は彼女の功績を讃えてこれからの可能性を繰り返し大声で力説した。

参加者が戻ってきたと同時にテントから出てオーケシュストが急場造りの壇上にあがると

上気した顔の村長が田舎臭い女性の手を取って万歳の音頭をとる。
それに合わせてオーケシュストも満面の笑顔で村長にお礼を言い市場に居る全員を、村民の全てを、そして女性を育んだ交通機関の乏しい峡谷を褒め称えるスピーチをした。

壇上では儀式として一枚の紙が女性の前に差し出されそれに女性がサインをすると村長はその書類を広場全員に見せるように高く上げて胸を張った。

オオーツという声と羨望のまなざしがその書類に送られ満足そうに村長と優勝者が壇上から降りると

広場に居る人間の関心事は又来年のコンテストの候補者に向けられ

ていた。

オーケシユストが村長との挨拶を終えてキャンピングカーに戻る頃には山の間にお日様が傾き始める。

「何とかまともな奴が居たじゃないか。田舎の雰囲気も存分に味わったし。次は何処だ？ 後何箇所回ればいいんだ」

キャンピングカーのステップを踏みながら後ろの秘書に尋ねる。車にエンジンをかけさせて革張りのソファ―に腰を落ち着ける。ベタベタしていた肌が乾燥していく。

秘書が日程を告げるとオーケシユストの愛想の良い笑はどこかに消えて、

一番に戻ってきた女性の書類と契約書を見て新しく編成しなおすメンバーの選考を始めた。

基本一チーム二十四人で（途中で八人に分けられる）最初は個人戦このときに個々の資質を吟味する。

次が総当りのリーグ戦。そこから上位八組をトーナメント方式で競わせる。それぞれを賭けの対象とし優勝チームのタイムを予想させるのだ。

オーケシユストは親の代から興行師で地方では古くからの家畜を対象にしたレースと賭博がありその一つを受け継いだオーケシユストは大都市で家畜を走らせるより人間を競わせたほうが金になると考えた。

それは個人技も見られればチームとしての団結力が必要になる新しい競技。

人数が多ければスターを作るのさえ難しくない。

幸い様ざまな競技で些細な故障で第一線を退く選手の多さが問題に

もなっている。

その受け皿にもなりえる競技ロックイーズン、闘技場のフィールドで繰り広げられる選手達の悲喜こもごもの葛藤を絶対に客は喜ぶに違いない。

選手も一年を通しての成績で高い年棒が決まる。

オーケシユストにとってフィールドの選手たちをスターにのし上げることは簡単なことで人気が出なければすぐに裏方に回すか新しい活路を（他のスポーツに戻す）提示してやんわりと退場を願う。

オーケシユストの手法は競技の解説者にスターにすると決めた選手を美麗美句で持ち上げて観衆のイメージを膨らませるにつきる。

一ヶ月を通して、半年を通して、そして一年を通してのスターを作り上げるそのシナリオが大切なのだ。

スター性を生まれ持ったスポーツ選手や努力と経験を積みファンを磁石のように吸い付けて行く様ざまな競技の選手と違い、確実にシナリを通り短期間でスターを育て上げることができる醍醐味を味わうとこの商売はやめられない。

どんな大衆の好みにもブームを作るのにオーケシユストは労をいとわない。

大衆は選手の汗とあわよくば懷に大金が舞い込むのを望み、さなぎから美しい蝶に変身する様を見たいのだ。

観衆の気持ちを煽るためには小さな仕掛けを作る。その作業には細心の注意が必要なのである。

興行主オーケシユスト

豪華なキャンピングカーのテーブルに広げた

紙の資料を反対側の椅子に放り投げ、

脇のパソコンを真ん中に据えてこれまで獲得した選手のプロフィールを画面に呼び出す。

小さな画像に眉根を寄せて気になる選手を何度も違う角度で撮った画像を大きくし見比べては次の選手のプロフィールに移る。

ピックアップした選手をチェックし並べ替えて表示させると満足な笑みがオーケシユストに浮かぶ。

「今年は大きく変動する。スターは決まった。夏から秋にかけての盛り上がりは半端ないぞ」

と、自分の言葉に酔いしれる。

「新人にいいのが居るんですか？それとも誰か又故障したんでしょうか」

オーケシユストとは逆の壁側に一人用の椅子で細かい箇所をパソコンでチェックしていたビルが聞く。

パソコンを閉じて顔を上げればにやけたオーケシユストの顔が目に入る。

よほど自分の立てた計画が気に入っているらしい。

「あいつ等の身体には強靱なバネと筋肉しか入っていないんだ。小さな故障ぐらいでびびるな。ありやお涙ちょうだいのパフォーマンスなんだ」

けられらと笑ってみせるオーケシユスト。

車内にはオーケシユストとビル以外居ない。皆移動準備にかかりきりで物資調達に奔走している。

パフォーマンスで故障する選手などいないと咽元まで出掛かるがビルは分別をわきまえてオーケシユストの機嫌を害う言葉は使わない。ビルはオーケシユストの指先でスクロールされる画面の具合で考えを読む。

早い、疲労がたまっている証拠だ。

これまでオーケシユストのシナリオにそぐわない選手は故障を理由に競技から遠ざける傾向が頻繁にあった。

気に入らない選手は何かと理由をつけてたとえば足の曲がり形が変だとか腕の筋肉のふくらみに異常があるとか他愛ないことで医療室に追いやり精密検査を受けさせるのだ。

その間に自分の思うようにレースを変えるのがオーケシユストの姑息な手である。

ロックイーズンの運営で何役も仕事をこなした中の、たぶん今のは観客側の気分で言ったものだろうとビルには思われた。

仕事柄選手を大事にしているイメージが強いのに今のオーケシユストの言葉はいただけないと心の中で反論した。

確かに商品としての一面はあるが運営者がそう言ってしまうと巨大なフィールドがクッキーの紙箱と同じレベルに思えてしまう。

ビルの冷めた目つきに気がつきオーケシユストは自分の言葉に人間味の無さに気がついた。

「サポート体制は万全なんだ君が心配する必要は無いって事。しっかりしたシナリオさえあれば誰も怪我などしないさ。そうだろう？」あまりに自分の作ったシナリオが素晴らしかったので人形のように動かしていたことがばれたのではないとビルの様子を伺うがビルはいつもと同じ人の良い笑顔に戻っている。

人間は態度が大事だとオーケシユストは思う。

言葉は正直に舌から滑り落ちてしまうがその後のフォロー次第でどうとでも受け取ってもらえる。

失言も身内のようなビルの前だと完璧に挽回できるのだ。現にビルの顔はにこやかな仕事モードに変わっている。

「そうですね。良いシナリオが思いつたのなら箇条書きで結構ですから書いてください」

このビルの言い回しがオーケシユストは好きだった。

オーケシユストが馴れ馴れしくしてもビルは節度ある態度を崩さないのだ。この関係は非常に仕事をする上でやりやすい。

「ライターに任せるのは七ゲーム分でどうだろう？後の三ゲームは通常の実況中継だけでガチでやらせるとかってのは迫力満点だろう。ふっふっこうなると解説者の力量が問われる」

素晴らしい思いつきのように一人悦んでいる。

オーケシユストは二人掛けの椅子に足まで乗せ腕組をした。

ピックアップした選手が走り回る姿を熱狂したファンが硬質ガラスを叩いている様子が目に浮かぶ。

「良いですね。ライターの候補は良いのが居ます。がずっとこれまではシナリオ通りやってきたので本物をそのまま言わせるとなると意外とアドリブが利かない実況中継になる恐れも覚悟しなければなりませんね」

オーケシユストににこりと微笑んでみせ会場の仕上がり具合に目を通す。

又砂のことでメールが来ている。

役所からは選手が万が一落ちた場合の砂の深さで折り合いがつかない。厚さ六十センチのマットレスを引くと最後にはある。

いつものことだが前回も前々回の答申にも同じことで回答したのに新しくファイルを作るのも時間の無駄で事務所に保存してあるファ

イルを転送するように指示のメールを出す。

ビル目の端ではオーケシユストがニューフェイスを前ににたにた笑が消えない。

「うゝゝゝん。やはり選手一人ひとりに面白いシナリオが必要」
と突然思いついたようにオーケシユストが言うロックイーゼンが始まった頃一人ひとりの選手にモチベーションを上げるためにもライターをつけたがシナリオの使用頻度が低く金ばかり使ったと言われた事を忘れていたようだ。

「時間のあるときにでも作ってくださいばよろしいですよ」
笑顔絶やさずにビルは言った。

シナリオを書くのが大好きなオーナーに頼むのが一番だとビルは心得ている。

実際はライターが全部手直しするがオーケシユストが手出ししていればその試合の結果はなんと言われようとも編集に時間をかければ最高に盛り上がり視聴率も取れる。

TV用に編集しすぎるのは良くないが、試合途中で怪我をした選手は競技場まで足を運んだ観客だけが知り、次の掛け金をかけるとき情報提供不足として何度もこの不平等を槍玉に上げられて居るがTVはショーとして観るものと主張するオーケシユストの意見が勝ち番組の最後で本日の故障者としてテロップで名前を出すことでお茶を濁している。

日頃レイステンで都市の役人や国の役人からの苦情、に対処しロックイーゼンを広めるため幅広くいろんなパーティーにも顔を出して多忙なオーケシユストが息抜きのためにこのキャラバンに参加しているのだがどうもその態度からだと思抜きというより、より以上にのめりこみロックイーゼンをショー化して高値をつけて別会社になん

売り飛ばす気ではないかと思えるくらい最近メディアへの露出度が激しい。

しかし故障した選手の賠償金額は大きいし、都市の条約、規約に触れていないか地域の住民に対しての苦情も全てオーケシュストは矢面に立ち裁判所から役所地元民の説明会にまで顔を出している姿は横についているビルが見てもロックイーゼンへの熱意で溢れている。この娯楽競技ロックイーゼンも何人もの政治家を抱き込んで始めた事業である。

興行主としての支出もかなりの額を出してもいるし政治家への献金も半端なく大きいこともビルは知っている。

目の前のオーケシュストを見る限り会社を売る心配よりもロックイーゼンの全てに君臨し牛耳るのが彼の最終目的ではとチラリとビルの頭をよぎる。

ビル

バッファロー地区優勝者ラティーフの名前が

プレロックイーゼン出走メンバーの中にアネルとして書き込まれ
中央の電光掲示板に華々しくお目見えしたのはそれから二カ月後。

ロックイーゼンの競技場はレイステン市に本拠地を持つ巨大なレジ
ヤーランドの隣にアスレチック部門を担当する円形闘技場として増
設された。

冬場には一般人に解放されて安全器具をつけたロックイーゼン体験
希望者が競技アトラクションを利用し
春から夏にかけては総勢二百人のアスリート達が難解なアトラクシ
ョンを個人のためチームのためにクリアしていく姿が見られる。

広い闘技場の観客席を埋め尽くすのは純粋に選手の躍動する肉体を
観賞する目的と

賭けた金が自分の予想通りにそれ以上に膨らむことを望んでいる人
間である。

ロックイーゼンが映像で放映されると地方にまで場外券売り場が設
けられ

闘技場の許可を出したレイステン都市、地方の市町村とオーナーの
オーケシュストとでこの競技のうまみを吸い上げた。

金のなる木だと解ると他にも様ざまな参入者、雑誌や新聞、関連グ
ッズ商品、主に公認されたブロマイドと際どいアングルから写され
た写真集も収入源となりTV画像の切り売りも多く出回って経済の
流通に一役買っている。

観客が最初に巨大な競技場を見上げた時に必ず目に入るように作ら

れた

電光掲示板の映像モニターを見て機嫌が良いのはーケシュスト。

足元から部屋の天井まで届く硬質ガラスの向こうに闘技場の全容が肉眼でも見える場所。

設置した全部のカメラの映像をも見られる特等室・主調整ルームの椅子に座りそっくり返っている。

見ているのはスカイカメラのリハーサルで映像が変わるたびに選手のいない壁を見ている。

「いいだろう、今年の新人は育てがいの有る選手が多い。このネーミングいい。やたら長いのもいけない短すぎるのもダメなんだ。ンフツ、ファンが勝手に短くして呼ぶのはOK」

外の電光掲示板と連動して動くホールの映像に選手の名前が順に映し出されるとフンふんと鼻息が荒くなる。掲示板の調子は最高にいい。

隣に居るビルはチラリとモニターを見て、からかって気になる短い名前を言ってみた。

「アネル？を短くしたら？？」

ビルは塗り替えた壁に変な影はないか切り替わる画像を見てチェックしている。

「そんなのはファンが考えるさ。Aから始まっているからってそれだから聞くな。素敵な名前の選手は何人も居るんだぜ」

アネルは適当につけらしいとビルは予想した。

オーケシュストの中ではニックネームで呼ばれる選手は全て決まっている。

本人だけがお気に入りの選手だけだが。

しかたなくオーケシユストの機嫌をとるために長い名前を選んで言う。

「レフティハルメス」

これは綺麗に言えるとビルは思う短くすることは無い。

嬉しそうにつぼにはまったオーケシユストが答える。

「レフティー！！いいだろう！レフティ~~~~って伸びる感じがいい！」

オーケシユストの趣味は一般受けするように考えているらしい。

「マルティンカウッピ」

これはビルにも解る。解らないのはなぜ後ろに変なカウッピをつけたかだが。

「マルティン~~~~」

金切り声で叫んでみせる。

名前だけで想像するのは悪いがかなりオーケシユストとしては力を入れてつけたようだ。

顔がいいだけでは人気者にはなれないのにとオーケシユストに見えない顔半分で苦笑してしまう。

「ミリーマキ」これもビルには想像できる。

「ミリィ~~~~」

と、どすの利いた男の声。

可愛子ちゃんを呼ぶ男性の野太い声を実演しているようだ。ということはかなり魅力的な女性に違いない。

さあこれはどうかな？と帰ってくる返答を予想して聞く。

「ナルバントグル」

これはナルと呼んでもグルと呼んでもぱっとしない。

「バントウ~~~~！~~~~んこれはちよつと無理があるな」とオ

オーケシユストの返事にこの選手は十人並みの顔の持ち主だと想像出来た。

オーケシユストは自分でつけた名前なのにそのときの気持ちが思い出せない。

ビルは疑問が浮かんだ。

「新人は皆この名前を気に入ったのか？」

と笑いながら聞いた。特に最後のナルバントグルは名前というには無理がある。

「さあ。ロックイーゼンのショーで使う名前だからどうでもいいんじゃないか」

涼しい顔で答えるオーケシユスト。まったく悪気がないだけ始末に終えない。

「そうか・・・」

無駄な質問をした。

今回はかなり新人に力を入れてシーズンを盛り上げようと考えていることだけはビルには解った。

掲示板には新人戦とタイトルが光り始めその下に並んだ名前の列はレイステンでは聞いたことのない名前ばかりだ。

そういえばオーケシユストの新しい彼女はトリンゼイ国の移民だと思ひ出す。

それで馴染みのない名前ばかりが浮かんだと思うと適当な名前をつけられた選手たちに同情する。

ミルレンブランド

こちらは選手の控え室。

プレロックイーゼンのために集められた中堅の選手と新人達がお互いの名前を覚える場所である。

緊張した顔で近づいてきた男に立ち上がり挨拶をする。

差し出された手と衣装の下の筋肉のつき方で中堅の選手たちは新人が何処でヘタれるかを予測出来る。

「ラティーフですよろしくお願いします」

近づいてきた男は美しい逆三角形の身体に緑のフルボディースーツ。

「やあ僕はジリアスク。ラティーフ？すまないがフィールド名じゃないね。君はアネルだ今日からアネルと呼ばれるから覚えておくように。オーナーの趣味なんだロックイーゼンだけで使う名前だと割り切ってくれ」

とジリアスクは片目をつぶってみせると

周囲の緑色のフルボディースーツ姿の数を手元のパネルにチェックを入れる。

これで同じチームの新人が揃った。ジリアスクがチーム全員と顔合わせを済ませてミーティングルームへと去っていった。

ジリアスクがアネルのそばを離れるとその後姿をじっと見つめて視線を下にやりほくそ笑む女性が居た。

女性は時々苛苛した目で周囲を見ては壁一面の鏡に写った自分の顔に気がつき

口角を何度も上げては可愛らしさを誰にとも無く振りまく。

確か控え室にもカメラがあり緊張した様子の新人達の顔色が放送されたこともあったと鏡から外した視線を床に向ける。

こうすれば顔に影が出来て不安げに映る・・・かもしれない。

アネルは何人かの顔見知りを探してみたが広い部屋に散らばっていて近寄ることが出来ない。

黙って足元の椅子の足だけを見つめるのにも飽きて顔を上げるときらきらした目がアネルとぶつかる。

アネルの運動能力を量り自分が上だと確信して隣の女性が声をかける。

一応同じ色のスーツ同じチームになる確率も高い。

「あたしきロックイーゼンの選手になりたいくてさ、憧れていたんだけど。この服とこの化粧は無いよね薄くない？身体のライン丸見えよショックー」

TVで見ていたときはウェットスーツのような丈夫な素材に見えた。

カウンター座席のように一本のポールで支えられた腰高い椅子にお尻の端だけを乗せて見事な脚線美をみせて居る金髪の女性がリラックスした表情で答える。

「あら会場に来ている観客になら私たちは動いている小さな色にしが見えなくてよ。期待していいのはTV中継だけど、よっぽど良い動きをしないと私たち新人は映して貰えないわ」と美しすぎる笑顔。今日のレースは新人戦でいわば新人のお披露目会だ。

誰に対してのお披露目かというと周辺の地域の住民とコアなロックイーゼンのファンに対するサービスである。

「本当？新人ってTVに写らないの？困ったわ私家族や友達に思いっきり見てって言って来たわ」

美脚の女性と自分とを見比べながらプロポーションで勝てないとわかると勝てる相手をアネルを見つめる。

大体アネルに声をかけたのになぜこの女が返事をしたのだと不服に思う。

他の新人に目を向ける。アネル同様緊張して固く口を結んでいるものが大半だ。

色分けしたスーツを着ている選手たちはざっと見ただけでは男女の区別もつかない。

大きく息を吐きながら背の高い男が会話に参加してきた。

話をしている二人は飛びつきり魅力的だ。

「一時間の放映だからな、俺達は集団シーンでなら写るかもな」と過去の放送シーンを思い出して見る。

新人はスタートから飛び出した色の集団だ。

「編集されるからね」と美脚の持ち主。

「えー！！ライブじゃないの。ずっと私ライブだと思っていたわ」尖がった口元が可愛い。

「ちゃんと書類を読んだかしら。木金は予選。土曜日が準決勝、日曜日が決勝戦よそれらを編集して日曜に放映されるのよ」

いらっとした気持ちを隠して微笑んでみせる。誰もが皆スタート前で緊張しているのだ。

「今日は木曜日でもプレオープンだからTV収録もないわよきつと」につこり笑って隣の飄々した顔を見るとなぜか安心する。まったくアネルは緊張した風情に見えない。

控え室の片隅でラティーフことアネルは近くに居た新人達との会話の中に居る。

長い髪の毛を頭頂部でまとめた美しい女性、本名ビーレル。

フィールド名をダンジェルマイア通称マイアになる予定の選手がチャーミングな笑顔のアネルに向ける。

幅五センチのチームカラーが鼻でばってんになったペインティングがなければ花がほころぶように彼女の笑顔は美しいに違いない。

笑顔に吊られて小声でラテイーフは聞いた。

「ここってそんなにすごいところなの？オーケシユストさんは楽しいゲームをしてみせて人間の運動機能の素晴らしさを世の人々に再確認させるのがこの趣旨だって言っていたわ。ロックイーゼンって新しいスポーツだって。違うの？」

ダンジエルマイアが答える前にミルレンブラントとオーケシユストに名付けられたミリーが含み笑いをかみ締めながら言う。

今は誰かと話しているほうが心が落ち着くのである。

「ロックイーゼンは人間のレースよ。ちよつと仕組みは複雑であたし達は賭けることが出来ないけれど今は16各国で開催されてる世界中で一番人気のレースよ。カヤンデル山脈から向こう側では別ね。あちらでは家畜なんかのレースが主よ。最初はねいろんなスポーツ業界の受け皿だったんだけど今じゃね・・単純な運動よりロックイーゼンのほうが認知度が高いのよ。うふん」

あたしはその中のスター選手になるの、とミリーは会話に入っている全員の顔を見回す。

ライバルになるのは色は違うがアネルの隣の女性だと思っている。他の男女は異常に胸郭を鍛えていたりとかかなり無駄の多いバランスの悪い身体付きばかり。

同じカラーのアネルはスタイルはまあまあだがほっそりした印象で頼りない。

「おれホイジンガー。ホイって呼んでくれそれじゃそろそろスターラインに行こうか」

アネルとミリーとの間に同じカラーのスーツの男性が割って入って

きた。

ビルがこの呼び名を聞いたらオーケシユストに再考求めただろう。残念なことにビルが目にするのは選手の本名であっても通称名は関係ない。ロッキーズン競技が始まりこのシーズンを無事に問題なく終わらせる事が彼の仕事である。

係員がスタートラインの手前で誘導燈をふって

耳につけたヘッドフォンの声を真剣に聞き右往左往して選手らに指示を出す。

「八番、七番、四番、違う！アマリジヨの周りばかりうろつくな！アスル・マリノ六番を前に、終わったらさっさと引っ込め！選手の最初の顔だぞ。ここをとっておかないと特番が組めない。足元の自働カメラ寄ってよって！目の動きを追って！そう！いいぞ！手足を動かしている奴も。そうだ！時間一杯撮るんだ。空中カメラスタンバイOK？頼むぜいいアングル狙ってくれよ」

矢継ぎ早に係員の耳にはディレクターの声が飛ぶ。

ミリーがアネルの横に立つとアネルの胸を見て顔をしかめる。

「あんたそれ本物？やだーかっこわるいいー」

「どうして？」

「ロッキーズンに胸は必要ないのよ。うふふ邪魔なのよ。ほら後で胸が無かったらッて思うことが多いわよウフン」

隣でフックスベルガーが女同士の鞆当に口を挟むべきか考え閉じるほうを選んだ。まだ軽口を叩き合えるほど知り合っていない。

「気にすることないわ。でも気をつけてねその胸が本物ならね」

何か含みの有る言葉を残してダンジェルマイアは笑った。

おっとりとしたアネルに同じカラーでもないのについつい声をかけてしまう。

ミリーが口元を引き締めるがすぐに左端に口が歪む。

胸は身体を鍛えれば鍛えるほど脂肪分は落ちてしまう。すなわちア
ネルの運動量はその程度と言うことだ。

同じカラーでもここに居る全員が一応ライバルである。弱点は早く
掴むに限るのである。

アルヴァー・ルーサー・フォルスストロム

セデル国レイステン市は千五百万人もの市民を抱える大都市である。都市を挟んで北と南には大きな工業地帯が広がりその賑わいを支えている。

もう一つの賑わいの源はレイステン都市が抱えるクスト湾。

クスト湾には多くの交易船が行き交いここから各国に向けての工業製品が送り出され入荷されるのである。

都市は空からも人を集めて内陸部に二つの飛行場を持ち航空機も人の流れを都市に集中させる要因になっている。

その集まる人間の数に目をつけたのがオーケシユストグループである。

オーケシユストグループはクスト湾の一部を埋め立て大きな遊技施設を造った。

それだけでは飽き足らず公的に認可された賭博とスポーツを掛け合わせたロッキーズン競技場をその隣に増設した。

人が集まれば金が落ちる・・遊技施設と競技場を取り巻くその周囲にはたくさんのホテルがひしめき立ち並び交通の便も無数に伸びて地下鉄の駅まで引っ張ってきている。

グループは市と協定を結び広大な遊技施設クストーランドと全天候型の競技場の間に緑豊かな広い公園も設けている。

公園の緑はロッキーズンで熱くなった観客の熱気を冷まして家に帰宅させるには丁度良い静けさを保ち公園を取り囲むように立ち並ぶ高層のホテルからは

昼間は公園の緑と湾の海の色の美しいロケーションを提供し

夜は港の奥に行きかえう船明かりと遠くに見える眠らない街の明かりが売り物になっている。

その絵葉書のような景色を独り占めにした、遠くから見れば尖がり屋根がシンボルのホテル・シュスターの最上階から豆粒にしか見えない人の動きを楽しんでいる人間が居る。

高所恐怖症の人間なら絶対に近寄らない

ガラス張りの窓辺に腰かけ地上を眺めているのはアルヴァー・ルーサー・フォルスストロム。

地上の喧騒から離れて広い部屋の入り口ドアのそばで立っているのが従者のフォークステット・テットと呼ばれている。

テットは年齢に似合わず地味な色のスーツで勤めである警備の仕事に徹し無表情を貫き通す。

「ストロム様・・・」

テットはこれまで同様に言い慣れた言葉を使い窓辺の青年の父親の名前の一部を口にした。

この言葉でテットは一日に何度も自分を戒めている。

声をかけられた青年は地上を行きかう人々から目を離さない。

ドアが閉じた音は聞こえているのにルーサーは完全にテットを無視していた。

忍耐強くテットは言う。

「フランスマン教授から伝言でございます。明日の授業を短くしていただけないかと。学会に行く準備をしたいのだそうです」

抑制の効いた声音にとげのある声が答える。

「学会？他人の事等何も興味もないくせに。大きな研究会にだけは顔を出しておかないと忘れ去られると思っっているのだろう。自分なりの証明もしてないくせに権威ばかりにしがみついている輩だ」

ルーサーのフランスマン教授への個人的分析である。

感情を表さない顔がテットを見つめる。

「あんな男の授業なんぞこっちからお断りだ。口先だけではフェルマーの最終定理を解くといっているが

もう歳だ。頭の中にはカビが生えている。代数も全部知っているのか怪しいからな」

と頭から数学会では有名な教授をこき下ろす。

ルーサーが誰をどのように酷評しようともテットは動じない。

「では社会学の後に三十分入れておきましょうか」

顔色も変えずに素早くルーサーは声を荒くする。

「断れと言っている。もう僕は大学の博士課程カリキュラムは終えている。これ以上詰め込ませてどの道に進めばよいのだ。生物学か医者になって欲しいか、細菌学者か、毎日菌の培養を調べて論文を出せばいいのか？もう充分だろうそれとも学士の資格しか僕は持っていないのか」

テットを嘲笑しているのか教授を嘲笑しているのか両方をあざ笑って口の片端を上げて見せる。

「それとも・・・まだこれからずっとあの男の卑猥な視線に耐えなければならぬのか。あいつの頭の中は夜の伽をする男娼の事だけ、僕を見るたびに妙な笑で僕からなにかを言わそうとするあの卑劣な男との時間などもういらぬだろう？テット・・・お前を見るあの男のこびた視線に気がつかないのか。いかにも僕とお前等が夜な夜な如何しいことをしているのを知っているぞと笑った卑しい目だ」

フランスマン教授が男色家なのは学会の人間ならずとも有名な話である。

そもそもルーサーが他国の人間であるのに面接だけで個人教授を引き受けたのはこれが理由だとルーサーもテットも周辺の人間ならすぐに理解できることだ。

運良くルーサーが母親に似て絵画のように美しい青年だったばかりにその知性ではなく美貌にばかり誰もが関心を持つ。

フランスマン教授も例に漏れず

出会った頃は少年だったが教授はルーサーを一目見るなり小声でス
ポルス・・とつぶやいた。

言わずと知れた美少年で有名な名前である。

教授の驚いた顔と赤らんだ顔は見なかったことにし、そしてつぶやいた言葉も聞こえなかった振りをしたがその場にいる全員が聞き逃さなかった。

美少年から美青年へと育ったルーサーに馴染み係としてテットは客を待たせることは教えていない。

「そろそろ階下におりませんとトーマスベルグ市長が待っております」

忍耐と節度有る態度・・これがテットの信条である。

「僕は市長の胸を飾る花か？僕は人の目を集めるだけの飾り物の役目をするだけ為にわざわざここから目と鼻の先に行く程度で正装してあの卑しい言葉を聞きながら歩くのか？その後は市長の家族と食事。」

次は？何処の王侯貴族がクストーランドに人目を忍んで遊びに来てるんだ。僕はそのたびあいつ等の飾り立てる花でなければならぬ

んだ」

苛立った目が冷たくテットに注がれる。

ルーサーの苛立ちはテットの苛立ちでもあるが二人でケンカをして
もこの場は始まらない。

ここは年長者のテットが二分・我慢すれば良い。

「参りましょう」

辛抱強くルーサーを促す。

長身のルーサーが窓辺から離れて動き始めると冷たい冷気が人間の
身体をもって移動する。

「くソツたれ！市長も議員も死んじまえ！偉そうに裏では汚いこと
ばかりして正義面して何が家族愛だ。スローガンに嘘ばかり掲げる
な。刺客も僕なんか狙わずあいつ等を殺せば世の中が明るくなる」

美少年スポルスと表現されたルーサーは口汚い言葉を吐きながら
棚から目の色と同じグリーンのスカーフを取ると器用にカラーの下
に巻きつけ横に結び目を置いた。

渋い灰色のスーツにスカーフは首元に良く映えている。

二十年ルーサーを見てきたテットはルーサーに同情しつつも気持ち
は顔には出さない。

ずっと彼には言い聞かせてきている。

ガイネス王国の準備が出来次第道は開けると。

エレベーターから降りるとルーサーは何事も無かったかのように
ホテルのエントランスで待つ市長に微笑んだ。

市長はあらゆるコネを駆使してパーティーにディナーにとルーサー

を招待したが

何かと理由をつけて断られている。

ルーサー達は逃げ口上も尽きてしまい特権意識の強い市長の招待を受けて開催式に同席することになった。

開催式典はVIPルームのバルコニーで参加し競技観戦の後市長の家族と共にホテルでのディナーが待っている。

ホテルの客が引きつけられる様にルーサーの歩みを見ている。

ルーサーが立ち止まり市長と話し始めると夢を見るように客もボーイも見つめている。

「トーマスベルグ市長、今日は忙しいお体を私のために空けてくださって嬉しく思います。楽しみにしてたんですよ。いつも競技の有る週にレイステンに居たことがなくて」

握手を交わした手をエントランスのドアに向けて市長をそれとなくエスコートする。

ここで立ち話をして何の实りもない。

満面笑みの市長は軽く背中を押されるまま雲の上を歩く。

「そうでしょう！そうでしょう！プリンスも若い青年の一人こんな面白い競技は滅多にない。老若男女全てが楽しめる我が都市が誇る娯楽です。今日はプリンスと同席して観賞できるなんて夢のようです。ああなんと美しいその微笑お写真や絵画では表現できない！あなたのご尊顔を・・・」

ドアボーイに軽く会釈をしてテット等警備の人間が先の歩道で目線でOKを出す。

なかなか進まない市長の歩みをもう一度速めるために言葉をかける。
「そこまでですよ。スタート時間が迫っています」
わずかに頭を傾けて市長の言葉を遮る。

ルーサーの容姿を褒め讃える言葉は物心ついた頃から数限りなく聞いている。

誰でも人は例外なくルーサーに見惚れる。

絵画の中の人物のようだ神話の世界から光臨してきた神の一人だと言った人物も居た。

外見の見てくれなどたぶんルーサーの母親が隣に居れば賞賛の声の半分は母親に囁かれたと思う。

残念なのはルーサーを生んだ母親はルーサーを産むため力んだのが元で脳の中の血管が破裂してルーサーを一目見ることもなく亡くなってしまった事。

当時王の愛人だった母は死んでから妻という位は付いたが後の冠は貰えず逝った。

王の正式な后となればその嫡男はそのまま王の跡継ぎとみなされるが正式な后に子供が居ない場合公平な詮議が評議会によって行なわれる。

ガイネス王国は似非民衆主義と王権国家とを併用し王を選出す際、慣習によって后の嫡男を選ぶ場合と嫡男が居ない場合王の血筋を引く者、

系譜に載っている者の中から様ざまな試験を行い秀でた王を選ぶ。

この方法は王族間の血縁関係を強固にすると同時に固執した一つの勢力を退け新しい風を吹き込む事で流れを活性化させる効果がある。

ガイネス王国を受け継いだ時王は将来自分の子供がこの椅子に座ることに疑いを持たなかった。

誰よりも賢く強靱な肉体の持ち主だったからだ。

美しい女性と恋をして子供を授かり後にはその女性を評議会で后に引き上げ順風満風の人生を思い描いていたのである。

VIPルーム

ロックイーゼンとは、あらゆる競技・・・陸上競技、格闘技、武道、などの戦いのための技術、術に秀でた者、並びに平和な時代に自己防衛や自己修練を積んだ人間なら誰もがこのフィールドで走る権利がある。

誰もが自分の得意分野で力を発揮すること勝利に貢献することが出来る、

多種多様な競技の第一線で活躍し小さな故障で第一線を退いた者、将来を有望視されていて才能があると認められていても大会に調子を合わせられず不調のまま沈んだ者などを救済するためにこの競技はある。と、役所や国に出した申請書には有る。

厳格な規律とスポーツをする醍醐味と感動を与えるという意義を振りかざして認可された。

実際には少ない掛け金で誰もが楽しんで出来る公共事業にして広く大勢の人間から金を集めるシステムがここに誕生した。

プレオープンはTV放送は無いがこれからのロックイーゼンを占う前哨戦だ。

ファンならば是非とも見ておきたい最初の個人戦である。

全身タイツに包まれたスーツ姿の身体を消毒薬のにおいの残る選手控え室から三十メートル離れた、車庫の出入り口のような傾斜のついた坂を上るとスタートライン。

選手が一同に並ぶとさらに天井やサイドの照明が明るくなる。ラティーフは目を細めて辺りを眺めた。

始め入り口近くのライトの向こう側にたくさんの色の波が見えそのうねりの一つ一つが人の顔でそれらが全て高台の出走口を見ていると分かったのは一人ひとり選手の名前が読み上げられている中盤。

そつとラティーフは選手の陰に隠れて前進し

左横の覗き窓からこれから駆けるアトラクションを見下ろした。

まばゆいライトの隙間に浮かび上がるのは波一つ立たない水面がギリと光って見える。

右に目を移すと手前の出走口から飛び出た後十五メートル真下の砂地に落ちる。こっちが最初のルートだ。

砂地を五十メートル駆けると振り返った壁が見える。

一般人ならばその手前に振り返った壁を見たら啞然とし立ち尽くすに違いない。

しかも背丈の三倍は軽くある。

その壁越しに空中に浮いたような円盤に飛びついて立てた丸太に太いポリウレタンを巻きつけた振動棒がゆっくりと動いている。

その後は・・・と見えているものとコースを頭の中で組みあわせているとスタートのサイレンが鳴り響いた。

市長を道路に残していきそうな勢いでルーサーは歩き闘技場に着くと待ち構えていた係員と

コンコースからエレベーターで直接VIP専用のラウンジを通過しVIPルームにアルヴァー・ルーサーとトーマスベルグ市長は案内された。

一般市民の目から隔離された一角には先客が居て飲み物を片手に談

笑をしている。

一人は市議会の議員であとの二人は大手企業の専務と親の金で会社を興して肩書きだけは社長の三人である。

「今入ってきたの・・見たか」好奇心旺盛の目が笑う。

褐色の髪の毛が飲み物を口にして新しい入室者を観察している。

「ああ、市長が珍しく笑顔で入ってきた。それがどうした家族サービスだろう？」

この男は市長の顔は確認したが連れまで見なかった。

「今日はちょっと違うらしい。あれは・・プリンスを連れている」親に会社運営の資金援助を頼みその資金も完済するぐらいの勢いの儲けがある男は事情通を気取った。

「プリンス？何処の？」

聞きなれない言葉に幾つかの有名な王権国家を思い出している。

「ガイネス王国だ。まあ王位継承権はかなり下だろう。こんな所にいるくらいだから」

実はそのガイネスに工場を建てさせて品物を輸入し儲けている。

「ガイネス？あの頑固者ばかりが集まっている国だな。この時世にあいつ等とは肌が合わないな」

市議会の議員は国交を結ぼうとしないガイネス国として知っている。

「フン、美人だ」

男の目は市長の連れから離れない。

「美人？」

プリンスには興味は無いが美人には一言挨拶を交わしたい。
プレオープンをわざわざ観に来るご婦人方は少ない。

「男でも女でも美しいければ全て美人というのだ。絶世の美人だ。市長でなくても口が開いたままになる」

オペラグラスを持ったままの市長は口を開けて隣のルーサーを見つめている。

「今度の国の予算案ではガイネスの武器を買うことに可決されそうだ。ガイネスのほら何とかって將軍と」

企業の専務になった男は国家の買物にアンテナを立てている。

「ああ有名な女の將軍か。確か・プラテアド。北の海にプラテアド軍あり手を抜かないからな、少しは手加減って物を知ればいいのに事前に申請した船、航空機以外は領海侵犯として追ひ払われるらしい」

「最近じゃすぐにその映像を公開するからこっちのほうも文句が言えない。扱いにくい国だぜ」

と議員の男。

「失敗したのか？」

社長は思い当たることがあるらしい。

「何が？」

質問をした男がどんな情報を欲しがっているか考えて返事をする。

「カット財団が着手したプロジェクトだよ」

と社長の男。

審議の中心人物ではなかったがうまみのある話だと興味があった。幾つもプロジェクトを立ち上げては横滑りに計画が売られていくのを何件も見ているが

横取りしたカット財団が自分の建設会社を総動員させて望んだだけにその結果に男は多少の溜飲がさがっている。

「カヤンデル山脈の地下資源開発か。荒地を五百メートル直下に掘って南に向かったが出てきたのは温泉だけ、暫らくその湧き出た水の勢いが収まるのを待ったがセイラー地区の湖の水量が減って湖の

底が陥没して坑道は埋まるし湖の水が無くなって地域住民がカット財団を相手取って訴訟を起こしている」

市議は終わった事だと簡単に情報を洩らした。

「地核は我々の方角に口を開けていたのか」

地質学者の意見を聞くまでも無いかと遠い目をする。
足元には宝は埋まっていないと確認しただけである。

「そういうこと。今朝のニュースにちょっとだけ扱われていたな。湖の底を元通りにすることとそれまでの住民の水を確保することを条件に和解したらしい」

「骨折り損か。本当にまだガイネスには希少金属があるのか？」

市場にガイネスが参入してくると厄介なことになると男は思う。
でもなぜ向こう側にあってこっちの麓には鉱脈が無いのかとまだ疑問に思っている。

「宝石の国ガイネスだ、カヤンデル山脈のどこかを掘れば少しは出てくるかもしれん。広大な未開拓地持って居る。うわさじゃ掘りつくして何もないって話になってる」と笑ってみせる。

その広大な土地にただ同然で工場を建てさせて安い賃金で働かせて儲けている。

掘るものがなければ地上を活用する。ガイネスの賃金はこちら側の市場の十分の一。

父親が買い付ける高額な武器の取引に乗じてガイネスで工場の新設を果たし

勤勉実直なガイネスの人間を使えば金儲けは容易い。

「おーお、市長の鼻の下。伸びてる伸びてる」

このまま話し込めば自分の金儲けのマジックを話したくなる。

咽元まででかかった言葉を飲み込み話の矛先を変える。

「ここじゃ市長が一番偉いからな」

チラリと赤ら顔の市長を盗み見て嘲笑する。

市長の手元の飲み物だけで酔っているのでは無さそうだ。

隣の美青年は脂ぎった市長の顔で見えない、残念だ。

「お、始まった」

美しい色とりどりの人形が横長の口からあふれ出てふわりふわりと落ちていく。

「今年は・・・お、好み！あの娘残ってくれないかな」
砂を撒き散らして駆け始めるる真剣な表情の選手たち。

「だめだめ！今年のスターはロホの彼女だ！絶対だ！」
もう美しい女性選手を見つけて口元が緩む。

「お前の予想は外れっぱなしだからな。うゝゝ、確かに良いプロポーションだな。どの競技から来てる？」

双眼鏡から目を外してVIP専用に配られたパンフレットを見る。
カラーで刷られた印刷物には配当の予想と大きなマルが幾つも書き込まれている。

「あれ？今回は個人名で賭けるのかか？やめとけやめとけて色で選んだほうが手堅いぞ」

この友人の予想は良く当たる。

隠れて個人予想で賭けることにしたこれは彼女へのご祝儀だ。

「そうなんだが・・・男はどうする？」

女性の場合は好みで決めるが男は印象が薄くいつも髪形で決める。

「ううんと・・筋肉のつき方からだとアスルマリノの奴が一番良さそうだ」

躍動する素晴らしい肉体美の中から引き締まった無駄の無い柔軟な筋肉をみつけている。

「どれどれ・・まあまあかな」

言われて探し出してみたが他の選手との違いは男にはわからない。

フィールドに走り出した選手に勝手な妄想と夢を抱き何かに追われて高い壁や複雑な骨組みの中をカラフルな色が通り抜けていく。

「今年は選手の当たり年ですな。なかなかいい動きの新人が多い」
目の前を走りぬける選手よりも隣のルーサーから市長は一瞬も目が離れない。

「そうですね」

市長から渡された無骨な黒い双眼鏡をルーサーは顔から離さずに答える。

空調で室内の温度は調整されているはずなのに
市長のシャツカラーは顔から流れ出た汗で濡れ
握りしめたパンフレットも滴り落ちた汗を吸収し
市長の席からは汗と香料が混じりあい嫌な臭いが漂い始めている。

プレオープン

色彩豊かな色の集団が触手を伸ばすように

灰色の壁の突起（ホールド）を掴み昇っている。

選手の足や腕がスライムの様に伸びては縮みぶつかり合い（実際にはぶつからないが観客にはそう見える）

一時も同じ模様にはならないが華やかで不思議な壁絵を作っている。

突き出た部分が五センチに満たないの握りを奪い合いたどり着いた頂上で

次に飛ぶ前のアネルにマイアーは声をかけた。

かけずには居られなかった。

「ありがとう、アネル、でもあなたベルデよ。いいの？」
と小声で。

マイアーは手を伸ばし掴もうとしたホールドを水色の選手に取られ左手右足だけ引っ掛けて宙に浮いた。

あと少しで壁の頂上というところだったから

ここで落とされては砂地からのやり直しはかなりきつい。

マイアーはホールドを取られ悔しくて惨めな気分になった。

右足の小さなエッジから離れて落ちる・・・と思った瞬間

マイアーのお腹付近にあるエッジにアネルが足を伸ばしマイアーの落下を防いだ。マイアーはアネルの足に右足を乗せ狙っていた上のホールドを掴み危機を脱した。

アネルは笑顔を見せて奇怪な人工的障害物までの距離を測りちらっとだけマイアーを見て

次のアトラクションへ急ぐ。

色の流れが坂道をボールの様に跳ね転がる。

ドンガと命名されたの壁をよじ登りまた急な下り・・今度はそのくだりを利用して小川を飛び越えて直立にたった岩肌に手足の指先だけ引っ掛けて昇る。

アネルとマイアー、二人は同時にそのアトラクションに取り掛かる。良いポジションをとろうと他の選手が次の岩に張り付き右へ左へと腕を伸ばしている。

「くっそーどけ！邪魔だ」紺色の巨体が器用に昇っていく。
負けじとアネルマとマイアーが後を追う。

マイアーの上気した顔がアネルに微笑む。

見晴らしの良い天辺では選手らが自分自身の息を整えながら作戦を立て、思い思いの場所でゆっくりと空中で動き回るアトラクションを見ている。

礼を言われたアネルは恥ずかしそうに笑いアマリジヨ（黄）のマイアーを見る。

「だって平和は友情、助け合いは人間の基本・・でしょう？」
やっとマイアーに答える時間が出来た。

マイアーのありがたいうの意味を込めた美しい微笑みを見ることがなくアネルはポジション取りに動いた。

アネルが言った言葉はロッキーズンの掲げるスローガンである。

岩肌を登り詰めるとくるくると回るコマが三個、地上十メートルの

位置で旋廻している。

「あれに飛び移るのね」隣に來たマイアーの言葉にうなづくアネル。付かず離れず二人はアトラクションをこなしてきた。

コマはモメンセ河の浮石を模している。

「助走をつけなきゃ飛び移れないぜ。邪魔だ！」

水色の男は次々と昇ってくる選手たちを睨む。威嚇もありだ。

数人の選手が目標を定めて飛び、コマの端に手をかけそくなって落下した。

落ちた先には土色の水が待っている。茶色の水しぶきが高く上がる。あの中に浸かると美しい色のフルボディースーツはその役目を果たさなくなる。

アネルも狭いコマの上に自分の場所を確保できるか一瞬考えたが旋廻してくるコマが目の前に來た途端跳躍してすぐにコマに飛び移っていた。

コマに足をつけると素早く反対側に回るとアネルと同じに潔く飛び移ってきた選手たちにぶつかるのを回避した。

コマはくるくると回り向こう岸近くまで來た。

次は半径二メートルの高いポール。さながら空中に浮かぶきのこだ。

数箇所取っ手のついた場所目掛けて飛び張り付くと取っ手の数だけ人数を感知するとポールはその場で回りだし選手を振り回し始める。回り始めたきのこに振り落とされる選手が続出する。

「フォーイ、今度はあの網の中かよ。おらよっと」

と、黄色のウェアの男は軽々と空中に浮かび四本の支柱に張られた大きなネットの中に落ちていった。

「フンッ！」とアネルも真似して飛んだ。

網の上を器用にアネルは歩いて木で作られたピラミッド型のジャングルジムに入り込む。

ピラミッドの天辺に設置されたパネルにタッチして入り組んだ木をかいくぐり、

ハンマー海峡と名前をつけられたアトラクションに足を踏み入れる。空中に十五センチ幅の橋が二本四十五メートルの長さで対岸に架かっている。

自分の体重と後からやってきた選手の揺らす振動を起用に利用して一歩一歩進み橋を渡り終わるとここからスピード勝負だ。

ジグザグに置かれたランプにタッチして落ちてくるハンマーの下を潜り抜ける。

ハンマーにたたき出されるとスタート地点の砂地に戻されるから大変だ。

ハンマー海峡の向こう側は当然海という設定で深いプールが待っている。

ここは高さがあり水に届くまで長いので耐空時間があり落下している間に回転やひねりを入れて個人技を競う。

プールの先には水中から気泡と一緒に大きな岩を模した突起が浮かび上がる。

岩と泡の水の障害物を乗り越えて海峡の高い岩壁を登り詰めるとラストランである。

見通しの良い平たい場所に高さ一メートル弱の障害物が五メートルおきに設置されて選手の行く手を阻む

地上を走るには全速力は出せないし障害物の上を飛ぶには目測を誤れば突起物の上に乗ってスピードがダウンする。

しかもここはだだっ広く他の選手の行動が全部視野に入るように作られている。

「ほうほう！今年の新人はいいのが揃ってる。そう思うだろうビル。よし明日の会議はランチと一緒にやろう。いいシーズンになるぜ！」軽くウインクをするオーケシユストにビルは笑顔で答える。

確かにスターを作るのはオーケシユストは長けているとビルは思うがあまりにシナリオを作りすぎて彼の押す選手はそここの人気しか得られない場合が過去には数多くある。

集中してこれ見よがしで画像を配信し名前を連呼してもファンの頭の中のストーリーは作れないし、オーケシユストの推す選手の名前を覚えるのは年寄りと子供だけだろうとビルは思う。

会場の嬌声の中、ゴールラインに一番で飛び込んできたのはミルレンブランドとミリー。

じつにTV映りの良い汗に濡れた顔で清々しい魅力溢れる笑顔が会場に設置された大画面で大きくクローズアップされる。

ミリーがゴールラインを踏むと赤外線で感知し天井から金色の紙つぶきが舞い降りてくる。

隣に居るオーケシユストに気を使って、

「決勝戦じゃないんだぜ」と小声で言う。

オーケシユストの今年の新人戦への意気込みはわかるが又アルバイトを雇ってあの紙つぶきを回収しなければならないと思うと気が滅入る。

会議

レイステン市の新しい名所になりつつあるのが
競技場から五キロ離れた場所に総合スポーツ施設である。

大きなスポーツ大会競技に向けて集中して練習を行なうために
埋め立ての際オーケシユストが進言してトーマスベルグ市長に作ら
せたものだ。

陸上、水中、水上、空まで想定した巨大な設備を整えたスポーツ施
設である。

各競技の選手たちは快適な宿舎が提供され

身体を整えるためと鍛えるための設備と事故を想定した医療設備を
兼ね備えた場所で

心いくまで大会に向けて身体を最終調節できる施設である。

スポーツ選手の育成に力を注いでいるという健全な施設と、

一般スポーツと違い特別な要素を持った、国公認の・・・賭け事の対
象になっているロッキーズンの競技者は一般施設利用者からは隔
離されて生活している。

公共賭博であるロッキーズン競技者に接触する

全ての人間、郵便物やファンレター、ファンからの贈り物

差し入れなどなど全てに厳重にチェックされ出入りする人間にも制
約がかけられ

当然競技者からの一般人への連絡は監視対象のトップに位置づけら
れ、

建物は厳重なセキュリティに守られて、徹底した管理がロッキーズ

ゼンの競技を神格化させ人気を集める要因の一つになっている。

施設は道路沿いの高い塀に金網にまきついた蔦が

二重にも三重にも膨れ上がり長い緑が取り巻いている緑の壁が突然切れ入り込んだ場所には

大きな巨木が左右に二本この施設の来訪者を迎える。

コンセプトは自然界との繋がり、を示し建物の正面には神々しい威厳を表現して作られた金ぴかのエントランス。

自動ドアが開き一步中に入ると真っ赤なカーペットが

樹木の幹と枝を表して各部屋へ赤く伸びているが二階から上が選手達に与えられた居住空間である。

カメラ片手に門だけを撮影して帰るファンが後を絶たたず

ファンが門の前で長居すると大木の陰に有る守衛室から大きな身体の警備員が

親切に選手の予定表を持ってファンの身上調査を始める。

他愛ない話から名前を聞き出し何度も通うようであれば

ピックアップされ要注意人物として名前が書き加えられる。

又宿舎から出てくるロッキーズの選手のペイントの無い顔をカメラに収めたいファンや記者は駐車禁止の表示を気にしながら周辺をぐるぐる回りシャッターチャンスを常に狙っていた。

三階から上は選手の個人用の部屋がある。

帰ってきたばかりのミリーは二階のラウンジは無視して部屋に入ると同時に携帯電話を取り出した。

ソファに座り込むと同時に最初の呼び出し音が終わらず出た相手に向かって微笑んだ。

「ハアアイー愛しいハニィー私の成績聞きたくない？そうよ私は一番で入ったのよ。最高に運が良かったわ。来月の本戦では今日の映像

が使われると思うから楽しみにしてね。映るわよなんたって一番よ！これで映さなきゃ私文句を言ってやるわよ。うっふっふっ愛しているわ、ハニィー」

言葉尻に甘ったるい含みをたっぷり乗せて言うのと相手も嬉しそうに愛してるよと返答する。

手術の途中だと電話の相手にもっと褒めてもらいたい気持ちを押し込めてミリーは携帯を切る。

出だしはまあまあだわ及第点よ自信に満ちた笑顔を壁に張り付いた鏡で確かめる。

何処から見ても完璧な顔、元々目鼻口と変則の三角形の位置にある、それが彼の手で何倍も魅力的になった。

コンコンとミリーの部屋のドアをノックする者が居る。

「フロステルだ。ラウンジに行かないか」

大勢居た選手の中で最初にミリーにちょっかいをかけてきた男だ。

「いいわよ」

男友達は何人居てもかまわないと携帯電話を閉じて可愛く肩をすくめる。

情報はあればあるほど良いと彼に言われている。最初の個人情報収集は彼から始めることにした。

「うふん。おまたせ」

選手が住んでいるビルから離れて樹木に遮られた場所にロッキイーゼンに関連する従業員並びにスポーツトレーナーが住む建物がある。

一階部分は会議室、地下にはセキュリティシステム全ての情報が集められているシークレットルームがある。

地下の区割りされた部屋にはこの大きな施設の全容が映し出された

モニタールームが次の部屋には選手の使う携帯電話通信で使われる電波は

ここを経由して本来のラインに乗る。

集積回路に集められた音声はスーパーコンピュータで分析される。たとえば言葉の中に暗号を隠して伝えたと選手と会話をした相手は五年間ロックイーゼンの掛札を買うことが出来ない。

ナチュラルな物を好むオーケシユストが室内をデザインした豪華な応接間はもとい会議室は

たっぷりあるカーテンの生地を湿気を含んだ生暖かい風が吹き込み重たいカーテンを揺らしている。

さつきメイク係に決めてもらったヘアースタイルが風に負けてオーケシユストの頭の地肌を見せている。

一人掛けの椅子に座り足を組み替えて揃った顔ぶれを一巡する。

「で、昨日の保安部の報告は。皆ちゃんと規則を守っているかな？ここん所は重要だから市の要望は健全な遊技場だ。些細なことでも市には報告しとかなきゃな」

部門別に二十人がテーブルに付き古いメンバーはスミスとビルとオーケシユストだけである。

実直な元警官だという保安部の部長は碎けた感じのオーケシユストの態度を完全に無視している。

背もたれに背中に預けることもなく前のめりで役所に出す予定の書類と同じものに目を通しながら報告をする。

古顔のスミスである。

「ええ、ではまず建物内で聞き取ったものを。選手同士の会話は他

愛もないものでした。通話は五十二件、今回の新人は通話回数は少ないようですね。相手のナンバーから割り出した職業と名前です。今のところマフィアがらみの人間は居ないようですね。気になる・・・というか整形外科医が一人。患者が縁で付き合った可能性もなくは無いかから、調べてみる必要がありそうです」

書類をオーケシユストのほうへ滑らせる。

保安部のスミスがコピーした資料にオーケシユストはざっと目を通すとオーケシユストの口元に下品な笑いが浮かぶ。

他人の秘密を覗き見る喜びを満面に出すオーナーに保安部長は沈んだ気持ちになる。

好き好んで他人の電話を盗聴しているわけではない。

オーケシユストの隣でちらりと笑い顔を見て不快な感情がわきあがってくるのをビルは押さえる。

「さっきのは注意事項に入れてもいいのかな」とスミスに尋ねる。

ビルの落ち着いた態度にスミスは気が弛む。大事な個人情報面白半分で見られたくない。

「んー、私としては入れたいのですが、如何でしょうか？」

とスミスはオーケシユストの隣にいるビルに安堵の笑顔に向けたが

その笑顔はオーケシユストがしっかり受け取って偉そうにそっくり返って答える。

「いいだろう！俺達が些細なことにも気を配っていると市長も思うだろう。まあ清廉潔白な奴なんか居やしないって、誰だって一つや二つ叩けば埃が出るってものさ。なあ」と軽くスミスにウインク。

便宜上の報告だと高をくくっているオーケシユストに
保安部のスミスは自分の仕事かものすごく軽く見られていると感じ
る。

ロックイーゼンが始まって以来十年、毎年恒例の行事として市民に
は受け入れられている。

他の競技熟練者からも羨望のまなざしで見られているのは
徹底した不正の管理と支払われる多額の契約金とが保障されている
からだ。

専門誌も多数出回り雑誌には必ず数ページは特集を組まれシーズン
が始まれば紙面を賑わすのがロックイーゼンの選手たちである。
闘技場で行なわれるドラマチックな戦略と選手のひたむきな汗と涙
が幾度も観客の感動を呼び起こしシーズンチケットは必ず完売して
いる。

スミスは誇りを持って不正と戦っているつもりだが
オーナーであるオーケシユストは体裁さえ整えばOKという雰囲気
で本当に役所との規約を念頭に仕事をしているのだろうか疑問に思
うことがしばしば有る。

ロックイーゼンの知名度が上がるたび土地の所有者である市と
認可した国、もちろん発案者でもあり主催者でもあるオーケシユス
ト等の懐は潤うが、
洗練された個人技とチームの団結力を前面に押し出し清廉潔白なイ
メージが売り物なのに
現実にはゲームをコントロールして大金を手に入れようともがいてい
る人間が後を立たない。

体育館

いつもは体操競技で使われるフロアがロックイーズンの選手で埋め尽くされている。

初日、競技を終えた選手には中堅の選手やトレーナーがついて各アトラクションの攻略方法である身体の使い方をレクチャーしている最中。

「まず最初、スタート直後の砂地の走り方だが無駄に力を使いすぎる。新人は皆そうだがあの曲面を登るために加速したい気持ちは良くわかるが。砂地を大またで走れば腰に負担がかかりすぎるしスピードも思ったより出ない。ならどうした良いか。カスティールとジリアスク。」

マットレスに座っているのは三人、後の六人は専用の折りたたみ椅子に腰をかけている。

「足腰を鍛える」

屈託ない笑顔がジリアスクに向けられる。

苦笑しながらジリアスクは目のきらきら光る可愛いミリーに移した。

「そうだ。それも正解だ。君はどう思う？」

可愛さ全開のミリーは自分の存在が充分にジリアスクに伝わったのを確認して答える。

「あたし？ あたしならいつもの歩幅より小さくするわ。ピッチを上げて駆け抜けるわ」

今年の新人は俺等の時と違うなど自信に満ちた目で見上げるミリーの魅力的な笑顔に見とれる。

「よし。いいぞ！ いいか背骨の軸を意識して太ももを上げるように

して走れ。蹴幅を変えると左右にぶれたりスピードが弛んだりと良いことは無い」

「それから次が意外と時間を食った場所だったな。ここでのロスタイムは個人戦では後の巻き返しも可能だろうが団体戦ともなるとちよつと辛い、二度も三度も駆け上ると団体戦では全員が揃わないといけないプログラムがある。君たちは優秀だから身体の使い方を見れば自分で方法を会得できるだろう。出来ないやつは個人的に俺カポールに言ってきたくれ。完璧に教えるから。じゃポール見本を頼む」

選手たちよりはるかに体重の軽そうな背の低いトレーナーが短い助走で壁を登り張り出した窓枠にぶら下がりマットレスの上に着地した。

その場全員の目がその程度の動きは子供にでもできると自信に満ち溢れた表情で見つめている。

新人レースが終り最初の段階で色分けされていた選手達が更にタイムで順位をつけられてチームの中でも三つに分けられた。

運動能力は拮抗していて分けた三チームに大きな違いはないと総監督は言うが歴然と三チームの差はあり優勝するチームは少し分析すれば予想が出来る。

長く活躍しているの選手ほどシーズンのシナリオを読み苦笑いしシーズン終りにある契約更新に上乘せが出来るようアピールできる自分の活躍場面多くすることを思い描き行動に移させた。

これは観客を喜ばせるショーである。

「悪いな呼び出して」

全力を出し切って疲れた頭で硬質ガラス越しの木々を見ていると身奇麗にしたジリアスクがラティーフの前のいすに腰を落とした。

「チームとしてはいい結果を出したな。まずまずの成果だ」

「その・・単刀直入に言おうミリーの事はどう思う？あ、答えなくとも解ってる君の日頃の態度を見れば

仲間として申し分ないと俺は思う。だがなもつとそのミリーを盛り立ててくれないか。彼女はベルデのスターだし見せ場を作って欲しいんだが。たとえばだが彼女の得意な場面では補助としてそばに寄らないで見守るとか。カメラの角度を考えてミリーが崖から落ちる時は他のチームの選手をさりげなく移動させるとか。君にならできるだろう？」

ジリアスクの言わんとしていることは解るが競技中にはかなり無理がある。

「補助が必要ないなら・・そうですね離れた所から移動します。崖の上では他の選手を押し回すのは不可能に近いと思いますが」補助をしてくれと言ったのはミリーからであってラティーフが進んでやろうと言ったわけではない。

「そうだな。これは例えだよ。君は目が良いからカメラの赤い作動ランプが見えるだろう。そのときは出来るだけ彼女をカメラの前にやって君は映らないように心がけてくれればいいんだ。チーム一丸となってミリーを押しで行こうと思ってる」

晴れやかに言うジリアスクに無理に作った笑顔で答えると「うだけの事は言ったとばかりに颯爽と立ち上がった。」

「明日又体育館で動きをやってみよう」と去っていった。

いつも全員集まる時には細かいことは気にするな全力で行こうとだけしか言わないのに
終わった後はちくちくとメンバーを呼び出しては個人的な動きを注意する

それがリーダーの役目だと思っている。

競技が始まるとロックイーズンを理解していない新人と

そろそろなんとなく胡散臭さを感じてきているがまだ勝負にこだわっている中堅の選手達とが

熾烈なトップ争いをフィールドで行ない、アネルはオーケシユストの思惑通り人の良い性格のままリーダーの指示通りに動いている。

ある日希望する者だけが集まった体育館では見本演技をするラティーフの周りに人だけがある。

「アネルもう少し解るように教えて」

そういつて食い下がるのはダンジェルマイア。

プレオープンからアネルの動きが気になってしょうがないマイアは試合が終わるたびアネルを通路で呼び止めてはアネルの解説に耳を傾けた。

最初何を聞かれているかわからなかったアネルも

素直なマイアの問いに答えられるようになり言葉で解らないものは実際に動いてみせ、向上心の強いマイアは貪欲にアネルの動きを少しずつ会得し

ロックイーズンの見せ場を作るため自分の運動能力の限界に挑戦していた。

美の女神のようなマイアーが食いるように見つめる。
その真摯な姿に皆見惚れている。

「落ちる時には砂地に向かって足を踏み出すの」

もちろん身体は引力に負けて何もせずとも砂地に引き寄せられるが。

「イメージは壁を歩く・・かしら」

通常の一般的な運動能力の持ち主は想像はできて

無理があると解るがアネルはそれを瞬時にやっているから誰も異論は唱えない。

「真ん中ぐらいでひねりを入れて、壁を蹴って着地・・逆だわ壁を蹴ってすぐにひねりを入れるの」

自分の動きを言葉にして解説するのは難しい。

「地上では無理かもしれないけど。見てくれるやってみるわ」

マイアーが集まっていた選手達の間をすり抜けて広い床の端に立ちダット十メートル走りタンブリングをして空中高く舞い上がり着地した。

「うーん今のはサルトパスだな（ひねりを入れない）マイアーが望んでいるのはツイストパスだろう」

「俺は床の上ではやれると思うけど、落下している途中ではそれも真ん中まで来てやるのはちょっと無謀過ぎやしないか？」

リドイは誰よりも目立ちたいのでアネルと違う回転を入れた降り方をする。

アネルに見えるようにマイアーは左の端から又走りタンブリングにひねりを入れる。

マイアーは大技よりも小気味良い切れ味のシャープなひねりを入れた着地を好んでいる。

これはマイアーだけが気がついたことでは無いが壁を走り中間で蹴りを入れることによって

着地が早くなりしかもひねった勢いで両足着地ではなく片足が下りた時点で

もうすでに走り出しているというマイアーに言わせると完璧な形なのである。

「今のでいいけど、出来ればせつかくのひねりを入れた勢いをそのまま使うために、回転軸を足に持ってきて身体が倒れこむようにしてみて。自然とどちらかの足が前に出るはずだから」

五十人近い選手達が見守る中晴れやかな笑顔がアネルに向けられるが

笑顔はすぐに遮断されてマイアーに魅せられた男女がピンク色の言葉の口にする。

「綺麗に決まったね。でもさもう少し体の力を抜かないといけないね。これって結構身体に負担がかかる。後で疲れるの嫌だろう。だからさこの場合・・・」

熱心な目がマイアーだけを見つめる。

「いいねいい動きだよ。天から降りてきた女神みたいだよ」と賛辞の声。

「最高だね。出来ればもう少し腰を落とせばパーフェクトだ」満面の笑顔でマイアーを見つめる。

「次にあたしが見てもらおうと思っているけど、先に完璧な演技みせられるとやりづらいわ」

とミリーマキ。

「そんなことないわ。私ちゃんと出来たなんて思っていないわ。アネ

ルにまだ聞きたいことがあるの退いてくださる？」

三重になった円の中心がラティーフに向かってが動く。

忍耐強くマイアーの崇拜者に邪険に扱われても

この場は怒り出すことも逃げ出すことも出来ない、

マイアーの顔が見える位置または声が聞えるまで彼女が近づいてくるのを辛抱強くアネルは待つ。

鉄女 バラデール將軍

モラド半島の気候は暑さ寒さの気温の差はあるが一年間の雨量は少なくカヤンデルの麓以外は広い半島全土が乾燥した荒地と化したままだ。

バラデールは窓の外に広がる薄茶色の砂漠を見ている。

モラド半島にプラテアド軍が本拠地を構えて百年を過ぎるというのに目の前の大地は緑に潤ったことが無い。

カヤンデル山脈の恩恵は視界の範囲にはないけれど乾燥した土地が宝を吐き出し希少金属の鉱脈にもなっているのは皮肉だ。

山側の傾斜地から引いた水路に添って土地の色と同じ屋根を持った工場が

砂漠と同化して地平線の向こうまで並んでいる。

ガイネスの歴史は西のプラテアド半島から始まった。

山肌に露出していた宝石の原石を研磨して北の港で売買したのが始まりだ。

船は他国の珍しい品々を積みこぞってガイネスの美しい腕輪や首飾りなどの宝飾品を求めてきた。

宝石の国ガイネスとして諸国に知られるとその宝石を独り占めしようとして幾たびか他国の軍隊が送られてきた。

モラドが武器を生産するようになったのはプラテアド半島から上陸した侵略者に虐殺された事から始まった。

貧弱な武器しか持たないプラテアドの一族は港を離れ

カヤンデルの山脈の奥地から隣のドラドへ逃げ
ドラドの一族やブランコの一族に助けを求めプラテアドを何度も奪
還した歴史にある。

惨殺された記憶はガイネスを内に閉じこもらせ他国との国交を禁じ、
近代化する諸国を尻目にガイネス独自の政治や文化を今日まで推し
進めてきている。

一切外部の情報は国民には入れず一部の者だけが諸国に目を光らせ
て監視し

近代化の流れを読んででは対処してきたがそれも限界が来ている。
時の流れはガイネス一の都だったプラテアドを以前の住民の三分の
二にし

半島に残ったのは港を守る僅かな兵士と漁民が住む街に変わってい
った。

近代になると産業はモラドへ移行して誰もプラテアドに見向きもし
なかったが、

外貨を稼ぐためにもプラテアド一族の一人サガモアが審議にかけ
朽ち果てた都に手を入れてホテルとして整備し観光事業を始め、
当初は諸国の王侯貴族だけに限って上陸を許していたが

儲かると解ると外洋船や大型クルーズ船の寄港を許可するとサガモ
アの懐は多いに潤っている。

新しい情報はプラテアド港に航海して来る観光船からも齎される。
情報は口から口へ瞬く間に広がり違った方向性を持つ。

それを修正するために何度も会議は行なわれ近代化した情報機器を
ガイネスにも取り入れもした。

国民の要求に役職の決め方も公開されたが国民がその役職につくこ
とは難しく

富のある者だけが出題される問題を解くことができ、たとえ民が試験を高得点で通過しても適正試験で一般民は落とされる仕組みがきちんとして用意されてもいる。

それが国民の不満でもある。要職は古くから支配してきた七つの部族間でだけで回っているに過ぎない。

インターネット情報の中では海の向こうの国々の人々は王制に反対するデモや軍国主義に対する怒りが爆発してクーデターなどが勃発している事をガイネスの民も同時期に知る事が出来る。

これまではガイネス国民はは統制の取れた発信源を信じストライキ一つ反旗一つ翻ったことが無い。

選別された電気機器はガイネス中に設置されたが国民には不評だ。

外貨獲得のために始めた観光船事業はひなびた港を三百年前と同じく活気ある風景に戻したが

そこで働くガイネス国民は世界情勢を知るたびに複雑な思いに駆られる。

水力発電で出来た電気は一番端のモラド半島に届けられプラテアド軍の兵器の為に使われる。

一般家庭に電力は使われず天然ガスだけがかるうじてきている。

ネット画面で見る他国の街並みは明るく美しく一方ガイネスは街灯はガス灯のみ

夜仕事もガス灯の明かりの下で行なうから

部屋の一角だけが明るく町全体が明るくなることは無い。

それがよいと観光客はこぞって寄港許可を申請しているのは皮肉という他ない。

百年の間に工廠は産業になり精密機械となった兵器を敵国に売りつ

けるまでに成長し、

国を挙げて兵器を作り上げ衛星を打ち上げて

世界中を監視下においていることなどガイネス国民は知らない。

国家間では内密に兵器の売買が横行して各国のバイヤー達は増え続け百カ国を越えた。

若干十八歳のバラディールを軍隊に引き入れたのはシャルボニエ將軍で

將軍が引退したのがきっかけでバラディールはプラテアド軍の將軍としてトップの位置に就いた。

齢五十四歳の今日まで鉄女將軍と影口を叩かれながらその采配にどの一族の長も一目を置く。

鉄女將軍が一番信頼しているのはサガモア王で若いバラディールの突飛な行動を

他の一族が非難する中、必ず言葉を尽くしてバラディールを援護した。

そのサガモア王も指針を何処に置けばよいか混乱している。

農地も放牧する家畜も無いモラド半島の人間には軍人になる以外出世の道は開かれては居なかったが

僅かな期間でガイネス一の金持ちになりその構図を作ったのはバラディール自身である。

膨れ上がったバイヤー達を前に緻密な情報を腹に仕込み

恐れおののかせて交渉の場に立ち会ってもいる。

成金となり七部族を牛耳ってはいるものの国民からの信頼度は無い。国民は世界にも例を見ない馴れ合いの試験制度の王族を軽視し国民が決める民主主義を望み始めその声がバラディールにも届いている。

国を守るといふ正義感の塊であるバラディールは突っ走ってきた人生を振り返り憂いて居る。

ポスター

近代的な開閉式の屋根を持つ円形闘技場は厳めしい外見に似合わず一歩中に入れば豪華な広いエントランスが来訪者を迎える。

競技場へは中央の二股に分かれて上に伸びる大階段を上れば人工的に作られた岩肌を模した壁と配置された植物によって鬱蒼と草木の茂ったジャングルを連想させる通路に出る。

空調で足元から風を起こし木の葉がゆれると気分は一万年も昔に闊歩した原人の気分をここで訪れた者に味あわせる。

しかし競技は先週に終り競技場は屋根裏バルコニーの見学通路を行き来するのみである。

したがって観光で立ち寄ったファンは豪華なエントランスに設けられたグッズ売り場と各チームに色分けされた選手のパネルを見学し設置された椅子に座り

週末に行なわれた競技の点数表が電光掲示板で流れる横の大画面の中で跳躍する選手の必死の形相を羨望のまなざしで見ている。

ベルデのミリーのアップの次にはアマリジョのマイアー、ロサのレフティーと人気者が次々と出てきては変わる。

来シーズン活躍する選手をファンは賭けシートを片手に次の予想を練るのも楽しい作業である。

閉館時間が近づくとは大勢居たファンの数も減り始め、入り口横で待機していた警備員は変な忘れ物がないか順路に添って歩き、

中央階段横の透明なアクリルボックスの前で一人身なりの良い青年に気がついた。

警備員は熱心にポスターを見ている青年に声をかけた。

「毎年恒例の行事だ。せっかくだから好きな選手の箱の中にその用紙に住所と名前を書いて入れておくといい。確率は低い但最终日まで夢は見れる」

元氣を出しなさいと言警備員は付け加えたかったが余計なお世話だと自分に言い聞かせた。

青年が暗く落ち込んでいるように見えたのは消え始めた照明のせいかもしれない。

最後の締めくくりの催し、

ロッキーズンファン投票で選ばれた二十人がチームカラーのペイントの顔で

笑っているポスターの前でルーサーは足を止めた。

壁一杯にロッキーズンの選手がポスターの中で真剣な表情でこちらを見ている。

大画面ではカラフルなフルボディースーツが流れるように水の中に沈み崖を登る。

最初初めて競技を見た時その間中ルーサーの胸は早鐘のように打ち、一人の選手だけを見つめていた。

興味は憧れに変わり二年後には熱狂的なファンの一人になっている。

ルーサーはついさっきレイステンについたばかりだ。

トランクを部屋に放り込み窓下に見える競技場にふらふらやってきている。

フラフラの理由は先月の議会で評議会が又延期された事。

これで次年の議会まで待たされ、

議会で選考会は必要無しと判断されれば又先延ばしされる可能性も出てきた。

ゴールの见えない試験勉強がずっと続くと思うと憂鬱になってくる。

ガイネス国で生れ落ちセデル国で教育を受けているルーサーは物心ついた時から知識を詰め込みに西に東にと高名な教授に指示を仰ぎ

このままどこかの大学院で研究に勤しみたいと思ったことも二度や三度ではない。

ガイネスに帰るという思いを断ち切ることはルーサーについてきた侍従の希望をも断ち切ってしまう事になる。

侍従は家族を残してガイネスを出、二十数年一度たりともガイネスの土を踏まず、彼らの役目であるルーサーを一人前にして立派な皇太子候補に仕立て上げることに進んできた。

できればルーサーとて皇太子になって彼らの地位を上げ一族全てに恩恵与えたい。

侍従一族といってもとうの昔に本流から外れて何の役職も与えられていないので、

ここで奮起すれば系譜にもぐりこめ将来自分達を

踏み台にして一族の名人間を他に知らしめる才能が現われる。

皇太子を選抜する評議会が後回しにされている理由は世界の国々とガイネス国のギャップ。

ガイネス国民は世界に目を向けだし様ざまなことを限られた映像の中で知っている。

知りたいという欲望は日に日に増して

書物から得た知識よりも実際に現物で見る知識の違いに驚愕している時期はとくに通り過ぎている。

一部の者だけが特権として外遊している事実が国民にも知れ渡り

ガイネスの王族の信用度は年々低くなる一方である。

一時は世界に類を見ない試験制度で優秀な人物を選出し地位を与えているのだという説明で理解を得たが長年続く七つの部族間だけの試験制度など

馴れ合いと暗黙の了解の中、試験の結果も公表されず

国民の知らないところで役職の授与式も終わることなどから不信感の芽は摘み取れない。

統制の取れていた七つの部族間の間にも貧富の差が歴然と出始め力の無い部族の代表は国の行事ですら決まった日にちを主張できず裕福な部族の言いなりになっている。

そのとぼっちりがルーサーがガイネスに帰れない理由だ。

侍従の心配顔が目の前のポスターに代わると不思議と心が落ち着き勇気が胸の底から湧き上がってくる。

落胆した気持ちを奮い立たせてくれているのは実際には会ったことも無いスター選手。

ペイントが大量に塗られた顔にありがとうといって警備員に追い立てられている人混みと一緒に闘技場をルーサーは出ていった。

フォークステット

ホテルの最上階ではテットがクリスを捕まえて怒りをぶつけている。

「又キャンセルだ！これで何回目だ。好きな学問だけは寝ないでもやるくせに、やらなきゃいけないことはここ二年間、一切やってない！一体どうなってやがる！歳をとればとるほど馬鹿になってやがるぜ！」

積み上がったトランクを前にして腕組をしたままテットは突っ立っている。

「反抗期なんだよ」

小さなトランクをクローゼットに運びながら苦笑してクリスは答える。

「今頃か！今が思春期か！」

と吐き捨てるようにテット。

クリスは一番大きなトランクを前に中身を空けるかちよつと悩む。止めて置こう。中身はルーサーの嫌い服ばかりである。

「彼は良くやってきたよ。僕等の言うことは全部こなしてきたじゃないか。そうだな、原因は評議会が延びたせいだろう。テットだって評議会が延びていなければそんなに腹が立たないだろう」

期待が大きかっただけに評議会が開かれないこはがっかりした。

クリスもこればかりはどうすることも出来ない。

国を出たときは二十歳になったばかりのテットを筆頭に全員十代の

若者だった。

あのまま国に居れば船大工として登録し上級試験を経て処遇の良い地位を得ようとクリスは勉強に励んでいたと思われる。

思い詰めた表情のテットの父親から話を切り出されて、道場に通っていた皆の人生は大きく変わった。

プラテアド一族の外戚であると父親はテットに明かし嘘のような任務をテットに頼み込んだ。

師範代になったばかりのテットは突然降って湧いたような話しに胸躍らせ道場の若者を引きつれ見たことの無い他国へ旅立ったのである。

絶対無二の使命はサガモア王の子供の命を守ること。

テットの祖先のように一旦系譜から外れた人間が

本家に戻るのは難しいが今世紀は才能と実力が物を言い、

ルーサーと共にガイネスを後にした男達の願いは未来永劫にまで約束される地位にある。

ガイネス国に戻りたいという気持ちはあるがテット違いクリスはプラテアドの一族とは何の係わり合いも無い。

ガイネスの一般民は百年前の手工芸の世界が続いているセデル国では少数になった徒弟制度も当たり前である。

そもそも娯楽と呼べる施設は無い。

世界中衛星で会話し航空機で行き来し隣国が近く感じられる近代国家だというのに

ガイネスの通信網は百年前と同レベル。

近代通信機器や航空機は軍隊のみが使用し、

民間人の移動は最近になって復旧した電気自転車だというお粗末さ。石工が石を切り出し木の枠組みで建造物が出来上がる。

生活に電子機器が不可欠なセデルと電子機器をまったく信用していないガイアス国民には

百年の文明の開きは酷すぎる。

クリスも車の免許を取り車体の整備も免許を取得しセデル国に放られても食っていくだけの技術は身につけたがこれはガイネスでは役に立たない。ガイネスは車社会ではなく自転車社会なのである。

故郷に帰りたくもあれば帰りたくもない、故郷で育った年数よりも他国で過ごした年数が上回って離れすぎた故郷を思い出す日々は確実に減っている。

小脇に抱えた手帳を指で弾き口を結んで怒りを示す。

「そうかもしれん。だがな最後の詰めはしっかりとしていなくてはならん。最後で投げるとは言語道断やるべきことはまだあるのだぞ」母親のように接するクリスが悪いとばかりに顔を睨みつける。甘やかせやがってと顔で言う。

サガモア王は王に就任した日に二十二年後に評議会を開くと満場一致で決めている。

各部族それを目標に幼子の優劣を見極めこの子ならと教育をし育てていたのに裕福な部族の子供がその知識を身につけていないのか、身につけていても年齢が達していないのかは定かではないが有無を言わずに来年に持ち越されている。

ガイネス国を出てから暮らしが蘇って来ては消える国の未来を荷うためといわれてきたが、その未来が本当にやってくるのかガイネス以外の国々は国民が決起し国を変えようとしているそれを目前に見ていると小さな個人の努力で知識を詰め込んだとて国を動かす力など到底出来ない。

テットの怒りなど慣れたものだ。いつもテットはルーサーの居ない所では愚痴っている。

「教授の評価が悪かったのか？何処か身体の調子でも悪かったかな。俺達は男所帯だ少しはルーサーに気を使わなきゃ彼は繊細なんだ」

優しいクリスは待ちぼうけを喰らったルーサーが可哀相でならない。

不満顔のテットは、宥めようとするクリスに反抗的な視線を送る。

「この俺と手合わせして三回に一回お情けをかけて勝負を譲る奴など繊細な気持ちなど無いわい」

週に三回、運動もかねて道場に通うが師範のテットの腕前はさび付いたのか

成人したかルーサーに勝てなくなった。

「プッ、全敗か。テットも歳だな。わりいわりい本気じゃない！一度他流試合を申し込んでみないか俺達も鍛えないとまずいだろう。そうだなレイステンには何箇所か良い道場がある今夜辺り行こうや、あ、女はダメだぜこっちの女は鍛えるって事を知らない腑抜けでふにゃふにゃだ早くガイネスの女に会いてエ」

女の話が出るとテットは怒りが半分に減る。

当に嫁を貰う年齢は過ぎている。

「人通りが少ないと思ったら今日はやってないんだな」

公園にはロックイーズン関連のグッズを売る露天が少ない。

「何を？」

怖い顔のテットは下界の事には関心が無い。

「ほんとにテットよ、遊びの一つでも覚えて帰ったほうがいいぞ。そんな顔していると女にもてないぜ」

「ルーサーのように目の色を変えろってか？出来るか！」

吐き捨てるように言うテットにクリスは笑いをこらえた。

テットが女性歌手やモデルに夢中になっている姿は想像できない。なのでいつか・今夜にでもテットのファイル置き場に美しい女性が満載の雑誌を置いて観察してみるのも面白い。

「お前、ガキのようなことをしたらただじゃ置かないからな。あの闘技場に放り込んでやる」

テットはクリスが何を考えたの想像がついたらしい。

「え、なんで俺がああな競技場のことを考えたのか解ったんだ？　すごいよなこの国は何処へ行ってもロッキーズンの話をすれば友達になれる。俺らの国にも競技場が一個は欲しいよな」と誤魔化す。

テットは無駄に勘が鋭い。

実際にロッキーズンと言う競技が国にあればと思う世間からは軍事大国との評があるガイネスは軍備に関してはまったく諸国と引けはとらない。

というのも国民のから搾り取った税金を全て軍備に当てている現実がある。

ガイネス民は大虐殺の記憶を忘れずガイネスに生まれたからには自分の身は自分で守り小さな力でも二つ以上ならば兵士一人分の働きをする・・・がスローガンで

歩き始めた赤ん坊から来るべき日を想定して身体を鍛えるのである。一年の半分は働き後の半分はスポーツにかこつけて軍事訓練を行なうのがガイネス流だ。

武道は必須、幼い子供達が集められた保育機関では敵の襲撃にたしでの行動規範が叩き込まれる。

幼い子供にまで隊列を組み移動する習慣を教え込むガイネスは異常だと思うが歴史から学び教訓とし実践して続いているのはよいことだとクリスと思う。

レイステン市の通りを歩く若者見るたび

クリスが彼らを頼りないと感じるのはガイネス国の実情を知ってい

るからである。

それに絶対の自信を持ってガイネスの国民のほうが運動能力が勝っているしもっと面白い盛り上がるレースが楽しめるのではと思ってしまう。

ミリーの企み

ダンジェルマイアはおっとりして勝気な性格だが、失敗したことは教訓としてしっかりと分析し同じ轍を踏まないよう回避する努力も惜しまない。

試合が終わればTVに放送されなかった映像を呼び出し繰り返し気になる動きチェックする。

特に気に入っているのはのアネルの映像。

マイアの理想とする身体の使い方がそこにある。

状況に応じて走り飛び跳ねる。気負いもなく当然のように着地し優雅にしなやかに目標物に到着する。

障害物との間には見えない空気の層が一定の距離で保たれる。

ミーティングルームのフロアーには席を一つ開けてミルレンブランドが座っている。

ミリーも研究熱心だとチラリと見えた映像を見てマイアは思う。

が、ミリーが熱心に見ているのは同じ映像でも個々の選手のくせ。

ジルは踏み切りのときに腕が開くこれは使えそうだ。

ミリーマキは大柄な割には小回りが利くがその身体の大きさを使い切れていないように見える・・他の選手との接触を嫌っているのかも・・それって使える？

ラッシは落下の時に大げさに手を回しすぎる。たぶんこれはTVを意識してのこと。

ラッシと同じに飛ぶとミリーへ注目度は低いかも、いや使える。考えを変えればいい。彼のそばで無駄に動かずに居れば勝手にカメラが激しい動きの選手を写す。OK。

映像を見ながらカメラの位置を調べるのが目的だったが今では仲間

を自分のために利用できないか研究中である。

食事が終わると皆選手はお気に入り、のトレーナの元へ行ったり好きな相手とラウンジでおしゃべりを楽しんだりと自由な時間を過ごす。

ラティーフは日頃から優しい言葉をかけてくれるステイブと他の選手も交えて他愛も無い話の中に居る。

話題は地方の選手の生活と都市部のギャップ。

「雲が下に見えるって？信じられないよ四日もかかるのかい君の故郷には」

「違うわバツファローまでよ。またそこから歩くの。そんなに驚かなくてもいいわあなたをそこへ連れて行こうなんて思わないから。もう帰らないのよ誰も居ないの。皆居なくなったのよ」

みな驚きにラティーフはびびる、特にステイブは驚いている。

「そうかそうだよね山暮らしは不便なものな」

と、暮らしたことは無いが言ってみる。

「そんな高地でトレーニングできたらいいだろうな」

高地トレーニングは筋肉も含めて感覚の全てを研ぎ澄ましてくれそうだ。

「五千メートルクラスの山の上だぜ。きついだろう。酸素が五分の一か？倒れるなこりゃ」

行った事も無い山を想像している。

雑誌を読んでいたマイリーが笑う。

「あの酸素濃度は標高五千では半分かな。違うのは気圧。酸素の摂取量で高山病になるんだ」

ステイブが聞く。

「アネルはならないんだろう？」

そんなところに住んでいたのなら高山病などなるわけが無い。

「解らないわそれって下りてもなるの？」

山を離れて数年経つ今は心も身体も街に慣れ親しんでいると感じている。

誰にでもウィンクするコーヌがアネルとステイブにもウィンクしてちよっかいをかける。

「高地で育ってるって事は順応してることだからアネルはまったく問題ないね」

アネルも笑顔で答える。

コーヌのウィンクにやきもちを焼いたヴィセンヌが大きな声でコーヌのファッションセンスにいちやもんをつけて騒ぎ始めると、

かねてから考えていた言葉を小声でアネルはステイブに囁いた。

「ね、今週末最後のプラネタリウムに行かない？」

プラネタリウムは友達同士で行くのも良いがカップルで行くともっと親密になれる。

「あ、いいよ」

一拍置いてよい返事が返ってきた。

その小さな間が気になる。

「誰かに行く予定があった？」

振られるのは早いほうが良い。

「無いよ」

即答での返事につこりと笑うアネル。

「それじゃ待ち合わせ場所は星の王子様で」
プラネタリウムの前の彫像である。

「楽しみだね」と、ステイプ。

「ええ」

嬉しくなってアネルが答えるとアネルの笑顔に気がついたリーフが
やっかんで口を挟んできた。

「楽しそうな相談だね。で、どんな計画？休みにどこかのチームと
合流して特訓をするんだろう？僕もその話聞いたんだ乗っけてくれ
よ」

ずっと気になっていたからひそひそ話しは皆この話題だと思っている。
る。

「おい、そんな計画何処で立ち上がったんだ？」
とコーヌ。

「この間話が出たんだ。SPAでゆっくりしようかって、そうしたら
話が進んじやって候補がロッククライマーの聖地バルローとか厳
しい場所ばかり皆言うからまとまらなくてさ。決まった訳じゃない
のさ」

とマイリー。

「決まったら連絡入れてくれ。あっと話が流れても連絡をくれ。頼
むぜ」とリーフ。

話の関係者を見つけて一安心する。

ミーティングルームの前ではミリーが通りがかりのアレックスに声をかけられている。

アレックスは口数は少ないが芯のしっかりした女性である。

「ミリー、あなたに一言言っておきたいことがあるの」

「ハアイ。どうしたの」

いつも笑顔が少ないわねと微笑んでみせる。

「マークにちょっかい出すのは止めてね。迷惑だから、彼が自分の口で言えないから私が変わりに言うわ」

アレックスはミリーが自分の魅力を振りまいて

あっちこっちと選手の気持ちを乱しているのを知っている。

「アラ、あなた達公認なんですもの心配はいらないわ」

それにマークになんて興味ないの・・・とまでは言わない本命はあなたよアレックス、あなたの心をかき乱したいの・・・とにっこり笑う。

一見冷静沈着に見えるアレックスを精神的に追いつめるにはからめ手が必要とばかりに

みんなの前でマークに近寄っている。

マークとミリーの仲の良い光景が何度か見かけられると噂が立つ、そこがミリーの狙い目。

これで来シーズンフィールドに出たときアレックスの見ている前で小声でマークに話しかければOK。

「外の彼氏が居るんでしょう。寂しいのは解るけど皆の迷惑も考えてね」

ミリーが原因で喧嘩別れしたカップルの噂を聞いている。

「別れたの」

としんみりしてミリーは言う。

ミリーと整形外科医の関係は続いているが表向きは別れた事になっている。観察委員会からのイエローカードが彼に送られてきた、（赤いカードは家宅捜査が入る）それも想定内の計画。

ミリーの意外な返事に表情を少し和らげ同情心を示してアレックスは去った。

整形外科医の通帳残高がどれだけ増えたかミリーにはわからないが彼の計画通りに進んでいるから相当な大金を二人は手に入れている。

ダンジェルマイア

「どうしたの元気がないわね」

マイアがタンクトップ姿で話しかける。

どんなに暑くても首まで有る薄手のインナーを一枚必ず身につけているが

今日はちよつと事情が違う。

ロックイーズンの試合が終り選手達は暇になるどころかしつかりと個人強化日程が組まれて

好む好まざるを無視してトレーナーの指示を受けなければならない。ラティーフはマイアと同じトレーナーになったのはよいがトレーナーは器具を使ったトレーニングをメニューのほとんどに入れて非力なアネルにとっては辛い。

「そんなことないわとっても元気よ」無理して笑顔を作る。

バーベルを上げるの嫌いだけどバーベルはスティーブを盗ったりしない。

「聞いたわよ。プラネタリウムの約束すっぱかされたんですって」マイアは上腕三等筋を鍛えている

約束を反故にされる・・・ことは本人にとっては辛いことだが他人から見れば興味の対称になる。

台に片手を置き視線を一定にして鍛えている筋肉を意識しダンベルを挙げて下げてを繰り返す。

「それはいいの」

トレナーのクルールが正しく動作を繰り返しているかチェックしながら運動器具の間を歩いている。

「良くないわよ先に約束したのはこっちよ」
クルールの姿が器具のシルエットの中に隠れる。息を吐きながら話す。

「悪いって謝っていたわ、だからそのことはもういいの」
アネルは手を止めて床の汗染みを見つめた。

「じゃなんでそんなに落ち込んでいるの？」
自然と言葉に力が入る。

「私って変？」
と、唐突に聞く。

「何がよ、何を言われたのよ言って」
とダンベルを持つ手をかえる。

「うん・・・」
トレーナーのみ回りを気にしていないアネルは曲げた腕をだらりと伸ばし答える。

「あのね、ステイブがごめんって謝ったから、許してあげるから結婚してって言ったの。そしたら君は頭が変だって。半分冗談だったけど半分本気だったのステイブだったら優しくて素敵だからいいなって。そのときの彼の目は・・・まったくの他人を見る目つきだったわ。なぜあんなことを言ったのかしら」
と夢でも見ていたような口調である。

「ステイブがあなたとの距離を縮めたからよ」
プラネタリウムと聞いてデートの申し込みだと気がつかなかったと

は言わせない。

アネルに興味も無いくせにデートの約束までしてすっぱかし笑い者にしたステイプに無性にマイアーは腹が立つ。

「私に話して気持ちが少しは収まるかしら。私でよければ食後にでもお部屋で聞きたいわ」

勝気なマイアーはこの施設の中では唯一の友人だと思っているアネルが

傷つき落ち込んでいるの見てられない。

「そんな・・・そうね聞いてもらえると気持ちが楽になるかも」

マイアーの申し出は嬉しかった。

選手は越えられない壁にぶち当たると心理療法士のドアを叩く。

トレーニングルームから出ると別メニューをこなしていたミリーにばったり出会った。

ミリーはこれから自主トレで運動器具を使ってトレーニングを始めるつもりであるおまけに筋肉至上主義のクルールはミリーを気にいって熱心にアドヴァイスをくれるのだ。

「あらか残らないの。時間外のほうが特別な話が聞けるわよ」
とアネルマイアーのどちらにとも取れる形で話しかける。

「あたし達の身体には十分な練習だったわ。又後でねミリー」
近寄りがたい美しい顔をミリーを見下してマイアーが笑う。
いったい何組みのカップルを別れさせれば気が済むの・・・とマイアーの目が問いかける。

ミリーはこの挑戦的なマイアーが大嫌いだ。
なんと言っても神々しいばかりに美しいなんてミリーには許せない。
今もマイアーに見据えられて軽口の一つも叩き返せなかった。
この世で殺したいほど憎たらしい人間が居るとすれば後姿のダンジ

エルマイアー。

「アネルまだ落ち込んでいるのね。悪い事をしたわ」

今回は故意に仕掛けたつもりはなかった。

「何をしたんだい？」

クルールが頭板状筋から頭長筋のはり具合を見ている。

「こういうのをなんて言うのかしら早く言えば横取りかな、そんな気はなかったのに。悪いのは気持ちが変わったステイブなのに」

「三角関係かい。良くあることさ」

「ぜんぜん、違うわ。だって私ステイブが好きじゃないもの」
マイアーの彼氏だったら落としがいもあるが偶然そばにいたステイブを最後だと言うプラネタリウムに誘った、時間はラティーフとの約束よりも早い時間に。

待ち合わせ場所に少し早めに着ていたラティーフがミリ―とステイブが仲良く出てきた所を見てしまった。

「横突間筋が弱いな。多裂筋もだな。持久力と平行してこれは鍛えるべきだな」

「それって必要事項に書いておくべきことかしら」

「いや特別弱いわけじゃない、背骨は頸神経、胸神経、脊髄神経が集まっている場所だ鍛えて置いて損はない」

「そうね」

クルールは真っ直ぐに通った背骨を守るように

背骨よりも四センチは高い美しい盛り上がりの腸肋筋を撫でている。

「今日来ていた人の中で誰が一番素晴らしい筋肉だった？」

毎回思うがこんなに魅力的な女性がそばに居るのにまったく顔も見ないで会話を続ける男性も珍しい。

「ダメなのはいたけどね。そもそもここに来るのはイマイチの筋肉の奴が来るんだ。ンンン一人だけ細胞レベルで調べたい人間が居た

けどね。合わないんだよね筋力と跳躍力やら・・僕の集めた数値の範囲に入らない筋肉があるんだね」

「じゃ、一番良くない筋肉な人って誰よ」

「わずかな数値の差だよ。突出していおるわけじゃないんだ・・」
「そういいながらクルールは片手分の名前を上げて見せた。」

ラウンジ

ラウンジでは一冊の雑誌を前に感極まった声やため息が漏れている。ドアを蹴飛ばしてP C片手にノートンが飛び込んで来て雑誌の横に並べる。

雑誌の掲載は二十位までだがP C画面には選手全員の順位がある。

「明日の朝発売なんだろう？ 本当の順位かよ」と嬉しそうな声でクロック。

「へっへっへっ。残念だなこのレイステンでは明日の朝だがトマホーク市ではもう発売されているんだ」

P C画面の順位の雑誌は手元には無い。トマホーク限定の雑誌らしい。

「わかった。日付変更線だな」

「そういうこと。トマホーク市の奴の書き込みさ」

ノートンがP Cの前から押しのけられ次から次にその場に居た人間が画面を覗いては番号を確かめる。

「へー、以外だな・・トップテンまでは納得できるけど二十位までは何処で選択したのかわからないぞ」

中央テーブルに集まった三十人が雑誌とP C画面を見終わると全体に騒がしい華やいだ雰囲気になる。

「誰を見ているんだ」

指先に有る名前を見て、

「うーん、彼か」

名前はナルバントグル。

「噂じゃ、今度の美しい筋肉の一位に選ばれるとか言っていたな」
雑誌であろうと自分の名前が載るのは気分がよい。

「クルール情報か？あいつあの雑誌の監修をしているらしいな」
筋肉と聞いたらクルールと条件反射のように名前が出る。

「俺よクルールのあの目つきが嫌なんだよ人間としてみてない気がしてさ」

皆が見終わって放り出された雑誌をめくりながらも一度確かめる。
ある・俺の名前だ。

「いつか筋肉を取り出して顕微鏡で見られるかもしれないぞ」
しかめっ面をしながらいう。隣の女性がうなづく。ありえる話だと。

「マジ、似たような事言ってた」

真向かいの男性は何度もミリールとクルールの話をそばで聞いている。

「実際に研究施設じゃアスリートに電極貼り付けて走らせたり飛ばせたりして調べているんだろう？」

半分笑いながら憶測で言う。雑誌の受け売りだ。

真ん中にいた男が立って左肩を少し後ろにずらし目を右斜めにやっ
てポーズをとる。

「君は半腱様筋が強いね。しかしそれを活かしきれていないようだ」

中央テーブルの周りだけでなく窓際の席に座っている人間にもその
真似は伝わり

ラウンジ全体がどっと笑う。

「おかっしい・・似てるよ。悪いがクルールだけが筋肉狂だなと思うなよ。何とその雑誌の購買数たるや

スポーツ誌のトップをいつてるんだぜ。だからよ。この二十位までの選手層にはマッスルマニアの票が集まっていると考えていい」
涙眼になりながら言う。

真似をした男に親指を立てて賞賛する。ナイス。

「え！一位と十一位が五十万票差ってことは・・ほう！ファンの五人に一人は筋肉フェチ？だな」

各国の票だけどこのレイステン市に居るマッスル狂の数を想像して顔をしかめる。

「そうなるね」くっくくくくくと真似がつぼにはまって笑が止まらない。

「まともなファンが選ばれることを願って乾杯！」

お調子者が水の入ったグラスを高々と上げる。

ノリのよい十人が中央テーブルを囲んで立ち上がり乾杯を叫ぶ。

「嫌だクルールと同じレベルのファンが来るの？」

と女子代表のミリーの黄色い声。

「最悪」

なぜか隣に居たミリーマキも同調する。

「いないとは限らないな、以前にも変質狂といったら怒られるが、何人か問題を起したファンはいるがね」

変質狂に当たったことは無いが過去事例で騒動が起きて禁止規約が増えたことは確かである。

「運だよ。よいファンかどうかはわからないが有名税だと思って一日楽しく過ごしてくれたまえ」

二十一位だった男はしたり顔で真面目に思索している顔の隣の人を見る。

「私その手のファンレターたくさん貰ってるから確率高いわね」とはミリー。

「そうとも言えないね。ここを読めよ。十位以下は皆素晴らしい肉体の持ち主ばかりである。ファンはこの素晴らしい身体を持った選手達の活躍を願って票を入れたようだ、とある。」

「それじゃクルールレベルは十位以下に集まっているの」魅力的な笑顔を隣の男性に向ける。

「この解説だとそうなるね」

安心して十以下の選手の名前を見る、一人まったく関係無さそうな選手も居るがこの場合どうでもよい。

話の流れを長椅子の片隅で聞いていたラティーフは青ざめた。十八位に自分の名前がある。

「ねえ、そんなファンと一日一緒に過ごせないわ」

会話は顔を見てするもので腕や足、背中を向けてなど出来ない。

「大丈夫よ選ばれた二十人には指導員がついてレクチャーしてくれるのよ。解らないことがあったら聞いて二度感謝祭には出ているから」

小声でとマイアーがうなづく。

テーブルを挟んで正面にはミリーがすねた口調で騒ぐと

取り巻きの男性陣はその笑顔に張り切って我先にと答えている様は

滑稽である。

ファンとの集い

昨夜の雨でレイステン市の空は洗い流されて
乱立するビル群に囲まれた海も白波が立ち対岸の港の船が良く見える。

今日も巨大な娯楽施設は花火を打ち上げて開園を宣言する。

青空が広がる眺めの良いホテルの一室では気分の良い朝が訪れていた。

ルーサーは浮き浮きした気分でも何度もタイを閉めなおし外ではスカーフに替えたり、
ポケットチーフの色を上着と合わせて悩んだりと鏡の前で忙しい。
腕時計を気にしてもう一度全身をチェックすると駆け出すようにして部屋を出て行った。

パタンと締まった扉を二人の男が見ている。

一人は手持ち無沙汰のクリス。

クリスが書棚からファイルを取り出してパラパラとめくり始めると、

「何か？ 人員配置に問題でもあるのか？」と湿った声でテット。

ルーサーの去ったクロゼットの収まりきれない服を無理やり戸を
押してクリスの隣にやってきた。

クリスの出したのは巨大娯楽施設の平面図、最後のページはたくさんのアトラクションの入り口にチェックが入っている。

今日のガードは八人を配置してある。

「別に、車を使わないようだから俺も行ってみようかと思っているだけだ」

クリスは主に車の運転を担当している。

昨日レイステンまで走ってきて今日はホテルの室内勤務だ。

「珍しいな。あんな機械のおもちゃなんぞ乗りたくないって言うていたじゃないか。まあ国に帰ったら乗れないからな。乗っておくのも話しの種にはなる」

眼下の公園の向こう側にカラフルな色調の建物がメルヘンチックに並んでいる。

お前も行ってもいいぞちよつとの間目をつぶってやるとテットがウインクをする。

テットのウインクを受けて肩をすくめる。

「見たいのはルーサーの顔だ。あいつどんな顔をしてスターと会うんだろう？」

四十に届くというのに大型遊園地になどクリスは興味は無い。

「なんだそんなことか。いい年してあんなものに傾倒するとはな」
毒されている・・・とテットは顔をしかめてみせる。

「子供らしくて可愛いじゃないか。賢いだけじゃなくて感動する心も持ってるんだぜ」

テットが書き込んだメモを読みこれらのアトラクションに長時間立って並ぶだろうかと首を傾げる。

「感動？あいつは脳みその使いすぎでおかしくなったんだ。それと

も馬鹿を演じているだけかもしれない、賢い奴は何を考えているのか解らないからな」

テットの前には国から送られてきた書類、大臣クラスの要人のスケジュールをルーサーの予定表に書き込む。

「テットはルーサーに厳しすぎるぞ・・・」

クリスがファイルを閉じてルーサーを待ち伏せできる場所を頭に叩き込むとテットの好奇に満ちた目を無視して目立たない服装に着替えた。

といっても娯楽施設の中でグレーのスーツやサングラスで動き回るわけではない。

大きな花柄の蛍光色のシャツと水色のハーフパンツで決めて、おどけながら部屋を出て行くとテットもつられて笑顔になる。

大感謝祭と銘打った割には観客は無し。ルーサーが常宿にしているホテルから離れて三軒目のホテル、オーケーシュストグループ出資の派手で豪華なつくりのスカイラウンジが指定された場所である。

当日、ロックイーズンの選手一人に一人の記者が付き添い

待ち合わせの場所に係員に誘導されたロックイーズンファンが

当選したチケットを手に緊張しながらやってくるとホテルのレストランの前で選手と握手して記念撮影。撮影が終わると記者は二三質問をして次の選手のもとへ。

係員の説明を受けていたファンはレストランに入り憧れのスターと昼食。

その後は巨大な娯楽施設で半日、スターとデートが出来るという企画である。

ルーサーの順番は最後、緊張の面持ちでレストランの入り口を見つめて居る。

たまたま入れたあの一枚の紙切れが誰かの手の中に納まりルーサーが選ばれている。

感謝祭の企画は雑誌とのタイアップでロックイーゼンのピックアップされたスター特集号に掲載される。

もちろん選手達は競技中のように顔にペイントは無い。

普段の顔で現われるが掲載される顔にはしっかりとペイントの模様がいかにもペイントを付けたままファンとデートをしたかのように加工される。

選ばれたファンもこのデートの応募条件の中に守秘義務の誓約書にサインしてこの場所に来ている。

選手が遠征に行く道中着ているスーツに身を包んだアネルが係員に案内されて入ってくる

窓際の席から素早くルーサーは立ち上がり、ロックイーゼンのスターアネルの元へ近づいていった。

ルーサーを探していた係員は極上の微笑を浮かべ会釈をして一歩下がる。

ロックイーゼンランキング読者が選んだ上位二十人は

特別室でファンとの接し方をレクチャーされ、アネルは教えられた言葉を百回練習し口から出す事が出来た。出だしは上々である。

「あなたが抽選でめでたく当たられた方ですか。おめでとうございます。私がベルデのアネルです。競技用のお化粧をしていないのがっかりされたかもしれませんが」

ここですっかりと笑う。

「今日は一日一緒に過ごせることをうれしく思います」と握手のつもりで手を差し出す。

「僕はアルヴァー・ルーサー・フォルストロム。ルーサーと呼んでください。ミズ・アネル、食事はお済みですかよろしければ少しおしゃべりをしながら軽食でも如何ですか」

アネルの後からすぐに来た記者が二人の前に回りこみスマイルといって一枚写真を撮って消えた。

たかれたフラッシュの光が目に入り何処を見てもアネルははっきりしない。

確か左側に立っていた・・・左に頭を傾けて笑顔を作る。

ファンをがっかりさせてはいけないとの配慮だ。

「喜んで。朝から緊張していて何も食べてませんの。去年はベスト選手に選ばれなかったので、初めての経験で・・・」

自然に、フレンドリーに、気さくな印象をもたれるように・・・

記者を避けて右側にたったルーサーではなく

ボーイに差し伸べたアネルの手がボーイの服の裾を掴みさりげなく払われる。

右側から軽くアネルの腕を取り自分の腕に絡ませる。

アネルの腕に羽根が生えて飛んでしまいそうできつく握り締めたい衝動をルーサーは押さえ込む。

「座ってから話の続きを聞きましょうか」

ルーサーに促されて改めて違う人間に愛想を振りまいていたことに気がついた。

「そうですね」顔から火が出そうである。

ルーサーはアネルの腕を軽く握り窓際の席へ。

嫌だわ変に思われなかったかしら・・・とパンツスーツと同じ藤色のパンプスをテーブルの脚に打ち付ける。

アネルが椅子に座ると同時にルーサーが顔を近づけて、

「大丈夫ですか？」と尋ねる。

テーブルの足が折れそうな大きな音がしたのだ。

「ええ」何が大丈夫なのかわからないまま返事をする。

当たったパンプスの先はへこんでいるが足先は衝撃だけで痛くもな
んとも無い。

隣のテーブルの客が二人を見ているのでアネルはこの二人のうちど
ちらかが大きな音を立てたと思っている。

まず両手を膝の上においてナプキンを広げる・・・膝から挙げた手が
テーブルの端に引っかかる。

マイアーの言った様に振舞っているのに、流れるように・・・できな
い。

糸つきのマリオネットのように小首を傾げて窓の外の景色を楽しむ
風を装う。

おもむろにファンの顔を見て微笑む。

と・・・ルーサーはメニューを広げてアネルを見ていなかった。

アネルは緊張しすぎて何を食いたいかわかなくても笑顔を作りすぎて
答えられない。

ルーサーはメニューを見ながら何処を見ているか解らないアネルの
瞳を覗き込み暖かな色合いに満足している。

メニューを閉じると給仕係が丁寧にオーダーを聞き取って去った。

柔らかな日差しの中、ガラス越しに見える青い空のように曇りの無い笑顔がルーサーをうっとりさせる。

天気が始まって料理の好き嫌い、アネルの近況ととりとめの無い話が二人の間で交わされ

小一時間をレストランで過ごしファン待望の娯楽施設でのデートである。

記者はとつくにトップのスター選手を追いかけてレストランにいなかったし

レストランの一部の従業員以外はイベントとして使われたこの場所にはロッキーズンの選手は一人残らず出払ってしまい、いつものレストランに戻り仕事を始めている。

窓際の二人が席を立ってもアネルに注意を払う客は居ない。

暇な給仕係がルーサーの美貌をさりげなく見て楽しんでいる。

ファンとの集いの後

ドアをノックする音が聞こえる。

ベッドに突っ伏して持ち上がらない頭でラティーフは考えた。

マイアーが訪ねてきたと解ったが体が鉛のように重くて動けない。動きたくない。

「いいわよ」

とアネルの返事が聞こえたかは定かではないがいつもと変わらないマイアーがドアから顔を覗かせる。

「どうしたの？わかったわ！ファンの近親者がいたのね当選を自慢するとね。親や兄弟従兄弟やうんと引き連れてくるのよ。ちゃんと書類で一人って書いてあるのにアトラクションの前で待機させてるんだからガードの人が大変みたい。人ごみの中を逃げ回るのって嫌ね。レースのほうがずっと楽だわ。ねえ疲れているところ申し訳ないんだけど、一つ聞いてもいいかな」

初めてファンと接したのアネルに同情しながらも、思いつた動きがあつて是非ともアネルの意見が聞きたいマイアーである。

マイアーの元気な声に顔を上げられずに、

「一人」

とだけ答える。

高い天井を見上げてうつすらと残る手形を見る。

「部屋じゃやっぱりダメよね。スポットがあると緊張感に欠けるよね。何？」

マイアーがベッドで跳ねてつけた跡である。

重たい瞼を開けて、

「ファンの方は一人しかいなかったの」

何とか頭を持ち上げようと試みる。

目を閉じてやるだけのことはやったと心の中で言う。皆のようにはうまく出来なかったけど。

受け答えは丁寧にはつきりと、答えられないことは笑って誤魔化し、思想的なことや政治的なことは口にしなかった。

他の選手の身体の調子のことも口にしなかったと思う。

あと何を注意されていたっけ・・・。

大事なファンは子供ではなく青年だった。ここにいるマイアーとならお似合いの一对になりそうな人・・・
とにかくやり終えた。

見知らぬ人と半日一緒に過ごすのがこんなにも疲れることなのか、まだ身体中が熱を持ったように熱い。

「うっそー。それでその疲れよう？どうしたの？私とミリーが教えたことが間違いだったの。一人だけ信じられないわ。そんなに気をかわせる人だったの。リラックスして行きなさいって最後に言ったでしょう。ほんとともうミリーの脅かしは効き過ぎよね。ガードの人がいるからさらわれたりしないのに、あの遊技場の警備員が厳戒態勢を強いているのよ。どこもかしこもカメラのリレーで追いかけてるわ。それにあなたが居なくなったら警備会社の面目丸つぶれよ。そんなに緊張すること無かったのにー」

コロコロと笑い転げるマイアーにつられて強張った顔に引きつった笑顔を作る。

「そうなんだけど。パンプスが・合わなかったのかも。歩くと何か変なのよね」

靴のせいに見てみたけれどラティーフには疲れの原因がルーサーの優雅なしぐさであったと解っている。

最初二人並んで歩く時に僅かだが後ろを歩くので

背筋フェチとか下腿三頭筋フェチがラティーフの頭に浮かび選んだ服がパンツスーツで顔以外は肌の露出が極めて少なくファンをがっかりさせたと申し訳なく思っている。

少しぐらいはファン心理を組んで腕や足の筋肉くらい見せて満足させなくちゃと。

暫らくするとミリーの言う選手の身体の筋肉に触りたいだけの変質狂ではないらしいとわかった。

が・・椅子から立ち上がるにも手を添えられる。

ポップコーンを食べるにも、コーンのバケットに興味の良いハンカチがお手拭に登場。

階段を上がるにもルーサーの手が腰にさりげなく回り補助をする。

階段が終わると添えられた手はすつと外される。

そんなエスコートなどされたことの無いラティーフは

歩き出しの最初の一步から調子がずれてギクシャクして一日を終えている。

「原因は靴ね。大量生産品だからそれで半日動き回るのは辛いわね。ねっ見てるだけでいいの。お願い」

広大な施設の中をファンの子供の手を引いて子供の親や親戚から逃げて楽しいアトラクションで子供のご機嫌を伺い夕食まで入れて七時間も走り回っていたとは思えないくらい明るい笑顔のマイアーである。

「少し元気になったわ。行きましょう」
アネルはどこもかしこも顔までも要らぬ緊張で強張って重い。

半日デート・・・後

ロッキーンゼンファン感謝祭の特集記事が載ったのは一カ月後
一番人気のスター選手が表紙を飾り美しく強い競技者達と見出しが
続き

ページをめくればスター選手の競技中の美しいアングルでとらえた
ドアップのピンナップポスター。

改めて知る必要もないのに選手名とロッキーンゼンに入る前の競技
暦が傍らに表示してある。

ルーサーは窓際の席に立ったままアネルと半日一緒だった遊戯施設
を背に雑誌を開いている。

「ラティーフ・セヴェール・ラティーフ、いい名前だ」
とアネルの本名を口する。二人だけに共通する秘密の名前のように
ルーサーには響く。

少し離れて暇なクリスがルーサーと同じ雑誌を読んでいる。

珍しく本を買って来いといったルーサーがどの記事を読むのか興味
津々で

同じものを二冊買ってカウンターの影で広げて見ている。

ルーサーのしているページをクリスは隅から隅まで目を通したがル
ーサーがつぶやいた名前は載っていない。

テットがルーサーの飲み物をつくりながらクリスの雑誌をちらちら
一緒に見ている。

「なあ、ラティーフ・セヴェールって何処に載っている？」とクリ
ス。

「ん？何でそんな名前をお前が気にする」

妙にテットの言い回しが気になりクリスがテットの目を覗き込む、

テットは小さく笑いながら、あごで雑誌を示した。

「反抗期少年に頼まれたんだ。今朝教えたばかりだ。で、お前の好みの女は？国に帰れば賭け事なんぞ出来ないから今のうちに頭を墮落させておけ」

テットはロッキーズ警備会社からコネを使ってアネルの本名を調べ上げている。

クリスの開けたページにはミルレンブラントが微笑んでいる。

テットの調べた女の本名がコケティッシュな女だと知ると

「うーん・・・俺の好みじゃないな」と

ページをめくり最後のページで地味な紹介で終わっているアネルを見て

「俺なら顔は良くわからんが雰囲気でこの選手だな」とつぶやきすぐにもとのページに。

アネルを紹介したページには写りの悪いルーサーとアネルも小さく掲載されているのには気がつかない。

テットがお茶を出して戻ってきた。

「個性的で可愛いな。このミリイって選手は地方で人気があるんだ。ちょっと顔の作りがアンバランスなのが魅力なんだそうな」

「そうなのか。じゃこの選手は」

と、開けたページにはロサのレフティハルメスとアマリジョのダン

ジェルマイアー。

「クールビューティと・女神様だ、この完璧な美しさ。この世に女神は光臨してきたようだな」

クリスに異論は無いがあまりにも二人は美しすぎて現実からかけ離れすぎている。

付箋代わりに左手を挟んでいたページをめくろうと機会を窺っていたが

テットがキッチンを離れる前にクリスは仕事に出かける時間になる。車のハンドルを握るとクリスは雑誌のことなどすぐに忘れてしまった。

クリスの雑誌は応接間のルーサーの雑誌と一緒にテットにダスターに投げ込まれた。

「同じものを買わなくてもいいだろうに。まったく何を考えているのやら」

ため息をついたテットの心も、終わりの無い流浪の日々に閉塞感を感じ、

言わなくても良い批判的な言葉が口に出る。

広いホテルの部屋の窓から広がる空の向こうには懐かしい顔が待っている。ルーサーとのホテル暮らしは何年たっても性に合わず、不便で退屈な国の生活に戻りたい気持ちは高まっている。

テットがプラテアドの故郷を思い出すと必ずセットで出てくるのはサガモア王。

毎回王の使いがガイネスの要人の細かいスケジュールを送ってき、数学、統計学、天文学、社会学、哲学、心理学、の高名な教授との授業を減らし、要人らの下調べした情報も取り入れて会員の順位を

つけ、ルーサーのスケジュール調整を始める。

この下準備をしておけばルーサーが帰郷しなんらかなの要職についた時スムーズに仕事ができやすいとサガモア王は思っているらしい。

テットの見解だとサガモア王の権力は効力を失っているように思える。所有している土地は七千メートル級の岩だらけの山とプラテアド半島の一角だけである。

他の一族のように大きな産業施設を持っていないと言うことは金を産まない鶏を飼っているようなものだ。

王のバックには気炎を吐くバラディール將軍がいると聞いているが將軍は政治の表舞台には立たない。

ルーサーのバックグラウンドを固めるためにはモラドのバラディール將軍が一番なのだがこれはルーサーが嫌っていて話がまとまらないでいる。

他の半島の一族は古い産業を維持するのが精一杯で顔も見たことのないルーサーになど援助など出来ないのが現状である。

ルーサーが幼かった頃ガイネスにはプラテアドの人間が二代続けて王座に座るのを喜ばない人間が大勢居たがここ数年事情は大きく変わっている。

七つの半島の長老はガイネスという枠組みから外れて独自の権力を持つことを望み始め

ガイネスが多くは七つ、少なくとも三つに分かれるという選択肢が囁かれる中にある。

ガイネスが分裂すればテット等の帰る場所はなくなる。

昨今金銭を目的にした誘拐も毒殺者や暗殺者という刺客もルーサーが大人になると激減し、

今度は変質者、狂信者がルーサーの周りをうろつくようになり広範囲に警護が必要になってもいるが現代社会のよさは何処にでもカメ

ラが設置してありその映像の死角を補えば少人数で警護が出来るようになっている。

刺客に怯える日々は消えたが今度は国が分裂する不安に苛まれテクトは沈み込む日が多くなっている。

フォークステット

格式あるホテルの深夜のエントランス。

昼間はソファアーに座りくつろぐ客も多いが、客の間をきびきびと働く従業員の姿も無く、照明を落とし主な通路だけにスポットをあて明るくしている。

ドアボーイが礼儀正しく深夜の客を迎え入れ、磨きぬかれた床をこつこつとヒールの音を鳴らして女性が一人入ってきた。

若い女性はフロントにも寄らずエレベーターの前に立った。

フロントのホテルマンが目だけで追って手元の来訪者欄にチェックを入れる、

指定時間より一時間遅れている。

エレベーターが最上階に止まると待ち構えていた男が女性の前に立った。

女性が遅れた理由を言い出す前に男は背中を向けて女性の前を歩き出しドアを開けた。

挨拶ぐらいしたっていいのにとむくれながら部屋に入ると部屋の中央には夜中なのにお茶の支度が整っている。

「悪いね、こっちへ着たら夜中だったものでね。明日にはモーニングも食わずに出なきゃならないんだ、書類は読ませてもらったよ学歴は最高だ秘書としては申し分ないね」

部屋には男が一人大きなソファアーにゆったりと座り片手で座るように指示をする。

男の、申し分ないね・・・の後は普通褒め言葉が続く。

褒め言葉が出ないということは何か気に入らないことがあるから。

私の何が気に入らないの？止まった言葉の続きを聞きたい。

「何か問題でも、夜中の勤務が多いとか」と嫌味をちくり。
椅子に深く座りすぎて飲み物に手を出せない。

大体夜の十一時に面接を指定するなど常識では考えられないと不満が心の中で爆発する。

最初は昼間の面接だったのにずれ込んでこの時間帯。
遅刻したコレットも悪いが高い給料に引かれて受けに来てしまっている。

コレットの場所は泊り客の氏素性のしっかりした金持ちしか利用しない

古いホテルが面接会場ということもあって変なことはないと思っ
ているが、

乗り気だった友人は面接時間帯が変わり断念している。

確かに真夜中にお洒落してホテルに入る姿は怪しい夜の女。
しかも相手は精力の有り余っている中年男性が部屋に一人。

絶対に怪しいとドアが閉まったと同時にバッグの中のスプレー缶を
手の中に隠している。

「夜中には出来るだけ仕事はしないようにしてるよ」
と男は嘘をつく。仕事は人が寝静まった夜が大半だ。

「今は別だけどね」
と笑顔を作る。女性が警戒しているのも承知している。

「身体を動かすことは好きかね」
と足を組み替えて聞く。

「夜ですか？」

書類選考はよかったが面接では黄色信号が灯ったようだと言われている。コレットは感じていた。

なのでまた似たような言葉を言う。これで面接はおじゃん。気の強い女は嫌われる。

「勘違いしないで欲しい。運動だ何か続けているスポーツとかあるか。僕は社員には率先して勧めているんだ。年に四回は大会にも出ている。僕じゃなくて社員に出てもらっている。健康になって欲しい」という思いもあるが運動から何かを学び取って欲しい」

男は疲れた様子でこめかみを指でぐりぐりやる。

何かやらないと女と一緒にになって軽口をたたいてしまいそう。今は偽者社長を演じている。

「それって強制的にやらせるって事？」

形のよい眉毛が上がる。

ワンマン社長の我が儘な方針に賛同すべきか、コレットは多少は目をつぶることにした。

入社してしまえば断る理由は何とでも作れる。

「僕が社長だからそういうことになる」

テーブルを挟んでコレットの首から肩の肉のつき具合は大した運動暦は無いと言っている。

「どんな運動をやるの？ジョギング？ウォーキング、山登りとか・・」

と自分にも出来そうな運動を言ってみる。

このくらいなら許容範囲だろう。ただし一年に一度くらいなら。

コレットはにっこり笑う、若い女は慎重で疑り深い。

「挑戦してもらおうスポーツが好きだね。苦しみに立ち向かう姿勢ってのは仕事に応用できる」
愛想笑は得意だ。

じゃ山登りなんかいいわね、
サンドイッチと暖かい飲み物に綺麗な景色なんて最高だわと頭の中で描いて見る。
やれそうかも・・・とコレットが想像しているのがテットには手に取るようにわかる。

「君みたいな女性はトライアスロンとかカッコイイかもしれないね。僕なら武道をすすめる。武道に興味は無いかね」
思わず本音が出る。

写真よりもずっと芯があって勝気な感じがテットは気にしている。
変な時間を指定したこっちも悪いが様子見に来たのだろうが
予防線を張って警戒している様は高感度がぐんぐん上がる。

「トライアスロン？ 武道」
フンと鼻で笑う、
「ごめんなさい運動は嫌いなもの」

世の中には運動に向いている人間と不向きな人間の二種類がいる。
コレットは後者で自分には運動など不要だと思っている。

「そうか残念だね、う・・・ん今日の結果は紹介者を通して連絡しよう。それでいいだろうか。遅くまで付き合わせてすまないね。秘書がいないと色々困ることが多いものでね」
無理強いはすまい。本人からの自発的な衝動で無いと長くは続かないものなのだ。

「ガイの声を聞きたくないの直接知らせてくれるかしら。聞いてもいいかしら私の前に何人面接を受けに来たのかしら」

従兄弟のガイは書類審査で落とされているコレットを面接にまでたどり着かせたらお礼を貰う約束が出来上がっている。仕事が決まれば別代金として請求される。

「君で五人だ九時に空港についてホテルについたのが十時近かった。遅くまでつき合わせてすまないね」

五人・・ね、五人のうちひとりが選ばれるか全員駄目かどうかでもないわ私の就職は無さそうなもの・・とさっぱりとコレットは興味を失った。運動ぐらいなら就職出来なくてもよいのである。

「私の携帯電話に直接かけてね」

ガイには会わなかったといっておこう、出費は抑えなきゃ。

「君の父上に知らせなくてもいいのかね」

コレットの父親は市議会議員、顔の広さをちよつとだけみせる。子供の就職の可否を知りたくない親はいない。

「失礼ね二十歳を超えているのよ」

一人暮らしだって始めたのよ・・とは見知らぬ人間には言う必要など無い。

「今日は来てくれてありがとう。外にいる男にホテルのチケットを貰って帰ってくれ夜遅く出向いてきてくれた迷惑料だ」

コレットがスプレー缶を握り締めながら出て行くとテットは本格的に両手でこめかみを押さえる。

「学問だけの朴念仁」とつぶやく、
「今の女か？そんな風には見えないが」

コレットをエレベーターの前まで送り届けてクリスが部屋に入ってきた。

「よっ社長」

「馬鹿言ってるじゃねえ、これで最後だからな」

秘書募集なんぞテットとクリスの猿芝居である。

提案者はクリスだが女っ気の無いルーサーの警護に女性を入れようと容姿端麗文武両道を求めているが思うような人間が集まらず募集を繰り返すうちホテルに入る女性を見て

毎夜毎夜高級女性をルーサーが買っていると噂になっている。

堅物と思われるよりはましさとクリスは言うが

テットには国に帰るまでの暇つぶしにしか思えない。

ロッキーズ

天井から床まである大鏡の前でいつも以上にきちんとテットはタイを結ぶ。

久しぶりに心は浮き立っている。

以前何度も鏡の前で服装をチェックしていたルーサーのことを冷めた目で見たことなど欠片もテットの頭には無い。

一週間前に面接で落とした彼女を駄目もとで食事に誘い、デートの場所はテットの思惑とは違っていても問題にならないくらいわくわくしている。

二十数年ぶりのデートである。

新聞を広げながらテットの様子を盗み見しては新聞を立てて顔を突っ込み思い切りクリスは笑う。

じっくり見ている風を装い新聞をテーブルに広げた時には真面目な顔つきに戻す。

一年又一年とセデル国の滞在期間を延ばされてテットは疲れ果てている。

四十人の部下を率いて落ち着いた風情を装ってはいても部下がいなところではぶつけられない怒りを汚い言葉を吐くことで解消しているのを何度もクリスは見ている。

テットは女性の話題でくつろぐ所を見たことが無い、誰かに義理立てしているのかと思うがそうでもない。

然らばとクリスは考えた。女性と面と向かって話す機会を作ればいいのだ。

一案を出した結果三十二番目の女をテットは気にいった。

「やってみるもんだ・・・」と後ろで扉の閉まる音を聞きながらにんまり笑うクリス。

テットは少しでも若く見えるスーツを選んだつもりだが並ぶちよつとイケテない。

コレットとは十五も歳が離れていて少々気後れしているがあいたい気持ちのほう为上回っている。

デートの場所を変えればいいわとの返事は嬉しかったがしゃれたレストランでゆっくり会話を楽しみたいが彼女はロッキーズン狂。

待ち合わせの場所で落ち合い闘技場へ向かったはよいが今日はロッキーズンクライマックスレース。

闘技場に一步入った途端コレットの表情が一変してレースの予想を甲高い声で話し出すのには参った。

観客が多くコレットがテットの腕にしがみついているなければ立ち去ってしまいたい。

コレットの指定した番号の席にテットは座るが周囲はコレットも含めて全員総立ち。

「最高！！ありがとう特等席だわ見て十二枚のモニターが全部見えるわ。右下のスタート口はレースが終わると表彰式もやるの！アネル～～私がついているわ～～あなたなら絶対勝てる～～」

テットに抱きついてコレットは説明をしたが観客は巨大画像に自分の好きなスター選手の顔が映るたび名前を連呼するのでコレットの声は掻き消える。

「う、うるさい！黙れ。彼女の声が聞こえないだろう。やめろ！耳元で叫ぶな！」

しばしテットはガイネス国のこともルーサーのことも心配事は頭の中から消えている。

甚平サメの口に似た

横に平たいスタート口にスポットライトが当てられるとマイクを持った男が鈴なりの席を見回す。

「さあ今期最後のレースだ皆楽しんでくれ！！」

男の声は明瞭で通りがよい。

「そしてー 最終選考に選ばれたのは・・・ナランハ3、アスル・セレステ3、アスル・マリノ3、ベルデ3、アスル3、アマリジヨ3、ロサ3、ロホ3ー！最終日いずれも残ったのはチームの精鋭たちだ！聞いてくれ。この声援を」

男はマイクを高く掲げて会場の声援を待つ。意味の無い返事に男は満足する。

「そして！ゲームをもっと面白くするために各チームの二位も参戦する！彼らだって馬鹿じゃないあの金色に輝く優勝杯を手にする最後のチャンスでもあるんだ。今期トップのチームのために動き回るかそれとも自分たち、セカンドの位置を持ち上げるために走るかは」

「神のみぞ知るーーーーー」と、一拍置いて長セリフ。

「躍動する鍛えられた身体。飛び散る汗！仕掛けられた罠を突破し水の中に空中に危険を顧みずチームのために飛び込むその勇気！誰

一人欠けること許さないゲーム！ロックイーーーゼン！！さあ号砲の後に選手が飛び出すぜ。期待して良いぜ今夜の月は満月！皆で多いに吼えよう！！まずは選手一人ひとりに俺達の熱い心を送ってやろうじゃないか！！」

扇動するアナウンサーの反対側から

蝶ネクタイの男が現われてマイク片手に選手を紹介し始めると

観客席は総立ちになり自分の最良の選手の名前を連呼する。

両手を挙げ、選手が顔を見せ声援に答えると闘技場全体が熱気に包まれる。

「上手いなこのセリフを考えたのは誰だ。ケルニ？良いじゃないか。最初のつかみは最高だ」

とオーケシユスト。

スタート口の真上にある部屋で窓を全開にして地鳴りのような観客の声を楽しんでいる。

ビルはこの最終戦のために変更したアトラクションの数々が上手く起動するか機器の点滅に気を配る。

製作担当者は予算が足りないと訴えていたがオーナーであるオーケシユストが自分の持っている子会社のスクラップから資材を調達させて出来上がっている。

それに加えて迫力有る映像を撮るために

スカイカメラの台数を増やしホールドや壁にも穴を開けてカメラを埋め込み、

より近くに選手の息使いを感じさせるために落下地点の床にまでもカメラがある。

このレースで何台かのカメラは選手に激突されて使い物にならないだろうとビルは思っているが口には出さない。

カメラとか器具類の損失はすべてTV局持ちだからである。

だが選手の怪我は別だ。

見た目ばかり奇抜に作っても選手に大怪我でも負わせたらと思うと始まってもしないのに早く終わってくれと願っている。

嬉しそうに強烈なライトの中浮かび上がる装置を見回しているオーケシユストに比べ

口数が極端に減るビルである。

こっそりビルはドア側に近寄り電気技師を呼び出した。

「ロブ、電源の供給量はまだ余裕はあるか？OK。もうすぐ天井を半分開けるスタートの空砲が聴こえたら明かりを半減してくれ。うん夜間使用のカラーガラスをしようあれなら光源はあまり要らないだろう。そうだ。うん仕方がないんだ。クレーンを使つての高画質のカメラが増えて。頼むぜ」

観客席を減らしてクレーンを取り付けカメラを乗せたお陰で必要以上で電力の消耗が激しい。

最終戦が日曜日の午後でしかも晴れてよかったとビルは感謝した。

レース 1

「いくぜっ」

今ではチームベルデ3のキャプテンを務めるジリアスクの声に答えて、高さ十五メートルのスタート台から勢いをつけて七人は飛び出して行く。

ナランハ3、アスル・セステ3、アスル・マリノ3、ベルデ3、アスル3、アマリジョ3、ロサ3、ロホ3、これに加えてチーム成績二位の同色チームも一緒に出走する。

左右のライトが、スタート地点から飛び出した選手の姿を綺麗に浮かび上がらせると観客席の応援は凄みを増す。

「これをそのままで伝えられないなんて、もったいないよね」とオーケシュスト。

放映される画像を思い描いて酔っている。

選手がばらばらと水面に吸い込まれ、設置された八つのスクリーンに観客の目が注がれる。

ライトに当たって水しぶきがきらきら輝く。

水中に白い気泡と黒い人影が交差しながら天井を岩に模した洞窟をくぐり抜けると白い砂地が現われる

濡れ鼠になった選手たちが息を整える暇もなく砂地を走り抜けて直立に切り立った崖をよじ登る。

「早いぞ！早いぞ！これまでの記録を塗り替える勢いだ！」

実況アナウンサーは手元の時計を見ながら解説を続ける。

「先頭に行くのはロホ。槍投げから総合十種に変えて成績を残し、今このロッキーズでトップスターに躍り出ているビーレル。素

晴らしい跳躍！素晴らしい筋肉の連動をご覧下さい！」

ムスカッドの壁は二番目に来る最も大きい高さの有る壁である。頂上だと思える一段目の壁の向こうに又聳え立つ壁を見ると、水の中から出て重たくなった身体で壁を登り詰めその先に見えるムスカッド壁を選手達を見ると大幅に気持ちがダウンしてしまう。

「カル。大丈夫？ビックウェーブは私が下になるわ」とカスティルの隣で声をかける。

「悪いなアネル」

チラリとアネルを見て安堵の気持ちがよくる。

「どうしたのよう？カル？肩が外れたの？」

足の速いヴァンニアがアネルの後ろから移動して苦しそうに腕を握っているカスティルの横に陣取る。

「入れられると思うが・・・よし入った」

苦痛に歪んだカスティルの顔に何が起きたかをヴァンは理解した。

スタート位置でヴァンニアの前にはミリ。その前にカスティルが居た。

体の大きいカスティルはスタートの位置からの蹴り幅が少なく遠くに着水できずに後から落ちてくる選手の誰かに踏みつけられたのだ。水深はあっても百人以上の人間が十二メートル四方のプールに飛び込むのである。

手前に落ちるか対岸近くに目標を定めるかで少しは選手同士のぶつかる衝撃を軽減できるが少しでも目測を誤ると速力をつけた人間がかかとからぶつかってくる。

ラティーフは一番危険な対岸壁近くに飛んでいる。そこなら落ちてすぐに洞窟に逃げ込めるからである。

それでも同じ場所に目標を定めている選手も多くいち早く水中を移動してもすぐにわずかの差で着水した選手の足がラティーフの足にもぶつかっている。

事故はスタートラインから落ちていく選手の隙間をぬってぶつからない場所に落下したが

息を大きく吸い込み潜った瞬間にヴァンより後に落ちてきたミリーの足がカステイルの肩を直撃した。

ぶつかれたカステイルは泳ぐことだけを考えて洞窟を脱出したが使えたのは左手だけで完全に右手は肩甲骨から外れて肩先は尖っている。

確かにミリーのかかところが直撃したが、偶発的な事故である文句が言えない早く潜らなかつたかカステイルが悪いのだと、ヴァンは唇を咬む。

ビクウェーブは足の速い三人が先に行き後から来たチームメイトの土台になり反り返った壁を乗り越える障害である。

いつもなら土台カステイルとアネルの二人で持ち上げるのだが、今の会話だと土台はアネルとヴァンでカステイルはその上に乗っていることになる。

二人で持ち上げるのだが体重の重いカステイルを引き上げることが可能だろうかと一抹の不安がヴァンにある。

ドンガの壁をカステイルはどうかスピードを落とさず登りきる。アネルとヴァンの目がカステイルの肩の辺りを見つめて空中に浮かぶきのこにジャンプした。

今はレースの真っ最中なのだ仲間のために良いポジションをとらな

ければと身の軽い二人は他のチームのえり抜きの選手と競いあつて次の空中きのこの取り合いに参戦した。

ドンガの壁を登り、モメンセの河を空中きのこを利用して飛んで渡り終えハンマー海峡。

落ちてくるハンマーと狭い橋幅を行きつ戻りつ進み中央まで行けば闘技場の真上に開いた穴から外の風が無節操に吹いてくる。

「うわああああー」と声を上げてばらばらと七名の選手が落ちていった。

落ちた選手たちの体重が橋からなくなると橋のたわみが大きく上下に震える。

カスティルは橋の上で歩みを止める。

「クッ」

バランスをとるために上げた腕が傷む。

「大丈夫よ、もう少し!」と後ろからアネルがカスティルに声をかける。

ラッキーなことに橋の中央まで先に行っていた選手は風で落ちてしまい

谷底から必死で這い上がってきている。

もっと手前で落ちていれば最初の砂地まで戻らなければならなかったからアネル達もかなりビビっていたがハンマーが風を遮り落下を免れている。

「先に行ってくれ」腕の痛みで足の進まないカスティルが叫ぶ。

「OK。アネル、スピードを上げるわよ」渡り終えたヴァンが答える。この先を二人で乗り切らなければとの決意が顔には現われている。

る。

五本ある橋の上をゆっくりと選手たちが渡り終え始める。

レース 2

次のアトラクションはビックウェーブ。

高さが三メートルから五メートルの反り返った岩の波が横幅四十メートルある。

目指すは三メートルの低い波の先。

高低差が激しくあるため最初のポジション取りが大事な場所である。先を行くロホの三人の内の一人はすでに波の屋根に上っている。

「アネル、勢いをつけていくわ。お願い」とヴァン。

立ち止まったヴァンを置いてアネルはウェーブの下、ロホの選手の隣に両手の指をかさねてヴァンを待つ。

「いいわ！」一か八かだ。この役はいつもカスティルの得意技。

助走を軽くつけてヴァンは利き足をアネルの両手に乗せると、アネルも懇親の力をこめて波の上にヴァンを跳ね上げる。

反転してヴァンを放り投げた方角をアネルは見る。

「やったわ！ 私たちでも越えられるわよ」

体の軽いヴァンは一回転して波の屋根に上っていた。

そこへ遅れてやってきたのがカスティル。

青ざめた顔に安堵の笑顔が浮かぶ。

「やったなアネル、ヴァン、頼むぜ俺の肩」

カスティルの後からベルデのメンバーが走ってきている。

細いアネルの肩にその倍はあるカスティルが立ち両手を組む。

「あれ今日は逆？」ミリーはそう言いながら走ってきてアネルの両手に右足を、左足をカスティルの両手に置いて、踏み台にした。

「そおれー」とカスティルとアネルの掛け声と同時にミリーは上へ放り上げられる。

飛び上がった波にミリーが手をかけるとそこにはヴァンが待っていてミリーを波の先から引き上げる。

ヒーリー、ホイ、フックス、ジリアスクと踏み台の二人を使って波に駆け上がると

ヴァンが悲壮な顔つきで下に居るアネルを見る。

「さっさと来て！」二人を信用してはいるものの自分の疲れ具合からカスティルの身体を心配している。

痛む腕を気遣いながら助走をつけてアネルの両手に足をかけカスティルが飛ぶと

ヴァンとジリアスクがカスティルの着地した波の先っぽから倒れこみながら受け止める。

最後はアネルだ。

助走を長くするためビクウェーブから離れて駆けだす、波の内壁に垂直になるまで足で登りつめ身体を限界まで持つて行き

波の先に手をかけてぶら下がりざらついた波岩の上を指でじりじり登り詰めて宙に浮いていた身体を完全に波の上に乗せると待っていたヴァンがにっこりと笑う。

「急ぐわよ」

近くにはベルデのメンバーはヴァンしか残っていない。

次のアトラクションは全員でないとこなせない。
坂を下りると丸太がかかった橋がある。

くるくる回る丸太の上を苦も無く軽やかに駆け抜けて二人が通過していく。

隣では丸太がぐるりと回り通過中の選手三人が慌てて丸太にしがみつく場面が展開されている。

丸太橋を渡り終えると恐怖の峡谷越え。

鳥の巣状の大きな穴だらけの球体の中に入り込み

緩やかだが起伏の有る床面を八人一丸となって球体を抱えて八人全員で立ち木の間を走る。

ベルデ3全員そろって重い球体を持ち上げてリーダーの合図で走り出す。

穴から出した足並みを揃える。

「右にヤシの木、クリア。十メートル先に左にヤシの木。いいか！ジグザグに走る！左！右方向一步左へ真っ直ぐ。右に五歩移動。次左に二歩移動。修正一步右。ギリギリ行くぞ真っ直ぐ！ヤシの木を通り越したらすぐに左五歩いや六歩。ロホに先に行かせるな！体当たりだ」

とジリアスク。

右方向からヤシの木の林を一番早く抜けるルートを

別な林からやってきたロホも球体と同じ幅に広がっている間隔に目をつけて向かっている。

ロホはベルデを確認し速度を上げる。

ベルデとロホの速度が同じになりヤシの木の間に突っ込む。

刹那、拮抗していた力はぶつかり合いロホは三メートル後退し、ベルデはというとゴムボールのように弾け何度もヤシの木にぶつかり転げて止まった。

「立ち上がれ！ロホに先を越されたぞ！それ」
とジリアスク。頭を上げた先にロホの球体が見えた。

天と地が逆さまになった選手達は一人が穴に両足を入れると練習と同様に決まった位置に転がって這って戻り立ち上がる。

「前進！」

「何で負けたのよ！踏みとどまってよ！」

怒り狂ったミリーの声。

「そんなことを言ってる場合じゃない！足並みを揃えるぞ」
とジリアスク。

涙眼になったミリーがホイジンガー、フックスベル、カスティルを睨み付ける。

ミリーの声にカスティルが唇を震わせて抗議したが何も言わない。
勝ちたいのはカスティルも同じだ。

ここで勝てば来シーズンの契約時有利な立場で更新が出来るのである。

肩に不安を抱えていてもこの勝負に参加し勝利さえ勝ち取れば
オフシーズンに肩の手術をし完治させて競技に望める。

何よりも一位であることにこだわって来たカスティルだけに
肝心の右手に力が入らないのは悔しいのである。

「行くぞ！」

後方からアマリジョとナランハが追い上げてきているのが見える。

「フンッ！」とカスティルは痛む腕に力を入れて球体を持ち上げる。

「負けてたまるか！」ホイジンガーが両腕に力をこめて声を張り上げる。

軽いヴァンニアが持ち手ごと浮き上がりそうになる。

「GO! GO! GO!」

ベルデ3は真っ直ぐに走りこんできたアマリジョのそばをかすりながら曲がり

ヤシの木の間に駆け込む。

緩やかな下り坂に勢いがついてぐんぐんスピードが上がる。

「右に三步又右だ。五歩左に二歩。今度のヤシの木の数は半端じゃないぞ」

「ロホが引っくり返っている。今のうちよー」

「軌道修正! 右の大きなヤシの木を回るぞ」

「OK」

「くっそ。奥に小さい木を置いてやがる」

必死の形相で球体解除ラインまで走りこむと
ゴム製の檻はばらばらになり汗びっしよりの選手の姿が飛び出てる。

「最後だ泳ぎきれ! 走り抜けろ!」

ジリアスクの声をメンバーは走りながら聞き、

個人の加点ポイント地点、落差四十メートル、パールの滝つぼに向かう。

高さに足がすくむが美しく飛べばボーナスが入る。

縁に立って片足で蹴る者、両手を挙げポーズをとって両足で蹴る、助走をつけて上に遠くに飛ぶ者と様ざまだ。

崖縁から飛び出した後腕を身体に巻きつけるようにして飛び込み、力強く足先から入水し浮き上がる。

技の無い選手はそのまま万歳をして飛び込む。

落下中ひねりや回転と如何に自分の技が美しいか観客席に見えるよ

うに工夫して選手達は次から次に入水する。

もちろん滝つぼでは先に飛び込んだ選手は落下してくる選手を避けて水中を必死で潜って移動する。

泳いでたどり着くのはスタートライン近くの砂場である。
スタートラインの壁を右に見て濡れた体で壁をよじ登る。

余力を残していた選手がぐいぐいと疲れきった選手を抜き捨てていく。

この壁からはもう色で分けたチーム行動ではなく個人の力にかかっている。

砂地を走る間に電光掲示板でチームの点数を見ていた選手らは最後の踏ん張りを見せ、

先頭集団にいる数人はチームのことを考えピラミッドの天辺の押しボタンを押して下りた。

壁を登りきり骨組みだけのピラミッドに選手は入り込む。

タイムだけを考えればピラミッドの天辺にタッチしなくとも良いのだが持ち点の少ないチームは是非とも欲しい。

レース 閉幕

副調整室ではオーケシユストが満面笑みで

TV局のディレクターを無視し大声で命令している。

「おい、早く下からのアングルに切り替えさせろ！よおーし。よおーし。いいぞ。これでなきゃ面白くない。そうだろうビル？」

ディレクターも慣れた態度でスイッチャーにウィンクして合図を送る。

「ええ、そうですね」と

生半可な返事をしてオーケシユストとは別の画面を食い入るようにビルは見つめる。

こぶしを振り回してレースを楽しんでいるオーケシユストとは大違いである。

ボルトできっちり止めたホールドが弛んで落ちたのをビルは見ている。

平時は足場を組んでホールドを設置するが急遽コースを変更したため緑の羊歯を描いた壁にロープでぶら下がりホールドやエッジを取り付けている。二人目の確認作業を省いたのだ。

選手がその後走る障害物にも問題がある。

高さ一メートルの岩は球体の素材と一緒にゴム板が多く使われている。

体重七十キロまでなら何とか持ち堪えられそうだがそれ以上は未知数である。

モニター画面では選手が墜落もせずに岩の上を豹のように四足歩行でしなやかに

岩から岩へと飛び移る様が床面からだろう選手の影が瞬時に飛んだのを綺麗に写している。

近距離での撮影からスカイカメラに切り替わる。

空からのカメラはごつごつした岩場の全体像を俯瞰でとらえ
いかに埋め込まれた小さな窓からの映像ではトップの選手を脅かす
後続の選手の動きが映し出されている。

大きな岩に片手を置いて飛ぶ、小さいな岩を跳び箱変わりに飛ぶ。
幸いなことに身体のかな選手は

ジグザグに走ることを選り起用に岩と岩との間をぬって行った。

明るい夕空に花火が上がりロックイーズンの最終ゴールを祝った。
立見席を入れて六万の観衆が見守る中華々しくロックイーズンのレ
ースは終幕である。

興奮して席を立ったオーケシュストの隣で深く椅子に背もたれてビ
ルはほっと一息つく。

ビルが見た限り四つ気になる点はあるがどれも訴訟や公的機関に
説明を必要とする事故はない。

そそくさと席を立ったオーケシュストを見送り放送された画像を呼
び出して食い入るようにビル見つめる。

会場ではクレーン車がスタート地点にくっつき赤い敷物と表彰台を
係員が設置し、

スタート口からぞろぞろと出てきたのはラフさを装いながら一番上
等なスーツに身を包んだ市長が

有力者の中で機嫌よく愛想を振りまいている。

そこへオーケシュストがひし形になった山高帽子をかぶり登場する。
フロアーディレクターが観客に拍手を要求する。

スタジアム発表六万の観衆の千人がまばらに拍手をする。

汗だらけの選手はステージに一人もいない。

「さあ今日の最終レース素晴らしい熱線でした。そしてあらゆる所で観客のためにスポーツの美しさを追及した選手達の登場です!!」
ゴールを切った選手達は暗転の中スポットライトを浴びて出てくると拍手の波が響き渡る。

仰々しく司会者がその拍手を手を挙げて止める。

「そして加点されるポイントは!」

ドラムロードが鳴り響きスタートラインの真上の電光掲示板がポイントごとに点数を光らせると観客の視線が注がれ一瞬間がありため息とも歓声ともつかない声がスタジアム中にうなり続く。

「良くやった!マイアー」

「立派な戦いだったぞー」

口々に最良の選手にまたは大金を稼がせてくれた選手に祝福の言葉が多く飛び交う。

司会者は両手を挙げて下げ又上げてスタジアムの真ん中に向かって叫ぶ。

「今年度優勝チームはアマリジョ3!!」

怒涛のように罵声やお祝いの言葉が観客の口から出てくると司会者の声などまったく聞こえなくなる。

アマリジョの八人が一位の台に上がり手を振ると

用意してあった金色の紙ふぶきが天井から舞い落ちた。

「二位は大健闘ベルデ3ー!!三位はロホ3、四位はロサのセカ

ンド。この番狂わせは来シーズンにどう影響するのか？楽しみですねー」

鳴り止まない拍手の中したり顔の司会者は負けじと声を張り上げる。

「たった一人にだけ送られる殊勲選手賞の発表！！皆さんの期待通り！美しい！あまりにも美しすぎるダンジェルマイアー！！マイアー選手です！！」

「オウ。拍手の要求はいらないようですね。では市長よりメダルと賞金の授与です」

デフォルメされた女神像がマイアーに手渡されると、表彰台から笑顔と投げキッス。表彰台が肉眼で見えないファンは大写しにされた画面のマイアーに感嘆の声を惜しみなく送り続ける。

スクリーンから魅力的な投げキッスが送られるとハートのついたため息が会場中に聴こえる。

お役ゴメンとなったオーケシュトや来賓はスポットライトの当たらない暗がりへ戻っていく。

中央に当たったライトを浴びて何度もアンコールにこたえて手を振っていた選手達も消え。

会場にある画面に今日のハイライトシーンが映し出されると興奮冷めらぬファン達が高揚した面持ちで席を立てて見上げる、緩やかに人の波が出口へと移動し始める。

賭けに勝ったファンはチケットを持ってに払戻機に向かう。

いつもはポスターやパネルで隠してある払戻機の前にはロッキーズンの人気を計れる長蛇の列。

副調整室に戻ってきたオーケシュストは一斉に揺れる人波を笑いな

がら見ている。

「すごいねこれだけの人が換金してるよ。皆さん予想通りだったのかな」

国に納めるのが十一%ロッキーズン協会が二十%、配当金七十%、それ以外がオーケシュストに入る。

解雇

興奮と感動の決勝戦が行なわれた後

丸一日だけ安全点検のため競技場は閉鎖される。

それと同時に選手たちが住む建物の一階部分、

エントランスの隣の応接室では契約内容を更新するために一人又一人と選手たちが呼び出されている。

呼び出し係はポール。一切契約の中身になど口出し出来ないが身分であるが選手の成績はレースを見ていて予想でき契約を終えた選手の顔色も判断の一つになる。

ポールの呼び出しに役員部屋に入った選手が
ドアが閉まった途端抱きつき握手までもやるのは契約内容がよかったからである。

厳めしい顔つきの選手がでてきた場合は最悪の契約内容だということ。

来シーズンに出走できない選手は後見人が呼び出されることもしばしばある。

選手呼び出しも目立たぬよう平常心を保っているがドアから出てくる選手が優しい笑顔で応じてくれたらと胸の内で願っている。

ポールが会議室のドアを開け中に声をかける。

「ラティーフ・セヴェールです」

「いいよ」中からの声。

「アネル、君の番だ。今日はとてもいい日になるよ」とポール。

「ありがとう」

部屋に入ると空いた椅子が一つ
その前には大きなデスクを囲んで一番奥からオーケシユストが座る
ように指先を動かす。

周囲には山済みの書類を前にオーケシユストの腰巾着の役員が五人
顔を並べている。

会議室の主導権はいつもオーケシユストにある。

「ベルデはいつも活躍しているね。いいレースをすると市民からは
喜ばれているよ。嬉しいだろうファンがたくさんつくと、走りがい
もあるってものだ。そう思うだろうアネルも」

とにこやかに正面のアネルを見る。オーケシユストの頭の中ではも
う金額は決まっている。

「ええそうですね」

アネルの返事など期待していないオーケシユストは
うつむきかげんのアネルから目を離してコンピューターが出した数
字を見る。

「で、君の成績なんだが一年目、二年目と結構頑張っていたみたい
だけれど今年はどうしたのちょっと元気がないみたいだが」

地味な選手は嫌いなオーケシユストはコンピューターがはじき出し
た数字が気に入らない。

「そうですね」

「何かあったのかい？僕等で解決できるような問題なら是非とも話
してくれないか。まだまだ君は活躍できる選手だからね」

優しい声でオーケシユストはアネルの口が開くのを待った。

がアネルは黙ったままオーケシユストの手元のファイルを見ている。

「疲れているのかね」

少々選手に気を使いすぎだと思うが役員達の見ている前では派手な言動は慎む。

「そうだと思います」

と口数少なくアネル。

この契約更新の場ではマイナーな言葉は禁句。オーケシユストには渡りに船。

「君ほどの選手を休ませたくないが。一年ほど休んでみるかね。なあに元気になったら連絡をくれればいい。最初からテスト受けなければならぬが。君なら心配する必要などないさ」

イマイチの選手は数多く要らない。どの角度からでもTV映りが悪いと心の中でだけでいう。

沈んだ顔を上げてアネルが尋ねる。

「ほんとに辞めてもよろしいですか。ずっと考えていたんです。田舎に帰ろうかと。私にはこの競技は向いてないんじゃないかと」と口からため息。

「君が居なくなるとカスティルやジリアスクが寂しがらるだろう。何、シーズンが始まればそんなことは言ってられないからな。残念だ」と他の役員の顔色を伺う。意義を申し出るほど発言権を持った役員はここにはいない。

「アネル、部屋を引き払う時に必要な書類をポールに持たせる。急がせるようで悪いが更新手続きがとられない場合、君はここをすぐ

に出て行かなければならないんだよ」
とんとんとテーブルの資料を指で弾く。嬉しい時のオーケシユストのくせだ。

「ええ、最初の契約に書いてありました。覚えてます。夕方までには部屋を空けます。それでいいでしょうか、では失礼します。お元気で」

ほんのわずかだけれどラティーフの心は軽くなった、

「ああ君も、アネル・・・」

辞めていく選手になど興味など無い。

次の選手との更新にオーケシユストは頭を切り替えている

こんな所には居たくないとおーケシユストの返事も終わらないうちにラティーフは部屋から出て行った。

四階の部屋に戻りこの三年間で増えた荷物を簡単に分けて二つのトランクに詰め込む。

一つは自分の服もう一つはファンから貰った贈り物。

ポールがどうしてこうなったんだ目で訴えながら書類のファイルを置いて

次の選手の呼び出しに去った。

契約更新は二日にかけて行われる。

掲示した契約金に不服がある場合、又次の週に持ち越される。

その不服契約で残っていたマイアーが荷物を持ってエントランス下りてきたラティーフの腕を掴む。

「どうして！居てくれないの。これ！これ！私の住所、母が居るの

手紙をちょうだい。連絡をちょうだい！すぐには返事は出来ないけれど。お願い！」

辞めた選手と現役選手同士の連絡は取れない。

様々な理由が規約では上げられているが根本は八百長を疑われる要因をすべて排除しているというのが理由だ。

「うん、ありがとう」

それ以上ラティーフは答えられなかった。出来れば今すぐ話を聞いてもらいたい。

「アネル・絶対よ私が引退したら。連絡を取ってね・・・」

ビーレルが言葉に詰まって立ち止まるとラティーフはその手を握って最後の別れにした。

宿舍のエントランスから五分ほど歩いて警備事務所で通公証を渡して高い門から表へ出た。

ごろごろと二つのスーツケースを転がしてタクシーを止める。

「ポーターミナルまで」

「ハッ？目は開いてるかい。何処を見て歩いてるんだよ。道を渡って二分だよ。まったくもうー」

怒って急発進して行ったタクシーの姿を目で追って運転手に言われた場所を見る。

確かに駅の入り口を示した矢印が道向こうにはある。

ラティーフが出て行くのをポールはエレベーターの手前で見送った。オーケシュストに最後のベルデチームの選手を引き渡しもう

用事はないかと尋ねて競技場修理の進み具合を見てくると宿舍を離れる。

競技場の売店やラウンジには工事用の資材やペンキを持った作業員がロッキーズンの話題で盛り上がっている。

TV放送されていた実物のアトラクションが
目の前に有ると言う事が作業員のテンションを上げさせている。

闘技場を観覧席から見て回りラウンジに戻ると

作業員に交じって立食テーブルでサンドイッチをかじりながらメールを作成した。

メールの相手はビル。

アネルの解雇をどう伝えるか何度も書き直して結局短い文でため息をついて送信する。

ビル 驚く

ビルがアネルの解雇を知ったのは夕方。

市の監査役に調査が必要と決定された人間の外部との接触、会話を収録したディスクと資料を持って役所まで来ている。

ロックイーゼンに関する収支報告は大型コンピュータが計算して競技が終わると同時に市に送られているからビルは一切金銭面のことはタッチしていない。

主催者でオーナーでもあるオーケシユストが市まで出向くのが筋だが市から細かい説明を求められる監査会を嫌って代理でビルがロックイーゼン発足から今日まで出ている。

タクシーを降りると時計を見ながらオーケシユストの行動パターンを思い出す。更新契約が済んだ選手の資料を見ながらPCの前で悦に入っているはずである。

金銭に関してはゼネラルプロデューサー、オーケシユストの担当だが選手の解雇となれば話が違う。

役職ではチーフディレクターのビルが個人的な見解で選手の契約金に異論は唱えられないが

シーズンベストテンに入った選手を簡単に解雇するなどありえないのである。

選手宿舎を突ききり左へ左へ木立の中を走るようにビルは歩く。

「オーケシユスト、話がある。アネルの解雇は本当のことか？」

応接間のお気に入りの椅子で嬉しい楽しい選手の組み合わせ表を作っては

湧き上がってくるイメージに浸る。これぞ最高のショーの見せ場・・

に水を差すようなビルの登場。

流石は役所、五時には追い出すのだなとビルを見る。

「アネル？アア、あの年増ね。人気はあっても年齢的に体力の限界に来て居たんだよ。本人も休みたいつて言っていたしいい機会じゃないか。最高に調子のよいときに辞められて。あの歳でこれから体力を維持するにもきつだろう？性格も暗いしここが潮時だぜ。そう思うだろう？」

ビルなら文句を言うだろうと思っていたから外しておいて大正解だったと薄ら笑いを浮かべ真剣な顔のビルに向ける。

生真面目なビルが怒っている。

「僕は残念ながらそうは思わないよ。僕等のシナリオ次第で彼女はもっと伸びたと思う。人間性を見たらどうだい？個性とか運動能力もいいけどその先の人間性を観客は求めていると思う。解雇を撤回してくれないか」と思いのたけを言う。

普段は決して本音は言わない。言った所で何も変わらないからだ。

困ったものだ・・・とオーケシユストは眉間に皺を寄せる。この皺はかなり効果がある。

「ビリー。君に彼女の解雇の相談をしなかったのは悪いと思うよ」としおらしく言って見る。

「でもあの程度の人間性なら探せばいくらでも居る。いや発掘するんだ。それと新しいライターを雇ってくれバイトの使いっぱしりの男を今度面接に回す。いいだろう？もう居ないやつことは。選手の活性化だと思えば。おっと我々のチームも活性化しなきゃならん。よろしく頼むな」

腹を立てたと思わせてねこなで声に変えてみる。

オーケシユストを怒らせたくないビルは口を結んで黙ってしまふ。

次は少々威圧的にここでのボスはこのオーケシユストなのだということをはわからせる。

「それとアネルは故障者リストに入れておいてくれ。これでファンは納得するだろう。そのうち忘れるさ。広報には俺が知らせておく。聞かれたら療養中だと答えてくれ。解雇したなんてばれたらファンがうるさい。暫らくはアネルが辞めた事は内緒だ」

屈託のない笑顔でウィンクして話は終りだとオーケシユストは手元のパソコンに目を戻す。

悪気の無いオーケシユストにあきれて言葉を返せない。
権限を持たないビルはすくすくこと応接間から出て行った。

十年前地方の競馬場を取り仕切りビルの采配で働く職員の動きにオーケシユストは感動しロックイーゼンのためにヘッドハンティングをした。

田舎でマッチレースを楽しんでいたビルは騎手兼馬主でもある。

賭け事好きの父親がオーケシユストと仲が良く、信用して一緒に仕事を始めることにした。

ロックイーゼンの構想を練ったのはオーケシユストだが細かい取り決めや基礎固めはビルが案を作る。

オーケシユストの最初の構想では実力はあるながら練習に打ち込める環境が整っていないアスリート、受け皿としての機能を発揮するのが目標であった。

故障している選手には休養と強化訓練と金銭的バックアップ。

これらは一年から三年の短期間の契約でアスリートは本来の自分のスポーツに戻るのが原則だったが

実際には集まりすぎたアスリート達を選別し良い選手は何かと理由をつけてレースに出して人気取りに使い本来の競技に戻す事はしなかった。

途中から受け皿をやめロッキーズ専用の選手の公募も始め
選手がロッキーズを辞める時だけ本来選手の所属していた競技
に引き渡すが

後、引き渡された選手が活躍した記録は無い。

ビルが辞めた選手のことを気にかけることを嫌味に思うオーケシュ
ストは面白く思っていない。

大事な会議もビルが留守にしているときを狙っている節がある。

後日会議内容を見せられて問題点を突くと慌ててオーケシュストは
ビルに修正をさせる

この繰り返しが多くなっている。

オーケシュストの行動を大人気ないと思いつつも発足時の仲間が辞
めていく中

巨大化したシステムと選手たちの体のことを考えるとビルが口を出
さないといけないことは山ほどある。

オーケシュストの子供じみたビル外しにも慣れた。

この一年、仕事手が止まり

男のプライドをかけてむきになってやっていたマッチレースを思い
出し

ぼんやりすることが多くなった。

「俺も歳だな・・・」

馬と一緒にあって喜んだり悔しい思いをした記憶が鮮明に蘇る。

ポールが送ったメールのもう一通はテットの携帯に届いている。
正確にはルーサーがメールを読んで顔色を変えている。

駅

「信じられない・・・かこの鳥が・・・出てきた」

ルーサーは嬉しくてはじけ跳びたい気分である。

「テット・・・今夜の夕食会は腹痛でキャンセル。サニ・ドクターの予約を入れてくれ」

持っていた本を放り出し専用のトランクを見つけると動きやすい服装に着替える。

「

それから・・・テット。君の情報網にラティーフ・セヴェールを入れて所在を追って欲しい。急げ。まだ遠くには行ってない」

携帯電話を握り締めルーサーの目は何度も短い文章を読み返している。今何処に居るのだろうか？

常宿にしているホテルに荷物を搬入し所定の位置に積み上げようと右往左往している最中、

手を止めてクリスとテットはルーサーの言葉を聞いている。

ルーサーの命令に無表情になったテットの革靴を蹴ってクリスは作業する手を動かしつつ、瞬時意固地になったテットに言う、

「やってやれよ」

重苦しいルーサーの雰囲気agaraと変わったのをクリスは見ている。

「冗談じゃない。遊びで使われてたまるか」と小声でテット。

自分の仕事を軽く見られるのはごめんだ。

「初めてじゃないか。気晴らしだと思えばいい。たまには気晴らし

もしなきゃ浮かばれないぜ」

とこれまでを振り返るように言う。

クリスの説得をうらめしく聞き、作業の手を止めテットはPCを立ち上げる。

まずチェックリストにラティーフ・セヴェールの名前を打ち込み馴染みの警備会社に承認してもらう。

犯罪歴にストーカーと記入。

警備会社の情報網にアクセス。

「何処にも通過記録がないですね。まだ周辺を歩いているのではありませんか？」

又くだらない熱が出てきたと無表情の顔は言っている。

テットの読みどおりに

ラティーフ・セヴェールはポートターミナル駅の階段で見知らぬ男に話しかけられていた。

大きな荷物を一段一段降ろしているラティーフを見て男は直感的にカモだと思って近寄っている。

「荷物を一つ持ちましょう」

男は持っていたショルダーバックを反対側に持ち替えて素早くラティーフの大きなトランクを持ち上げる。

軽くなったトランクに驚いて即座に、

「いいえ結構です」と答える。

「あなたの手には余っているようだ。大丈夫です私も同じ場所に行きますから」

と階段を下りながら、トランクをひきつけ先に降りる男性。

「あ、いいのに」

といいつつもトランクを持て余していたのでそのまま男の後を追って広い地下に下りる。

待合室を見つけて椅子に座ると親切な男も隣に腰掛けている。

男の額の汗を見てちよつと可笑しい。

「ありがとうございます。助かりました」と礼を言う。

男は息を整えると、

「良い旅行でしたか」と気さくに話しかける。

「この駅をご利用だとロックイーゼンの最終戦を見に来られたのでしよう。嫌ですね楽しい事はあつという間に終わる。オールシーズンやれる競技なのにもっと試合数を増やしてくれてもいいのにね」この駅を利用する人間は誰もがロックイーゼンを知っていると言う大前提で話をしている。

「そうですね」

ロックイーゼンと聞いて身体が強張る。

ロックイーゼンの話題で乗ってこないと知ると男は会話の内容を変えらる。

「どちらまで帰られんですか」

と男に聞かれて正直に、

「バッファローまで」と答えたが、

男はバッファローをバウロー聞き間違え。

「バルニエ行きはさっき出たばかりだ。バウローね、あれはもっとも長い距離があるな。遠くから来られたんですね」

女性の荷物と人相、服装から地方出身者だと思っている。

男に言われて刻々と変わる電光掲示板を見、
バツファロー行きの電車は出たばかりなのだ。ラティーフはがっかりした。

「そうですね」

他に何か別なルートは無いだろうか。と掲示板を見ているがどの名前も知らない地名ばかり。

「何かをお探しですか」

「いえ、ちよつと」

「私でよければ何かお手伝いをしましょうか？」

田舎の女は親切な言葉使いで相手を信用すると笑顔を作る。

「いえ、その・・・電車に乗るにはチケットが必要だと思っ
とすけ
ど」

「販売機なら・・・アアここからは見えませんね。よければ私が買
つてきて差し上げましょうか、私もセージクまで必要ですから」と誠
実ににこやかに言う。

一瞬チケットの買い方が解らないラティーフはこの男性に頼ろうと
思ったが

ブラウスの内側に下げたあるカードを思い出し止めた。

カードには三年間ロックイーゼンで稼いだ契約金の全て入っている。
軽々しく渡せない。

「そうですね・・・でも結構です。自分で買いますわ」
ラティーフが断ると、

男はあっさりと引き下がり、

「それじゃ私が荷物を見張っていきましょう。大事なものが一杯入っているのでしょうか」
と優しい笑顔。

「そうなんです。この小さいのは大したものが入れてないんですけど大きいのは大事なものを一杯詰め込みすぎて重くなってしまいました」と大きなトランクを触る。

「とても高価なもの？」笑い顔の目が真剣である。
金目の物は大きなトランクに入っているらしい。

「ええ私が一生働いても買えないくらい」
誰も買うことが出来ない宝物。ファン手作りの品物が一杯詰まっている。

「早くチケットを買ってらっしゃい。宝物はしっかり見張っておきましょう」
そ知らぬ顔で周りを見渡す。警備員は通り過ぎ誰も二人の会話を気にしている様子はない。

立ち上がったラティーフが小さなトランクを蹴飛ばすと
軽いトランクはくるくる回って教えられた方向に滑っていく。

「あ・・」
トランクを捕まえて恥ずかしそうにそのままチケット売り場にラティーフが姿を消すと
待合室のトランクと男の姿も消えた。

駅 2

列車に飲み込まれては消えて行く大勢の人波を見つめながらいつになったらこの場所から

この駅から、レイステンという都市から

離れる事が出来るのだろうかとうと哀しい目でラティーフは眺めている。

「ええ、そうなんです大事な荷物なんです。とても親切な人で荷物を持ってくれてチケット買っている間見張っててやるって言って、そのまま持って行っちゃったんです」

小さな椅子に座り何度も同じことを駅員に訴える。

駅員はラティーフの書いた名前を見て胡散臭いと表情に出している。ラティーフだって変な名前だと思う。

「トレーダー・バクロン・さん。確かに待合室でその時間トランクを持った男が去っていますけど。これ以上探すとなるとあなたの身分証を提示していただかないと」

トレーダー・バクロンと名乗る目の前の女性は不安げな様子で駅員を見ているが嘘をついているように見えてかなり怪しい。

「そんな・・・」

胸元の身分証には選手としての名前がある。

辞めて一年間は些細なことでも問題を起した元選手は違約金を払わなければならない。

トレーダー・バクロンはロックイーズン選手が問題に直面した時に使用する名前。

ファンや記者などに悟られないようロックイーズン顧問の弁護士が

処理をすると契約書に書いてある。

「会社に連絡してください私の身分を証明してくれますわ。それで早く荷物を取り返してください」

事故を起した時の対応は最初に教えられた。書きたくなかった住所と名称を書く。

駅員は保安部を呼び出しラティーフの書いた住所を照会する。

競技会施設館内事務員として名前と顔写真がモニター画面には現われた。合っている。

「その男が最寄の駅にいたら？まえますけどね。構内から出ていたら難しいかと」

身分確認が取れたのか別な仕事で忙しくなったのか駅員はトレイダー・バクロン（ラティーフ）の存在を忘れたように仕事を始めた。

ラティーフは駅員室から出て暫らく駅員から見えるところに居たが諦めて

地図を求めて大量のパンフレットを旅行会社から仕入れ見よう見真似でチケットを買い長い列車の旅に出た。

「それで！彼女は何処へ行ったんだ！ポート駅からバルローまでのチケットを買って。バルローからの足取りは？あの駅は四方八方何処にでもいける」

後部座席で腕組をしたルーサーを車内ミラーでクリスはチラリと見る。

いつもの冷静なルーサーと違いむき出しの感情が伝わってくる。

バルローと彼女の接点は身上書に無い。

バルローはただの乗換駅だろう。

「ええ彼女のカードの番号を追っていますがまだ使用された形跡がありません。電話も使ってないようですし」

助手席でPC片手に状況を説明するテット。

特急列車を車で追いかけるとは無謀なと思いつつハイウェイを滑る様に走る車の速度を見てぞっとする。クリスは絶対にルーサーの願い叶えてやりたいのだろうと苦々しく隣を見る。

運転席ではハイになったクリスがスポーツカーと抜きつ抜かれつのカーチェイス。

「テット。君の情報網も大したことないな」

イライラの極致に達し言っては行けないことまでルーサーは辛らつに言う。

テットはルーサーのために法を犯してラティーフのカード番号を追っている。

ラティーフの解雇の情報の仕入れ先はポール。彼とは三年前から金で情報を買っていて

確認を取るため二人の警備員にも聞いている。

資格評議会開かれることになり身辺整理もかねてレイステンに来て
いるが

ルーサーは以前にも増して神経質で些細なことで突っかかってくる。

ガイネス国の皇太子を経て王になると思っているから

青二才のルーサーの悪口雑言皮肉も聞き入れてはいるがときに我を
忘れて拳を上げたくなる。

腹に力を入れて肩の力を抜く、視線を景色から手元のPCを見る。

ラティーフのカードが使われた。バルロー駅からシャプイまで旅券

を買い乗車している。

「彼女の目的地はシャプイだな」
シャプイは観光地で有名な場所である。

「ではクリス。ここでユーターンしてもらおうか。このままシャプイに行っても夜中だ。我々は明日の朝人に会わなければならない」
しっかりと後ろのルーサーに聞こえるよう声を大きくする。

「よろしいですねストロム様」

ボスツと助手席の背もたれをルーサーが蹴る。

予期していたテットは背中を浮かして蹴りを回避。
PCを畳みながら名前の知らないランプを車は降りて桁下をくぐり
再びハイウェイに戻る。

「解った。だったら明日の午後の予定は全部キャンセルだ。いいな
っ」

口惜しげにルーサー。

今度はテットがドアを叩く。了承の印・・・らしい。

シャプイ

レイステンから千キロ北東にカヤンデル山脈の麓、

野山の向こう側に小波が打ち寄せる海岸線が美しい観光地シャプイ。

ホテルのモーニングコールで目覚めたラティーフは窓から見える遠い青い海を見る。

明るい日差しと明るい海の色はラティーフの暗く重い気持ちとは正反対。

「綺麗な色・・・」

生まれて始めての海。

レイステンにいる間一人物思いにふける時間は皆無。

今が物思いにふけるチャンスだと思うけれどよくよく考えて自分自身を否定しても何も進みはしないと気持ちを明るい方向へと切り替える。

「そうよ。誰も頼れる人はいないんだから」

明るい方向といっても望みの薄い明るい方向・・・である。

十歳の時に生き別れたとラティーフは思っている・・・母親を探す目的でこのシャプイを選んだ。

ラティーフの母親はある日突然帰ってこなくなっている。

周りにはおばや従姉妹たちが大勢住んでいたお陰で母親の失踪後孤独に過ごした記憶は無い。

村では失踪として扱わず山の亀裂に挟まり落ちて遺体が見つからないまま死んだと処理している。

子供同士の会話では大人たちが出稼ぎ行く場所シャプイの名前が

良く出ている。

ラティーフの母親はシャープイで働いていて元気であるけれど何か事情があって村に帰って来れないと子供らしい発想。

恋に破れて傷心を抱え選手生活にピリオドを打ち、

駅で待たされている間に思いついたのが遠い記憶の母親を探すこと。ともかく街を出る理由が欲しかったのが真実。

シャープイがシャープイであろうと無かろうと目的になる。

写真もないのにどうやって探すのだろうと自問自答し、女の子は母親に似るものと自分の顔に似た人を探せばいいのと心を奮い立たせている。

ホテルを一步出ると観光客が大勢闊歩している。

行き過ぎる顔は誰もラティーフをロッキーズの選手だと気がつかない。

顔に塗った緑のペイントは強烈だがTV放映されるラティーフの露出度は低く一線を退いても誰も騒がないのはとてもありがたいことだと思っている。

大きなホテルが立ち並ぶ温泉街を人波の流れるまま歩いていくと道幅が狭くなり岩肌が左右に迫る。

門のような木の下を潜り抜けるとパンプレットの表紙にもなっている有名な白い峡谷が見える。

手前のわずかな傾斜地には土産物屋の軒が連なっている。

みやげ物など関心がないラティーフはゆったりと動く人の流れに少々苛立つ。

二百メートルほど歩いたら前方の平らな岩の上で人の流れも止まってしまい

立ち止まった人達が揃ってみている方向をラティーフも見たが何も

ない。

段々になった平たい岩のみ。

たくさんの人々が何かを待っている。

黄色の雨合羽を着た係員が大声で叫ぶ。

「下がって下がって!!」

係員の声で一步程度観光客は下がる。

がこれから始まる自然のショーを近くで見たい気持ちに逆らえず大きな動きにはならない。

「来た!」「ワァー」「キャー」

最前列の観光客が嬉しそうに悲鳴を上げる。

平らな岩のあちらこちらに穴がありそこからお湯が二十メートル前後吹き上がる。

お湯柱は風に吹かれ曲がりぼとぼと係員の身体に落ちてきた。

係員の近くに居た観光客は濡れた濡れたと言って大喜びである。

間欠泉の向こう側には青い海を臨む白い石灰岩の段々畑が広がる。

人の流れが動き始めるとラティーフは店の前にテーブルと椅子を出した店に足を向けた。

咽の渴きを覚えたのである。

飲み物を買って求め顔の向きを変えると後ろから声をかけられた。

「やあ、久しぶりだね」

その声思わず振り返るラティーフ。

ロッキーズの誰かが迎えに来てくれた、と期待したが間違っていた。

斜め後ろに見覚えの有る男の顔。感謝祭で半日一緒に居たファンの一人。

ベルデのペイントも薄いボディースーツも、ラティーフがロックイーゼンの選手だったとわかるような外出着も着ていない。髪の色も染めかえている。

宿舎を出てシャプイまで誰もラティーフをアネルと呼んだ人間は居ないのである。

なので男の視線を外して無視する。

素早く観光団体の人混みに紛れ込みその場を離れる。

上手いことに間欠泉を見ていた観光客の中にもぐりこみあの男性ファンの前から逃げ出せた。

早足で歩きながらみやげ物屋のショーウィンドウに映る自分の姿を確かめる。

ジャケットは配給された薄いベージュ。パンツスタイルに大事なカードはチェーンをつけて首からポケットに入れてある。

他の観光客との違いは手荷物を持っていないのと会話しながら歩く同伴者がいないだけである。

しかもここはレイステンから千キロ以上離れて居る。

足早に白い峡谷に入りその奥の小さな土産物屋の中に駆け込む。

店の主人はぶら下がったカードを見て首を横に振った。ここではカードで物が買えないんだと。

ポール

ポートターミナル駅に降り立ったビルは足は重い。人の流れの中足を止めて改札口を見る。

電車から降りた人々がビルを避けて改札口を抜けて通り過ぎる。

「どうかしたんですか？気分でも悪いのですか」と今年最後の監査会に一緒に出かけたポール。

今日のビルはちょっとおかしい。何がおかしいかと聞かれてもポールにはわからないが何か変なのは確かである。

「ポール言いにくい事なんだが」自分の事を言うのは照れくさい。

まだロッキーズに未練があるビルは手助けしなければいけないことをあれこれ思い描く。

魅力的な選手人一人の顔が浮かぶと心は切り裂かれるように辛くなる。

「何ですか。こんな所で改まって、ちょっと端に避けませんか」人の流れがぶつからない場所を選んで一息をついた。

ポールはビルの様子からとうとう自分の秘密を知れたと覚悟した。小遣い稼ぎに選手の情報を売っている。優しいビルは雑踏を選んでポールに注意をするつもりなのだ。

ポールにとっては訴訟沙汰になるような大事な情報は洩らしていないと思っているが

金銭のやり取りをしているので偉そうに弁解も出来ない。

ビルの口から言われる前に先に自分から謝るべきかしらを切って通すか迷い

ブリーフケースの取っ手を握り締める。

「俺はもうロックイーゼンには関わらない」
唐突にビル。

行き過ぎる人の流れが一旦収まり二人のそばには誰も居なくなった。

「この書類を事務所に渡しておいてくれ。オーケシユストには事務所のイレ－ヌから連絡が行くだろう」

ビルは視線を床に移し冷めた目つきでつぶやくように言った。

シヨルダーバックの口を開け分厚い封筒をポールに渡す。

踏ん切りのつかない気持ちをかくして強気に笑ってみせる。

「ご冗談を、あなたはロックイーゼンの創始者だ。そんなことって出来ないじゃないですか」

ぽかんと開いた口でポールは尋ねる。自分の悪事はぶっ飛んだ。

オーケシユストはTVや雑誌に繁盛に顔を出してはいても、実際にロックイーゼンを動かしているのはビルである。

「ロックイーゼンの権利に関する書類にも全部サインがしてある。

俺は手を引くよ田舎で馬の世話をしているのが性に合っている」

やりたいことはまだまだあったがここらが引き際だと自分に言い聞かせる。

ビルの強い意志を感じて止める言葉を見つけられずポールは又焦る。

「メソドハに帰られるのですか」
メソドハは有名な古い競馬場がある。

「そうだ。今期のロッキーズン競技は大盛況だった。俺も思い残すことは無い。荷物は業者を手配するから俺はこのままメソドハに帰る」

改札口がビルにおいでおいでと呼んでいるようであたまれない。帰りたいのはメソドハではない。闘技場にあの選手達の下に帰りたい。

ここで戻れば又ずるずるとオーケシュトの尻拭いに走り回る自分に戻る。

「こんなことを言っではいけませんけど。僕も馬の仕事できますか。牛でもいいです」
オーケシュトの率いるロッキーズンに自分の場所は無いとポールは思う。

「その場の感情で言うんじゃないよ。来たけりゃ来い。まずは俺が帰って地盤固めをしといてやるよ」
無理に気持ちを明るくしてみせる。別れは苦手だ。

「ここから直にメソドハに？」
真剣な目で聞く。

「うんまず親父に手土産を買って帰らねえとまずいから、ロジエで一旦下りる」

ロジエの市場で両手一杯のみやげ物を調達するつもりでいる。
ポールに全てを話したら気が楽になる。

気が楽になると急に腹が減ってロジエで食事になりつこうと食い物

のことだけをビルは考えている。

「解りました。預かった物は事務所にしておきます。イレエヌが寂しがると思いますよ」

「頼むな」

ポールに片手を振って市内行きの電車にビルは乗って消えた。

ビルに渡された封筒とブリーフケースを抱えてロックイーズンの事務所にポールは駆け込むと、

書類の確認作業を終えたイレエヌが明日からの休みを楽しく過ごすか他の事務員と話が盛り上がり事務所全体が華やいである。

「これ中身を確かめてチェックしておいてくれよ」
と笑顔で頼む。

机の上に置かれた分厚い書類の束を見てイレエヌは缶切り声を上げる。

「打ち込み作業は終わっているのよ」

他の事務員も不満げな顔で書類を見ている。

「就業時間内には終わるって。あ・ともう一人分。十分後に持つてくるからそれも頼むね。僕の方は大丈夫、簡単さ。就労年数が少ないから」

とさっさとイレエヌのそばから離れる。

これ以上話しているとイレエヌの仕事が進まない。

ブリーフケースの中身を金庫にぶち込み、二三枚の書類を片手にポールは自室にかけ戻る。

先に退職願を書いて更新契約書破棄願いにサインをする。

部屋のパソコンにメソドハ行きの電車の時刻表を出し

旅行かばんに荷物を詰め込み事務所によると封筒の中身を見たイレエヌが呆然としている。

「このサインビルの名前がある。何よ全部の権利を譲歩するって・
・嘘」

そつとイレヌの机の上にポールの書類も置いて事務所を出た。

シャプイの夜 1

土産物屋で立ち話を繰り返しているうちに、感謝祭の男性と偶然であったことなど忘れてしまい日が暮れている。

母親の消息など見つかるとは期待してないが

バッファローの地名すら知らない人も多く

シャプイが村人の出稼ぎ場所では無い事はわかった。

白い峡谷から人混み紛れ駅に寄りこれからの予定を立てるために新しい観光パンフレットをホテルに持ち帰っている。

人間の多さで疲れた頭を切り替えて

パンフレットとの地図を睨み要所要所を丸で囲みルートを考える。

どのパンフレットも観光地までおおよその時間しか書いていない。

このシャプイもメインの白い峡谷まで

何箇所も小さな白い峡谷があつて商売をしたいみやげ物店と

宿泊客の欲しいホテルの策略に乗って小さな段々畑を歩きまわっている。

「人でいっぱい・・・」

広げたパンフレットを眺める。

ホテルの部屋は小さなテーブルと椅子

その向こう側にベッド、大きな窓はあるが隣は又ホテルの壁である。

椅子に座り込みペンを持つが一向に明日の予定が立たない。

腕組をして考え込みぼんやりしているとドアをノックする音。

すっかり暗くなった部屋の明かりをつけてドアチェーンを確かめる。

「はい、どなた？」

沈んでいた気持ちが伝わらないように声を出す。

「やあ、アルヴァー・ルーサーだ」

の声に思わず顔をしかめる。

華やかな観光地から離れて奥の住宅街に足を向け、
そこでもたつぷり時間を使って歩き回っている。

何処で見つかって後をつけられたのかがわから無い。

「？何の御用かしら」とドアを開けずに返答する。

昼間土産物屋で声をかけてきたのはアネルだとわかって挨拶をしていた。

たまたまラティーフがこのホテルに入るところ見ていたのかもしれない。

それともホテルの従業員がアネルと気がついて誰かにおしゃべりを
して噂が広まったとか・・

とっさに色々考えたがここまでラティーフをロッキーズンで走り
回っていた選手だと

判った人は誰も居ない。

この場は顔を出さずに知らぬ顔で追いついてしまるのが一番・・。

ドアの前で追いつく方法をあれこれ考えていると、

「ここはラティーフ・セヴェールの部屋かな？あのロッキーズン

のスターアネル・・・」

追い返す口実がまとまらないうちにアネルの名前がルーサーの口から出る。

「やめて！」

チェーンをつけたままドアを開けて確かめる。間違いない昼間見た男である。

「入れてくれないか。話がしたいだけなんだ。困らせるつもりは無い」

廊下のライトを背後に受けて自分の魅力は誰にでも通じると思っているのかルーサーには一切悪びれた様子はない。

黙ってラティーフは男を睨みつける。

「アネル元氣そうだね」

そんな人知らないと言下まで出てきていたが押し通す気力は無い。

半日素顔のラティーフと一緒にいた男である。

諦めてチェーンを外しドア前から退くと

ルーサーと一緒に優しい香水の香りが狭い一室に広がる。

ルーサーは床、テーブル、椅子までもパンフレットで一杯の部屋を見回し

優雅な物腰でパンフレットを二三枚拾って眺める。

「次に行くのはヤンプーの泉かい。綺麗な場所だ」
と腰掛ける場所を探して狭い部屋のベッドの上に座った。

シャプイの夜 2

「ごめんなさい場所が無くて。あ、まって。椅子を一つ運んで貰えばいいわ」

部屋に入ったルーサーがベッドに腰を落ろすと慌ててラティーフは電話口に行こうと三歩歩いて立ち止まる。

最寄の駅ごとにパンプレットを集め路線図どおりに置いたところだったのに崩したくない。

「ここに座ったらどうだい」

ベッドの上にもパンフレットが散らばっているが

ルーサーはそれらをまとめて隅に追いやりラティーフ一人分の座る場所を作った。

落ち着いた物腰のルーサーに気負っていた気持ち沈み本音がぼろつとが出る。

「色々と考えていたらこんなになっちゃった」

ベッドにラティーフが座ると身体の向きを変えてじっとルーサーが見つめている。

「ずいぶん疲れているね。ここは広い観光地だから一日では周りきれないよ」

表情の乏しくなったラティーフを気遣っている。

「そうなの」

確かに何も考えがまとまらないのは疲れているから。

「横になつたらどうだい。座っているのも辛そうだ。横になれば動かすの口だけでいいよ。どうぞ」

とルーサーが枕を整えラティーフを促すと疲れ切っていたラティーフはちよつとのつもりで横たわった。

「寝ないでくれよ話をしに来たんだから」と陽気にルーサー。

心臓の鼓動がガンガン耳元でうなっている。

感謝祭で会った彼女の隣にすることが嬉しくて、狭いホテルの部屋も地味な壁紙も質素なベッドもルーサーには見えない。

「大丈夫よ、話ぐらい出来るわ」

騒がないでくれるのなら少しぐらい話をしたっていい。どうせ今は華やかな選手では無いのだから・・・そう思うと気が楽になる。

「じゃ聞いてもいい？ どうしてロックイーンを辞めたの」

「え？ そうね・・・重なつたの」

何が重なつたのかラティーフは目を閉じて考える。

重なつた・・・重なつた・・・重なりすぎて身動きできないくらいに・・・

「ねえあなた、女性に振られたことある？」

澄ましてこちらを見ている男性は女性に振られる要素は何処にもない。

「その顔だとあまりないようね」
チラリと端正な顔のルーサーを見る。

どっちかというラティーフのような平凡な女性は相手にしないだろうと思われる。

付き合う相手に不足が無いのはマイアーぐらいのものね・・・と
思い出したマイアーの最後の顔は哀しい表情だった。

きちんと別れをしなかったことをラティーフは後悔した。

「私好きな人に振られたの。それで競技に集中できなかった。一度や二度じゃないの三度よ。同じ男性に三度振られたわけじゃないわ。皆別々、年齢もタイプも違うわ」
まだ生々しくジリアスクの言った言葉がよみがえって哀しくなる。

「幸運だと思ったの。周りは皆素敵な人ばかりで、皆努力家で素晴らしい才能を持ってて、私が有頂天になっていたのね・・・」

「焦る気持ちはわかるけど、近くに居る男なら誰にでもそうやって声かけるのは、かなりみつともないぜ」

君はいい人だけど付き合った男に病気みたいに結婚してくれって言うの。有名だぜ。止めなよ。みつともないよ〜

病気なんかじゃない、本気でこの人となら一生暮らしていけると思ったから言ったのに・・・と心の中で反論する。

ジリアスクにはもっと言い訳したいことがいっぱいある。

「ステイブはね、他の女性に盗られたの。ローランドは結婚なんか考えられないって。ジリアスクは一番付き合いが長かったし優しかったから絶対大丈夫だって信じてた・・・」

振られた男の名前とその理由をルーサーに説明しているうちに目頭

が熱くなり涙が溢れ出てきた。
頬を伝わって涙が耳に入る前にルーサーのハンカチが涙を拭う。

二年前のローランド、一年前のステイブ、三ヶ月前のジリアスクとの会話を思いつくままルーサーに話す。

ラティーフの口が閉じるのを待って落ち着いたのを見計らいルーサーは口を開いた。

「ラティーフ。ステイブは十八だ結婚を考えるには早い年齢だよ。ローランドは君じゃなくて君の隣の人が目的だったのだろう？ ジリアスクは誰にでも良い顔ばかりする奴さ。君の話だと僕には煮え切らない奴に思えるよ」

目を閉じて黙ってルーサーの慰めの言葉を聞く。

「マイアーと同じ事を言うのね」

ルーサーのハンカチを取り上げて自分で涙を拭って握り締める。

「私って男を見る目が無いのね」だからこの歳まで結婚が出来ないのだと思うと又涙が溢れる。

「自分を責めてはいけないよ誰も君を否定し居るわけじゃない。君はとても優秀な選手だよ」

ラティーフの目じりの涙をポケットチーフでなでる。

声を聞いているだけでルーサーの新しい未来が見えるようだ。

「あなたはどうかのよ。女性に振られたことはないにしろ。楽しい事はあるわよね。ね、素敵な人に出会ったときに振り向いてもらえる方法ってあるかしら」

捨て鉢な気持ちで聞いてみる、この部屋に一緒にいるのがジリアスクだったら

どんなに楽しいだろうと閉じた瞳の中で想像している。

優しいジリアスクは星空を見ようと誘うかもしれない。

夜の海を散歩しようと肩を抱いて歩いてくれるに違いない。

でもそれは勝手なラティーフの想像で実際は優しく拒絶されている。

ジリアスクではない優しい声が答える。

「素敵な女性に出会ったら・誠実に自分を見せるよ。隠し事は嫌いだからね」

「そうなの。意外だわ。あなただったら魅力的だからすぐに素敵な彼女を捕まえることができるわよ」

半日一緒に行動したことを思い出している。ルーサーの行動が読めずラティーフは焦ってばかりいた。

「そうだね・・・」

素敵な女性はまだ見つけている、

？まえることができるかはこれからの会話次第。

「選手るとき何を食べてた。好きだった食べ物ってある？筋肉増強剤が主食で後はビタミン剤がおやつになんて言われてるの知ってる？」

と話題を変える。

彼女の嗜好品、日常品、どんな些細な事に愛情を注いでいたかをルーサーは知りたい。

辛い内容ばかりを彼女には口にさせている。
下世話な話を入れてリラックスさせる。

「おやつ？それちよつと当たっているかも。でも一部の人だけよ。ほとんどの人が食堂で出された食事を食べているのよ。私はね野菜と果物が好き。夕食は皆と同じに食べるとおなかが重くて眠られないの。だからトレーナーからいつも注意を受けていたわ」と思い出して話す。なぜか自分のことを聞かれると嬉しい。

食堂ではトレーの上の料理に足りないものが上乘せされる。

動物の内臓は極力嫌いで細切れにして食べていた。

涙目のラティーフの口元がうっすらと笑うと言葉を忘れてルーサーは見とれてしまう。

「普段はどんなファッションで過ごしてる。スポーツウェアが多いの」

これからラティーフと一緒に歩くとなると持っている服を見直さなければならぬ。

「私はそうよ。皆は違うわ、色々な服で個性的よ」

ミリーの自己主張が強いファッションと、センスの良い着まわしでおしゃれを楽しむマイアーの二人は選手達の憧れの的だった。

ミリーのファッションを見て驚いていたらマイアーからさりげなく注意を受けた。

競技中は身体のラインが丸見えでも集団の中では目立たず身体の線が見えても平気だが日常にそれを取り入れることはラティーフにはない。

肌を露出しない服装を好む無頓着なラティーフに

マイアーはいつも気を使ってアドヴァイスをしては服装にアレンジを加えてかつこよくしてくれたものだ。

アアそうか・・・私に足りないものは性格の地味さだけではなくて

地味さが服装にも現われていたのかと又落ちこんでしまう。

「私ってマイアの引き立て役かもね・・・」

マイアと離れて初めてマイアの美しさを感じている。

「マイアって？さっきも出てきたね。ダンジェルマイアの事。君の友人？」

「そうよ。一番仲良しだった。彼女がいなかったら私の選手生活はもっと寂しいものになっていたかもしれないわ」

マイアと過ごした時間は楽しかった。彼女の周りには彼女が動くと同時に人の流れが出来たのには驚いてるがそれら全部を含めて良い思い出である。

「ダンジェルマイアに恋人は。大丈夫、誓ってもいいよ。僕はこの話を雑誌社売りこまない」

と宣誓のまねをしてふざけてみせる。ラティーフが口にする個人名は要注意。

「居ないわ。誰にでも親切で優しいけれど特定の人とは付き合ってなかったの。きっと選んでいたのよ慎重な女性だから」

私ももっと慎重に男性を見て居ればよかったとまたまた落ち込む。

とりとめの無い話をラティーフにさせてはしっかりとその内容をルーサーは吟味している。

友人マイアはルーサーの印象ではアネルを恋人のように思っているようだ。

極めつけ彼女を振ってくれた三人の男性達が居なければルーサーにチャンスは巡ってこなかったと思うとに彼らに感謝したくなる。

シャプイの朝

目覚めは突然やってくる。

カーテン越しの朝の光がラティーフの顔に注ぎ隣に眠るルーサーの顔を直視した。

アラこの人自分の部屋に帰らなかったんだと思ったが頭の中はなぜかすっきり

遅くまでグダグダと話していたと思っていたがいつの間にか二人とも寝込んだらしい。

昨日まとまらなかった観光地巡りの計画案がはつきりと思い描ける。そつとルーサーを起さないようにベッドを離れるとトランクの中に荷物を押入れ要らなくなったパンプレットをゴミ箱に入れる。

「やあお早う。疲れは取れた？」

さわやかに起きたラティーフにざわざわと嬉しい胸騒ぎを覚えるルーサー眠っているラティーフも可愛らしかったが活き活きと動き回っているほうが更に魅力的である。

「え、あらごめんなさい。起しちゃったわね。私は元気よ。あなたは部屋に帰らなくても良かったの。きっと心配しているわよ」とルーサーへの返事はかなり儀礼的。

優先順位は自分の支度とばかりに、

「私はえーつとね、これから駅に出るわ。お別れね」

につこりとルーサーに笑いかけて洗面所で身だしなみを整える。

ジリアスクに振られて以来鏡を見た記憶が無い。

あーあ、やけで染めた髪の毛はちっとも似合っていないしまだ二十

五歳だというのに十は歳をとって見られるわ目の下のくすみはもう取れないのかしらとしみじみ自分の顔を見る。

「朝食はどうするの」

ラティーフの中ではもう帰ったはずのルーサー。

今日の計画は昨日決まっっていて、

「朝食は電車の中でとるわ。急がなくなっちゃヤンプーに昼には着きたいの」

鼻歌が出るくらいに予定が頭の中に入っている。

「それじゃ夕食を一緒にどうだい」

部屋の鏡で身だしなみをチェックし洗面所から出てきたラティーフをみて頬が緩む。

「あら素敵。でも約束しないわよそれじゃお先に」

軽いトランクを片手にさっさと部屋を出て行った。

「予約しておくからね」

の声が背中に聞こえる。

「変な人、でもなんかすっきりして気持ちがいいわ。さあー行くわよ。いっぱいいろんな所に行って見て回るわ」

フロントでカードで支払いを済ませて意気揚々とラティーフはホテルを出て行った。

ラティーフが出て行くと同時に黒いフロントガラスの車がエントランスの前で止まる。

そこへ手ぶらのルーサーが現われ乗り込むとゆっくりと車は発車して行った。

「今日の予定はご存知ですよね」とテット。

「知っている」

「テット、飛行場へ向かったらどうだ。そのほうが早く着くだろう」
嬉しい気持ちが声に出ている。

「準備してございます」 胡散臭げに後ろに目をやるとクリスも見ている。

「うん」

と上の空で軽い返事。

車は駅とは反対方向へ走り出した。

バックミラーで見える限りルーサーの様子は上機嫌だ。

後部座席に座ると同時にいつもの分厚い本を広げたが

ページをめくりながら見慣れない動作が入っているのをクリスは見逃さない。

信号機の変わり目を利用して注意深く見ていると携帯電話の画面をちらちら見ている。

隣のテット同じ行動である。

テットもパソコンで部下の仕事の状況をチェックし命令を変更したりしているが

合間手が止まり携帯電話の画像を呼び出しては表情を和らげている。
盗み見した画像はコレットとのツーショット。

テットはレイステン市では警備会社の社長、主にルーサーの警備をしているがガイネスからの要人達の警護も受け持っている。

田舎国ガイネスから出てくる要人たちはとっかえ引返して引き連れてくるお供は半分観光旅行気分の団体様を立ち回り先毎に警備を変えて守っている。

社長としてのテットの立場を利用してコレットを誘っているが誘われるコレットもテットを金のなる木と心得て付き合っているようである。

数日後には二人はセデル国を出てガイネスに戻る身分である。

テットは歳の差のあるコレットを本気で国につれて帰るつもりであるし

ルーサーはといえばやっと二度目のデートが出来て 크리스 としては人間らしいルーサーを見られて嬉しいがテットの手帳のリストを半分も消化できていない。

テットがメールの着信履歴を見てにやりと笑う。それを横で見ている 크리스 はコレットからの良い返事だと推測する。四十路の春である。

「良いニュースです。今夜ドラドのブラーズ様が予定を変えてレイステン市においでになる」

「明日の予定だったろう」それもイクラル市のホテルでラウンジでの約束が取り付けてある。

「セデル国の外相が南海の嵐に出立を遅らせたせいでしょう。予定を見直しましょう」

「変えなくて良い」

「それは出来ません。ブラーズ様は評議会の委員の一人です。出来ればもっと繁盛にあって印象つけるべき人間の一人です」

「変えなくても良いといっている。外相は天気で予定を変えたのだ

ろう。南海の天候などすぐ変わる。ブラーズは外相と会談するつもりだ言っているが目的は別だジプトン社の会長も孫の誕生日にレイステンに居る。ジプトン社の系列会社の社長も集まっている。僕になど会う暇もないくらいに忙しいはずだ」

ブラーズの行動予測などすぐに計れるとテットをたしなめる。

予定を変えらてはたまらないそれでなくとも

幾つかのキャンセルをテットには飲んでもらうつもりでいる。

昨夜から今朝までのラティーフの顔を画面に出しては何度も見ている。

雑誌と違って初々し印象である。

どちらも大事なことを話し合っているというのに
少し浮ついた会話になっているとクリスは一人聞きながら思う。

この土壇場に来て恋に燃えている二人が切ない。

ヤンブー

白い峡谷シャプイから五十キロ内地に入り込みヤンブーに着いた。標高二千メートルの台地には美しく澄んだ湖が広がっている。シャプイを早く出たのはヤンブーの探索時間は多く取るため。美しい湖を取り囲む森の間に村や町、ホテルが点在している。

パンフレットどおりに歩いていくと小さなコテージが道路の横に立ち並ぶ先に賢者の泉といわれている小さな泉まで歩いて登りラティーフは一息をついたここもまたたくさんの観光客で溢れかえっている。

流石にここまでシャプイの硫黄の匂いは漂ってこなかったがおしゃれをした婦人の香水がどぎつく鼻にまわり付いたのには困った。湖を半周し遠くの山並みに太陽が傾きはじめている。

土産物屋にバッファローから嫁いで着た夫人は居ないかと尋ねると答えはここもシャプイと同じでバッファローの地名を知って居る人間に出会えなかった。

「ここも素敵な場所だけど、人で一杯だわ」

水の上に吹く風に心地よさを感じながら夕暮れの湖がピンク色に染まるという時間を心待ちにしている観光客を後にしてホテルにとラティーフは足を向ける。

疲れる前にホテルに戻り明日からの予定を組みたい。

穏やかで神秘的な風情の湖を離れて緩やかな坂道を登り詰めるとシャプイで泊まったホテルと同じ名前のホテルが建っている。

神秘的な湖に合わせてたくさんの木々が建物を囲みエントランスを隠している。

ホテルの玄関の手前で一台の車が静かに止まったまま動かない。坂道を登って来たホテル客の車やタクシーが慌ててハンドルを切って避けて中を覗くが運転手も車内も見えない。

止まった車の助手席にはパソコンに拳を置いているテット。目は後ろのルーサーを睨んでいる。

「もう遊びはお終いですよこのまま帰りましょう。連絡が入りました。明日の朝トレジャーホテルで待っているそうです」握った拳が青い。本気で腹を立てている。

ヤンプーまで不承不承しているがついさっき連絡が入った予定の要人のアポが取れたのだ。

大事な人間だとわかっているのにルーサーの答えはつれない。

「今日の予定は全部クリアした。どんなことをしたか教えようか。

卿の娘は誰を連れてきたと思う大統領の娘だ、歳は聞かなくても良いか？婦人は五十を超えている孫娘は十三だ。彼女等とお茶を飲んで花を見て回った。これの何が楽しい！」

他にも世話になった教授に挨拶をした。

「ブラーズと会ったところで何も変わらない。評議委員会は彼の意見を聞く所じゃない。国の未来を決める場に個人的な意見を通そうものなら彼自身が失脚する。無駄な顔つなぎはやめる。僕はこの見てくれのせいで信用度はゼロだ。この意味が解るか？良い体をなさってますね。スポーツは？では今度一緒にプレイしましょう。行けば女子供ばかりが集まっている。昨日もそうだ今日も同じだ」

最後くらいしっかりと専門書を読んでいたルーサーは子供や女性にキヤーキヤー騒がれるのに辟易している。

「フン、それに朝だと。ランチでもなければディナーでもない、出

発間際のホテルの朝。彼が僕に会おうと思ったのは、僕が現在王座にいる男の血を引いているという理由だけだ！僕個人に一片の興味も無い。奴とて同じ万が一・万が一僕が皇太子になったらあの時はこうでしただけだと言ひ逃れを作るためさ。もうすぐ試験だというのに何をあいつは隣の国でうろうろしている」

ルーサーの怒りが何処の誰に向けられているか推し量る。

「それはタラカテル国が民船を装って領海侵犯をしたからでしょう」今朝のトップニュースでは嵐で沈没と書いてあった奇跡的に船員は全員無事という。南海で嵐に遭い生き残れる確率は低い。

「将軍が追い払った」

ルーサーもニュースを見ている。

「表向きは、実際は船員を皆殺しにすると脅かして船を沈没させ戦鬭の様子をタラカテルに送りつけています」

ガイネスからの伝達事項でテットは前からこのニュースを知っている。

タラカテルとは国交が無い国交が無い国との会見は秘密裏に行なう。ドロドのブラーズは運輸関連の話し合いでセデル国に訪れているが裏では外交交渉の駆け引きに飛び回っている。

「バラディール将軍のやりそうなことだ。タラカテルはどう出ると思う？」

ガイネス国内の要人達の動きはすぐに政治情勢に関連する。

これから帰国しようとするルーサーに要人の情報は不可欠である。

「表向きは激しく抗議するでしょうね。セデル国が介入して宥めているのが実情だと思いますが」

「わが国は損害無し」

「ええ、わが国は追い返すだけで海の向こう側まで砲弾を撃ち込み

ませんからね」

「ではドラドのブラーズに伝言を。気疲れしているだろうからわずかな時間だがゆっくり休めと言っておけ明日は僕も休みだゆっくりとヒースコートの前並みを散策するよ」

と言い捨てて嬉しい笑みを口元に浮かべて出て行った。目の前をラティーフが歩いている。

「ストロム様！」テットの声が閉まったドアに吸い込まれる。

ルーサーは歩道を歩いているラティーフのそばに駆け寄り

パーティにでも行くようにぴったりと寄り添いホテルの緑深いエントランスに入っていた。

「まったくもう！いったい何があったんだ！」

要人の話でルーサーの怒りが冷えたと思ったら予定通りの行動。

「あれが普通の男だと思いますね。今までが異常で……。俺今のストロム様のが好きです親しみやすい」

運転手クリスは鳶の絡まったエントランスの明るい照明を羨ましく眺める。

「ばか者！そんな事言ってられるか！試験は迫っているのに。このままでは今までの苦労が水の泡だ」

クリスを叱り付けながらキーボードを打つ。最後の最後で追い込みの勉強もせずに女の後を追うルーサーが信じられない。

「ストロム様、試験を放棄するなんて無いですよね」

とちよつとだけ心配をする。確かにこの瀬戸際に休みをとって女性とデートは考えられない。

「そんなことさせるか！ギリアンに詫び状を書かせろ」
達筆な文章のギリアンは主にルーサーの身代わりに見知らぬ人達に熱意のこもった文章を書く。

「もうレイステンはお払い箱っすね」

ルーサーが視界から消えるとクリスの笑顔も無くなる。

「規模を縮小するにも王の命令が必要だ私の一存では動けない」
せわしく指を動かしながら答える。

「サガモア王は本気でストロム様を望んでいるんでしょうかね」
手持ち無沙汰の腕を組む。明日の俺達はいったいどうなるのだろう
と思いあぐねても帰国する以外に道は無い。

「わからん」

今日の予定は決まった。

「このホテルの見取り図は、よし従業員通路は把握しているな。通
気孔と配管図。よし。出入り口には二人組んで一時間交替で明日の
朝までヒースコートへの下調べを。レイステンの警備体制はそのま
まで」

ルーサーの我が儘も後二日で終わると思うと張っていた気持ちが萎
みそうである。

「了解」

「クリス最後だ。この場はお前に任せる俺はブラーズ様に付く。俺
の身の回りも片付けなければな」

「了解」

二人は少しの間前を真っ直ぐ見て黙っていたが
クリスが発車準備を始めるとテットは寂しげな顔を窓ガラスに向け

た。

ヤンブーの夜

濃い緑色の蔦のカーテンを掻き分けて歩いている歩道を登り詰め
やっと思えたホテルのエントランスの磨き上げられたガラス越しに
遅く到着した観光客が奥の受付で会話をしているのが見える。

予約無しで来た観光客だとその夫妻に同情した。
きつと断られている。

ラティーフもそうだ、ホテルなんて飛び込みでもすぐに泊まれると
思ったら大間違いで予約客でいっぱいですと受付で断られ荷物を抱
えて駅まで戻り駅から予約をして泊まることのできたのである。

あの夫婦とすれ違ったら声をかけて教えてあげようと歩幅を広げる
と後ろからルーサーの声。

「やあ」

いかにも顔見知りの二人が示し合わせて出会ったように声をかける。
「なんで？」

振り向きざまに上ずったラティーフの驚きの声。

頭の片隅にもルーサーはいない。綺麗さっぱり忘れている。

「夕食の時間に遅れそうだったんだけど間に合ったみたいだ。行こ
う。おながが空いている」

子供達が作ったという焼き菓子を食べ過ぎて口の中が気持ち悪い。

「どうやってこのホテルだとわかったの？」

一言も泊まるホテルの名前は言わなかった。

「受付のカウンターからここを予約しただろう？」

そうだったかしら？確かにチェックインしたカウンターで予約した。
あのとき周囲に人がいたか思い出そうとしたが

にこやかな表情のボーイがルーサーに話しかけてボーイの案内でレストランの窓際の席に座る。
本当に予約していたらしい。

ルーサーの人目を引く容姿が気になるがガラス越しの美しい景色と一緒に食事をする相手がいる嬉しさにラティーフは顔がほころぶ。
食事が終わるとラティーフは感謝の言葉を心から口に出した。

「ありがとう。とても美味しかったわ」

他の客の目はルーサーに注がれていて

そばにいるラティーフはちょっと恥ずかしいけれど

別れて部屋に入ってしまったえば気にする必要は無くなる。

「どういたしました。喜んでいただけ嬉しういよ」

直接部屋に昇るエレベーターの前でやんわりとラティーフの腕を取る。

「あ、君の部屋はこっちだよ。僕の部屋に荷物は運んでもらっている。旅は道ずれというだろう。まだ色々聞きたいことが残っている。パンフレットを広げる場所ならいくらでも有る。一人寝を希望するなら

最初に部屋を選んでくれ。西とか東とか朝日を浴びたい？夕日が見えるはんたいの部屋を選べば良いよ」

と、ラティーフにしか聞こえない声音で意気揚々とルーサーは説明する。

「あの・・・どうしてそんな勝手なこと」

狭いエレベーターの中で他の客の視線を気にして

大声で反論したいのに隣の女性と目が合い言葉が続かない。

「昨日のお詫びさ。僕は無作法だったいつもそんなことばかりして

いると思われたくないからね。それと君の予約した部屋はキャンセルした。行こうか」

エレベーターが開くと優しく腰を押されて前に歩くしか選ぶ道はない。

ルーサーに説明された後、

ふとあのご夫婦がキャンセルが出た部屋に泊まれるのではと思うと悪い気はしない。

「ベッドが二つあるの？それともこれから部屋を決めるのかしら」ルーサーの説明を頭に描くと建物の端から端まで歩くことになりそうである。

エレベーターのドアが開いた先には大きなドアが一枚開かれている。

「私始めてよこんなに広いホテルの部屋って見たことがないわ」

中を覗きドア横に立つグレーのスーツの男性にこんにちはと声をかけると

にこやかに会釈をして男性は立ち去った。

「どなた？」兄弟の方かしらそれとも一緒に旅行を楽しんでいる友達のかしらと色々詮索する。

「テット。執事兼護衛イコール教育係」と短く的確に説明する。

広いリビングから分かれた五つの部屋を一つ一つ灯りをつけてラテイーフに見せる。

「忙しい方なのね」

昨夜止まった部屋の三倍はある寝室にただ驚き選ぶことが出来ない。

中でも一番小さな部屋を見つけるとここがいいわとトランク一個置く

ルーサーがにこやかにここはクローゼットだと教えてくれその隣の広い部屋にラティーフの寝室は決まった。

リビングに戻るとテーブルには温かなお茶が待っている。

「色々見て歩いて、お勧めの場所なんかある？」

地上の暗さとは相反して空には太陽の明るさが僅かに残り美しい星が灰色の空に瞬いている。

窓辺の小さなテーブルにお茶を移動させてラティーフを長椅子に座らせる。

高い位置から見る湖とその周囲の景色は広く大きいがどこか物悲しい。

「景色は何処を見ても綺麗だったわ」

でもヤンブーもシャプイも一生その景色を見て過ごしたいとは思わない。

村を出て三年、

町に出れば仕事はあるとオババに言われ出てきたが

ありついた仕事は狭い範囲内でしか動くことしか許されない生活である。

選手生活の中で友人もたくさん出来たというのに規則の壁に隔てられ誰にも会えず相談も出来ない。

もし競技の関係者にラティーフから声をかければ

調査委員会から声をかけられた人間が呼び出しを受ける。

調査委員会の判断が悪ければ出場停止のペナルティが待っている。

本戦にでていない選手は失業する。

そんなハンディを分かって連絡を取るのはラティーフには出来ない。

最後のお別れにマイアーが来てくれたのでさえ心苦しかった。

マイアーの実家の住所までラティーフに渡している。

喜んでその実家にでも連絡を入れればマイアーの選手生命を短くする可能性もある。

点々と浮かび上がる湖の周囲の灯りが暖かな色合いに変わり始める、
気がつけば空には満天の星。

やっとロッキーズの選手ではなくなったとの感覚がラティーフ
に戻ってきている。

ルーサーの心はガラスに映るラティーフの顔に震えが来るほど感動
している。

上弦の月

カーテンの無い窓ガラスの向こうには
暗い湖と遠くに瞬く光。天空高く上っているのは弓なりになった月。

広いベッドの中央に小さな灯りが一つ
昨日に引き続きラティーフとルーサーは顔を寄せ合ってベッドに横
たわっている。

遠い昔話をするように
オーケシュストのキャラバン隊と一緒にレイステンに運ばれ
競技に参加したことを細々とルーサーに話して聞かせている。
聞き手はアネルの大ファンである。

ルーサーの穏やかな口調で尋ねられて何時とはなしに良い雰囲気にな
り
次から次へとお互い質問を投げかけては
返事とも説明とも取れない受け答えでベッドの中の会話は続いてい
る。

「君の美しい村の思い出は全部友達の花嫁式に繋がるんだね」
少し茶化すように抑揚をつける。
楽しい雰囲気は演出しなくてもルーサーの身体中からあふれ出して
いる。

「そうよ。女の子はねその儀式に憧れているのよ」
「君も憧れているの・・・」
ラティーフが照れて笑うと暖かいと息がルーサーの胸元にかかる。

村で同じ歳の女の子は皆結婚している。年下の女の子の式にもたくさん出て寂しい思いもいっぱいした。

「そうよ、女の子ですもの」

ルーサーと濃密に言葉を交わしているラティーフはお酒に酔った気分が続いている。

「そうだね、こんな所で言う言葉じゃないけど結婚しないか・・・と違うね。結婚式を挙げないか。綺麗な景色の場所で結婚式を挙げたら素敵だと思わないか。思い出はいつも美しい景色と共に有る。いいだろう？」

淡々と今までと変わらない甘い声音で尋ねる。

「結婚？」

きょとんと口に出し言ってみる。結婚とは何か？

「違う結婚式だ。結婚式。女性なら理想の結婚式があるのだろう。どんな結婚式がいい？式服は君に合わせるよ素敵なお思い出にしよう」
いかにも結婚と結婚式が区別された違うもののように言う。

「思い出作り・・・旅の思い出に結婚式なんて考えたこと無いわ」
ときらきらした目がルーサーを見上げる。

ミリーが言っていたつけファンは一生に一度の思い出を選手と作りたがると

ファンの送ってきた結婚申請書を見せびらかしていた。

結婚に憧れて三度も振られ
もう駄目とあきらめた時にまたもや結婚の話題が出るとジリアスクの顔が思い出される。

「それじゃ今から考えてくれ。君の望むままにやってあげるよ」

ルーサーの言葉でラティーフの口元がほころんでうっとり
回想している表情はルーサーを満ち足りた気分させる。

「結婚式・・・」

幼い頃の記憶が鮮明によりみがえり
ラティーフの心は一気に村へ戻り友達の結婚式に出た感激に浸る。
ユリーンは満面の笑顔で、モクゾンは笑いながら泣いて・・・皆素敵
で可愛らしかった。

ルーサーの手がラティーフの腰から背中に入り肩を優しくなでる。

「一度・・・やってみたい結婚式があるの。とても簡単なお式なの、
あつというまに終わるわ」

ちよつと興奮して早口になる。

ルーサーの手の位置が変わったことなどまったく気にならない。

「いいよ。明日の朝準備をしよう」

なんの銜いもなくラティーフがルーサーにしがみつくとルーサーは
至福の時間に浸る。

「ええ」

ルーサーの耳元でラティーフの返事が心地よい。

閉じた目の中にジリアスクが浮かび上がり

しがみついたルーサーのぬくもりをジリアスクに置き換えてラティ
ーフは幸せに浸った。

カヴァンナの丘 1

翌日の朝は快晴を約束するように
ひたひたと湖には白い靄が揺らめいている。

太陽が中空高く顔を出すと靄はたちどころに消えて水辺の草の上に
朝露だけを残している。

二人はホテルから椅子を二脚借り花屋で二人が持てるだけの花を購入した。

「車を使おう。合理的だろう」

「だめ、歩くの。式場には歩くって決まっているのよ」

椅子の足にも花を巻きつけている。美しく開いた花をつぶさないように持つのは難しい。

早起きした観光客の好奇の視線を無視してラティーフはずんずんと湖と反対側に向かう。

一時間も歩くと湖などまったく見えなくなっておおよそ観光地とは無縁の集落に二人は入った。

静かな家並みの間を歩いていけば軒先に出てきた婦人が立ち止まって二人をみている。

「ここらでもう一度聞いたほうが良いかもしれないわ」

ホテルの従業員に一通り道順は聞いて歩いているが
四方に伸びた家の間の道はどれも同じ幅である。

「何を聞くの」

「式場よ」

「？」

暫らく歩いて庭に出ていた婦人にラティーフは声をかけた。

「カヴァンナの丘はもっと奥かしら」

「ああ、その先で道が分かれている。右の小さな道を行きなさい」
「ありがとう」

にこやかにラティーフが答えると花だらけの椅子を持った二人を村人は黙って見送った。

道は婦人の言うとおりで二手に分かれて

右への道はちよつとルーサーが躊躇するくらいに鬱蒼とした草で覆われている。

ラティーフは気にならないのか汗を拭きながら歩いていく。

古い石垣や道とは思えない笹の原を越えて

木々の茂った中を登り突然足元には丸石が敷き詰められた山道に入る。

「着いた！」

人が手を入れた後である。

「ここ？」

「うん、この先」

丸石の続く坂を登り詰めると山の頂上。

見晴らしの良い丘の天辺は樹木を切り払い視線の先には遠くに山並みだけが見える。

「ここがカヴァンナの丘。カヤンデル山脈に向かって式を行うの。世話人や介添え人が居なくても山が見守ってくれるのよ。手入れされてるからまだ使われているのね」

とラティーフは二つの椅子を短い草の上に並べ花束を抱えて頂上の周囲を回って一本ずつ置いた。

「これでいいわ」

と天辺の上にも又こんもりとした土山の上にルーサーを呼ぶ。

「来て、素敵な花婿さん」

椅子の前に二人で立ちにはかんだラティーフが目を閉じる。

「空に住むもの、地に住むもの。山々の精霊たち。ここに居ますは太陽の子ラティーフ・セヴェール」

「月の子アルヴァー・ルーサー・フォルストロム」

「空蟬の花と誇り高いカヴァンナに誓って二人の営みをその懷で行ないます」

お互いの胸に花を飾ってラティーフが唇に指を置く。

誓いのキスをするのだなと察して軽くラティーフの唇に触れると電気が走ったように全身が痺れる。

「風の神よ受け取って!!」

さわさわと吹いていた風がラティーフの声で強く吹き上げ
投げた花を空中に運ぶように浮かした。

風が薄い雲を追い払い丘の上に強い太陽の光が降り注ぎ
刈り取られた草が陽を受けて金色に輝き
草や木がいつせいに葉をこすり合わせ拍手をするようにざわざわ音
を立てている。

風の神様の祝福を受けたラティーフは恥ずかしそうに大きな声をだ
した。

「これで終りよ。立会人はカヤンデル山脈。参列者はお花たち。苦
勞して歩いてきた甲斐がないでしょう？」

「いや。いい式だったよ」

「ごめん。十代の子供じゃないのにね。一度ねカヴァンナの丘に立
ちたかったの。さあ椅子を返さなきゃ」

昼も過ぎ空は高く澄み渡りカヤンデル山脈が遠くに見える。
来た時よりも身軽になったとはいえ敷石が無くなった荒れた道を椅
子を持って下りるのはきつい。

丘を降りて家並みが見えると、

「降りてきたよー」

と何処からか子供の声。

道幅が広くなり汗と草まみれの二人を夫人が家の前で手に何かを持
って待っている。

門の前の前まで二人が来るとニコニコ顔の女性が、

「ハイご祝儀だよ。おっとお返しはこの花を貰おう幸せにね」

「ありがとう・・・」

婦人は干物を椅子の足にくくりつけ代わりに椅子の背中の花を抜き取る。

道筋の軒先には老人から子供まで待っていて手に手に鳥の羽やビー玉、紐、干物と

花をとっては代わりに乗せていく。

「わしの分がないじゃないか！」

汚い老人が足つきの箱を手に二人の椅子の周りをうろうろして邪魔をする。

「ええい、これを貰おうかの」と干物を抜き取ると満足げな笑みを浮かべる。

「陽のあるうちに帰りつきなされや」

「ありがとうございます」

飛び出してきたばかりの老人は裸足のまま家屋の中に戻っていく。

「これはこういう風習なのか」

と怪訝そうなルーサー。

椅子の背柱から足の支柱にまでくくりつけられた祝いの品物。

一見ゴミにも見える。

「そうみたいです」

椅子を持つ手が貰った物の重さで震えるがなぜか楽しい。

ラティーフも解らないがヤンプーではカヴァーナで式を挙げたカツ

ブルに

祝儀を渡すのが当たり前らしい。

カヴァンナの丘 2

椅子に積まれた祝儀の品物を落とさぬよう
来た道を辿り帰路に二人はついている。

曲がりくねった道を抜けて

コテージやホテルが樹木の間に見え始めると

さわやかな風が湖から吹きつける。

行きと同じにびっしりと汗をかきホテルの前では

一人のドアボーイがロビーを走っていくのが見えた。

椅子を持って出た二人が今度はその椅子に訳の解らないものに乗せて帰ってきたのである。

「途中で捨てればよかったな」

くだらない祝儀の数々をルーサーは持て余している。

「あらもったいない。全部私が貰うわ。でも椅子は困ったわね。汚れたし変な匂いもついてるわ。私がこの椅子買い取るわ、あとで支配人に謝らなきゃ」

「支払いは気にするな。僕がやる。まずはシャワーを浴びなきゃ話にならない。この手でホテルの壁やなんかを触ったらその代金まで請求されそうだ」と笑う。

「本当」

残っていた一人のボーイが荷物を持ちましょうかと近づいてきたが二人は断ってエレベータに乗った。

まずは草の汁や泥汚れをシャワーで落としてご祝儀にと送られた品物を床一杯に広げてみる。

その作業はラティーフが全部担当した。

「何人から貰ったのかしら。たくさんあるわね」と嬉しそうである。

ファンからの贈り物を失くしてがっかりしていたからこの品物はラティーフの気持ちを明るくさせる。

そこへノックの音、テットがドアを開くとホテルの支配人が立っている。

「ごめんなさい、まだ椅子は綺麗にしていけないわ」慌ててラティーフが椅子についた葉っぱを落とした。それは葉っぱの形をした大きな染み。

「そのままです。そのまま結構でございます。いえ椅子のことは後で結構でございます。ちょっとその先ほどボーイが知らせてきたのですが、カタラの箱を見かけたと騒いでいたので。よろしかったらじっくりと見せていただけませんか？出来ればその箱を写させて頂いてロビーに飾りたいのですが」と、

もみ手を繰り返して真剣な様子の支配人の後ろに三人のボーイがちよろちよろと中の様子を伺っている。

「カタラの箱とは何か説明してもらおうか」と椅子に座って足を組みルーサーは支配人を見る。

「は？あのお客様はセデル国の方ではありませんのか。フォークステット様はセデル国には多い名前ですのでつい・・・」

支配人は神妙に言葉を選んで居るがだらだらと要領を得ない。

「わかった。そのカタラの箱はイアコブというマイスターが作った物だ言うのだな。本物か？」

支配人の説明を大まかにまとめてその後ろに声をかける。
後ろからボーイが首を縦に大きく振る。

「本物かといわれましても私どもはカタログとかコピーでしかこの目で見たことがないので。マイスターの創作活動はこの地域の誉れです。ここで作られた新作ならば是非ともこのホテルに飾っておきたいのです」これで一つ他のホテルより抜きん出る事が出来るとその顔は輝いている。

支配人の言葉を受けて老人が置いていった小箱を手にとって見る。
確かに細かい細工が要所要所に施され込み入っている。

「そうですか。そんなにすごい物なのですか。私にはその価値はわかりませんから大事にしてくださいさるなら差し上げ・・・」

ラティーフの言葉を手を握ってルーサーが止める。

「貸し出ししましょう。テット契約書を作ってくれ。貸し出し期間はこちらが必要になったときにでも返して下さればよい」
凜とした声音でラティーフの声を消し飛ばして主導権を握る。

「ルーサー私は構わないわ」
と小声で言う。ルーサーは何か考えがあるらしい。

「やってしまえばホテルが金銭的に困った時や、つぶれたときに売り払われてしまう。貸し出ししておけばむやみに粗末に扱われないだろう」

と手早く説明する。

「あ、そうね。あなたにお任せするわ」と納得する。

ラティーフの声は支配人の耳に届いた。

「ヒエeeeeee」

「へeeee、あ、」

一瞬思考が止まった支配人は何度も瞬きをしてテーブルの上にある縦二十センチ横幅三十センチ高さ十センチに満たない箱を見つめている。

「支配人、何か言って・・・」
と、後ろからボーイ。

「本気でございますか？」と支配人。

「違う、違う、そうじゃないってば・・・」
と後ろのボーイ。

「期間は限定しない。貸出料金も無料にしよう。テット、契約書を支配人に渡してくれ」

にこやかにラティーフを見て手を握り締める咄嗟に出して握ったけれど離れたくない。

「は？では見栄えの良い額縁を・・・は？いえロビーにガラスケースを置いて展示してもよろしゅうございますか？」と気を落ち着けて尋ねる。

「そうそう・・・」
と後ろのボーイ達。

「地元の有名人の作品なのだろう。展示の仕方はそちらに任せる。こちらに返してもらおうとき破損などせぬよう気をつけられよ」

テットが契約書を支配人に渡すと珍しいものでも見るように内容を確かめる。

「ほう、この印は王家の紋章。は？へ？真にぶしつけなお願い事をしましたお忍びであるとも知らずに・・・」

ゆつたりと構えて座っているルーサーに対して支配人は一歩後ろに下がり

こんな時どんな態度で接したらよいかいまさらながらに必死で考える。

「かしこまる必要など無い」

と片手を振られて会見は終わったと知るとカタラの箱を抱えて支配人は後ずさりして出て行った。

「支配人！大事に持ってください！！！」

とエレベーターの前でボーイの声。

「だめだ・・・手が震えて力が入らない・・・」

「支配人！」

壁に寄りかかった支配人を支えエレベーターに乗せ騒がしい男達は去っていった。

支配人が部屋を出て行くと、

「出立の時間が来ていますが」とテット。

昨日の夜から今日の午前中まで全ての予定をキャンセルしている。

二十三年間待っていた日が来たのに感慨深くなるどころか不安ばかりが先行して落ち着かない。

「分かっている、ロビーで待っていてくれ」
反対にルーサーときたら試験を放棄したのか妙に清らしい顔つきである。

軽く頭を下げてテットが部屋から居なくなると
ラティーフは慌ててヤンプーの人から頂いた干物以外の品物を綺麗に並べてトランクに詰め込む。

余裕のあったトランクはパンパンに膨れ上がりそれでもラティーフは満足している。

三年間の競技生活よりも充実した一日、なんと言っても人の笑顔がラティーフの心に残っている。

出立 ヤンプー

テットとルーサーの話し声で楽しかった時間に終りが来たのをラティーフは知る。

又一人旅が始まるのである。

「私もここを出るわ。受付で次のホテルの空きを調べるわ。もうデイナーの予約はしないでね」と明るい声。

選手宿舎を出た時と違い心も身体も軽くなった。

選手生活は霧の様に消えたけれど

残ったファンは大事にしなきゃいけないとルーサーに感謝している。

「何を言っている。今日式を挙げて晴れて夫婦になったというのに。僕はこれから国に帰らなければならない。一カ月後良い連絡か悪い連絡が出来るかわからないが君の居場所はテットに解るようにしておいてくれ。すぐに迎えをやる」

ラティーフとの楽しい時間はとうに終り出立時間も過ぎている。

着替えもそこそこにラティーフの手を取り命令するように話す。

「断るわ。遊びは終りよ。あなたは自分の仕事に。私は世間を見て歩くわ。気持ちよく笑って分かれましよう」

と、ルーサーの冷たい光を讃えた緑色の瞳を見つめながらラティーフはきっぱりと言った。

ルーサーは握った手を自分の口元まで引き上げて軽くキスをする

冷たく笑う。

「君は・・・大地の精霊に嘘をつくことになる。祝いをくれた人々にもだ」

ルーサーの口から意外な言葉が出てラティーフの胸は詰まる。精霊にだけは嘘をつかないというのは村人の古い掟である。

「そんな・・・だけど思い出作りって言ったじゃない。私とても良い思い出になったと思っっているのに。後悔させないで」
街に出てきているから街の掟に従おうと開き直る。

「言っておくよ、一カ月後何があろうと君は僕の所へ来るんだ。わかったね！」

冷やかな目がラティーフをじっと見つめている。

有無を言わさないその目とは対照的に口元は軽い微笑が浮かんでいて一層美しさに凄みが増す。

言い終えると易しく笑ってきびすを返した。柔らかい匂いを残してルーサーはエレベーターに乗って去ってしまった。

ルーサーの迫力に負けて声を出せなかったラティーフは誰も居ないフロアーに、

「嫌よ。私の人生は私が決めるのよ！」

と言い放つが、

大地の精霊への誓いを破る勇氣はラティーフには無い。

無言の威圧が続いていたフロアーは静けさだけが残っている。

一人残されたラティーフは突然優しくなくなったルーサーに腹がたつ。

「何よ、あんたなんか嫌いなんだから」

「私ってどうして男運が悪いんだろう。遊びじゃなかったの？通りすがりの男でしようルーサー。なんでおままごとみたいな結婚式なんかにこだわるの。おかしいよ町の人もおかしいよ。なんでよ」
ぽろぽろと悔し涙が流れる。

涙を流しても誰もラティーフに慰めて手を差し伸べてくれる人影は無い、

フロアには慌しく出て行ったルーサーたちの後を追うボーイの一人も居ないのである。

気を持ち直してパンパンに張ったトランクを引きずりラティーフはエレベーターに乗る。

最後に嫌なことは言われたがラティーフの行動を阻むものは居ない。誰一人残っていないと思うと不思議な開放感がある。

ホテルを出てまだ明るい光と風を感じると気持ちは明るくなる。

「泣いたからかしら」

駅から電車に乗るとカヤンデルの山並みが遠くに見え、訳もなく華やいだ気分になる。

べったりと人の温かみを感じたのは子供の頃の思い出の中。

ルーサーの暖かさは母親の暖かさとは違うけれど

口から出る息の匂い。

何処に手を置いても柔らかい温もり。ルーサーの目を見ながらの会話は心地よかった。

目覚めるとどつぷりと甘えていたことが恥ずかしくもある。
行きずりの男にしては最後の別れ方以外は及第点である。

「私に寄ってくる男って、ろくでもないのばかりだわ」と自嘲して笑う。

オババはお前の選んだ男で充分さ、良い男を見つけな・・と励ましてくれたが

世の中は奇妙に歪んでいて筋肉の好きな、しかも収集癖の有る顔の良い男と、道端に咲く小さな花よりも大輪の美しい花を望む男に分かれていると自分の体験からラティーフは思う。

前述はルーサー後述はジリアスクを思い浮かべている。

レイステンを出てから一度も明るい気分にはなれなかったがなぜか隣で騒いでいる観光客にも親しみを感じている。

「そんなことないわよ。あなたって地味だけど魅力的よ。ねえねえそう思わない？」

合い席になった隣の女性達がラティーフの独り言を聞きつけて話のネタにする。

「そうよ、世の中五万と男はいるのよ。あゝンでもあなた化粧ツけないわね。問題点はそこね」

「そこよ！化粧はしてなきゃ」

「風呂上りもこまめにしなきゃ」

「きゃーそれって、男と一緒にするときよね」

「いい男だったらやるけどねゝゝ、どうせ見えないでしょう。ほっほっほっ」

吊られてラティーフも笑う。

婦人たちの話を聞いていてそういうものかと納得したが
選手生活の中でべったりペインティングされた顔は嫌いである。

ロッキーズのファンはラティーフではなく

けばけばしい独楽鼠かゴム人形として見ていると感じていた。
こうして化粧を落としてしまうとアネルと解らないのが嬉しい。

断腸の思いで宿舎を出たときは人の目が気になってうつむいて歩
いていたが

駅の構内でラティーフが大声で歌おうともアネルと重ねて思い浮か
べる人間は居ない。

暫しの別れ

不安な心境でグリスの空港に降り立ったテット等侍従と違い
雨模様の暗い空の色でさえルーサーには悪い前兆だとは思えない。

なぜなら感謝祭で一目ぼれしたラティーフとデートにこぎつけたからである。

彼女が失恋の痛手を深く負っていたというのもルーサーの追い風になり、

悪く言えば弱みに付け込み優しい言葉で接して彼女の一番の望みを適えて結婚式を上げている。

近親者の誰も居ない結婚式だけれど彼女の提案した結婚式はルーサーを感動させた。

この世で生涯を共にしたいと思った女性と誓いあい、
これほど喜びを齎すとはルーサー自身思いも寄らない。

評議会の長老達との面接。主要な学問のテスト。

必須の運動能力は古武道の有段者ということで免除されているが別段運動能力テストも受けても構わないと思うようになっている。

たとえ試験に受かろうとも落ちようとも

ラティーフが居ると思うだけで足は宙を舞い全ての人々にこの幸せを分けてあげたくなる。

目指していた未来が明るいピンク色にルーサーには見える。

「テット。レイステンにいつ戻るのだ」

薄手のコートの襟を正してついてもいないチリを払う。

「私どもの試験が済み次第に」

空港から数百メートル濡れたような石畳の横に訪問者を見張るように石像が左右に並んでいる。

「彼女の居場所は掴めるか」

その石像には緑色の苔や灰色の染みがいたるところにある。

「ええそれは・・あの方はカードで買い物をなさいます。レイステンの事務所に足跡を呼び出せばよろしいかと。それとサガモア様からプラテアドに館を借り受けています」

石像のポーズから何かを威嚇していると思うが

手に持った武器は無く顔と思われる場所には灰色に覆われて仮面を被っているようにも見える。

「わかった。結果はどうあろうとも全力で行こうじゃないか」

石像の後ろに木々が多くなるとグリスの宮殿である。

「その通りですね」

いやに明るい前向きな言葉を言うのだろうとテットがルーサーを振り返るがルーサーの足は試験会場であるモラドの屋敷へ足を進めて後姿が小さくなる。

テット等はネグロの屋敷が試験会場。

大聖堂を中心にこれまでの王達が建てた屋敷の数の多さは

事前に下調べをしていたテットでも重なり合った巨大な建物群に尻込みし案内の兵士失くしては試験会場にたどり着けそうに無い。

「ストロム様の心配よりこっちのがやばいぜ」と隣でクリス。

案内係の兵士の足は大またで早い。

セデル国に残してきた二十人が急に羨ましくなる。

石積みのような大きな建物は来訪者を脅すように作られていて窓枠に掘られた口を開けた形相の獣の顔はいただけない。

暗い空と石像の見下ろすアーチ型の通路を歩くと派手な色の扉が開いてルーサーを待っている。

薄暗い通路から調度品の影すら見つけられないほど明るい応接室に入り

中央階段を登り会議場として使用する大広間に集まった皇太子候補者達は

正面のステージに立つ長衣纏った評議委員に迎えられる。

大広間には不似合いな椅子に着地すると

四十代から十代の十一人受験者の間を

軍帽を目深に被った兵士が分厚い問題集を評議委員の目前で机に積み上げる。

房飾りの多い帽子の評議委員が仰々しく壇上で腕を広げる。

「この場を借りて言いたいことは山ほどあるが。それはやめておこう皆によき結果が訪れんことを、始め」

宝石の国と呼ばれているだけに

広い大広間の壁や柱には色彩豊かな宝石で絵が描かれている。

天井画には四季折々のカヤンデルの山の絵それを支えているのが兜飾りの角。

広すぎて周囲にいる受験生など見る余裕も無く積み上げられた問題用紙を受験生達は書き上げていく。

「容姿はまあまあ・・・」

「得てして人は器量が良いほど中身は空と申しますが・・・」

「そのようすな・・・くっくっくっ」

評議委員が二人がステージの上からこそそと下世話な話で盛り上がる。

話題の主はルーサー。

一人の評議員は一族をかけてサガモアの息子を亡き者にしようと私利私欲に走り金銭的に痛手を受けてここ五年は大人しくしていたのはネグロのワルテ。

もう一人も似たようなもので着々と皇太子候補の身上調査をさせて頃合いを見計らい評議委員会を開くことに賛成をした。

受験者の中でも一際評価が低いのがサガモア王の息子、見た目どおりの軽い男に見える。

フォークステットとコレット

職について居ない女性の部屋とは思えない洒落たアパートの一室にテットは空き時間を利用してくつろいでいる。

コレットといえば考え深げな顔で趣味の良いソファに深く座りバラの花をかたどったクッションを抱いてテットを見ている。

コレットの柔らかそうな肢体はちよつと運動をすれば引き締まりもつとテット好みになると値踏みする。コレットに運動を勧める日が来ている。

「悪いわね、あたしガイネス国になんかいけないわ。あなたがガイネスの人間だって知ってちよつと驚いたけれど。残念ね」

答えに窮して考え込みここはきっぱりと断るべきだと判断した。

是非会ってくれと言われて自宅のアパートに呼んで会っている。

話の内容がコレットのへの求婚だったのでシチュエーションを考えない男の無粋さにも呆れ顔である。

「そんなに早く結論を出さなくてもいいんじゃないのか。ガイネスに興味は無いのかい。いいところだ」

あっさりと断られて少々気が抜ける。テットの予想では二三日待って断られると思っている。

「無いわ、だって賭け事禁止の国でしょう」と鼻で笑う。

コレットとの会話を終りにしたくないテットは入った時から気になっている壁に張り巡らされたポスターの話題に

切り替える。

「このポスターの選手が君のお気に入り？」

同じ雑誌を何冊買ったのか光の当たらない壁一面緑色の選手で埋め尽くされている。

「うん・・・」

とコレットの返事は元気が無い。

闘技場であれだけ声援していたのにとテットは不思議に思う。

明るい答えを期待していたテットはここで又もすかされる。

返答に困ってテットが黙り込んでしまうと

深い吐息を吐いてコレットが理由を語りだした。

開き直って何でもよいからテットはコレットと会話を楽しみたい。
プロポーズは断られた。後は寂しく引越しの準備を始める。

「彼女故障中でね。所在不明なの。こんなことあなたに言っていないかわからないけど。今ロッキーズはガタガタよ。責任者が相次いで辞めて、議会じゃ闘技場を閉鎖するっていう議員まで出たのよ。でもパパが責任者を新たに選出させる案を出したら承認されて、これから責任者選びが大変。規約や選手への待遇改善も緩和されるって。アネルは故障者として解雇されたから呼び戻すって言ってるわ」
沈んだ口調にアネルへの想いが山ほど込められている。

「君のスターがどこかに行ってしまったんだ。それでそんなに落ち込んでいるんだね」

といいながらこの符号を繋げて仕えないかと考える。

ルーサーの好きな女とコレットの好きなスターは同一人物。

「もう、ロッキーズなんてどうでもいいわ」
ポスターを上目使いに恨めしげに見るがその目はまだきらきらして
いる。

「本当に？」

ときつちり貼られたポスターを見て聞く。

ポスターの前にはこれでもかと額に入ったたくさんのアネルの腕や
足。

「極秘情報なんだが知りたくない？」

手持ち無沙汰の指を絡めて視線を落とす、上手く彼女が話に乗って
きてくれると嬉しい。

「アネルについてなら一パーセントでもいいわ、聞かせて」

経済学専攻の彼女は全ての物事を確率でとらえる。

コレットはアネル情報に飢えている。

嘘でも良い些細な事でも・寂しげにテットを見る、このおじさん
がそんな情報を持つてゐるわけがないと思つてはいてもアネルのこと
で会話が弾むのは楽しい。

「半分半分つて所かな。彼女はガイネスに来るかもしれない」

小さな声になったがちゃんと聴こえたかなとコレットの顔を見る。
なんと言つても極秘情報である。大きな声では言えない。

窓からの光を燦燦と受けコレットの艶やかな頬が輝いて見える。
聴こえたようだが驚いた目がすぐに疑いの目に変つた。

「冗談でしょう！？後進国よ。車もなければ電気も通つてない。知
つてゐる？衛星で見たらガイネスだけは真つ暗よ。そんな文明の無い

国にいくら山脈一つ隔てた国だっていっても、セデルとガイネスとじゃ文明だけでも二百年の隔たりがあるのよ」

二百年は言いすぎである。

早口で異議を唱えるコレットを辛抱強く笑いながらテットは見ている。

他国の市民達も共有しているガイネス国の一般常識がコレットから語られるとなぜか可笑しくてならない。

苦笑するテットにちよつと言い過ぎたと顔に甘えた表情を作る。

「ごめんなさい。言い過ぎたわでもどうして彼女がそんな国にいかなきゃならないのよ」

完全に疑ってかかっている。

「さあ、ちよつと王室関係者に知り合いが居るとか」と笑いながら答える。

「それもヒフティー、ヒフティーなの？」と目は本気だが口元は笑って聞いている。

アネルを餌にガイネスに入国させセデル国に帰さないのではと疑っている。

そんなことをしたら父親を動かして国際犯罪者にしてやると目が光る。

「いやこれは確実な情報だから九十%でいいだろう」

後の十パーセントは遊び分だ。コレットは百%という数字を信用していない。

「どういう意味なの、知り合いを頼ってアネルが行くの」

それなら話しの辻褄が合う。コレットの父親がアネルに連絡をつけようと探しているがなかなか足取りが見つけれないで居る。

「私がもしあなたと行ってもアネルに会える確率は？」
九十％は聞き捨てられない。

「ヒフティー、ヒフティー。これは個人の努力にいや能力がものを言う。ガイネスは他国からの人間を選別する。何か秀でた能力を示さないと試験には通らない。王室付きの職業に就くには何段階もの試験がある。後進国だけど受験大国なんでね」
試験、試験、なんでも試験がまかり通る。

帰国したテットですらルーサーの試験中には軍隊用の中級試験を受けたのである。

「それなら私は問題ないわ。学問だったら少々自信はあってよ」
大学院を二つ卒業して、三つ目は卒業確定している。

「君が来てくれるならいろんな面で優遇してもらえよう努力しよう。通信も定期的に家族と話せるようにしてもいい。ホームシックになったらレイステンに帰ってもらっても構わないよ」
と、ガイネス国の代表のように微笑む。

テット自身ガイネスの通信システムを甘く見ているがそんなことはコレットに説明する必要性はない。

「ええ、私がアネルに会えないって解った時には間違いなく帰るところになるわ」
とにっこり笑う。

商談が成立したとテットが手を伸ばすとその手を掴んで胸元まで引き寄せて満面の笑みを浮かべコレットがテットに抱きついて来た。

「信じられないわ！どれくらい待ったらいの？一ヶ月二ヶ月？一年かしら、アネルが身体を治して私に会える日は一体何時？二年でもいいわ私アネルに会えるのだったら待つわ。待つわ」
コレットの香水がテットを包む。

今だけでもいい優しい言葉を俺にかけてくれと願わずに居られない。

「一年とか長い月日じゃない。すぐには・・無理だがな」
連れて帰ってもこの女はすぐにガイネスに飽きるだろうとの思いがよぎるがコレットから離れられない自分が疎ましい。

コレットはスターに会うためにだけガイネスで暮らすつもりでいる。
女房として入国させるのに、
入国したらすぐに離婚とは複雑な気分である。

「俺は振られたままか」
自暴自棄で言ってみる。希望は少しでもあったほうがよい。

「そんなことないわ。だって私が頼れるのあなただけよ。そうでしよう？ガイネスって良く知らないけど男女同権よね。軍隊も女性の將軍だしねウフン」

頼りになる父親ですらアネルの情報を掴めなかった。
テットは得体の知れない男ではあるがコレットに対しては嘘を言っていないと思っている。

試験会場 離宮

二千年前まで西の外れのプラテアド半島にガイネス国の人は多く住んでいた。

半島にあった都市は外敵の襲撃から逃れるため何度も遷都して、西から数えて四番目東から数えて四番目のグリスに国の要として城を作り国としての名乗りを上げる。

七つの半島のうち岩が多く砂漠とも荒地ともどっちつかずの東の半島は

山脈から流れる河にもそっぽを向かれ、東の果てから蛇行しいきなり海に流れ込み乾いた土地に注ぐ事はない。

最後まで人を拒んでいた土地は、近代になって水路を確保し池を作り水を溜め

鉄鋼産業が盛んになりモラド半島に住み着いた人々は豊かになった。

そのモラド族選出の王、十九代目の王様が立てた夏の離宮では筆記試験が終わった志願者達が第二の試験に挑んでいる。

本立に囲まれた離宮裏の広いヘリポートには

候補者の数より多いヘリコプターがずらりと並んで物々しさを語っている。

十九代目の王様が離宮を建てたときは内外から戦火の手があがる過渡期で

当時の王様が知恵の限りを尽くした防犯設備が施されている。

たとえば広い大広間の壁は六十センチの石壁で作られ表面には窓とわからぬよう彩色が施してある。

部屋と部屋の仕切りは広く取っており警護の兵士が二十人は隠れていられるようにしたりと、

宮殿の外観も森山の一部のように装ってもある。

「ここは本当に最高の場所だな」

のっそりとしてきた軍服姿のバラディールに思わず椅子から立ち上がり敬礼をする。

「將軍！」

へりで到着したのは知っていたが試験会場の広間に入ったとばかり思っていた。

「そのまま、そのまま。任務を続けたまえ」

「長官は地下におられます」

「そうか。三十年に一度あるかないかの集まりだからな」

バラディール將軍は鬼といわれた顔をほころばせてたくさんのモニターを見回した。

古い昔帯刀した兵士を忍ばせていた隠し部屋は

離宮全体に設置されたカメラの画像をあらゆる角度から盗み撮りし監視している。

評議会が招集されガイネスの知識人、要職に有る人間が一同にこの離宮に集まるのである。

離宮を管理するのは諜報機関の長官、バラディール將軍の夫ウルバーノが取り仕切っている。

「フッ。どの部屋の連中も緊張しているようだな」

各個室に入っている候補者達は教授五人に囲まれて彼等の意見から何を成すべきか判断を迫られている。

「そのようですね」

兵士の返事を聞き流し通路に人が歩いていないのをモニターで確かめてバラディール女將軍は隠れ部屋から出て行った。

「おー、緊張した」

ブルブルと小刻みに身体を震わして息を吐く。

現実にはバラディール將軍と言葉を交わすと冷や汗が流れる。

「俺も」

「噛み付きはしないだろうが、そばに立たれるだけで迫力があるな」と真面目な顔で言う。

「そのうち呼び出しを喰らうのか」

何のために呼び出しを喰らうのかまでは考えていない。

「ん？兵士の教育には厳しい人だから」

「出奔する奴がいたって話しだが本当か？」

皆と軽口が叩けて嬉しい。

「国外逃亡だろう」

緊張でここが何処だかわからなくなったが、問答が続いているモニター画面をみて安心をする。

「デマ、デマ、居たら見せしめにみんなの前で殺されてるよ。へっへっへ」

肩の力が抜けて物騒なことが口から出る。

「ありうる・・・」

男の返事にしんとモニタールームは鎮まり返る。

バラディール女將軍は就任した直後領海侵犯しそうな国々に、空も海も当然陸地も敵軍と判断したら完全な戦争とみなして徹底攻撃を仕掛ける・・・と宣誓文を送りつけている。

ガイネス王国に害をなす船籍、飛行物体、民間機、民間船とあろうと救難信号を挙げても有無を問わず木っ端微塵にするとも・・・そして一隻の例外も無しに攻撃し追い払った実績がある。

ガイネス国と同じ海に面した国々は一斉にバラディールに反発したが
ガイネスの出す公開映像と資料の前ではどの国も宣戦布告を出すに
は到っていない。

一体なぜ將軍がこの部屋に入ってきたか解らない兵士達は
切り替わる画面を見ながら途中経過を地下の上官に知らせた。

地下のコンピュータールームでは更に広範囲の映像が集積され分析
にかけられている。

「奥方のお出ましだ」
モニターに映ったバラディールを見つけたヤーゴ参謀が笑いながら
ウルバーノを見る。

大広間の評議委員達に挨拶を済ませて階段を下りる姿が四分割され
た画面の左下にある。

「あれはもう女ではない」
威厳を出すために伸ばした髭の下の口元が歪む。

あの女の一言で配置転換され半島を一巡してやっと本隊に戻ってき
ている。
夫であろうとチェスの駒のように動かす。

「そんなことを言っているのか？この国の守護神だぞ」といいなが
らもヤーゴの顔は笑っている。

「人間として良く出来てる」出来すぎだとウルバーノは心の中で言
う。

まっとうすぎて面白みは無いがそれは隠れ蓑として使えるとヤーゴ

と目で笑い合う。

「寛容で神の域に近いな」

ウルバーノの心の声が聞こえたようだ。

「モラドの屋敷には住んでいないのだろうか？」

「そうだ妾が三人居るから一緒に住んでいれば毒を盛って殺されかねない」

肩をすくめ大げさに言う。

「ホウ！ そうだな奥方がここに来たということは、下手な工作は止めた方がいいということだな」

冗談のように聞く。

「そうだ」

ウルバーノの目が笑っていない。

ヤーゴは次の会合に参加する人間を減らすことにした。

臭気無いものまでかき分けるといふ将軍である。

懐に入る額が減ると思うと残念だが将軍の登場は危険極まりない。

「誰が出てる？」

話題を試験に変える。

「俺の一番下の弟キケ、そっちは」

「はこのジンだ」

「はとこか・薄いな。あまり文句を言われない間柄だな」

良かったじゃないかのうなずきのあと

二人の会話をしている地下のコンピュータールームにバラデール

女將軍の姿が現われ、二人の会話はそこで途切れ恭しく敬礼をし將軍を迎え入れた。

気の利いた兵士が椅子を持ってきたが將軍はつつ立ったまま二人と同じ画面の前に陣取った。

大きな画面は左右、正面、壁面四分割されて誰も映っていない。

將軍がじろりとヤーゴを見る、ヤーゴ参謀は通路の映像に切り替えると今まさに試験を終えて監視員と歩いている候補者達が映る。

大扉が開かれて広間の中央の演壇の周囲に置かれた椅子に一人又一人候補者が着席した。

一段後ろに置かれた椅子に監視委員が座り終わると大扉が閉められた。

皇太子候補の家族等が神妙な顔で壇上を見ている。

若干十六歳から上は四十二歳まで幅広い年齢層の候補者の中で異彩を放っているのはルーサー。

始めて帰国し受けた試験会場では見知った顔一つなく白い顔が緊張して青くなり一層美しさを際立たせている。

「皆、頼りになりそうにないな。本当にこの中から選ぶのか」
モニターを見ながらバラディール將軍が感想を漏らす。

隣には案内係の中尉がかしこまっている。

「帰国組みも居ます、皆勉強に勤しんでいる。優秀な人材ばかりですよ。これによるとアルヴァー・ルーサー・フォルストロムという男はわが国の古武道の達人です」手元の資料を見る。

「珍しい奴だ。どいつだ？」

古武道と聞いてバラディール將軍の目が輝く。

ヤーゴ参謀と中尉二人、端から端までモニターを見るが特定できない。

「おいおい、試験が終わり次第勧誘でもするのか。彼らはまだひよっこだ。これから各機関で仕事に就いてもらわねばならん」とウルバーノ。

「研究機関も狙っているから一ヵ月後が楽しみだ」とヤーゴ。

「学者ばかりたくさんはいらないぞ」と將軍。

「わかっている。だから三ヶ月は軍隊で鍛えるよう末尾に入れただろう」

快活にウルバーノ。將軍の機嫌取りに軍隊での訓練も盛り込んでいる。

「ン、楽しみだ。国を荷う若者だ」

將軍の答えに思わずヤーゴ参謀とウルバーノは顔を見合わせる。

試験で手一杯の彼らがバラディール將軍の訓練に耐えられるだろうかと無駄な心配をする。

「將軍、まさか今日ここにおいでになると言うことは後継者の件も踏まえていらっしゃるのか」とヤーゴ、

「ふっふっ。その通りだ良い人材はどこも欲しいからな。どの機関も結果を楽しみにしている。ウルバーノお前の愛人の子供は論外だからな。無理強いして入れるなよ」

しらっと釘を刺す。

「分かっていますよ。その約束で家を離れたのですからな」
話題が家庭内の深い部分に入ってきたのでヤーゴ参謀は口をつぐみ
一歩離れた。

試験結果

革張りで鋏を打った椅子はすわり心地が悪い。

外観と内装の違う建物には何度もお目にかかったことがあるがここはその中でもダントツである。

複雑な通路、窓の無い部屋。かと思えば丘を一個くりぬいた大広間。変色して色が変わったようなタペストリーは誰が見てもおかしい色合いである。

豪華な陳列品が壁をくりぬいて飾られているのも違和感がある。

この違和感が何に似ているかを考えていると一つだけ当てはまる場所が浮かび苦笑してしまふ。

もうすぐ発表だというのに周りを観察する余裕がルーサーにあるのは皇太子の地位に執着していないから。

さっきまで教授連とガイネスにおける社会動態と社会文化としての人間行動、人間社会形成、それを総合政策に組みこみ、歴史社会的視野もいれ、ガイネス世界情勢を楽しく論じていた。

個室を離れ冷えた頭の中に彼女の顔が浮かぶと冷たくなった手に血液が通い温かくなる。

視線を壇上の後ろの窓に向けるルーサーの意識の中に鮮明にラティーフが浮かび上がる。

笑った顔も怒った顔も下から見た顔も、後ろからは……。せつかくのラティーフの顔が見えなければ何の意味もない。

彼女が居れば生きていける、と開き直っている。

テット等には試験後会えるかどうか解らないが

どんな結果になろうとも最善は尽くしたと清らしい気持ちである。

隣の候補者と視線が合わないようテーブルから窓へ、

木々の枝が風でたわむのを見て心を開放する。

窓の外は少し色づいた枝葉が闇から現われたように息づいている。

評議委員長が奥のドアから登場し壇上に上がると大広間に居る全員の目が一点に注がれる。

「お待たせしましたな。今日の予定ではこの試技のあと宮殿にお帰りいただくのだが。明日まで引き伸ばしても結果は同じという意見が何人もの口から出たの、幸いにも関係者は一同揃っているという幸運にも恵まれているので協議の結果を発表したいと思う」
水辺の鳥を見ているように眺める。

「近親者の方々、良からうかの。誰か異議のある者がいたならば言ってもらおうと有り難い。無ければ話を進めるが」とまた心構えが出来たか見回す。

「居ない様じゃな」

大広間は静まり返っている。

「では厳正な試験の結果をお知らせする。十二人の評議員と三十人の学者の見解を述べさせてもらおう。

次の皇太子は」

「アルヴァー・ルーサー・フォルストロムに決定する」

意外な名前にルーサーは緊張した。

「性格、意欲、社会性、価値観、などの適性検査をした結果ですじゃ」

持ったファイルに目を落とし疲れた顔で候補者一人ひとりを見るように会場を見下ろす。

「彼は奇しくも王の第一子であるが事情があって嫡子にはなれなかったが素晴らしい知識と教養、健康な身体を持った青年である。特に秀でていたのが軍事問題と外交に優れた見識を持っている。これ

からは王の下で実務を経験し知識を無駄にせず活かして頂きたい。
それではそれぞれの評議員から総評を頂こう」
ため息をつく候補者に付き添い家族が慰めを囁いている。

演壇の評議員の話など聞かずにこの場を立ち去りたいのはルーサー
も同じである。

が演壇ではそれぞれのこの国の機関の長が個人名を出して勧誘を始
めた。

この場所に居るだけで高い給料は約束されよいポストも保証されて
いる。

その役職に不満な者はその勧誘を断っても構わないと声高々に言わ
れると

囁き声が消えて新たな仕事の場を設けられてほっとした顔の候補者
達が

長い緊張から解き放たれて笑顔がこぼれ始める。

ただ一人緊張が解けないルーサーは目を見開いて壇上の評議委員長
を見つめた。

壇上の評議委員長はルーサーがドタキャンをしたドラドのブラーズ
である。

候補者全員がガイネスの主要機関の就職が決まると大広間は和やか
雰囲気になった。

そこへ王も現われて壇上からルーサーを呼び横に立たせ
あらためて広間に居る全員にルーサーを紹介した。

広間に居る全員付き添いも含めて六十人の拍手がルーサーに送られ
た。

「絵本から抜け出たような顔立ちね」

「王様の顔にも似てらっしゃるけど綺麗過ぎない？」

「絵画のモデルをやれそうだ」

「彼がガイネスの顔になるのか。いいんじゃないか血なまぐさいイメージを払拭できて」

「そうか。そういった戦略か。これからは無骨な顔の政治家は出すべきじゃないな。クリーンで美しいトップで行けば、変わる外交も多いぞ。そうは思わないか？」

壇上から候補者のひそひそ話が全部聞こえ勝手な憶測で話している彼らに嫌悪感をルーサーは覚える。

顔の綺麗さで外交問題が解決したことなど無い。

この国が成功しているのはバラディール將軍を悪者としそれを宥めて運営しているというポーズをとっているから諸国は納得しているのだ。

力を見せ付けるバラディール將軍と外交で駆け引きをする他の機関の長官達。

王様は道を示し国の顔になるそれが勤めである。

晴れて皇太子に選ばれて命を狙われる危険度は大幅に減ったけれど一つだけ心配事があった。

捨て鉢になって後ろ盾を頼むつもりだったドラドのブラーズとの会见。

ただ一人会ってくれるという人物だっただけに皇太子に選ばれてもテットや他の従者達に顔向けが出来ないと壇上で悔やんでいる。

ドラドのブラーズと王の間で握手を交わす際

ルーサーの気持ちを知ってかよそよそしい態度のドラドのブラーズ。

父親の王も何処となくぎこちない態度でルーサーに接しているのがわかる。

王の態度の冷たいのは許容範囲、仕方がないとルーサーは思う。

これまでルーサーのために多額の金が王の懐から出ている。皇太子としての資質を育てるためにカリキュラムを考え逐一指示を出し続けているが

本物の顔を見るのはこの日が始めてである。

メリハリの有るいい声だ・・・がルーサーの印象。

大広間の雰囲気は一変した、ルーサーを軽蔑したような視線は少々残っているが皇太子に選ばれても重要な機関で働ける候補者達の握手は十二人の評議員より白々しくは無い。

「始めまして、よろしくお見知りおきを」

「始まったばかりですが目を通していただくものがたくさんあります。後ほど使いを私のところへ・・・末永くよろしくお願いします」

一通りルーサーと全員の顔合わせが済むと会はお開きとなった。

席を立つ候補者達の後を追ってルーサーも壇上から降り

ヘリポートに向かった。

早速グリスの宮殿で皇太子としての仕事が始まるのである。

地下の監視システムを駆使して候補者の顔色や評議委員の表情を見ていたバラデールは、

「なんともはや、先行きのわからない人選だな。人材が居なければ評議会を開かねばよいものを。王の健康とて明日明後日にはどうかなるといった病もないのにと」

と正直な感想を洩らす。

案内係の中尉が一拍置いて言葉を挟むヤーゴ参謀は閉会と共に部屋を出ているし夫ウルバーノは聴こえないフリをしているのか違う画面を見つめたままだ。

「ネグロのイシアル氏の長男ロレスがせっついたようですよ。ネグ

ロは四人候補を挙げているから、上手くいけばと思われたのでしよう」

「ロレス・・ああもつと外交政策の幅を広げろとうるさい奴だな。奴の子供だとまだ年は若いだろう」

「本人が候補として出まして難関を突破したのもロレスでして」

「自分で国を操ろうと思ったか。ふん！なかなか骨があるじゃないか。ネグロも隅には置けぬな」

「そのようすな」

ありきたりの返答しか中尉にはできない。

バラディールが顔の向きを変えウルバーノに視線を移すと、

「よし！評議会は滞りなく終わった。撤収だ。ウルバーノ新しい皇太子の警備チームは出来ているか。メンバーのリストをよこせ。それから一年間は皇太子の行動を私にも知らせるように。手ぬるい報告書を回すと怒鳴り込みに行くぞ」

気分良く腸から声を絞り出す。

「バラディール・・ここは私の持ち場だその威圧的な態度は止めてくれないか」

バラディールの声に部屋に居る兵士達がびびっている。

気にも留めず、

「ウルバーノ。悪いな私はお前を命令する立場に有る。返事は」

なお口元に微笑を浮かべてウルバーノの答えを待っている。

「わかりました。すぐに仰せの通りに」

「ん、それでは王に挨拶に行ってくる。お前はついてくるな。さっさと兵士を連れて撤収しろ。そしてもう一度一ヶ月前からの試験内

容をチェックしろ。急いでやれ。期限を切られたいか？」
部下を使うときは何時何時までとかつちり言い渡す。

傲慢な上官に逆らうつもりなど無い。

「いやいい、メンバーを総動員してやる。一週間以内には報告書が君の机に乗っているだろう」

一応持ち場の責任者はウルバーノであるが横槍を入れられるのには慣れている。

将軍が去っていくと恨めしげに将軍のいた場所を見失ってしまう。

「鉄女め。評議委員長と評議委員を二名呼び戻せ！すぐにだ。あいつ等を半島に帰したら連絡を取るのに時間がかかる。ヘリのパイロットに離陸許可を与えるな。急げ！」

「長官！すでに三機飛び立っております！」

「誰だ、呼び戻せ！」

ウルバーノの出した大声が地下通路に空しく響き渡る。

出迎え 1

大都市レイステンから離れ、

南東のヤンプーまで旅行しヤンプーから

カヤンデル山脈を右に見て西へ西へと千二百キロの移動をした。

高級ホテルはやめて格安の宿泊所を探し出しては寝泊りし旅を続けている。

ラティーフはほとんど困り果てていた。

シャプイ、ヤンプーまではカヤンデル山脈が常に見えていたのに西に行くにつれ山裾野は荒地になりカヤンデル山脈から距離を置いて人々は暮らしを営み故郷の山並みは見えない。

出発地バッファローに戻り旅を始めればよかったと小さな駅でくたびれたトランクを椅子代わりにして観光客の流れをぼんやり見ている。

オババは人の多いところには何かある、お前の知り合いだって居るよ、山を下りてよい男を見つけて暮らすのさ。と、言っていた。

その知り合いはたぶんラティーフが幼少時に居なくなった母親のことだと勝手に思っているが母イトウイはもちろんのこと村の名前を知る人にも今だに会って無い。

季節労働者は大都市の周辺に集まるらしく景勝地を売り物にしている観光地には近辺の働き手でまかなっている。

これ以上西に向かっても無駄ではないかとラティーフは思い始めている。

百キロ戻ってオーケシユストのように車で荒地を渡りカヤンデル山

脈の麓の町バッファローに戻りたい。

山から下りてきたラティーフを親切にしてくれたバッファローの市場の人に会いたいと痛切に思っている。

相談する相手もなく駅舎に入る人の流れを見つめっていると観光客とは少し雰囲気の違いスーツ姿の男が

ラティーフに近寄ってきた。

「ラティーフ・セヴェールさんですね。お迎えに上がりました。車まで来てください」

一瞬何のことやら解らず目の前の男が誰だったか思い出そうとしてまじまじと男を見た。

まったく見覚えが無い。

「迎え・ルーサー？」筋肉フェチの美男子の名前が浮かぶ。

男は黙ってラティーフが立ち上がるのを待っている。

「私。その。ラティーフなんとかじゃないわ、人違いよ。他をあたって。ほらあそこ一人旅の女性が居るわきつとあなたの探している人よ。行って訪ねてみるといいわ。ほら動き出した。急がないとあの電車に乗ってどこかに行ってしまうわよ」

咄嗟に立ち上がって嘘をつく。

にこやかに愛想笑まで浮かべて教えてやっているというのに

男はラティーフの言った女性の方へは一度も顔を向けない。

男が何も言わないのでラティーフも男を無視し電車の時間を手帳で確認する残念ながらラティーフの乗りたい電車はずっと後で発車する。

男はさっとトランクを握って歩き出した。

その速さにラティーフは慌てた。

「待つて。返してそのトランクには大事なものが入っているの。待つて！」

といている間にずんずんと男は駅舎から離れて角を曲がる。

「泥棒！」と言ったときには男の姿は駅前には無い。

早めに泥棒と叫べばよかったと思いながら男の去ったほうへラティーフは走った。

角を曲がった所にまだ男が居れば泥棒と大きな声で叫ぶつもりだ。

バンと何かが締まる音が聞こえ行き交う観光客を避けて角を曲がれば車が一台、

後部座席のドアを開けて待つている。男はいない。

「車のトランク開けてよ。私の荷物を返して！」

と後部座席に顔を突っ込んで運転席に叫んだ途端ラティーフはお尻を押されて後部座席に転がりドアは閉まり車は発車した。

反対側のドアに手を置いて振り返るが誰も居ない。急発進に両手を背もたれを掴んで踏ん張る。

「誘拐よ！何でこんなことするのよ。降ろしてよ。私はあんたなんか知らないのよ。人違いよ。人違いだってば」

後部座席から運転席を隔てた強化プラスチックをガンガン叩いた。もちろんドアも何度も引いているが内側からドアは開かない。

「お静かに」

運転手が振り向きもせずにはラティーフをたしなめる。

確かに騒ぎ過ぎだと思うが白昼堂々と婦女子がさらわれたのである。

大袈裟に動いていれば例え車内とはいえ歩道を歩いている通行人が不審に思っ

通報してくれるかもしれないと暴れているのである。

「人違いだっていつてるでしょう聞こえないの！耳が無いの？」と大声でわめく。この声も外を歩く観光客に聞こえてほしい。

「聞こえていますよ。ラティーフ様。選手時代は私もストロム様と一緒に見ていましたから」

選手だった頃のことを言われてぴたりとラティーフの動きが止まる。

「違うわよ・・・」とラティーフの反論する声も小さくなる。

一瞬、腹立たしい思いが沈静化したがこのままではどこか解らない所に連れて行かれてしまう。

新たな案が頭に浮かぶ。ラティーフにしてはかなり絶好調の案である。

「ね、この車は何処に行くの？良かったらバッファローまで行ってくれない？あそこを、荒地を越えるのが難しくって」

少し声のトーンを落とす。頼みごとである。

「この車はガイネスに行きます」

目的地は空港だがそれを言えば後ろの客はもっと暴れる恐れがある。

「ガイネス？だめよ私いけないわ。パスポート持ってないの。残念ね。だから荒地を越えてちょうだいお礼はするわ。私これでもお金は持っているのよ。お願い！」

ガイネスはバッファローのはるか向こう側、行き過ぎである。でも途中で降ろしてもらえるとそれもありかなと思う。

ドアを開けてもらう口実はバッファローまでに考えればいいのだ。

運転手はラティーフを無視し運転を続けている。

車は家並みを通り抜けて山間に入り細長く開けた土地に来ていた。

「少し揺れますが・・」ちよつとの間クリスは考えたがラティーフの筋力ならシートベルトはいらないと判断した。

滑走路は車道から直接入ってもなんら問題の無い個人の所有地である。

丁度その滑走路の真ん中に貨物機が一機、荷物の積み降ろし用のカーゴドアを開けて待って居る。

「ここは何処なのよ！」

両サイドと後ろの窓ガラスに顔をつけて人の姿を探すが綺麗に刈り込まれた丘が見えるだけである。

出迎え 2

うるさい女だ。

可愛いルーサーの頼みでなければこんな誘拐じみたことなどしたくもない。

「航空機の後部でございます。車は固定しますからご心配なく」
むかついた気分でも感情を押し殺した声はだせる。

ゴトンゴトンと車が斜めになり貨物機の中に入る。

エンジンを止めると機内から人が出てきてタイヤにチェーンを巻きつける。

次に足元から別な振動がブルブルと伝わってくる。

カーゴドアが下りると車内は暗くなり逃げ場がなくなったラティーフは

座席に座る以外やるべきことがなくなった。

この中で叫んでも暴れても疲れるだけである。

こうなったら腰を据えて

運転手の同情心を煽って途中下車を頼み込む以外方法はない。

「あなたねこれがどういうことかわかってやっているの？拉致よ拉致はね犯罪よ。これであなたの人生に最大の汚点が付くのよ。でもまだ今なら止められるわパイロットに言ってバッファロー近くで降ろしてよ拉致は罪だけどさらわれた私が届けなければ発覚しないし。あなたの汚点も無くなるわ。ねっ」

運転席と後部座席の間仕切りは

下ろされないまま運転手の声だけがラティーフの耳に届く。

「これはストロム様の奥方様を迎えに来た車でございます。あなた様がストロム様と結婚式を挙げた花嫁であると承知しています。お待ちさせた数週間の間に家族、友人、知人にその旨を連絡なさいましたか？出来れば到着後で結構でございますからきちんと言絡を取ることをお勧めいたします。ああ、今でも構いませんよ。座席の肘掛を出していただければその中にお電話がございます。しかし正確な情報をお伝えしたければ到着後がよろしいかと。ご家族の方もガインズがどんな土地で、住まう部屋のことなどお聞きたいでしょうから見てからでも遅くはないと思いますよ。奥様」

拳を握ってハンドルの端をたたく、
流浪していた時に身につけた抑えた声音で後ろの座席の女をたしなめる。

まったくルーサーはこの平凡な女の何処が良くて慌てて式など挙げたのか理解に苦しむ。

同じロッキーズンの選手ならもっと可愛いのなら美人を選ぶとクリスは思う。

しかもルーサーに惚れている様子はない。

将来ルーサーが王になりそのときに何人もの妻が居てそのうちの一人が妃に選ばれる。

その一人に後ろの女がならないとは限らない。

運転手の言葉にその場の成り行きで式を上げたことをラティーフは悔やんでいる。

ふられ続けて生きる気力も無くなり落ち込んでいたときにかけられた優しい言葉に小躍りして式を上げている。

後のことなど何も考えなかった。ただあの時はおままごとのように式だけを上げただけ。

山の祝福を受けて沿道の人々のお祝いも貰い

ラティーフにとってあの日は本当に幸せな一日だったのである。

夫となるルーサーとの生活など微塵も考えない自分が幼子に見えて恥ずかしい。

後ろの女が静かになるとクリスはこの機体を選んだことを呪った。

手近に合った古い輸送機で西側を回り、プラテアド半島に上陸するには気流の具合も考慮しなければいけないと身を持って知った。

偏西風で知られている山と海の狭間は気まぐれな子供が空き箱にガラス玉を入れて乱暴に振り回している。

もちろんガラス玉はクリスで内臓と脳が入れ替わった気分である。

八時間貨物機の中で揺られプラテアド半島の真ん中に位置する

オコドナ基地空港に着陸しそこから四時間車で移動し大きな古びたホテルの前でラティーフは降ろされた。

「こちらでございます」

クリスがトランクを持って古い大きな玄関に入るのを見てラティーフは逃げ出したい衝動に駆られる。

「幽霊屋敷みたい」

奥からラティーフ様と呼ぶ声がして足早に広いロビーに入ると上品な紳士とクリスが話しこんでいる。

ラティーフの姿が見えるとクリスは軽く会釈をしてその場を出て行った。

「ちょっと何か説明してってよ」

とラティーフの声だけが古びたドアに吸い込まれる。

「お部屋はこちらでございます」という紳士の後ろから二階に上がる。

階段を登り右に曲がった突き当りの部屋に通された。

「ここはなんていう名前のホテルですか？私支払いはカードなんですけど。現金で支払いだとちょっと待って貰わないといけないんですが」

これまでの経験では先にカード払いを言っておかないとまずい。

蔑みの笑顔か常時その顔つきなのがわからない紳士は目礼をし、
「この屋敷の名前は地名でイエフゲニーと皆は呼んでいます。失礼ながらホテルではありません。そのところお間違いないように」とラティーフに諭すように教える。

「え、だってあの」

「皇太子様の妻になられた方の仮住まいと考えてくだされば」

「ルーサーは皇太子になったのですか？」

寝物語に二人はお互いの情報を交換している。

「はい。見事難関を突破されました。喜ばしい事でございます」

ダッドと名乗る紳士はにこやかにイエフゲニー周辺の名称由来を述べ丘を越えた向こう側・海側とダッドは言ったが実際には近くに海はないが、海側は復元された古代の遺跡がたくさんあると教えてくれた。

そして海側には港がありたくさんの船も停泊していることも。

お茶の用意をしてダッドが去っていくとトランクを開けてガイネス王国の地図が載っているパンフレットを出してダッドに聞いた地名を探したが何処にもその地名は見つけられない。

大きな首都名と地方の名前か半島の名前かも解らない。

そこでふとP Cで検索することを思いつき部屋を見回すが
古い窓枠のそばには重たそうなカーテンと隣の続きの部屋には頑丈
な机と椅子、渋いが磨きぬかれた燭台と家具類、奥には天蓋付きベ
ッドが一台とが置いてあるだけで電気ポットや電話の類は見当たら
ない。

高い天井を見上げればシャンデリアが下がっている。

「電気ぐらい通ってるよね・・・」とスイッチをドアのところで探し
たら見つかってほっと一息。

イエフゲニーの館 1

翌朝、幽霊屋敷周辺の地図をダッドに書いて貰い、夜通し逃げ出す算段をしていたラティーフはあわよくばその足で逃げ出すつもりでいる。

服装は変わらず選手時代のパンツスーツ。

ラティーフの頼りとしているのは首に下げたこのカードはのみ、肌身離さず持っている。

「遠出をなさいますなら、申し付け下さいませ。車をお出します」
「いいのいいの。私車の免許持っていないから」

と断り真面目な顔のダッドを幽霊屋敷に残して足早に出かける。

ラティーフの姿が見えなくなると、

ダッドはすぐさま階段下の小部屋に入り衛星から出ているシグナルをキャッチした。

発信機はラティーフのカードに貼り付けてある。装飾品を何一つ身につけてないラティーフのカードにつけさせてもらった。

ダッドの視線の先にはレーダに浮かぶ点滅。

点滅はラティーフが消えた方向ではなくて海側の丘の中腹で止まっている。

「変わった経歴のご婦人だな」

右手でレーダーの解説をして

左手では首都グリスのコンピューターにアクセスしラティーフの情報を呼び出した。

ダッドは王、直々の頼みで屋敷の警護職に就いている。

クリスが連れて来たあの女性は一箇所に留まらない性格らしい。ダッドに見張られているとは知らずラティーフは地図を頼りに海を目指して歩いているが一時間歩いても二時間歩いても海の匂いは漂ってこない。

「遺跡ばっかじゃない」

歩けど歩けど大きな石済みの壁や柱、植物の根に持ち上げられた巨大な顔。

植物が切られたのは最近の事らしく開けた空間にはその大石をバツクに写真を撮っている観光客が居る。

そこから三十分ほど歩くと遺跡と同じ柱が取り巻いたホテルが点在してラティーフを驚かせた。

ホテルの中を覗けば中には売店があり観光客で賑わっている。

意を決して観光客を捕まえ海はどこかと訪ねると二日前に港について移動しているからわからないと答えが返ってきた。

ならば地元の間人もしくはホテルの従業員にも尋ねたが、七百キロ離れた所に港があると教えられ、

気が遠くなり周囲の状況を知る必要が有ると幽霊屋敷へと戻ることにした。

夕方の六時を過ぎると辺りは暗くなり

たくさん遺跡群が黒々と押し迫ってくる。何処を見ても街灯の灯りが見えない。

時々遠くで観光客が懐中電灯で照らす灯りが動くのが見えるだけである。

ラティーフは大きな高い石垣の前で足を止めた。

昼間明るい時にはこの石垣からジャンプして飛び降りたのだ。

左右を見てもこんもりした真っ黒の茂みで

石積みの中に指を入れて登ることはできるが石の間からは水が染み出て

スーツが汚れるので登るか登らないか迷っている。

ダッドは止まった点に向かって車を走らせた。

おおよそ考えられない位置にその点は走っていたので車を止めて声をかけてみた。

「もしラティーフ様がそこにおいで困っておられるなら。この灯りの元によってきてもらえませんか？」

石柱が暗闇の中白く浮かび上がり足元の草の上を風が通り過ぎていく。

そこへ石の上をぺたぺた歩く足音が近づいてきて

車のライトの前に上着を片手に持った勇ましい格好の女性が現われた。

「靴はどうされましたか？」

靴はウエストのパンツの間に挟んである。

太ももまで巻き上げたパンツの裾を下ろしながら

なんという言い訳をしたらいいかあれこれとラティーフは考えた。

「ごめんなさい。迷ってしまったの」

まずは謝ることが先決である。

「そうでしょうね。ごらんのようにここらは街灯の一本もありませんからね。明るいうちに帰宅されたらこのような場所を歩かれずに

済みますのに」

ダッドはラティーフが現われた方向を見た。

真黒い空間が壁のように見え途中から星空に変わっている。

開けられたドアから座席に腰を沈めて

もう少しダッドが迎えに来る時間が遅ければ

一人で帰宅できていたのにと愚痴愚痴と口の中で言い分けた。

トランクを置いた幽霊屋敷の方向へちゃんと戻っていた自信はある。
ところが焦ったラティーフが最短距離と選んだ道は突然切れてしま
っていた。

少し足場の悪い場所を勘に頼って飛んで迷い、陽も暮れて
遠くが見えないのを理由に安全策で足場の良い場所を探していたら
車の音。

車のヘッドライトが照らした箇所を見て幽霊屋敷への最短距離の道
は諦めた。深い谷が口を開けていたのである。

気まずい雰囲気で幽霊屋敷に戻ると幽霊屋敷に相応しく
たくさんのランプの光がラティーフを待っている。

イエフゲニーの館 2

うつむき加減で階段を上る。

館の扉の前で足を止めると以前にも嗅いだ事のある優しい匂いが漂っている。

扉を押し開けるとオレンジ色の光の中にルーサーの姿が見えた。

「やあ。来てくれたんだね」

聞き覚えのある声に苦笑する。

「皇太子になられたのでしょうか？おめでとうございます」

祝いの言葉を言っただけは見ただけで少ない明かりでも

ラティーフのスーツの汚れはしっかりとわかる。

ルーサーは古めかしい絵画の中から抜け出た白いシャツブラウスに織りの細かいベスト姿で

美しい微笑を浮かべてラティーフをまじまじとみている。

あなたねえ・・・と文句を言いたかったけれど

灯りの下ではジャケットの汚れや指先の草の汁がこの場にそぐわない。

「シャワーを浴びたらどうだい」

笑いながらルーサー。

疲れきった顔に半分濡れたジャケット

横縞に汚れた皺のあるパンツ。靴だけが泥汚れから逃れているが裾で隠れて見えない。

「そうしますわ」

かきあげた髪の毛の中に小枝を掴む、引っ張り出すとぼろぼろと壊れ足元に落ちる。

迎えに来てくれたお礼を言おうとダッドを探すが一階の広間にダッドの姿は見えない。

まずは昨日の夜お世話になった部屋に駆け込むとバスルームに飛び込んだ。

「お湯出るわよね？」蛇口をひねれば色のついた水が出るのを期待して回す。

最初は冷たい水が出てすぐに温かいお湯がシャワー口からあふれ出てきた。

ばさばさと髪の毛についた枯れ草や土汚れを洗い流してバスルームを出ると

良いお茶の香りが部屋中に漂っている。

いつの間にかラティーフがバスルームに入っている間に広い部屋の窓辺には二脚の椅子とテーブルが置かれティーカップとサンドイッチが並べられている。

部屋中央のソファアーには百年も前からそこに座っていたかのようにルーサーがくつろいでいる。

「お茶は？ダッドが軽食を用意してくれた食べるかい？」

「頂くわ・・・運動しておなかが空いてたの」

実は朝食後何も口にしてはいない。

椅子に座るとすでにティーコゼは外してある、先にルーサーが飲んだようだ。

両手をサンドイッチに伸ばしたいのをこらえて
ルーサーに似合いのカップを手元に引き寄せ口にする。
暖かいミルクティーが身体中に染み渡る。

「古い遺跡ばかりで面白くないだろう」
うつとりとはにかんだラティーフを見る。この日が来るのを心待ち
にしていた。

やっと食べ物が口に出来て思わず笑みが漏れる。

「この土地の説明を聞いてて驚いたわ。四千年前からの遺跡だっ
てね、ここもそうなんでしょう？」

二個目を食べ終り浅ましく見えないかしらと三個目は
ルーサーの目がテーブルから外れるまで待つてそつと手を出す。

「ここはまだ新しいよ六百年前の建物を改装した」
ラティーフの優しい茶色の目を見ていと心の中の氷柱が溶けてな
くなる。

三個目はもう口の中には無い
四つめに手を伸ばしたいがルーサーが見つめているので
身体を動かすことが出来ない暫らく二人は違う思いを抱いて見つめ
合っていた。

ラティーフの頭の中ではこれまでのことがぐるぐる出てきては
きちんとした言葉にならずに気持ちの奥に押し込められている。

ラティーフは幽霊屋敷から遠く、できるだけ遠くに行くことだけを
考えて歩き回っていたのだ。すなわちルーサーの元から逃げ出すこ
とだけを考えている。

港があるという北に向かい港を見つけられず、連れてこられた時の

飛行場も探し出そうと試みた。

大きな観光地だとラティーフは思うが観光客専用の大型バスはホテル横の駐車場でたくさん見かけたが

他の交通手段が無い様で自家用車の類が一台も見当たらない。

これまで旅してきた明るい看板の土産物屋、軒を並べるホテル街・観光客を目当てに開いているカフェも、砂色の遺跡を復元したホテルの中に作られ見渡す景色の中には近代的な建物は皆無。レイステン市とは様式美の違った建物群が連なる様は廃墟である。

サンドイッチを食べ終わると気分も落ち着いてルーサーを観察する余裕も出てきた。

「ねえ。カヴァンナの丘の事は忘れて欲しいの。あれはほら誰も皆子供の頃やりたがる遊びみたいなものよ。立会人も居ないし、契約書も交わさない結婚なんて有り得ないでしょう？」

確か年齢は私が上だったわとちよつと上から目線の言葉使い。

「君の村でも同じ事が言える？」

又してもラティーフは言葉に詰まる。

村のしきたりやおきてをつまびらやかにルーサーに語っている。

ほんの一世代前まではカヤンデル山脈の麓では普通の結婚式。

立会人はカヤンデルの精霊たち介添え人は野に咲く花々。

祝うのは風と光あの日はその全てが揃っていた。

余裕の笑顔でルーサーは紅茶を飲み干す。

「それに、君は妻ではない。僕が皇太子に選ばれたから妃になった。これからはそのつもりでいてくれ」

婚姻の証明書はヤンプーの教会で貰っている。

セデル国の教会もカヤンデル聖教会と同じ紋章を使う、これがガイネスに入国するには必要だった。

空になったラティーフのカップにティーポットのお茶を注ぐ、

この幸せな時間を望んでいた。

「今日はダッドに言わせると、歩ける場所ではない危険な所へ行ったらしいね」

驚いてカップのお茶が波立つ。

逃げて失敗したことを言うべきか、一連の浅はかな行動が負い目になり怒りが湧いて来ない。

「そうかしら？ 変わった石を見たくて中に入ったのが間違ってたのね・・・」

ルーサーの視線を外して嘘をつく。

花びらがこぼれるように微笑を浮かべているルーサーは美しすぎる。

ラティーフは今日の経験で見張りの人数が増やされたり外出禁止になるのが怖い。

連れて来た運転手もダッドとか言う男も接触しているガイネス人は皆丁寧な扱ってくれている。

暴力や暴言で迎えられてもないしひどい目にあってもいない事から逃げ出すのは暫らく様子を見て行動することに決めた。

外した視線を恐る恐るルーサーに戻して、

「大勢居るのよね妃の人って。私もその一人？」

と小声で聞く。

ルーサーの言った。妻から妃？

妻とか妃とか呼ばれる女性がこの国ではどんな立場で語られるのか
ラティーフにはよくわからない。

妻と妃と言葉は違うがただの王のハーレムの一員ではないかとラティーフは思う。

黙って笑っているルーサーの顔は肯定も否定も読み取れないが
何も言わないのが答えだとラティーフは確信した。

ルーサーに幾人もの妃が居て彼をとり囲んで居る姿を想像をすると
馬鹿馬鹿しくなる。

きつとルーサーの周りにはたくさんの女性達の柔らかい肢体と綺麗な
顔に自信のある美女がうようよいるに違いない。

中にはミリイのように派手な美女も居ればマイアーのように上品で
知的な美女も居るはずだ。

顔の美しさだけで見比べられ、年月がたてば年齢が若い女性にルー
サーの興味が移る。

レイステンでも若くて綺麗な女性はもてはやされたせつかくあの場
所から離れたのにまだそのループからラティーフは逃れられないの
かと気落ちする。

ハーレムの中の美女部門ならぬスポーツ部門に収集されたのだろう
かと自分を卑下してみる。

ルーサーの嬉しそうな笑顔を見ていると当・た・り・ねと思う。

「疲れただろう顔が青い、横になったらどうだ」

ルーサーは優しく素敵だ。

「そうするわ」

横になって作戦を練り直そうこのままここに居ても私は幸せになん

かなれない。

私の理想は優しい夫とたくさんの子供達。

ルーサーがラティーフの横に立ち手を差し出す
草の染みの残っている指先をルーサーが支える。
ラティーフの手を握りベッドルームへ。

ちらちら揺れ動くランプの光に浮かぶルーサーの顔は
次元の違う住人を見ている不思議な気分
にラティーフをさせるのである。

イエフゲニーの館 3

広く大きなベッドの真ん中で
ラティーフは身体を横たえている。

疲れているが妙に冴えた頭で隣のルーサーのことを考えていた。

ルーサーはルーサーで赤ん坊でもあやすように
ラティーフの手を握ったり胸を叩いたりして眠りを促してくれている。

「元気だったかい」

枕もとの灯りを小さくしラティーフを氣遣う。

「ええすこぶる調子は良かったわ」

ルーサーに旅の行動を聞かれるとぽつりぽつり出ていた言葉も連なり滑らかに

忘れていたことさえ思い出して話している。

「まだ探す気持ちはある？」

「もう無いわ。母は村の皆が言うように山で死んだのよ」

母親の顔を見なくなつて寂しい思いをしたことなど無い。

ラティーフのそばには必ず叔母や従姉妹達が居て楽しい思い出ばかり。

ジリアスクに振られて目標を失い旅をする口実が欲しかったただけだと今は思っている。

結婚式ごっこして有頂天になりすっかりジリアスクのことはラティーフの中からは消えてしまい、

そのかわり目的も生きる意欲も無くなつて漠然とバッファローに帰

ろうと思案していた。

ルーサーにそんな心の中の動きを話しているとルーサーの優しさが伝わってきて甘えたくなる。

「楽しくないでしょう？私、話が上手じゃないの」

「そんなことは無いよ」

ルーサーがラティーフと離れてからいつ何処で誰と会ったかそしてどんな感情を抱いたか聞きたい事はまだたくさんある。最初の夜はジリアスクへの未練たらたらの言葉が多かったがラティーフがジリアスクのことを忘れたとまではいかなかったも過去の出来事として捕らえていると解ってルーサーはほっとしている。

イエフゲニーの王の別邸の部屋数は五十五、使用している部屋はラティーフが使用している一部屋と

階段下の隠し部屋。

ダッドは仕事部屋で暗視カメラのモニターに映る一つの塊りになった影を眺めている。

ヘッドフォンを耳にあてボリュームを上げる。ベッドに隠された集音機は正常に働いている。

「暫らく離れていたんだろう？お涙ちようだいはやめて情熱的な会話は無いのか。面白くない奴らだな」と独り言。

「寝てしまったか、書くことないぞ、皆期待してるっていうのに」ヘッドフォンを外して放り投げる。

観光ホテルで働くイレエヌを思い浮かべる明日デートに誘ってみよう。

パソコンの画面には、

「主に女性の身上話、政治情報漏えいの単語は見つからず」と書いて簡易ベッドに身体を伸ばした。

二人のうちどちらかがベッドから降りなければシグナルはならない明日の朝まで鳴るなどダッドはモニターを見て目を閉じる。

朝ルーサーに強く抱きしめられてラティーフは目覚めた。

半身を起こすとルーサーはドアから出て行くところだ。

ルーサーはラティーフの起きた顔を確かめてドアを閉めた。

階段を下りるとダッドが支度を整えて玄関で待っている。

「お早うございます」

「アア、お早う。彼女・言っても無駄だろうが危険な場所に入らないように気をつけてくれ」

「かしこまりました」

慇懃に会釈をしてダッドはルーサーを送り出した。

昨日の夕方自家用機で皇太子がイエフゲニーに向かっていると連絡が入った時女性を示すレーダーの点滅は峡谷の川にあった。

何があったのか？ 観光客とケンカして突き落とされたのか？

それともともと自殺癖があり手頃なかけを見つけて自ら飛び込んだのか？

慌てて飛び出し車道でレーダーを見ていたら点滅が移動を始めた。

これは警備隊に出動を要請するべきかそれとも直接王様に知らせるべきかダッドは悩んだ。

峡谷に落ちて死んでいれば遺体を確認して終りだが

下手にがけの途中で引っかかり生きていたらダッドの責任問題でもある。

着任早々始末書が更迭が浮かんだが暗視カメラの向こう側には動く人影がはつきり映っている。

そこで声をかけてみたら動いている人影はダッドの方向に向きを変えて

ライトの中に気恥ずかしそうに汚れた顔で微笑んだ時は卒倒するぐらい驚いた。

皇太子の選んだ女性はかなり変わった経歴・・・ロッキイゼンの選手という経験を積んでいる。

細かく調べれば故障者リストに入ってはいるものの優秀なスター選手でファンクラブの人数も半端な数では無い。

それであの脆いがけっぷちを歩いても・・・飛んだのかもしれないが何処にも怪我など無く汚れただけで済んだのだ。

外見上は超人的な女性に見えない。

特別美人でもなし何処がよくて皇太子がここで囲っているのかがわからなかったが

ダッドの勘では競技中の彼女に惚れたのだろうと思われた。

そう解るとこの仕事も長くは続かないと思われる。

憧れや崇拜は年齢とともに無くなるのが常識。

ルーサーが出て行った後ラティーフは急いで着替えて中庭に出た。

助走をつけて屋敷を取り巻く外壁を駆け登りルーサーが乗ったと思われる車の音を聞いている。

「下に行かないの？空港は下じゃない？上にはもっと古い遺跡群があるって聞いたけど・・・」

車が道を曲がり消えると朝食をとるために部屋に戻った。

「今日はどちらまでお出かけなさいますか？」

ラティーフはスープを口の中で味わいながら東を指差す。

警戒して先に先制攻撃をダッドはかける。

危ない谷の方向には行かないよう釘を刺しておかなければ。

「昨夜は遺跡の中を探索されて迷ってしまったのですから、くれぐれも塗装された道筋から離れませんかようお願いします」

糊のきいた白シャツに黒のスーツ、分け目のついた頭がにこやかにラティーフを見下ろしている。

「道案内にイレエヌという女性を頼みました。門の青いホテルで名前を言って下されば色々な場所の見学できます。ここは手工芸が盛んなのです。靴からバックまで幅広く・見るべきものはたくさんあります」

女性はショッピングがだい好きと言う前提で話をしている。

買い物さえさせて置けば五時間でも六時間でも飽きずに見てもらえるとダッドは思っている。

うんうんと何度もうなずきにこにこつと笑顔を作りラティーフが朝食を済ませると

ダッドが会釈して下がる。

ダッドがいなくなるのを見計らって

残したパンをポケットに突っ込んでルーサーを乗せた車が走り去った方角へ歩き出した。

「馬鹿じゃ無さそうだ」レーダーを見ながらダッドはコーヒーを飲む。

「俺の言葉なんか一言も聞いてないな」と点滅の画像を消して元の

仕事に戻る。

ラティーフの警護なんぞ重要な仕事ではない。

ダッドの仕事はプラテアドに上陸する観光客の素行調査である。

港の職員、観光地の店員、ホテルの従業員、バスの運転手など全員がダッドの隊の兵士達である。

何度も危険な箇所には行くなと念を押されて屋敷を出たラティーフは車道をひたすら上に駆け登っていた。

地図上でイエフゲニーがある箇所は二つ、海に近い所と半島の中央部分。ラティーフが居る所は中央イエフゲニー。

ルーサーは自家用機で来たと言っていたからこの車道を上がった所に空港があるはずである。

たったつと軽快に走って車道を登ると確かにダッドの言うとおりに残した遺跡が左右にある。

「滑走路を、見つけ・・・」

足を踏み入れたのは門が半分残った平らに整地された遺跡路。

管制塔も無ければ格納庫もなく数百メートルのひよろ長い空き地。

「本当に自家用機で来たの？」滑走路として使われている場所以外は雑草が生い茂っている。

がっかりしたラティーフは滑走路の奥に広がる雄大な景色を見に、滑走路の端っから飛んで降りた。

遺跡の基礎の石組みの上に立ちさわやかな風に身を任せる。

「午後からはお勉強ね・・・」

バッファロー、レイステンに帰りたいかと自分に問うが帰りたい街

や村はない。

ガイネスの事をもっと知って欲しいとルーサーに言われてその場ではいいわと答えたが

暗く重苦しい書庫になど籠りたくない。

イエフゲニーの館 4

峡谷の流れる河の音を真下に聞き絶壁に近い縁をつかず離れずラテ
イーフは上流へと歩いた。

二、三キロあった峡谷の谷底は上流に行くほど幅が狭まっている。
谷の縁を進むうち岩ばかりの中に不自然な青い色を見つけた。青い
色に近づいてみれば足場が高く組まれそれを覆うブルーシート
川に流れる白い水しぶきを眺めながら反り返った峡谷とその上にあ
る立てかけの建物に向かって歩き、何度も激しい流れの川を覗いて
は対岸に渡れる場所を探したが簡単には対岸に渡れそうにない。

大工の親方ロペスは荷台に積んだ設計図を自転車で
数え切れないくらいこの道を往復している。

仕事が依頼されたのは三十年も前、
一番の課題は古い遺跡の土台が脆いこと。

カヤンデルから流れてくる急流は毎年何度も水量を多くして峡谷の
幅を広げてきた。

岩には脆い岩と固い岩とがあって古代の人間は固い岩を選んで
きのこのように残された岩の上に城を作り上げている。

その技術力は大したものだと思うが二百年三百年と雨風にさらされ
ていると流石に傷みも酷く

そこから千年も過ぎて新しく城を建てるとなると最初何処から手を
付けてよいか悩んだが、

敷石を入れなおし整地し外壁を補修しいざ内装となると当時を知る
人間などこの世に存在せず

現代に残っている建物から想像して図面を引いているがガイネスの
建築史を研究している学者の意見も

新しい発掘のたびに意見がころころ分かれ、城の改築はまったく進んでいない。

遅遅と進む現場を見に今日も親方は重いペダルを踏んでいる。

城への一本道を親方が登って来た。

高台にいる職人はいち早く親方の姿を見ると大声でわめいた。

「親方ー」

足場の添え木から顔を出して作業中のセザンが手を止めて木立のほうを指をさす。

ロペス親方の近くにいた男が手を止めてセザンの言葉を伝えると、親方が山側を向くと何処をどう上ったかは知らないがやけに高い岩の上に女はいる。

「あんたかい、あいつの仕事にケチをつけているのは。何処から来た。こんな所まで徒歩かい？ 帰ったほうが身のためだぜ。ここいらにはおっかない幽霊がわんさと出る。明るいうちに帰えんな」
はらわたから染み渡るいい声で女を脅かす。

「ケチなんかつけてないわよ。あの彫り物の戦士の持っている物が間違っているから教えてあげただけよ。葡萄なのよ、それも山葡萄。まだあるわよ、似ているようでぜんぜん違っているのよね。わざとなの？」

岩の縁に腰掛けて足をぶらぶらしながらしっかりと男に聞こえるように話す。

親方は顔をしかめ振り返って指をさした。

「門の横の壁画か？」

どうにでもなれとゴーサインを出した場所である。入城するとき

最初に目に付く場所だから最後までたくさんの学者の意見を参考にして先月取り掛かったばかりである。

「そうよ。左右とも間違ってる。もし私の知っている壁画だったらってことだね、ここからだ良く見えるのよ」

馴染みのある壁画が変な供物を握って踊っている。あまりおかしいので作業をしている人に話しかけて追い払われた。

「何処から来なすった？」

緑色の運動着姿である。この国の人間ではない最初から思っている。

「レイステンよ」

親方はラティーフの答えを聞いて暫らく黙っていた。

「何処に滞在しなすってる」

降りて来いと手を振る。上ばかり向いて首が痛い。

「イエフゲニーのフォルスストロム城」

とダッドに教えられた名前を言う。それ以外は何も知らない。

十メートルの高さからぼんと降りて親方のそばに。

親方は上から見ても大きかったが横に並ぶともっと大きいことがわかる。

親方はまじまじとラティーフの顔を見て尋ねる。

「そりゃこの谷の向こう側だ。あんたは学者さんか？この辺の遺跡を寝袋をもって調べているのかい？」

化粧ツ気の無い顔に推理を働かせて探りを入れる、イエフゲニーなら腐るほど遺跡はある。

あるにはあるが王様の個人の持ち物で発掘されていない地域のほうが多い。

「そんなところよ」

と裾の汚れをチェックする。ダッドのしらっとした目を意識している。

親方の値踏みする目がラティーフを見ている。

「あの城が気になるかい」

これはよいことの始まりかも知れない。

「そうね、見せてくれるの」

追い払われて少々腹も立っている感情を入れない返事が出る。

素っ気無い返事をされても親方の思いはちがうところにある。

「そうだな。いいよ。その代わりといっちゃなんだが細かく壁画の違いを教えてくれないか。それお前さんの研究している壁画絵とよ」

イエフゲニー遺跡を研究しているならこの城の時代の壁画も

何処かで見ているかもしれないと親方は思い始めている。

昨日もおとといも偉い学者さんたちが集まる学術会議とやらを傍聴してきたが

学者が発表しているときはなるほどと納得もするがいざそれを生かそうとしても親方の仕事には当てはまらない。

「フオルスストロム様に雇われているのかい？」

と尋ねる。

プラテアドには手付かずの廃墟・ではなく遺跡が山ほどある。最近では港近くを修復し観光客に見せている。

「そうよ」

頑丈そうな男がフォルスストロムを知っていて内心ラティーフは驚くが顔には出さない。

ロペス親方に案内されて正門から中に入ると外壁は出来ているものの玄関扉や窓と窓枠も無い城が組んだ足場の中にはある。

「おい！」

親方が呼ぶと門塀で作業していた四人が下りてきた。

「こいつに変えるぜ」とチェックのついた絵を四人渡した。

「なんでいその女の言うとおりがよ」

不服そうに男が去っていくと親方は広く開いた玄関空間にと入り込み分厚いファイルと見比べながらラティーフに意見を求めた。

「この扉の上には蓮の花、壁の色は草色よ。右手は小さな蔦模様が柱と窓枠に這っているのよ。左手の部屋は野いちごの壁模様、窓枠は直接壁に書いた大きい蔦。奥の部屋も私の助言が必要かしら」

親方はあれこれと花や模様を描いたファイルを見せながらチェックを入れた。

ラティーフが次から次へと説明すると親方の顔色が段々明るく変わる。

「そうだそうだ。この絵だ。よしこれで彫りに出せる。おおい、リマやこれ持って下の作業場まで走ってくんな。呼び戻ししないといけない奴らが出てきたな・・リマ戻って来い。こいつ等に連絡を取るようにカミさんに言ってくれ」

リマが自分の仕事を置いてむくれながら携帯電話をいじった。何度見てもアンテナは立っていない。

「行ってきたやす」リマが電動自転車に格好をつけて走り去った。山奥にはもったいない別嬪さんが来ている。

引き際

冷たい風が落ち葉をはらはらと鳴らし枝葉に残る色付いた葉に吹き付ける。

宮殿の中庭には老人が一人木立の中を人の姿を求めて歩いている。老人は木立の間を足早に歩く二人連れを見つけるとその道先に立った。

二人の男は道を塞ぐ老人に気が付き会話をやめて近づいていった。

「ほう、これはこれは評議会以来ですな」

冷たい目が老人を見る。

三十年前ならいざ知らず、ウルバーノに意見を言えるような長老はもういない。

「おや珍しい引退なさると聞いていたのに何か不都合でもあられたか」

ネグロのワルテは老人に敬意を表わして目をふせ挨拶をする。

老人はワルテの挨拶を交わしてウルバーノを見据えている。

「最後のお勤めをきちんとして幕を引きたいと思ひましてな」

老人のいわくありげな視線を笑ってウルバーノは無視する。

「良いご子息をお持ちで羨ましいですね。モラドには深い繋がりができつつあるようでお家元も潤うでしょう」

評議会では三十年たっても若造だが力関係は逆転している。

「ハン、どうでしょうかな。土地から人が居なくなれば困るのはわしらなのに。息子は一過性のものだと言い張っていましたがな」
薄ら笑いが老人の口元にはある。

「我等を待っていたように思うが。なにか御用かな」

険悪な空気を読んで相手の意向をうながす。

「そうですじゃ。寄る年波で物忘れが酷くなりました。モラドの大公様に伝えたいことがございましてな。わしは手を引きます。単純なこと。金ですじゃ。金が続きませんのじゃ。失礼ながらモラドは商売上手じゃ。わしらもその後に続きたいが元手はありません。マロン半島の民は出稼ぎでしか食えぬ。ここらでもそつと腰を据えて地場産業を盛り上げねばの。そういう時が来ております」

風が落とす落ち葉がかさこそと音を立てる。静かにゆっくりと終りが来たことを老人は告げている。

「なるほど腰を据えて・・ね。カヤンデルの地下から何か出ましたか」

薄ら笑いを浮かべて木々の彩を愛で老人を見る。

「良くご存知ですな。良質のケイ酸塩鉱物がありました。鉱脈も大きくいろんなものに使える可能性もあるそうな」

やはり知っていたかと苦笑いをする。

「カオリンですか？」

ワルテも失笑しながら聞く。報告では対して埋蔵量がないと聞いているがマロンではもろ手を挙げて喜んでいるらしい。

「そうそう。それですじゃついでに申さばモラドの兵士達を引き上げてくだされ。物騒で適いませんわしらは平和主義者でして」

ウルバーノに隠し事は出来ない。噂では何処にでも密偵を作っているという。

「大公殿。それと」

老人は真剣な目でウルバーノを一瞬だけ見て視線を外した。

「わしらはグエナエルから手を引きますじゃ。ブライアンにもしっかり言い含めました。それを申し上げたかった。後は良しなに」
頭を垂れて会釈をし老人は背筋をきりりと伸ばして去っていった。

老人の後姿を見送ると呆れ顔をワルテは作った。

「突然ですね。何処で心変わりをされたのか。まあマロンの一族が手を引いたところで何の影響もありませんが。その過程が知りたいですな」

ウルバーノは沈黙を守っている。

「職人を全部引きあげる気でしょう。マロンの職人は鋳型を作らせればなかなか良い仕事をするんですが」

「なにすぐには引き上げられないさ。職人の受け皿が必要だからな」
モラドの作業所のことなど考えていない。ウルバーノは目を細めて老人の最後の言葉に思いを寄せている。

「この際モラドに忠誠を誓わせれば話は済むでしょう」

ワルテが気楽に言う。

強引にやらせる方法はいくらでもある。なぜそうしないのかがワルテには不思議だった。

「過激な意見だな。まあマロンの職人が減ったくらいでモラドの工場が立ち行かなくなることなどないわ。老人め何かバラディールに詮索されたか？それでビビッて手を引くと言って来たのではないか」
老人の態度から良い後ろ盾を得ていると感じ取っている。

「將軍が何を詮索できるでしょうか」
バラディール將軍は派手な癩癩もちで細かいことに口出したことがない。

「あれの詮索好きは今始まったことではないでないでな」
とは家庭内のことだが確かにワルテの案にも一考するだけの理由はあるが放って置いてもすぐにブライアンが泣きついてくるのは目に見えている。

ガイネスの金のなる木は全てモラドが持っている。逆にこれまでが締め付けが緩かったとウルバーノは思う。バラディールの顔色を伺って手ぬるい政策ばかりあった。だがこれからは違うビセンテのような腰抜けが二度と出てこないように必要な物だけを運ばせくらない付属品は切り捨てることにしてやるとほくそ笑む。誰も今のウルバーノには逆らえない。

ビセンテは気負っていた気持ちを萎ませてグリスの宮殿を出ている。カオリンはモラドから抜け出る口実。

六つの半島はモラドに支配され生き血を吸われる様に人や埋蔵物を提供してきている。影では不満を言う者も僅かではあるが居る。

ビセンテはその一人ではなかったがマロン半島の住人がこれ以上減ると主要な産業も無く独立も難しい。

独自の探査で埋蔵量の少ない鉱物層を見つけブライアンを説き伏せてモラドの傘下から逃げ出すと決めた。

マロン半島の住人には鉱物資源があると安心させ出稼ぎ人を呼び戻しマロン独自の産業を繁栄させる。

露天掘りしたカオリンだけでは産業は成り立たないのは百も承知している。

ケイ酸塩鉱物は以前からあったもので、その近くに堆積頁岩があり沈殿した金が出てきた。

腹心の部下に緘口令を強いて採掘させているが埋蔵量は未知数で、堆積した金が尽きればマロン半島は終りである。

二基ある水力発電所の整備、機械工場、車両整備工場、化学工場、

発電所、変電所、ポンプ場、廃水処理場、と付随事業にも大勢の間が必要である。マロン半島の一大プロジェクトが動き出すのだ。

議会の開幕

ガイネスの首都アークスは 그리스 半島にある。

奇数が好きな国民性で石作りの三階建てと五階建てと

緑色の屋根が段々に続く都市の奥まった高台に

周囲の森に負けないくらいの緑色の苔で覆われた城がある。

古く厳めしい城の裏庭は広く良い馬場だったものを小型機の発着所として滑走路に、

横の厩舎は飛行機の格納庫として作り変えられている。

前日から議会のために来ていた各半島の長と当日ぎりぎりに間に合った代表者達が

城の大広間で円卓を囲んでいる。

カンヤデル最高峰グエナエルの絵を後ろにサガモア王、その隣にはルーサー。

右にマロンのブライアン。左に軍を代表してモラドのバラディール將軍とその夫のウルバーノ。隣にモラドのイシアル。ネグロのワルテ。グリスのヨルゴ。ブランコのシメオン。プラテアドのティエリ。ドラドのブラーズ等がそれぞれの嫡男または後継者として選ばれた人間を携えて半島の代表者の横に座らせている。

「まず欠席者マロンのビセンテ。ブライアンの話ではストレスから胃痛で脂汗を出して寝込んでいるそうだ。TV参加もあの様子では難しかろう。次にモラドからウルバーノ大佐。大佐は研究機関の代表として来て貰った。承認してもらえるかな？」

円卓の全員が片手を上げる。

「良かろう。全員の承諾があった」

と議事進行のサガモア王。

手元の書類に目を通しそれぞれの代表者のテーブルを見る。

事前に書類は行き渡っている。どの顔も手の内は見せまいと平静を装っている。

「言い難いがの。ウルバーノから山脈鉄道の補助金を来年度から半額にしてくれとの申し出があった。提案理由はウルバーノから言って貰おうか」

この場所では一番品の無い顔がウルバーノだとサガモアは思う。

垂れ目で男なのに妙になまめかしい雰囲気を持つのがウルバーノである。

「昨年にも提案していたのだがケンプの研究費が膨れ上がり採算取れぬ。それに用意に手に入れた諸外国の設計図が手に入りにくく、高値になった。手元にその予算案がある、これは今年度の書類を元にして来年度の予算を算出している。これよりも多くかかるのは予想できるが、今回は切り詰めてやってみようと思う。すまぬが来年度は多方面の補助金の削減を願うと思われる」

簡潔に要点だけを言う。特徴の有る色艶がウルバーノの声にはある。

その場の全員が首を横に小さく振り視線を書類から外して天井へ・・
一同の慣れ親しんだ顔を見回す。

「毎度言うことだが打つ手立ては無いのかね。何時までも競争ばかりやっても終りがなからう」

とマロンのブライアン。

精密な機器が要求される武器産業である。つぎ込む金額の多さは六つの半島の収入を足してもはるかに大きい。

武器の開発には長い歴史的背景がガイネスにはある。

太古の昔には同族間の戦闘が主だったが船の出現で様変わりし
外敵の侵入を防ぐため七部族が一丸となって戦い追いつた経験は
敵よりも殺傷能力の大きい武器の開発に拍車をかけた。

渋面を作ってブランコのシメオン。

「そろそろどこかの国と友好条約を結んではどうだね。ガイネスだ
けでやっていくのは限界だと思うが」

シメオンは平和主義者でたくさんの武器の必要性を理解しながらも
その武器が使われ人の命を奪うのが耐えられない。

シメオンの平和ボケを知って釘を刺すようにウルバーノ。

「それは何度も話し合った。我々が作っている武器は国民に向けら
れているのではない。その予防処置も完璧だ」

旧式の武器の扱い方も知らない奴にうだうだ言って欲しくない。

ガイネスの飛ばした衛星は世界中を空の上から見張ってにらみを利
かしているというのに、何度説明しても同じ所に引き戻る。

周りの国々は外宇宙に関心を示し

ガイネスは宇宙よりも明日の朝目覚めた時に自分が売った武器で包
囲される状況だけを心配している。

畳み掛けるようにモラドのイシアルが円卓を囲んだ面々を一人ひと
り見回す。

「その話に決着は着いている。我々は五十年計画を始めたばかりだ」
五十年後には元敵国と友好条約を結び条約内容でガイネスを有利に
持っていくつもりでいる。

一人、五十年には不服な男グリスのヨルゴ。

「ガイネスの国民性は質実剛健、質素儉約これらが崩壊すれば悪鬼

どもが蔓延る無法地帯と化す」
無秩序なニュースを見るに付け敵国と仲良くなどとは国民を貶めると言い続けている。

長々とため息をつく長が何人も居る。

モラドからの補助金を当てにしていたのは王以外の全員である。

五つの半島の鉱物をモラドに高値で買ってもらっていたが産出量が大幅に減り、

列をなしていた車両は純度の低い鉱石を乗せてしか走らせられない。

それに引き換え、産出量の減ったほかの半島と違いモラドの荒地、砂漠の地下には大きな鉱脈があり埋蔵量は無尽蔵でガイネスだけでなく他国に輸出できる量まである。

「ウルバーノ。もう山脈鉄道で運ぶものは無いのかね」

とドラドのブラーズ。ドラドは古くは王室付きの医者の家系。

ブラーズの一族は医療研究室を多数持ちモラドからの援助の額も大きい。

そのうちの幾つかの研究室を閉鎖しなくてはならないと考えるとブラーズの立場は苦しい。

六つの半島の住民は糧を求めてモラドへと人口流出が続く、

自然人口の流れと共に物資の流れも変わりモラド以外の半島では収入は減り支出だけが膨れ上がる。

「仕方がないな。了承する」

とブランコのシメオン。シメオンの言葉で全員の手が上がる。

「さて次。プラテアドの観光事業としてのてこ入れの一貫として陶

磁器の開発に力をいれようと思うておる。この事業はどの半島とも参入しやすい所が利点だ。わしが独自で行なった地質調査を配ることを皆に」

サガモア王が目配せをすると侍従がファイルを代表者の前に置いた。「見てのとおりプラテアド以外は色々なケイ酸塩鉱物が含まれている」

「モラドの調査結果がないようだが」

ファイルを見たままウルバーノが皮肉ったように言う。

ウルバーノの嫌味な言葉をサガモア王は軽く受け止める。

「モラド半島はウルバーノがすっかり把握していると思うがの。それにモラドは整備する箇所はすでに着工済みであろう。ウム、モラド、プラテアド以外は大型船舶の発着所人工島の建造を推進しなければならぬ。我々は武器の技術においては世界でも引けはとらないが国民の生活水準となると下から数えたほうが早い。一方世界は広い。いろんな可能性を秘めた市場も多々あると思われる。我等は次のその又次の世代にまでは世界と肩を並べよいものを送り出していききたいそれについて予算を揭示していただきたい」

フンと鼻で笑ってウルバーノ。

「いい案ですな。草稿は出来上がっておいでなのでしよう。次回の議会の時までには修正案、並びに決議事項を煮詰めましょう」
半島の代表者を差し置いて王の次に言葉を挟む。

金という権力持ったウルバーノを黙らせる手段は無い。

かろうじて奥方のバラデイル將軍がウルバーノをたしなめることが出来るが

議会では夫を立て意見をしたことなどない。

「では休憩をして少々頭を冷やそうかの」

議題は多いがモラドのウルバーノの機嫌をとりながら進行させるのは難しい。

直接ウルバーノに交渉している長もいる。

以前のように議会が求心力を持たなくなった今
半島の長が集まって話し合うことの必要性が問われだしている。

ガイネスの二人

ラティーフのガイネスでの生活は充実している。

皇太子妃の勉強はそっちのけでダッドの目を誤魔化しては書庫で村の記憶を呼び起こしてはスケッチブックを広げてそれを書く。

ついでに書庫で寝起きするのも二度や三度ではない。

散歩と称して古い石垣の上を渡り対岸に渡る。

対岸では大勢の職人が気軽に声をかけてくれる仲である。

人一倍親切なのはロペス親方で復元しているバルカ・シシク城の内装の発注にまでラティーフの意見を取り入れてくれ、染物の色具合が見たいというラティーフを繊維工場にまで連れて行き工場長を紹介して貰ってもいる。

繊維工場では温度や湿度を的確に言い当て、

染める工程で色が変わるのを何度も工場長や染色係に見せて学者として認めさせて、

バルカ・シシク城で使われる織物全てに関わることを許された。

科学染料を使わないガイネスの染色は大いにラティーフを喜ばせている。

村での仕事は糸をつむぎ草木や泥で染めて機織で反物を作り上げていた。

古くから村に伝わる模様を城の内装に使うという仕事は

天から降って沸いた幸運にラティーフには思える。

ルーサーはと言えば大勢居るハーレムの中を順番どおり泊まり歩いているのか

一月に多いときに三度、それも夜中に現われて明け方には消えるという忙しさである。

そのためラティーフの生活の中にルーサーは存在せず一瞬目を閉じて見た夢の中の人物になりつつある。

今日も朝早くから夜中に書き上げたスケッチブックを持って城を出て行く足取りは軽い。

暗い空には降るような星。

丸いガラスの向こう側は暗い山並みが幾重にもある。

パイロットが暗い闇の中に小さな明かりの列を見つけ旋廻して着陸態勢に入る。

機体はぐつと高度を下げる。

議事録を畳みルーサーはカーテンを引いた機内の窓を見つめ軽いため息を洩らす。

緊張から開放される瞬間である。

城で待つラティーフを思うとうっすらと笑みすら浮かぶ。

皇太子は直接政務には関われないが、外交、内政、財政の調節をする王様の補助的役割を担う。

五百七十年前戦いに明け暮れていた七つの部族は外敵の急襲で人口の半分を亡くした。

生き残った人々は団結して敵を撃退する方法として盟主を一代限りで終わらせる方法を考え出した。

止まぬ内紛を押さえるために考え出されたのが技能や知識の豊富な賢い人間の選出である。

何度も選出方法を吟味し誰もが渋々でも納得する方法を決め
七つの民族の上に立ち公平な立場で陣頭指揮を取れる人間を選ぶ。
優秀な王に所有させるのは西から東まで二千五百キロの長さで横た
わるカヤンデル山脈の全て。

山脈は七つに分かれた半島の全てに水の恵み山の恵みを公平に行き
渡らす命の根源を・・持分とし七部族の頂点とした。

何度も戦場となったプラテアド半島でまとまった軍隊の本拠地は
モラドに移しても軍隊の名称はプラテアド軍を名乗って居るのはそ
の名残りである。

山脈の麓から海まで突き出た半島が七つの部族の諸領地。

どの部族でも将来部族を率いるに当たって私利私欲に走らず
協調性を重んじ清貧なリーダーを選出するため嫡男以外の候補も名
乗りを上げることできる。

更に選出方法は時代を追って加速して、文武両道はもちろん筆頭に
上げられるが

適正テスト心理テストで将来に不安を残す材料が候補にあれば又次
の年に繰り越され
新しい人選で選びなおすこともしばしばあった。

ルーサーの場合サガモア王の第一子でも

母親はルーサーを出産時に死亡しているので皇太后の地位は無い。
サガモア王はその後妃を娶らず、七部族の優秀な青年達は王になれ
る可能性を信じて日夜努力を惜しまず勉学、スポーツにと徹底して
励んできている。

生まれてすぐに侍従四十人に守られてルーサーはガイネスを離れ
教育レベルの高いといわれている他の国で過ごし、

生まれた国ガイネスに皇太子として戻ってくるためだけに二十数年は費やされて、

侍従の献身的な努力と王の継続的な庇護のもと評議会に望んだルーサーは見事皇太子に選ばれている。

王子の時点で住まいや衣服などプライベートに関するすべてをバックアップしてくれる一族を探したが誰も皆、自分の一族の子供達を育てるのに金を注ぎライバルに塩を送る余力のある一族は無かった。モラドだけは七部族の中では際立って潤っているがルーサー側が避けていたのも未だに後ろ盾が無い理由である。

皇太子として使える金は限られ王の諸領地プラテアドにてラティーフを囲っていても 그리스宮で生活させる余裕はルーサーにはない。

それでもルーサーはラティーフを連れてきたのは大正解だと思っている。

強引に連れてきた彼女が侍従の居ないルーサーのただ一人の拠り所である。

幸いにも彼女がレイステンから消えても彼女の行方を心配して搜索願を出す人物が居ないのもルーサーに連れ去る口実を作らせた。

彼女が一日の大半を過ごすバルカ・シシク城の親方ロペスとの接触には多少の嫉妬は覚えるが

城に閉じ込めてルーサーに憎しみだけを募らせるより了吗だと思っている。

会えない日々はレイステンで使用していた使えない携帯電話の小さな画面に撮りためた彼女の顔を眺め一日を終える。

わずかな時間でも彼女に会えば生きている幸せをルーサーは実感出来るのである。

ガイネス国のコレット

海の上を一隻の豪華客船浮かんでいるのが見える。

眼下には汐で洗われている岩の多い入り江に丸太の栈橋が頑丈そうに伸びている。

ガイネスの人間が港と呼ぶのはもっと北に行かなければお目にかかれない。

入り江に続く石畳の道を辿ればびっしりと隙間無く家が建っている。家並みには商品を宣伝する派手な看板、ポスターの類が何も無い。店の軒先には雨にさらされて判読不能な板切れ。

石作りの家並みにその板はマッチして商店の入り口だとはコレットは思わない。

かと思えば出入り口に気味の悪い人間の顔が口を開けて多数掘られている。

それがパン屋だといわれても楽しく入る気分にはさせない。

いたるところにある等身大の石像は何のために置いてあるのか想像もつかない。

この町に住み着いてから三ヶ月、街路樹に咲く花を眺めそれが美味しそうな実に色付いている。

「イエフゲニーの町は見飽きたわ」

潮風は心地よいがそれが二千年も前から吹いていると思うと腹立たしくなる。

ざくざくに切ったTシャツの胸元にラメを塗り窓を開け放って全身に風を浴びる。

軍服姿がそぐわない道場の端で

恨めしげにコレットはテットを見ている。

「親父から昇級試験に落ちたって聞いたぞ。少しは腰を落ち着けて覚えたらどうだ」

可愛い顔でふくれているコレットに見つめられると腰の骨が二三本引き抜かれたようにテットは甘くなる。

「だって何の意味があるのよ。私が古武道の型を覚えてあなたと組み手でもやれって事？私あなたとはベッドの中での組み手以外したくはないわ」

と誰が聞いても親密度の高い会話。

一応テットは妻という形でコレットを入国させたがコレットはしたたかで

ガイネスに来て以来ではテットと仲良くしているように装うが

約束のアネルの顔を拝むまでは就寝の部屋はテットとは別々で過ごしている。

若い女性練習生も道場のあちらこちらと大勢いるが

ガイネスの女性練習生は休み時間でも腹筋や懸垂と自己鍛錬に余念がない。

テットは仕事中で無かったらコレットを優しく抱き寄せたいと思うがそうもいかない。

ここは父親が師範の道場の中である。

「分かった。わかったから大きな声でいわないでくれ。恥ずかしいよ。説明するよ。皇太子妃の侍従には無理だから世話係という名目で申請しよう、それでも条件が幾つか有る。妃を守るだけの力量があること。なぜかって？妃の命を狙う奴だって居ないとは限らないだろう。俺達だって二十数年間身を粉にして皇太子を守り通してきた。そのためには日夜身体を鍛えて、あわや皇太子に危害を及ぶ

と生ったら己の身体を盾にして皇太子を・・・」

同じ話を何度もするなとコレットの手がテットの口を塞ぐ。
離れて見ている練習生にはいちゃついているようにしか見えない。

「私皇太子なんてどうでもいい。守るのは皇太子妃よ」

口では威勢の良いことを言っているがアネルに会いたい気持ちは日に日に募っている。

筆記試験はパーフェクト、面接もOK。残るは運動能力。

古武道八級の腕前では初級兵士の資格も貰えないのである。

「私やるだけのことはやったわよ。後はあなたが私に愛情を見せてくれる番よ」

と上目使いにテットを見る。

胴着を脱ぎ捨て下着姿のコレットは扇情的で悩ましい。

「俺の愛情はいつも見せているだろう？」

もういけない。コレットに甘えられたら鼻の下が長く伸びる。

「私知っているのよ」

と軍服の肩章に手を入れる。

「皇太子妃はグリスの宮殿には居ないのよね」

テットを引き寄せて耳元で囁く。

「え、いや・・・そうだが。なんで？」

皇太子妃が近くに居ることはずっとコレットには内緒にしている。
知れば試験も受けずにすっ飛んでいきかねない。

「私をイエフゲニー城の見張りの兵士にしてちょうだい。それくらいできるわよね。下っ端の兵士でいいのこのままじゃ私百年待った

ってアネルの影も見られないわ」

さっきクリスと言う男がテットに会いに来ていた。

二人は親しげに近況を伝え合い・・・主な内容は皇太子になったルーサーのことだが、

まだ皇太子妃をグリスに迎えられないのかと二人は暗い顔をして話し合っている。

細かい内容はコレットは知らないがガイネスでは珍しい車の運転席にクリスが乗ったのを見計らい道に飛び出して車を止めて皇太子妃の居る場所を聞いたのである。

「クリスのやつだな・・・いらぬことを吹き込んで・・・」

クリスと別れてテットは父親にコレットの運動能力はガイネスの赤子以下だと告げられている。

「いいじゃない。ここからだと内地勤務なのでしよう一ヶ月に一度は帰ってくるから。ね、ね」

コレットのきらきらした目で見つめられると嫌とは言えない。

「変な奴の配下に入るがやっていけるか？」

プラテアド半島警護所長の身分にはなったが王室付きの警護班ではない。

クリスの話では諜報機関の少佐が最新機器を配備して皇太子妃を守っているという話だった。

「あなたの奥さんに無理な仕事をやらせる人なんて居ないわよ」

そこまで言われると、若くしてプラテアド警護所長に就いたテットの自尊心はくすぐられ父親に免状のサインを頼み込み、基地に戻る早々本部に掛け合い予備特殊隊員としてコレットを登録している。

コレット参上 1

広く晴れやかな空、

大都市レイステンとは比べ物にならない澄み切った空気の中、朝早く1泊したホテルから自転車でコレットは出発している。

緩やかな上り坂が長く伸びて行き交う人も無い、

大きなカーブを曲がるたび目的の城の登場を期待して胸が高鳴る。

自転車なんてガイネスに来てから始めて乗っているが電気自転車は何の苦勞もなく石畳みの坂道を登る。

頭には白いフリルの帽子、黒いドレスに白いエプロンが風を切っている。

二時間も上り下りを繰り返すとまったく人通りは無くなると草の生えた道路の向こうに目的地を見つけた。

宿泊したホテルの五倍はある屋敷の前でコレットは流れる汗を拭いた。

「来たわよ、私のアネル。とうとう来たのよ」

五メートルは有る門のチャイムを押して門が開くのを待っている。

電源の接触が悪いのかはたまたコレットの人相を疑っているのか五分以上待って文句が咽まででかかったところで門が少しずつ開いた。

「ヤッホー!!」

自転車にまたがると広い庭の奥にある玄関を目指して

力いっぱいペダルを踏み込むと玄関前には黒いスーツの男性が一人待ち構えている。

「あんた誰？アネル様はどこ？何処に居るの教えてよ」

自転車を花壇に転がしてじっと見つめる男の視線で慌てて花壇から自転車を引き抜きスタンドを立てて階段横に置く。

駆け足で階段を上がり玄関のノブをまわしたり押したりと忙しいが扉は開かない。

締まっている玄関のドアから離れて館中の窓が見える庭の真ん中まで戻ると

一個一個窓の中を確認しては「アネル様ー」とコレットはわめく。

「早く。挨拶したいのどの部屋なの？」とたたずんでいる男に尋ねる

黙ってみているダッドは胡散臭い目でコレットを睨みつけ「出かけている・・・」と告げられると。

「こんなに朝早くからいったい何処に行くって言うのよ！」落胆して吐き出すように言葉が出る。

「召使にしては思った事をそのまま口にする女だな。まあここには来客が来ないからお前のような女が採用されたのだろう」

ダッドはそういい捨てて追いつ返すべきか悩んでいた。

書類ではプラテアド警護所長の妻と有る。

所長のフォークステットは四十を過ぎてガイネスに戻って来て港のイエフゲニーに勤め始めたばかり、

彼の力量はまだわからないが教育の行き届いていない女を妻に迎えて居ると言うことは男として力量が知れている。

そんな値踏みをされて居るのが分かったのかコレットは諦め顔で息を整えると、

「はい。これ移動命令書。私コレット・バーニーはこの仕事に従事

できることを誇りに思います。ここでの会話、行動命令は決して口外しないことを誓います。敬礼！」
と二等兵として敬礼をする。

「OK。確かに命令書は受け取った。だがな、お前の仕事はこの屋敷の掃除だ。それでその後ろの荷物はなんだ。私物はココにはもってきてはならないと言われてなかったか？ さっさとホテルに置いて来い。宿泊する時はこちらから支持があるまで待て」

少尉が直々に初等兵に命令することなど無いがあまりにも無節操なコレットの登場に驚いている。

「はい！ 又戻りますと任務が完了できませんので夕方もって帰ります。それでいいですか？」

ダッドを見つめる目がぎらぎらしている。その目力にダッドは圧倒される。

「ああ、門の外においておけ。観光客はここまで来ない大丈夫だろう。さっさと置いて来い！」

ブスツとしたコレットに腹を立てダッドは声を荒げる。

さっきまで人が変わったようにきびきびしていた態度が急にふてくされブチブチと口の中で文句を言っている。

自転車の荷台を引いて門の所へ置いてくるとむくれていた顔が愛くるしくニコニコ笑に変わっている。

「挨拶と引継ぎが終わりましたよね。質問していいですか？」
充分相手がコレットの可愛らしさを認識したのを見て大きな目を上目使いにする。

「仕事の場所説明かね。玄関、それから中に入っの広間と応接間二階に上がる大階段二階の鍵のかかってない全ての部屋。皇太子妃の部屋は妃が居る時に尋ねて承諾を得てから入室するように。勝手に入ることはまかりならんぞ。他に聞きたいことは？」
新人にして良い心がけだと内心褒めている。

「アネル・・じゃなかった皇太子妃はこの玄関を使用なされるので？ 帰宅されたときはどんな言葉をかけられるのですか。あんたじゃなくて皇太子妃。階段は何歩で駆け上がるのでしょうか。どの辺りの手すりを握られます？ カメラ持ってきてるので一緒に写真お願いしてもいいですか。アア、あなたの手数はかけませんわ。私手作りでツーショットが取れるグッズを作りました。ウフン質問の答えは後でいいですわ仕事を終えてしまわなきゃ。キャー玄関の取っ手はあなたが開くのそれとも皇太子妃？ 信じられない〜！！」
コレットの矢継ぎ早の質問にダッドの顔色が変化する。

「いい加減に・・・」

「きゃーきゃー！！」両手を口に当てて屋敷裏へとコレットは逃げ出す。

ダッドの耳には甲高いコレットの声。

コレットは奇声を発しながら脇の小部屋に入り込みがつつりと吸引力の強い掃除機を取り出すとスイッチを入れる。

部屋の真ん中ばかり掃除するコレットに再三大声でダッドが注意するが聞く耳はコレットには無い。

何でも手早く綺麗に出来る女を見せ付けて居るつもりである。

階段を登りドアを蹴飛ばして開かないと次に次にと走り回って掃除をやり終える。

「ここレイステンと変わらないのね。掃除機はいっちゃんいい奴ジ

ヤン」コードレスでハイパワーの掃除機に満足なコレット。

百回ほど掃除機をかけたら調度品を磨けといわれたことを思い出し長いスカートの裾をひるがえしウェットタオルを持って階段のてすり、花瓶や絵画、変なオブジェを撫で回した。

汗だくになりながら次の仕事道具、脚立を抱え広間の豪華なシャンデリアを磨きにかかる。

このときはもうダッドは声をからしてどこかへ行ってしまった。

「ピッカピッカのピ！よ」

どうよ！この美しさはと、美しい水晶に微笑みかける。

水晶に映った小さなコレットが百の笑顔で笑い返す。

「終り〜〜〜！ダッド隊長今日の任務終了であります！インターバルをとります十五分、門より外に出て汗を乾かしてきます〜〜」

ダッドの返事を待たずに掃除道具を片付けて自転車に飛び乗った。門を折れて左に出れば路が急に細くなる

「確か、確か・・・この上の朽ち果てた石橋の橋脚・・・付近・・・にと。何処よ！」

ダッドがぶつぶつといていた言葉思い出している。

「えっ！あれ！」

敷石の上の樹木を掻き分けて、行ってはいけないと言われていた崖に来ていた。

コレット参上 2

昼食を食べて行けとの誘いを断り

チェックを入れた資料を完璧に仕上げたくて繊維工場をラティーフは飛び出している。

バックパックに荷物を詰め込み山へと進路をとって駆け出すと誰もラティーフを止められない。

途中で城の復元工事の職人と出会い会話を楽しみながら並走した。

城から別れて岩山に分け入るといつもの崖を飛び降りて

川に崩れた遺跡の上を水面に足をつけないように飛び跳ねて

城壁のような橋脚をよじ登り柔らかい土砂を避けて

足場を固めて作った岩場を鼻歌交じりでラティーフはよじ登る。

嬉しそうに見つめているのは横幅五センチ奥行き一センチの岩の出っ張り。

頭の中は染色に使う土や山野草の名前。

工場長から見比べたいから染色した糸を見せて欲しいといわれている。

「違った散歩コースを見つけなきゃいけないわねダッドが許してくれるかしら」

ダッドと顔を合わせる機会は少ないけれど朝と夜はきっちりその日の行動を報告するのが滞在者の義務らしい。

最近は簡略して昨日と同じよ・・・と言っている。

野草を採取に山奥に入るといったら止められるかも知れない。

「やっぱり無理よね一泊や二泊では済まないから」と独り言、

ダッドの手書きの地図ではなくきちんと測量した地図があれば
たくさんの情報が得られるけれど最初に逃げそこなってからラティ
ーフの信用度は低い。

掃除で流した汗の上に力強くこいだ自転車の汗が流れていく。
絶壁の端には今にも崩れ落ちそうな石組みと足場の無い岩肌。
その下に半分壊れて落ちたアーチ型の橋脚部分の石積みがある。

遠目にもそれは人が通れるとは思えない。

口の悪い上官が洩らした言葉には谷の上流からいつも帰宅すると言
っていた。

「あれかしら？ すごい絶壁だわ、レイステンとは大違いね」

コレットは使用不能の携帯電話を取り出すと橋脚に向かってシャツ
ターを押し続けた。

と・・・緑色のジャージがあつという間に崖から落ちてジグザグに走
って居なくなった。

「え、ホント？ 帰宅時間なの？ ラッキー！」

緑の色が動いた場所をじっと見据え手居るとまた緑色の人影が出て
きてコレットを喜ばせる。

「ス、素敵。間違いないわ。アネルってペイント落としても素敵！」
崩れ落ちている石積みの上を憧れの人アネルが見え隠れしてコレッ
トに近づいている。

ラティーフは隠れる場所の無い岩場を渡り終え人影に気がつき
こんもり茂った樹木の中に飛び込んで隠れた。

「待って待って。行かないで！」

アネルに逢えた感動でコレットの声は上ずる。

見えなくなったアネルに不安になる。

「えっと、ラティーフ様！ラティーフ様！私使用人のコレットです。今日から仕事につきました！！」

と大声で叫んぶ。

そうだったアネルはコレットの存在を知らないのである。

慌ててアネルの本名を思い出して呼んで見る。

なんと素晴らしい！アネルと会話が出来るとは夢にも思わない。

がけ下に揺れる草むらにも遺跡の上のこんもり茂った樹木に人影は見えない。

と不意に後ろから、

「こんにちは。さっき見たことは黙っててくれる。あそこは通っちゃ行けない行って言われていて。でも早道なのよ」

振り返ればラティーフがたっている。コレットの呼び声はしっかりとラティーフには聞こえていた。

「ギャーアアアアアー」。キャー！キャアアアアー。

コレットは携帯電話を握り締め大口を開けて力の限り叫んだ。

「お願い！何があったの、どうかしたの？」

驚いた顔のラティーフが一步下がる。

見知らぬ可愛い女性は顔を引きつらせて叫んでいる。

「逃げないで。ごめんなさい。ずっと楽しみにしてて故障者リストに入れられて。事務所にも会場にも何度も電話して・・・元気だった？元気だった？」

大きな目が何一つ見逃さないと必死でラティーフを見つめている。

「あの・・・私をご存知なの」

いきなり選手時代のことを言われて戸惑う。レイステンの三年間は遠い過去の出来事になっている。

そこへコレットの悲鳴を聞きつけてダッドがやってきていた。

「コレット帰ってこないから探しに来て見れば。こんな所で何を騒いで居る」

「あ、監督官殿」

となれない敬礼。

目札をコレットに返してダッドはラティーフに苦言を一言。

「皇太子妃、上流の橋は通らぬように申し上げたはずですが」
今日こそは言い逃れはさせないとしっかりと注意をする。

「私があの上を歩いて所を見ていましたの？まさかね。今日はたまたま城を行き過ぎただけですわ」
と、にこやかにラティーフ。

下流の吊り橋までは二十キロも有るそんなところに行くのは一度で充分である。

ダッドの登場でかしまった振りをしながら携帯のシャッターをラティーフに向けたまま押し続けているコレット。変な人ね、とラティーフ。これまで選手だったことがばれてカメラを向けられたことが無いからコレットの行動は良くわからない。

「そうですか。それならばよろしいのですが」
実際はリーダーで何度も古橋を通っている証拠はあるのだがあえて
言わない。

「コレット。先に帰って門を開けておきなさい」

「はい！」と元気良く返事をして自転車に飛び乗り荷台に積んでき
た荷物をどの順番で渡そうかと心を躍らせている。

荷台の荷物はアネルにプレゼントしようと持ってきたジュエリーや
可愛いぬいぐるみ、洋服類。

今日会えるとわかっていたのならホテルに残したプレゼントも全部
持って来るべきだったと
のぼせた頭でコレットは考えている。

「イッヤッーホー！」

追憶

中庭からカヤンデル山脈の方角を見れば空に瞬く星と黒い地平線。春には山から冷たい風がグリスの宮殿にまで吹いている。

春が過ぎると海風が湿気を運んできて蒸し暑い夏がやってくる。

裏手の滑走路からサガモア王も若い頃イエフゲニーの屋敷にと九百キロの道のりを何度も往復した。

今夜飛び立ったのは王の一人の息子アルヴァー・ルーサー。

他国から連れてきた女性をイエフゲニーの屋敷に囲っている。

息子の女性への熱情を自分の時と比べて息子のほうが女性への愛情が薄いと感じるのは自分の息子への愛情が希薄なせいだということとはわかっている。

愛する女性ファレーネの命を奪った赤子がサガモアは憎いのである。

陣痛の痛みの合間に言葉を交わし、

ファレーネは後四人は産むわよと笑っていたのに

赤子の鳴き声はサガモア王の妻の命を奪ってしまった。

寝室にはファレーネの着用していた衣服がハンガーにかけられ厳しい政務の王を慰めてくれる。

妻の分身を愛そうと何度も努めたがファレーネの居ない空間を埋めることは赤子には出来ない。

愛しいファレーネとは山ほどの会話があり思い出はあるが、赤子は泣いて訴えるだけで訴える相手は誰でもいいのである。

サガモアは妻を失ったショックで赤子に対して愛情は抱けなかった。

身分の低い従者に赤子を託して国外に追いやり、出来れば国外で病死をすることを若いサガモアは願っている。他の一族の妬みも激しかった。

ファレーネを愛しているのに次の妃を娶れと脅かされてもいる。細々と赤子に金を送ったのは大きくなった我子がファレーネの代わりにサガモアに微笑んでくれることを期待したからでもある。

ファレーネの縁故関係で選んだルーサーの従者はしっかりとその任務を全うし

皇太子の候補としての資質を備えさせルーサーを試験会場まで連れてきてくれた。

万が一にも彼が皇太子になったらと寝室でファレーネの絵に問いかけた。

このときだけはなぜか心が暖まりファレーネとサガモアとルーサーと三人が家族の様な気分を味わった。

試験結果は文句なしの出来でわが子が皇太子に選ばれ会場の演壇でルーサーが王の横に並び間近でわが子を見たときはまったく見知らぬ他人としか思えなかった。

ファレーネと出会う前のサガモアは高飛車で高慢ちきの情に薄い冷たい男である。

優しいファレーネにすっかりとげを抜かれ美男美女のカップルだと噂にもなったほどだ。

ルーサーは母親の美しさを受け継ぎ美しさにも磨きがかかり試験会場では一際目立って誇らしかったが昔の自分のように感情の起伏が読めない冷たいだけの人間だと解ったのは王宮に戻ってからすぐだ。

こんな男が次の皇太子かとサガモアは落胆した。

息子とグリスの宮殿に一緒に住むことも、息子が愛している女性にも王は会いたくない。

ファレーネとの思い出の品々の一つにもルーサーには手を触れて欲しくないのである。

ガイネス国を残して他の国々は新しい未来を築きつつある。

他国は力関係を吟味し同盟を結び強力な権力体勢を作ろうと躍起になっている。

遠方から帰ってきた息子は赤の他人になりサガモアのサポートどころか嫌悪感の対象になっている。

各半島の事業内容の概要や顛末、人口の推移、恐喝まがいの軍の強行、押し迫った他国との協調交渉。

「井戸の中の蛙大海を知らず。いつまでこの状況が続くとも思えんが。何か打つ手を考えねばならんわい」

苦しい時も哀しい時も若くして逝ったファレーネを心の中で呼び出しては相談相手にしている。

彼女はいつも明るい方向へと導いてくれたが今度ばかりは口を閉じて笑っているばかり。

どの半島の出身者の妻も持たなかったからどの一族にも借りも遠慮も無い。

そのかわり親しくしなかった分だけ深く隔たりが出来たのも事実、好き勝手に動き出した半島の長老達がこれからどんな手を打つてくるのか、

「あやつらのこと、指をくわえてなど居ないだろう・・・」

中庭の木に住み着いた鳥が暴れている。こんな時間に鼠かへびにでも卵を盗られて騒いでいる。

光と影

モラド半島の最北端

沖を航行する船に狙いを定めているのは古い砲台。

崖下百メートルの先には航空母艦を納めるドックがある。

岩と大地に似せてカモフラージュされたドックは

衛星に写されても大丈夫なように作られている。

ドックでは修理を終えた船が出て行き盤木の列が大型空母の船底の分だけ並んでいる。

岩をくりぬいた指令所でドックを見下ろしてふんぞり返っているのは軍服姿のウルバーノ。

隣には手足のように動いているヤーゴ参謀。

「それでサガモア王は何を企んでいると思う？」

モラド半島に帰ってきてても一箇所に腰を落ち着けられない。

「ドラドのブラーズ、プラテアドのティエリー殿が環境委員会、休戦委員会、安全保障委員会にと出席されています。もちろん呼び出しを受けてわが国の意見を述べてきただけのようです。議事録を見ても二方の報告書を見てもなんら問題は見られないと思いますが」

集めた資料をシュレッダーにかける、
どれも持ち出し禁止の書類ばかりだ。

「なぜ今頃になってブラーズが出てきたか・・・だな？」
モラド半島からの眺めは最高だ。

特にこの岬は視界を隔てるものなど海鳥以外は見当たらない。

「ええ、王に言わせれば環境に関しては医者であるブラーズ殿は適任かと。ティエリー殿は経済学のエキスパート多国間条約の他にセデル国との二国間条約も結んできた。問題は休戦委員会、この二人のうちどちらが発言した意見だと思う」

仕事を終えた作業員達が入り江を回った造船所に移動してしまいこのドックには整備点検の人間しか残っていない。

「確認して見ますか？モイセイ將軍に馬拉ット国とマルセル国の戦況も知る必要がありますので」

「タラス国は休戦委員会に参加したのだな？」
「ならば武器の売買いは少なくなる」

「ええジノバ国と一緒に」
「ヤーゴの言っている二カ国は最近もたくさんの武器購入に意欲的だった国。」

「モイセイ將軍はこのことで恩着せがましく何か言ってくるかの？」
「モイセイは大国に組して白旗を挙げた国の首長の名前」

「次の取引でおまけをつけてやれば喜んで教えてくれると思います
が」

「経済制裁を受けないために休戦委員会に参加を促した中心人物である
どの国もひとまず休戦と見せかけて自国の装備を整える」

「値引きをしないのが信条なのだがな」
「値引きではありませんよ。おまけです」

ヤーゴ参謀の答えに満足してウルバーノは片方の口の端を上げてにんまり笑った。

ダッドは朝早くから苛苛しながら二階のへの階段を上っていた。

「まったく主人が主人のように振る舞わないから、召使もまともな仕事も出来ない。召使ぐら使いこなして欲しいものだ」
うっすらと階段の隅には三角の誇りが溜まっている。

コレットの掃除の仕方が悪いと
主であるラティーフに文句を言っているが実際の上司は文句を言っているダッドである。

朝の六時を過ぎているこの時間。

ダッドは朝食の準備にとりかかるが昨夜から奇妙な声に悩まされとうとう堪忍袋の緒が切れてラティーフの部屋に注意を促しに行くところだ。

「ラティーフ様！奇妙な物音を出すのは止めて頂きたい」

一晩、二晩寝ないで盗聴したこともあるがその場合、
生活の物音や話し声で昨夜から今朝にかけての奇妙な音とはまったく違っている。

「一体何をしていらっしゃる！」
イライラの頂点で言い募る文句ばかりが頭には浮かんでいる。

「ダッド？珍しい。どうかしたの？」

と寝室からラティーフが顔を覗かせる。その胸には小さな赤ちゃんを抱えている。

「一晩中、変な音がしていました。・・・それは何処から・・・拾ってこられたのですか？」

シーツにマルマルくるまれていたのは一見人形のような物体。

「この子の泣き声が聞こえたのね、ずっとバスルームに居たから響いたのかしら」

バスタブにお湯を張って狭い洗面所を暖めていた。

「もしかしてラティーフ様が・・・」

拾ってきたのではないのなら盗んできた・・・とダッドは思った。

「そうよ。昨夜生んだの。男の子よ可愛いわね。ずっと見てても飽きないの」

ラティーフも子供がお腹で成長しているなどとは気がつかないでいた、

昨日の夕方から断続的にやってくる痛みにもしやと思っていたら夜中の一時過ぎに痛みは頂点に達してバスルームで出産している。

「妊娠してらっしゃたのですか？」

間の抜けた質問である。ベビーは母親の胸で抱かれている。

「そうみたい」

恥ずかしそうにラティーフは微笑む。ガイネスに来て一番驚いて嬉しい出来事である。

寝不足の怒りを何処にぶつけていいかわからずダッドは一步下がっ

た。

「はぁー・・・は・・・はぁ？失礼致します・・・」
きびすを返すとダッドはドアも閉めずに飛び出していった。

「なんなんだあの女は？犬や猫じゃないんだぞ！」
と廊下に出るなり違う怒りが吹き出る。

実際、犬や猫をダッドは想像していた。

夜中に回線を切り替えて聴こえる鳴き声は、拾ってきた犬、もしくは猫の鳴き声。

厳しく注意をするべきだと勇んで上がってきていたのである。

脱兎のごとく通信室の小部屋に入り込むと本部を呼び出した。

「医者を頼む！産院の経験を積んだ医者だ。状況？そんなものは見てはいない！！」

見て居ないから慌てている。

皇太子妃が住み始めて騒ぎを起すのはもっぱら召使のコレットである。

「子供が生まれたのだ。医者だ。必要なのは医者なんだぞ。さっさと手配しろ！」

皇太子妃は谷越えをしては機織に出かける。変化の無い日々が続いて来ている。

本部との連絡を切ると少し気持ちの余裕が出たダッドは部下のイレヌを呼び出した。

「悪いな朝から。頼みたいことがある。ベビー用品を一式コレットに持たせてくれ。何？もう出た？呼び戻せ大至急だ！」

ダッドの大声をホテルの事務室で聞いていたイレエヌは緊急ブザーを一定の兵士に向けて押した。
連絡を受け取ったと赤から青にランプが変わる。

「何が起きたんだろう？」

とイレエヌは首を傾げるがベビー用品が必要になる女性がああ城に居ると思えない。

「ははーん、少佐ったら、谷越えして遊んでいたのね。ばっかな男！」

イレエヌに隠れて遊んでいた女性に子供が出来たと押し付けられダッドが慌てふためいて走り回る姿を想像している。

幸せな二人

月は新月、空には満天の星の海。

夜半、書き散らかした紙が散らばった部屋を足音もなく通り過ぎラティーフのベッドの脇に腰をかけて

愛しい人を起さないように寝顔を覗き込む。

ルーサーが今宵行くと連絡していたのにラティーフは待ちきれずに熟睡している。

毎日二人の子供を抱えて谷渡りをしては機織に出かける。

繊維工場での子供の面倒はコレットが見てくれラティーフの機織に支障は無い。

バルカ・シシク城の復元チームの一員として城の床に敷く織物、タペストリーを一日僅かに10センチずつというスピードで織り上げている。

城に帰っては土砂崩れで流された村の記憶を思い出し

スケッチブックや個人の記録として日記にしたためている。

「嫌がるだろうな・・・」ぽつりとつぶやく。

日々一箇所に留まっていけないルーサーと違い、ラティーフは腰をすえて子育てと機織を一生懸命にやっている。

宮殿での暮らしは少しづつ話してはいるものの妃として知っておくべき事はラティーフは興味が無い

嫉妬深いルーサーはラティーフを誰にも見せたくないし会わせたくも無い。

早くグリスの迷路のような宮殿奥深くに住まわせて、毎日愛しい人の顔を見ていたいのである。

「あら・・・やだ起こしくださればよかったのに」

ベッドの真ん中で丸まって寝ていた。

今宵はルーサーが来るというので

二人の子供はコレットがホテルに連れて帰っている。

半分開いた目がルーサーを見つけて微笑む。

「今ついたばかりなんだ」

ネクタイを外し上着をスツールの上に置いてラティーフの隣に。

ラティーフはベッドを半分開けてルーサーを待った。

枕を裏返しにしてよだれのしみがでないか素早く目を走らせる、あった・・・。

裏返すのを間違えたともう一度元に戻したいがルーサーがひじを突いて見えなくなる。

（隠れちゃった・・・いいか・・・）

ルーサーから立ち寄ると連絡が来ると気分が浮き浮きしているラティーフがいる。

短い時間しか会えないのに会っている時間はとても楽しく感じる。

ルーサーと別れて三日間は心に穴が開いて寂しいがすぐに織物に夢中になって忘れる・・・を何度も繰り返して二年半が過ぎている。

枕もとの灯りに端正な美しい横顔が浮かび上がる。

「棟梁に頼まれた仕事は進んでる？」ラティーフの頭の下に手をくぐらせて尋ねる。

ルーサーとの会話はいつも至近距離。

ラティーフもルーサーの背中に両手を回して綺麗な顔を見上げる。

「ええ、一階部分は全部出来たわ。二階とか吹き抜けの部分はちょっとややこしいみたい」

「君は建築家ではないから無理をして関わらないほうがいいよ、それに相手の迷惑にならないかい」

「私が押しかけて居るみたいね。違うのよ」
押しかけているのは繊維工場。

どうにかして職工として働きたいけれどレイステンから来たよそ者なので

協会に入れてもらえないのである。

「どうかしたの？」

いつもならばちゃんと答えが返ってくるのに
ルーサーは黙ってラティーフの顔を見つめている。

「お願いがある」

「夏までに君の好きなドレスを作ってくれ僕が見立ててもいい。僕の好みで選ばせてくれるならデザイナーに何枚か描かせようその中から選んでももらえると嬉しい」

「ドレス？そんなかしこまった格好で何処に出ると言うの、私にはつなぎで充分よ」

「建国三千年祭という国を挙げての大きな祭りがある」

「祭り？」

「僕達も隅っこで三千年を祝おうじゃないか」

「祭りなの・・・」

祭りは大人社会への第一歩。

村人が全員集まりしきたり通りに品物集め社を飾りつけ神様と一緒に食事を取る。

「そうだ、王宮内でガイネスの神が宿っているという宝石のお披露目と王の拝礼、司教の説教を聞いて。最後は日の出共に我々はバル

コニーに出て国民と共に祝うその後軽い会食。TV放映もあってガイネス中の国民に見られるだろうけど。大丈夫さ、僕達はバルコニーの端っことでTV画面には映らない。国民からも遠くて誰が誰やら解らない」

「そんな大事な祭りに私が参加しても変に思わない？」

祭りといっても隣の国の祭りだと自分に言い聞かせるが片隅でもよいから参加出来るという事は人間として大人として認められるとの思いがある。

「祭りだから皆縁故者を連れてきて、バルコニーは人で満杯さ」
形だけでもラティーフを父親に合わせたいルーサーは
王とギクシャクした関係なのはさておいて
ラティーフと子供達を王に引き合わせる日を考えていた。

「色は何が好き？君はここを出たがらないから僕がデザイナーに伝えよう」

好奇の目からはラティーフは逃れられないだろうとルーサーは思う

「祭りの式典に私も入れてもらえるの？」

村と同じ規模ではない・・・と頭で考えても
祭りに参加できると考えるだけで心の底がむずむずしてきた。

「そうだよ。そのお腹だと辛いかもしれないな。何かあったときのために部屋は確保しておくよ」

「そうね。そうしてもらえると嬉しいわ」

見る見るうちにルーサーの目の前でラティーフの両目から涙が溢れて流れ落ちている。

「どうしたのなぜ泣いてるの」

驚いて尋ねる。会話の中身は三千年祭の式典で着用する服装。

優しく背中をなでる手がラティーフの涙を拭うとラティーフは気持ち
ちが落ち着く。

選手生活を辞めた時もルーサーと会話することで気持ちが軽くなっ
た。

「ドレスは私が考えたデザインでいいかしら。もちろんあなたの意
見を取り入れるから。こんな時に変だ思うでしょけど婚礼衣装を着
てみたいと思っているの。村では祝い事には必ず着るの」

子供の頃から憧れていた。

村の女性なら誰もが一着は持っている最高のおしゃれ着は深緑の山
に映える美しいドレス。

「デザイン画を描いてくれよ。僕も君の描いたドレスに合わせて式
服を選ぶから」

ラティーフのおでこに頬にキスして言葉に出来ない約束をルーサー
は繰り返した。

王の治世は後二十年は続きそうだと謁見者が帰り際に高らかに話し
ていた。

二十年・・・という年月の長さがラティーフにとってどんな時間にな
るのか考えただけでも恐ろしい。

「ルーサー。ありがとう・・・」
やっと一人前になった気がする。

もう三十というのに祭りを経験していないラティーフの負い目でも
ある。

幾度か村のしきたりや慣習をルーサーに話したけれど彼が覚えてい
たことに感謝した。

「式典が終われば、私はここに帰って修復の仕事ができるのよね？」
二番目に心配なことである。

土砂崩れで村はなくなっただけでそれを思い起こす作業をさせてくれた仕事は続けたい。

「いつまでたってもお妃としての振る舞いが身につかないな。ダツドに命令すれば全部揃えてくれる。いつてあるだろう私服もつなぎ以外に揃えないさい。作業服しか持っていない妃なんて・・・」
間近に有るルーサーの唇に指先を当てて言葉を遮断する。

嫌な顔もせず淡々と説教を言うルーサーは嫌いではないが何度も注意をされると聞きたくない。

ルーサーはこのラティフの行動は好きだった。

優しく笑うルーサーに、

「なりたくなってたのではないわ。私は向いて無いと思うわ。ダツドも妃教育なんてやりたくもないのよ。でもガイネス史は面白いわ変わった国家の成り立ちだけだね。勤勉実直、質実剛健。助け合いの精神が溢れている国なんて世界中探してもここだけよ。素晴らしいわ」

村の人々と一緒に住んでいるようだわ・・・とちよつと感傷的になる。

「文化的には遅れているけどね」

「そんなの・・・住んでいる人が幸せと感じているならどうでもいいことよ。私ここが好きよ。ここでは私を必要に思ってくれる人がいるから。ずっと居たいわ」

両手でルーサーを引き寄せて一緒に働いてくれる人を思っただけだ。

「嬉しいよ・・・」

ラティフの感謝の表現を自分だけに向けられたのだと感動している。

会話

丸い天井まで高さ八メートル、壁には趣味の古刀や甲冑、奥の壁には磨き抜かれた大小さまざまなこん棒、

高い窓には武器の劣化を防ぐため幾重にも分厚い布で覆われている。サガモア王が私的な客と応対する応接室の一つにルーサーは居る。

「このたびは私のために時間をとって下さりありがとうございます。説明を・・する必要ありませんがお手元の資料は私の妃の衣装です。問題点を指摘してくださるとまだ考慮の余地があります」

心地よい風が入るように四つの窓が開いてそこはかと風がカーテンを揺らしている。

並んだ椅子を四つ間において王とルーサーは座っている。

短い挨拶が終わると壁際の侍従がルーサーが持参した封筒を王に差し出す。

王がうなずくと侍従が中身を出しテーブルの前に広げる。

手元に書類を引き寄せないのは老眼が進んでいるせいである。

王は書類を眺めてはこめかみに指を置く。そろそろメガネが必要な時期かもしれない。

「これを描いたのはだいぶ前のようだ」

皇太子が王宮の書庫に入ったのはこの日づけよりも一ヶ月は後の事。忙しい合間をぬってルーサーは前々から気になっていたことを書庫の中で見つけている。

期待はずれの皇太子、身内の一族の人間にすら期待も何もされてはいないのならばこれ位しても許されるとルーサーは思う。

そうでなければ妻はガイネス国に認められない。

ルーサーの顔にどこか嘘がないか長い睫毛の間からサガモアはじつと見つめた。

息子とはいえ何を企んでいるのか読めない面構えがそこにはある。

そのルーサーの顔がふっと弛む。

「ええ、彼女はその日以来ドレス作りに邁進しています」

ラティーフのことを父親の前で語れることは嬉しい。

日頃、王とルーサーの間では個人的なことは一切話題に上らない。長老達との意見調整に遁走し合間に世界の情勢を分析し国の指針と照らし合わせて他国の危険な人事異動や騒動をピックアップし細かに書類に書き残し王に渡して、
国に馴染もうと寸暇を惜しんで働きグリスの宮殿では一度もラティーフのことに思いを寄せることも出来ないくらいに緊張した毎日を送っている。

それが堂々と謁見の広間ではあるが語れることが嬉しく
全身から喜びが出てその場にいる侍従にまで伝わっていても
臆することなく王の言葉をルーサーは待っている。

思慮深い目がルーサーに向けられ片手が上がり払うように動く。
侍従が書類を封筒にしまいこむと乗り出してみていた身体を椅子の背もたれに乘せ掛けて腕組みをする。

「バルコニーで立つ位置だがTV放送も考慮に入れて長老達より末席になるが いいかの？」

「私どもは若輩者です。一緒にバルコニーに立てるだけでも恐れ多いのに。控え室に近いことはよろしいですね。すぐに引き下がれま

すからね」

孫の話題でどんな反応をするかルーサーは父親を観察した。

サガモアは何か違うことを考えているようで淡々としている。

「そうか。何か必要なものがあつたら云ってくれ。それと・・・式典の日に行きなり会うのも・・・どうかな。日時を任せてくれるなら会食の用意をしよう」

侍従にスケジュールを尋ねる。

「父上に妻を紹介する機会を作ってくださいるのは嬉しい事です。会食となると時間をとって会話を楽しみたいと私は思いますが、妻はかしこまった席に着いた経験は少なく乳飲み子を抱えていますし身重でもあるので、出来れば時間は短くして欲しいのですが」
父親の他人行儀な態度にルーサーも諦めて首長相手の態度に切り替える。

「そのほうの云うとおり短く時間を取ろう」王は息子の壁の向こうの自分の寝室の肖像画を思い浮かべて遠い目をした。

謁見の間を退出し

最後に苦悩の表情を浮かべた王にルーサーは嫌悪感を抱いた。

皇太子に選ばれてから色々な所で王と顔を合わせるが一度として優しい笑顔を向けられたことはない。

いつも王はルーサーを見るたび何か心の中で込みあげて来る憎しみと戦っているように言葉も一拍置いて出てくる。

それほどルーサーが嫌いなら生まれた時点でどこかの家に養子に出してしまえば縁は切れたものを・・・とルーサーは思う。

ただ養子縁組をした人間がきちんとルーサーを育てるとは限らない。

いわく付きの赤子だ。養い親の生活状況でルーサーの人生は変わる。

黒塗りの専用車の後部座席に乗り込むとさっきまでの緊張が身体から抜けていく。

「面と向かって会わないようにすればよいものを」
思わず王に対する不満が口に出る。

皇太子付きの運転手になったクリスが声をかける。
ルーサーの独り言はクリスには聞こえなかった。

「殿下。初めてですね二人だけの会見は如何でした。大広間の絵画じゃ颯爽としていい感じでしたが」
二十数年ぶりの親子の対話である。

「ン、大広間の絵は若かりし頃の絵だろう。今はもっと老けている」
王の眉間に皺のよった無表情の冷たい顔は二百年は生きている老人のようだ。

「そうでしたかね。あの絵は去年の掲げられたものではなかったでしょうか」

大広間の絵画を待ち時間にこっそり入れてもらって見学している。
入れてくれた侍従の説明と違っているのでどっちが正しいのかクリスには解らない。
バックミラーでルーサーの顔色を伺う涼やかな表情はいつもと変わらない。

「親子の感動的な再会を想像しても無駄だぞ。王は私の血縁ではあるが家族ではない」
ルーサーの言葉を聞いてもっと人間味の有る大人に育てるべきだった

たとクリスは思う。

ガイネスの皇太子には喜怒哀楽の少ないルーサーでよかったのかとまたぞろ後悔がよぎる。

フォークステットはプラテアド港湾局長に納まり五十歳超えない若い局長が誕生した。

ルーサーの侍従の全員がフォークステットの配下に組み入れられた。クリスも同様に入隊するつもりで居たが二十数年苦楽を共にしてきた仲間がいつせいにルーサーから離れるのを危惧してフォークステットに五年だけとルーサーのそばで仕事をさせて欲しいと頼み込んでいる。

テットは王様に頼み込み異例の配置でルーサーのお抱え運転手の職に就いている。

運転手と言ってもガイネスでの車の普及率は低い。

特殊な人間だけが電気自動車を使用し一般市民は自転車での移動手段がほとんどである。

セデル国では車道では車が走るが

ガイネスではたくさんの自家発電地を付けた自転車が車道を走っている。

たまにクリスが車道に車を乗り入れても文句が出ないのは自転車道は緊急時には大型輸送トラックが人と武器を積みこみ戦闘配置にくくために使用されるから道路幅は広く車が一台走ってもかなりの余裕がある。

「本当にここは進んでいるのか、遅れているのかわからない場所です
すね」

比べているのは隣の国のレイステン市を筆頭に看板や電飾のぎやかな街。

ゆっくり徐行しながら走っていると自転車に乗った子供と婦人が右手を肩まで水平に上げて車を追い抜いた。
年寄りから子供まで自転車のルールをきちんと守ってきびきび動いているのが微笑ましい。

「遅れているんだ」

バックミラーとサイドミラーで過ぎ去った景色を見て居たルーサーは、五階建ての建物の側壁に添って人の列が長く続いているのを目を止めた。

「携帯電話が無いですもんね。一家に一台電話も無い。あ、電線が無い。それで空にしまりが無い？」

フロントガラスから左右とまっすぐ道向こうの空を見上げる。

緑の街路樹の続く街並みには広がる青空が似合っている。

「電力は限られた工場にしか使われないんだ。電話設備も装荷線輪と古いがな」

「装荷線輪・・・ですか。アンテナ立ててくれませんかね。TVも一局。娯楽と言うのは運動競技だけそれも名目でしょう。有事のための軍事訓練で国民納得づく邁進している、良いちゃん良いし。やりすぎて感じもあるよな。幼児の頃から走ったり飛んだりしてるものなあ」

変わっていると言いながらクリスもそのカリキュラムで古武道を選び卓越した武道家の一人になった。

ガイネスが何を目指して何処へ行き着くのかルーサーには解らない。今は五十年進歩で国民の生活水準を引き上げる計画が進行している途中だ。

他国並みの生活水準を目指しているのは、世界の情報をリアルタイムで国民が知り始めたから。

そんなことが必要なのかはルーサーの知ったことではない。

三千年祭 1

그리스王宮には

朝早くから奉献の儀式のために自家用機を飛ばした客と

離宮で一夜を明かした客が集まり暗い道を王宮の奥の神殿にと歩いていた。

長い通路は飾り窓に等間隔に配置されたガス灯がぼんやりと光る。

ゆっくりと歩む人々は頭からすっぽりと覆ったマントの裾を蹴って、口を開けた大扉の中に入る。

聖堂は無骨な外見とは違い美しいレリーフが壁に浮かび参列者と同じように祭壇に向かって頭を垂れている。

正面の高い祭壇は花を模した宝石を隙間無く配置し主体となる御神体の姿は見えない。

最後の一人が入ると内側にいた侍従が扉を閉め

持った灯りを左右の蜀台に灯し壁の暗がりになり太いロープを引っ張り上げると、

祭壇の一部が稼働し左右に開く。

その奥には幾重もの布が垂れ下がり扉の締まった空気の振動でゆれている。

衣擦れの音を立てて、前に出てきたのはサガモア王である。

王は左手に持った盃から部屋を取り囲む七つの彫像に聖水を振りまき祭壇の傍らに盃を置いて膝を折りじりじりと祭壇へ進み薄布やぼつてりと厚い布を手で払い祭壇奥の小部屋に入る。

時刻は太陽がカヤンデル山脈の東北東から上り始めている。

奥の部屋に取り付けられた鏡は太陽の光を御神体に集め祭壇の真上から部屋全体に光りが溢れる。

充満した光は祭壇に漏れ飾られていた宝石の花々を美しく輝かせた。

光りが大聖堂を満たすと光と同じに王の声も静かに壁から天井から響き始める

カヤンデルの恩恵に報い恥を雪ぎ、

萬乗の疆國を夷らげて、八百歳の蓄積を収め、

群臣を棄つるの日に至るに及び、

余教未だ衰へず、政を執り事に任ずるの臣、

法令を修め、庶彙を慎み、施いて萌隸に及ぶが若きは、

皆以て後世に教ふべし。

夫れ身を免れ功を立てて以て先王の迹を明らかにするは、臣の上計なり。

毀辱の誹謗に離りて、先王の名を墮るは、

臣の大いに恐るる所なり。

不測の罪に臨み、幸ひを以て利と爲すは、

義の敢て出でざる所なり。

臣聞く、古の君子は、交はり絶ゆるも惡讟を出ださず。

忠臣は國を去るも、其の名を潔くせずと。

臣は不佞なりと雖も、数々教へを君子に奉ず。

侍御者の左右の説を親しみ疎遠の行ひを察せざらんことを恐れ、

故に敢て書を献じ以て聞す。

唯だ君王の意を留められんことを。

最後の言葉が王の口から漏れると天井を満たして金色の光りは消え
淡い温かみある黄色のに変わり聖堂の中に差し込んできた。

王が祭壇裏から出て聖水の盃を持ち上げて指先につけてひれ伏した
人々にかけると一人ずつ奥の部屋に膝をつけて入る。

最後のラティーフがルーサのまねをして出て横に戻ると神殿での儀
式は終わった。

儀式での役目を終えた王は司祭から香炉の煙を頭、両肩と降りかけ
られて神殿の大扉は静かに閉められた。

「大きな水晶だろう。僕は事前に見ていたから驚かないつもりだっ
たけど。今日のは一段と素晴らしかった、水晶に一筋の光が入って
部屋の鏡で増幅されるように計算されて居るんだね。感動したよ」
そつと身体を寄せて話しかける。

一日の始まりをラティーフと迎えられルーサーは気分がいい。

周囲に誰もいなければ手を繋いで歩きたい。

ガイネスに戻ってから初めてのデートがこの式典である。

「ええとても綺麗に磨かれて美しかったわ」

マントの中に着込んだドレスが見えないように打ち合わせを深く止
める。

王の言葉の意味は解らなかったけれど潔い気持ちさがこめられている
のは伝わった。

「水晶はガイネスでは珍しいものではないよ。地核変動や火山活動
で出来た結晶だからね。どの国でも水晶は多く産出されている」
ラティーフの緊張を和ませようと気を紛らわせるため会話を続ける。

「ご神体が納まったときは三千年前からだという学者もいれば千年
前だという学者もいてね。はっきりした年代はわかっていないよ。
神話の時代にはあったって言うし、そうなると、ほらね。わからな

いだろう」

緊張し思い詰めた顔のラティーフを覗き込む
些細な変化を見極めようと細部まで見つめる。

迎えの飛行機の中でも到着しても緊張と孤独感は増していて、やっ
とルーサーの手のぬくもりと正面から見つめられることでこれが現
実に進行している出来事だとわかる。

「荘厳な神殿で圧倒されちゃった」

神殿奥で見た水晶が今は無い村を思い出させて気が滅入っている。
子供の頃大人の後つけて社の御神体を見た。

岩山に変わった場所にさっき見た水晶の少し小さなもの見たことが
あるといったらルーサーは信じるだろうか、

「気分は？少し顔色が悪いね」

と本気でルーサーはラティーフを心配している。

「大丈夫よ。緊張しちゃって眠れなかったの」

小さな記憶はラティーフの心いっぱいに広げられている。

三千年祭 2

中庭に足を踏み入れれば木の葉に降り注ぐ朝露を感慨深げに見上げて参列者たちは歩いている。

祭りという気楽さからそこいらの木陰や柱の影で会話に花を咲かせる人の集まりができる。

立ち止まった人の目を気にしながらルーサーとラティーフはゆっくりした足取りでコレットと子供達の待つ控え室に歩いていた。

二人の姿が屋敷の中に消えると、

「跡継ぎが血を分けた子となって安心したであろう」

顔にかかるフードを外すと少なくなった銀色の髪の毛がはらはらと額にかかり、

髪の色に似合う日に焼けた顔が現われる。

「そう思うだろうと期待していたがな。残念だが同じ屋根の下で長く住まねば情は湧かぬものらしい。顔をつき合わせる機会が多いが息子だという感覚は無いわい」

眉間に寄せた皺が本音を語る。

「それも解らぬでは無い。わしとてあちらこちらと子供は大勢おるが、どれも皆一緒にみえての。優劣をつけてから名前を覚えるという嫌な図式になってしもうた」

そう笑いながら子孫が増えたことに満足している。

「仕方あるまいて。優秀な人材はいくらでも欲しい」

長年の友人の自慢話を苦笑して聞いたたびに妻が生きていたならばとの思いがサガモアの頭をよぎる。

「皇太子はなかなかの美男子だが親に似て硬派じゃな。一本気というか頑固というか。最初彼が選ばれた時七つの部族の何処に最初の産声上がるかと期待しておったのに、レイステンから連れてきた恋女房との間にしか子はおらぬのう」

内緒話をする風でもサガモアに気を使うでもなく通りの良い声が談笑している人々にも聞こえている。

「言うな。そんなしょうもないところだけ似てもらってもものう」
固執する性格だけ似ていると言われている。

「そのうちわしとこの娘と娶わせてくれ。女子供がうるさくて適わぬ。あれほどの美形なら一人くらい孫の中に居ても目の保養になるだろうて」

サガモアに視線が集まってきたのをいいことに本気とも冗談とも取れないことを言う。

王は未だに引き受けての無い後見人は現われないとはルーサーが可哀相になる。

長老達を臨機応変に手玉にとってしまえばよいものをと自分のことは棚上げ手心配をしている。

「さすれば恋女房の後見人になってくれるかのう」
頑固な皇太子はどの一族との間にも愛人を持つ様子はない。

サガモアの受け答えには困らないさりと本音を突かれると笑って

誤魔化す余裕はある。

「それはそれ。これはこれじゃな」

親であるサガモアもルーサーの母親を忘れられずに独身を通してきただけに、

ルーサーの女性関係には口出しはしない。

会見であつたラティーフの印象は悪くない

一瞬亡き妻を見た気がしたが良く見れば似通つた場所など何も無い。特別美人でもないが彼女が居るだけで

緩やかな時間の流れを感じさせる素直で感じの良い女性である。

「悪い女ではないがのう」

侍従たちが動き始めた、衣服を調べバルコニーに立つ時間が迫っている。

急場しのぎに作った木組みの上には三人の男がTVカメラを設置して見下ろしている。

宮殿から正面に伸びた庭とバルコニーのみに固定した古いカメラは調整が難しい。

木組みの上には滑車を取り付けられ板をロープで吊っただけの昇降機に乗ったカメラマンはバルコニーを上からと地上から見上げたの角度を動きのある映像で撮ろうとしているがカメラの重さで板がゆらゆら動いて足元が固定できない。

「リポーター！画面から消えたぞ何処へいったんだあいつは。三カメその位置はダメだバルコニーが全部入らない今日の主役はな皇太子だ。王様もいい男だが後添えを貰ってないからな、性格に問題があるのかもしれない、長老達の後継者もぱっとしないし宮殿の中ではぴか一皇太子が美男子だと言われている。奥方もいて今回が初お目見えだ。若い皇太子の家族は注目される。俺の一存でカメラの設置場所を変える。言い逃れはなんとでも有る。頼むぞ良いアングルを狙ってくれよ」

ヘッドセット片手にマイクに向かって映っていないリポーターに真剣な目をして話しかける。

「ねえねえ。いいかしら、通行人の話を二三撮ってきたんだけど。みんなの注目は王様の振る舞い酒だけよ。広場の護衛の周りにはスッゴイ人ばかりよ」

耳元の声に目を閉じて頭を振る。

「ロック、カメラが回ったらその女言葉やめろよ。周りにはちゃんとインタビュールにに応じてくれる奴はいるか」

前もって式進行の台本はあるがそれをそのまま映すのは面白くない。滅多にないリアルタイムでの放送である。

「うん居るわよ。ちょっとこの資料何よセイジ！細かく説明の載ったのなの？皇太子の奥さんの衣装の説明がわかる資料を持ってこさせてよ。ふざけてるわよ」

ロックの女ことばに肩を落とす。

こいつはいつか失敗するとセイジは思う。

「ロック、ふざけてない。それは宮殿から出たものだ」

買ったばかりの副調整車の中で何度も各カメラのアングル調整に余念が無い。

「これを大寫しになった時に云うの？三千年祭だから？」
と、不服そうな声。

「そう。言葉を選べよ。王から紹介の言葉が始まったら三秒後に奥方の顔のどアップに切り替える。奥方が挨拶を終えたら足元から顔までゆっくりと回してカメラを引くから、そこから説明を始めてくれ。画面下に用意したビデオを流すから。ゆっくりと語れよ。そこからもう一度全員の胸から上を王様から回して最後に奥方で閉める。OK？」

昨日の会議で説明したはずなのに外に出た途端ロックは細かいことは忘れる。

「了解。良くこんなので王様許したわね。私一緒の場所に立ちたく

ないわ」

渡された資料を見て本音が出る。

「おいおい。思っても口には出すな。最高のショーなんだ」

スイッチャーの切り替える画面をチェックして式典の流れを何度も細かく構成しなおす。見せ場は半島の有力者が全員並ぶ時の表情である。

半島ごとに自治権を求めて居る。

何処が一番先に古い結束を破るか？その兆候を今日の式典で読み取ることが出来るか。

長老達の立つ位置でその力関係を読みとれるセイジは思っている。

「聞いて。ロック。ガイネスの歴史を紐解けば、七千年の昔から人の営みがカヤンデルの麓から広がり近代の私たちにまでその長い歴史の中の英雄と云えばこの人グエナエル、の名前が受け継がれています。勇猛果敢なカヤンデル族の勇者グエナエル。大人から子供まで皆が知っている・・・だめだわ頭回らないわ。なんか言ってよセイジ」

「分かった。ロック。何とか納まるように俺が考える。お前はその女言葉何とかしろ、絶対に出すなよ。顔が映るんだからな」

「うん、もうちゃんとやれるわよ。気合い入ってんだから。ウフン」
ロックの隣で町の広場を撮っているカメラマンが空を見上げて首を振る。ロックは台本無しではしゃべれない。

「よし。もう一度やってみよう」

セイジはマイクに向かって叫ぶ。

王宮の前の広場から有事には滑走路にもなる横幅45メートルの道路が真っ直ぐに北の円形広場に延びている。

広場の周囲には五階建ての建物、屋上には画期的なデジタルサイネージが取り付けられTV局から選びぬかれた映像が映し出される。道路に溢れ出した人垣は左右の建物の壁面に設置されたて

五メートル横七メートルのデジタルサイネージに映る映像を見ようと場所取りが地上では行なわれている。

器用な人間は家の柱から長いロープを張ってハンモックを外に出して揺られながら見ようと工夫している。

王宮では裏庭から集まった各部族の長老達が後継者を携え瀟洒なドアに消えていく、裏庭にもTV局のカメラが設置されて逐一お客の登場に説明文を加えて紹介している。

「裏庭のリポートは充分だ」
と、満足げな表情。

「屋外の画像状態はどうだ。OK」
さあ始まるぞとセイジは両手を揉んだ。

サガモアは幅十センチ長さ三メートルの宝石のついた帯を首からかけてもらった。

支度が整うと視線は決まって妻の自画像にむかう。

緑色の朝日が窓から壁の絵を浮かび上がらせ何度も味わった寂しさに胸がうずく。

一緒に祝いたかったと心の中で妻につぶやく。

広い応接間にはたくさんの椅子とテーブルが並び

きらびやかに着飾った男女がこの日のために王が設置したTVを物珍しげに見ている。

「なんだなんだ、この間のカメラマンはこれを撮っておったのか。これはまた古い式の写真を使っておるな」

自分の姿が画面に現われると嬉しいような気恥ずかしいような不思議な気分である。

「きっと現在のあなたと後で見比べられるのよ」

痩せた女性は胸の詰まったドレスの上に同じ色で宝石をちりばめて上半身を埋め尽くしている。

隣の夫は始めてみるそのドレスをいくらで買ったのかを尋ねるが妻は笑っているだけである。

式典にはずっと同じ服で通している男は先に放送された画像を見て腐った。

「バルコニー立つ必要が無いじゃないか」

若々しい頃の画像がTVに映り服装は同じだが老いぼれた顔で出て行きたくない。

「TVの復旧率はすごいわね。主要な場所はTVと同時にパソコンも使えるようになったのでしよう？」

「電力不足で一定の時間しか使用できないがね」

「あらそうなの。もうそろそろ水力発電だけじゃ駄目ってことね。」

モラドを見習って火力発電所も検討すればいいのにね」

若い妻は明るい声で答える顔もスタイルも若さではちきれんばかりで今を生きている実感は誰よりある。

「モラドは生活環境が我々とは違う。別次元だろう」
隣の老人が同感だと笑う。

「それは着ているものを見れば解るわ」

若い女性の視線の先にウルバーノ

老人は奥のウルバーノの地味な色合いの服装と見比べて

仕立て直した服が思いのほか良く出来ていて新調した気分で背筋が伸びる。

「大公殿の服装の趣味は、奥方の意向を汲んでおられるのだろうね」
と言った中年の男の後ろのドアが音もなく開くと
自然に目がドアから入ってきた人物に注目する。

「ほう」

「え？おう！」

「まあ素敵」

聖堂では皆深緑色のマントですっぽりと覆われていたため誰が誰か判別しにくい状況だった。

「離宮であった時よりも又一段といい男になっておる」
とバラディール。

直接顔を合わせたのは議会だが代表者以外は黒子のように顔にベールをかけて
しげしげと見られず細部まで見たのは離宮の監視カメラなのだから
しょうがない。

バラディールの言葉を聞いていたのが夫のウルバーノ。
さりげなく周囲の反応を見る。バラディールが離宮に居たという矛盾に気がついた人間はいないようである。

モーニング姿のルーサーが現われると感嘆の声が口々に漏れ、
軽やかに通り過ぎるとその瞬間だけ大きな控えの間は華やかな空気に変化した。

「人間の出来が違うの・」
ルーサーが去っても花が咲きほこった様な良い香りと華やかさは漂っている。

足早に応接間を素通りして控え室にルーサーが飛び込むと
うなだれたラティーフが長椅子で突っ伏している。

「用意は出来たかい？」

そっと持ってきたショールをラティーフの肩にかける。

寝不足で赤くなった目がしょぼしょぼとルーサーを見る。

「ええ、でも・・・」

「大丈夫ですわ。そのドレスはイケてます。ねっ」

四つんばいになった幼児の腰に紐をくくりつけて腰とつながぎ、顔をおもちゃ代わりに引っ張る赤子を抱えてコレットはにこやかにラティーフを励まし続ける。

絶対にラティーフにはバルコニーに立って欲しい。

夫に内緒で録画機器をスタンバイさせてきている。

夫の情報だと末席の皇太子はアイドル並みに人気がありその余波で皇太子妃にも注目が集まっている。

紐をつけた子供がラティーフの手を離れて壁際の彫像へと興味を示し駆け出すとコレットも引っ張られて壁際まで下がる。

「やめとけばよかったわ。ドレスのデザインなんてやったことが無かったのに。私だけごちゃごちゃと恥ずかしい・・・」
応接間に集まった人々を見てすっかり気後れしている。

「ラティーフ。TVを見ても解るように僕等はほんの点にしか見えないよ。壁紙と同じさ。僕は灰色で君は赤だ、良く似合っているよ。その髪飾りは覚えているよ。セデル国でのお祝いの品物だ」

蘇芳で染めた赤いロングスカート、祝い貰った大事な羽根飾りを頭に隙間なく飾り

胸にはラティーフが織った帯が巻きつけられて居る。

帯模様は緑や茶色が主体で複雑な模様が織り込まれてラティーフの力作である。

美しい自然の中では生えて美しく見えていた衣装も

おしゃれなドレスと並ぶとたちまちくすみ古びた民族衣装に見える。

デザイン画の時点で誰も注意をしてくれなかったのが恨めしく思う。

「私にとっては大事なもののな。でも変よねこんなの」

青ざめたラティーフの顔の横で羽飾りがゆらゆらと揺れる。

子供が紐をほどいて長椅子に逃げ、飛び乗って一回転して着地してみせる。

それを見て歩き始めた第二子がコレットの手を振り切り椅子に突進する。

「母様かっこいいよ。僕もかっこいい？」

子供の手を取り握り締めて窓の外を怯えながらラティーフは見る。

「アネル様そっくり・・・」

コレットが壁際でこっそり以前のラティーフの思い出に浸り微笑む。

「とてもかっこいいわ」

音を消したTV画面には宮殿から伸びた道に人の流れが出来ている。ルーサーがそっと腰に手を回し引き寄せてラティーフを抱きしめると少しだけ気持ちが落ち着く。

「大丈夫だ。僕がついているそうだろう？」

ルーサーの声が空しく聞こえる。

「ええ、ええ・・・」

ラティーフの滑稽さを強調するように民衆の前でラティーフは完璧なルーサーの横に立つのである。
風船のように膨れ上がっていた高揚感は掻き消え、後悔と恥ずかしさにラティーフは包まれている。

グエナエル 1

屋上の大画面を見ようと見上げる顔が
大画面に映し出されるときよとした自分の顔を見つめたまま動
かせない男は

画面が変わると隣の友人と顔を見合わせる。

「お前TV写り悪いな」

「あれ、俺？ やっぱそう、何処かで見た顔だと思ったんだ、へへッ」
照れ笑いをしながら周囲を見回しても誰も男には注意を払わない広
場に居る民衆はころころ変わる画面にくぎつけである。

王宮の門前横、中継車の中ではやぐらからの映像を逐一見逃さない
ようセイジが指示を出す用意をして待っている。

バルコニーへの大扉が開き侍従が止め具を挟んで室内に戻っていく。

「街並みから王宮のバルコニー！ 一カメ。アップで寄ってくれ王様
達が出てくるぞ」

スイツチャーが画面を切り替える。

「七カメ、広場の民衆の全体。それから広場中央に寄って民衆のア
ップ。可愛い子探してズームがぶれるなよ」

七カメは好み女の子を探してはカメラ調整を続けていた。

「OK出てきたぞ。一カメ、二カメ、三カメ。長老達をアップにし
たまま固定。四カメ全員を入れた画像まで引いて！ よし切り替え。」

なんだありや？」

「四カメラ、バルコニーの並び全員はやめた、左端の赤ドレスは入れるな。よし王様の祝賀スピーチだ、音を全部拾えよ」
セイジが黙ると中継車内はしんと静まり返る。

道路の真ん中で待っていた民衆はバルコニーの動きにざわめいた。

「出てきたぞ、おおっ王様は変わらずカッコイイ人だな」

濃紺の長衣を肩にわずかにかけて、さりげなく宝石のついた帯を首から垂らして先頭を気って出てきたのはサガモア王。

「年取って貫禄が出てきたよな。知ってるか？世界の王族で一番カッコいい王様選ばれたんだぞ」

門の横の壁を見ては百メートル先の点のような王様を見る。

「そりゃすごい。皆じじいになってしまっってよ」

後から続く長老達が映し出されると真横の画面と遠くの点の動きを目で追う。

「あの端の赤のドレスは誰だい？」

遠くでも赤い色は目立つ。

「派手だな。隣の顔のいい男が皇太子の服を着ているから皇太子妃？だろう」

皇太子が横の画面でアップになると無駄口がやむ。

画面に皇太子妃が映らず切り替わると、

「は。あの皇太子妃の格好は見たことがあるぜ」

友人の広い額を見ながら考えている。

「あるな・・・」

隣の友人も真面目な顔をして、

「カヤンデルの勇者グエナエルだ」とうなずく、

「へ？信じられねエ。何で又・・・」

素っ頓狂な顔が友人を見る。

「まさかな？」

首を傾げて二人は顔を見合わせた。

「まさかな・・・」

三千年祭を迎えられた祝辞が列席者から述べられると半島ごとの住人が拍手で讃える。

「最後にわしの後を継ぐ皇太子夫妻じゃ皆には始めてである、特に皇太子妃は初めてこのグリスに見えている」

王の紹介で広場鎮まり返る。

期待に満ちた顔がバルコニーの左端に一斉に向く。

「皆様始めてお目にかかります。男の子二人、ガイネス国がこれからも長く発展を続けていきますように」両手を強く握り締めている。

「ガイネス国の三千年祭を祝うことが出来てこんなに嬉しいことはありません。妻共々ガイネスの未来を作っていきましょう」と軽く腰を折り会釈をする。膝が突っ立て曲がらない。

離れた民衆には真横から二人の声は聞こえる。

「子供が二人もいるのか？」

子沢山は良い兆しである。

「らしいな、山の花嫁さんか？別嬪さんか？遠くて顔がわかり辛いのもっと見せてくれんか？」

人山に頭を出し伸び上がって見る、棒のような赤いシルエットしかわからない。

「そうやの・・・そうや」

真剣な目をして拳を作る。

「ゲエナエルから花嫁が来たのか？」

画面の端を見ては隣の人間に声をかける。

「そう云うことになるようだよ」

見えない姿を画面で確かめられず視線を遠くのバルコニーに移す。

「ほんまか？」

赤いスカートはずっと見えている。

「信じられん、夢か・・・ゲエナエル。俺が生きている内にお目にかかれるとは」

「皇太子妃も粹なことをなさる。嬉しいのう」

「あの衣装は勇者の衣装じゃ。あの羽根飾り。なんといってもあの赤・・・」

「羽飾りまで・・・」男には頭の羽根飾りまで見えていない。

「勇者の赤じゃ。ゲエナエル！」と誇らしげに言う。

「ゲエナエルじゃ！」子供の頃の感動が蘇って来た。

「ゲエナエル！ゲエナエル！ゲエナエル！」

「ゲエナエル！」「ゲエナエル！」「ゲエナエル！ゲエナエル！ゲエナエル！」

「グエナエル」「！グエナエル！」

グエナエルの連呼は後ろへ後ろへ繋がって群集は揃ってグエナエルと叫びはじめる。

「なんだ？おい、四カメ。左端の赤いドレスのアップだ！寄れ寄るんだ！細部まで舐めるように撮ってくれ」

「皇太子妃の顔にズームして中央広場の画面に映せ！早く切り替える！」

「リポーター！グエナエルを説明しろ急げ」

たぶん幼児からひねたジジイまでグエナエルを知らない人間はこのガイネスには居ないが映像が見えている国民だけではないのである。

ロックが手元の資料を読み始めるとセイジは主調整室に居る局長を呼び出した。

「トマス！ガイネス史の教授は？あの妃の衣装を見せろ、誰かやって何かコメントをとって来てくれ。急げ！王様が仕掛けた罠かもしれない。いまどき皇太子を選ぶとかいろいろやっているが、王様の人気は地に落ちてるからな。自分の血を分けた子供を世継ぎにしたかっただけで無駄に時間取らせて、今度はグエナエルかよ。あまりにも見え透いてるぜ」

国民をちゃんな仮装で喜ばしている王の意図が見えてセイジは面白くない。

グエナエル 2

狭い中継車の中をくるくるセイジは歩き回る。

「俺達は事実を報道する、それが役目なんだ。イカサマや虚構を押し付けられてたまるか」

と自分自身に言い聞かせる。

バーニーはなんと返事をしてよいか解らずセイジの指示通りにありのままの風景を歓喜に満ちた人の顔の詰まった画面に切り替える。

「俺達国民を騙せやしないぜ。トマス、ガイネス観光局をネットで調べろトマス！聞こえてるだろう？皇太子妃の情報だよ！」

思い詰めた表情で宮殿の方角を睨む

マイクに向かってセイジは必要以上に声を荒げる。

耳には局の主調整ルームでキーボードを叩く音と

街中に広がったグエナエルを呼ぶ民衆の声の大きさに驚いて感想を述べあっている局員達の話し声。

バーニーが手を伸ばしてパソコンをいじると主調整室から送られてきたデーターがパソコン画面に現われる。

「はぁ？妃の出身はセデル国？デタ！何が出た！ロッキイーゼンの選手？馬鹿な・・・カヤンデル山脈が住所？？冗談だろう・・・」

主調整室ではミックリンことミックがスクロールした画面から目を離さず読み上げる。

ミックの横では同じ画面を呼び出してトマスがプリントアウトした

紙を真剣に見ている。

セイジを後ろにバーニーがパソコン画面に送られてきた文字の羅列を読めと指で突く。

「わかって言っているのか？ ガイネスではカヤンデルは神聖な場所だ、だがなセデル国は違う。カヤンデル山脈と住所をつければあの山岳に住む一族のことを蔑視してつけてるんだぞ。たぶんそんな住所を自分から言う奴なんて居ない・・・はずだ・・・」
自分の言っていることを、考え直すうち最初大きかった声が小さくなる。

「三年間その住所でやってたって・・・」
眉間の皺が深くなる。

歩き回っていたことに気が付き元の椅子に座り込む。

「皇太子との結婚の記録はシャプイで・・・その日付は？ なんだ？ シャプイの広告に載ってる？」

ガイネスの半島の景観を流していた回線を切り替えてシャプイのホテルのブログが映し出される。

トップで人間国宝クラスのマイスターの作品が見られるホテルと一押しの文面。

大文字の後に古代からの様式で結婚式を挙げた高貴なカップルと小さな紹介画像。

「その結婚は選手を辞めてからだな？ ちょっと考えさせてくれ。国民に妃の情報を出すか？ いやそこまではいい。ああ、ありがとう教授のコメントを早くくれって」

セイジの独り言にミックがいちいち反応して情報収集に動き回る音

が耳障りである。

雑音を消して考えると頭の中では一つのがまとまりはじめる。

「千年も待って。今このときかよ。まさか。まさかだよな。本気で山族が降りてきたなんて。俺達の一員になった？何で今なんだよ」

ぼろぼろとセイジの目から涙がこぼれる。

「やっと、本当の天辺を迎えたんだね」

耳元でリポーターのロック。

歴史学者と電話連絡を取っていたミックが慌ててマイクに唇をぶつける。

「教授の談話です。赤の色は蘇芳から染めていれば正式なものです。羽飾りは絶滅種の鳥でセデル側で生息しているみたいなんですか。この時世羽根を取れるほどの生息数は確認されていないとか。帯模様は実際に見たことがないのでわからないといっています、映像からだとは良く似ていると。エッと本物の資料は王宮の書庫にあるそうです」

涙と鼻水をすすってセイジはバルコニーを見た

「王様が作ろうと思えば作れるって事か・・ダメだそんな都合のいい話は無い。だが運動能力は抜群だ。ネットの書き込みは褒めちぎってる。どうすりゃいいんだ？局長！」

一部始終を見ていた局長の長いため息はロックとセイジの耳に優しく響く。

「この時だけでいいから喜んで見たらどうだ。俺はここの皆と喜びを分かち合いたい」

「ちくしょう！！街中の画面に皇太子妃の全身と顔のアップを繰り返して写せ。三カメ横顔を狙え

ニカメ笑顔になったら切り替える、ずっとくつついろ！それと皇太子と子供も入れて全員を一カメラに入れて。四カメ、王様や長老の笑顔を上半身を入れて。リポーター、祝いの言葉を。三千年祭ばんざい！」

セイジは十二歳の頃 그리스 最北端の絶壁を見に行った。

千年の昔、武器の無い市民が大虐殺された年、敵国の將軍や兵士の刃の中にこん棒を振り上げ奇襲をかけたグエナエルの彫像が岬にはある。

その台座に登り崖下の北の海の恐ろしさをセイジは忘れていない。

グリスが襲われ街民が山族にたすけを求めた際、彼らはあの崖を登り未熟な武器でかけつけた。

たぶんたくさんの山族が死んだと思われるが遺骸は一体たりとも残さず彼らは去った。

残されたのは敵国の兵士の死体の山、又山。

グエナエルの謂れは三千年以上も前プラテアドの姫君がカヤンデルの山に斎宮として入山したのが山族の始まり。

三千年、長い間遠く離れていた体の一部がやっと元に戻った、そんな気分をセイジは味わっている。

バルコニーの着飾った長老達が何度も民衆に手を振り答えて居なくなる

広場で振る舞い酒を警護していた兵士達は樽の栓を抜いて器を持った一人ひとりに激しい抱擁を繰り返しながら酒を注ぎ声高く歌う。

錦の海にはその人がいるグエナエル
緑の山のその向こう白い頂にはグエナエル
天と地を繋ぐ 雄雄しい姿グエナエル
かの人は我のそばに我のそばにはいつもグエナエル

大広間 1

熱い想いが木々に建物にぶつかって広がる。

民衆は日頃鍛えた腹筋を震わせて思いのたけを歌にこめる。

朗々と鳴り響く群衆の声にサガモアは満足した。

ロックイーゼンという競技が始まったとき競技者の運動能力に驚いた。

テットを使い金で選手を呼び寄せようと命令したことも有る。

ルーサーがセデル国に居る間には確実に一人または二人の女性を王宮に呼び寄せるつもりが選手のガードは固く、万全な警備体制をかくぐり選手とのコンタクトをとることはテットには出来なかった。堅物のルーサーを競技場のそばに寝泊りさせているも興味を示さず王の計画はテットの胸の中に暖められていた。ところが何を間違ったかルーサーはロックイーゼンのスター選手に憧れを抱き、ルーサーの帰国寸前にはラティーフというルーサー憧れの選手が競技を辞めてレイステン市を離れた。

一本気な息子は女性を半分騙して国に連れかえったと思い込んでいたが逐一報告を受けていたサガモアは。

息子は帰国して長老達の中を上手く立ち回り後宮いっぱいとはまでは行かずとも後宮に女性を集めてくれれば少なくとも自分が生きていく間はガイネスは分裂する危機から逃れられると安堵したが息子は長老達の申し出を断り続けた。

後ろ盾の無い他国の女をグエナエルの血筋として迎える事は民衆にどう受け取られるか、笑い者になるか尊厳を取り戻すか賭けに近い。

「祭りにはぴったりの歌だのう」

サガモアが深々と椅子に沈み込むと、他の長老達も思い思いの椅子に座る。

「サガモア王、もう一度紹介してくれまいか。その皇太子一家を」
早朝、礼拝の時はまだ寒く分厚いフードとマントにくるまれたままであった。

それに嫌いな皇太子の妃である、妃から挨拶の口上を半分無視したことを少しばかり後悔している。

「ブラーズ、何を語らせたいのかな。聞きたいことがあらばわしを通さずとも自分で尋ねるが良い」

老人は恨めしくサガモアを見て

疑り深い目はそのまま変えずに窓際に座る皇太子一家に声をかける。

「そうか・・それではアルヴァー皇太子尋ねたい。その妃の衣装は何処でこしらえたかのう？ 良く出来ておる、お子達の衣装もなかなか可愛い」

コレットの長いスカートで遊んでいる二人が窓に揺れるカーテンに目をつける。

「コレット、子供達をあちらの控え室に。眠そうだとルーサー。」

子供等が窓辺のカーテンで木登りを始める前に引っ込めなければならぬ。

我が子ながら野生のサル並みの動きにはついていけない。

コレットに手を引かれて去っていく子供と一緒に席を立ちたいのはラティーフ。

バルコニーから一步室内に入ると矢継ぎ早に質問攻めに会っている。

心配の種が消えるといつもより丁寧な言葉使いで長老達と接するこ
とが出来る。

「ブラウズ様、褒めてくださりありがとうございます。ラティーフ、
衣装の苦勞話をする機会を得られましたよ」

にこやかにルーサーが妻を見つめる。

ルーサーの思惑通りにラティーフの着た衣装に注目が集まっている。
これで妻への認知度が上がる。

説明して・・・とルーサーから促され、

「ルーサー。説明なんて」

あなたから言っ
てよ・・・と目でう
ったえてもルーサ
ーは微笑んでい
るだけである。

四人くらいに同じ事を言った覚えがある。

「これは・・・村の結婚式の時に着る衣装です。羽飾りも山の神と一
緒の印、この帯びは家に伝わる出来事が織られて。このお祭りが
とても大事な式典だと聞いていたので、おしゃれをしたつもりです
けれど皆様とはかけ離れすぎて」

質問者はにこやかに聞いているそぶりだけである。

「その色には意味とかがあるのかな」とブラウズ。

地味な帯びの色と違いスカートの色は赤い。

「この場にそぐわないとお思いでしょう」他の女性達は宝石類は派
手でもシックな色合いが多い。

ブラーズの強い目の光をチラリと見る。

「古い言い伝えでは、戦いで自分の血が赤い生地に染み込んでも解らないようにと。良い意味もあるんですよ。赤い木の実には豊穰の印。この羽根は・・・」

ブラーズは腕組をして椅子に深く座り込む。

その様子はラティーフの説明など聞きたくないと言っている様に見える。

「結婚式の祝いの品物なんだ。そうだよ」

詰まるラティーフに助け舟を出すように言葉を挟む。

「ええ、ルーサーとカヴァンナの丘で式を挙げたときに頂いた物。私の村では美しい羽は個人の財産みたいなものだったから頂いた時は嬉しくて・・・」

今度はルーサーに微笑む、ラティーフの話を聞いてくれるのはルーサーだけである。

ブラーズの顔は他の女性の陰に隠れて見えない。

「カヴァンナの丘・・・か。私にもその羽根を一枚くれぬか」

と今まで黙って聞いていたウルバーノが二人の会話に加わってきた。

目じりの下がったウルバーノの顔はちよつと唇の端を上げるだけで笑っているように見える。

「ええ喜んで」

恥ずかしげに頭から一本羽根を抜き取る。

「いいだろう。わたしはこれでグエナエルと縁戚関係になったぞ」

羽根をなでながら嬉しそうにウルバーノ。
隣でバラディールが床に視線を落とし薄く笑った。

大広間 2

食事の用意が整うまで会話を楽しむ人に解らぬようにラティーフはルーサーに目配せをする。

「グエナエルって、人々が口々に言っていました。似ているの？」と小声。

「子供たちに本を読んでやっただろう」とにこやかにルーサー。

「ぜんぜん違うわよ色も違うし・・・」とラティーフ、

読んでやった絵本はレンジャー隊のヒーローもどき。

完璧な仕上がりではないが忠実に記憶を呼び起こして再現できたと思っている。

私のは花嫁衣裳なのにと不服顔。

三つ隣のウルバーノは胸ポケットに羽を差込みぼんやりとラティーフを盗み見る。

となりの妻バラディールは夫の羽飾りを鼻で笑う。

「確認しておきたいのだが皇太子妃の住んでいた村だが、本当に消えたのかね。村人は一人もいないというのは信じられないのだが」と眠たげなバラディール。

カヤンデルの山脈は雨季には必ずと言っていいほど

地形が変わるくらいの土砂崩れが起きている。

ただ村が全壊するほどの大きな災害はバラディールの記憶には無い。

「あ 悪いね。いやなことを思い出せたかな。いや気になってね、何百人もね消えるなんて。そのとき君は何処にいたのかね。さつきヒドラと言っていたが、向こうのヒドラとこっちのヒドラと意味が違うってご存知かな？」

室内に引っ込んだ途端ラティーフは老人達から質問攻めにあっている。

その受け答えを全てバラディールは聞いていた。

「ごめんなさい。本当に解らないのです。ヒドラは・・今ではどう言ったら。姥捨て山と言ったらわかりますか？私の祖母は年老いたから山奥に入って行ったのです。私どうして会いたくて相談したことがあって、山を彷徨って。たぶん半月は山をうろうろして死ぬかもって思ったことも。ですけど祖母は私を見つけて村に帰るように言われて。村に戻ると、村は・・何も無くて。村は岩屋の中なんです。岩屋はご存知ですか？自然に出来た洞穴なんです。水は洞窟の奥に泉があってその水で暮らしてたんです」

何度思い出しても息が荒くなる。幼い頃からの記憶をもぎ取られた気分である。

「ふーん、ヒドラからの路を間違えて帰ったんじゃないのかね」
淡々と疑問に思ったことをくちにする。

「いいえ周りの景色は見慣れた場所です。村があった場所には土砂の滑った後が行く筋も出来ていて。木切れ一本見つかりませんでした」

記憶は曖昧になりつつあるが生まれ育った場所は岩の形、木の伸び方、歩いた道は忘れていない。

「そのヒドラに行った理由を教えてくださいかな。いや差し支えがなければだが」

穏やかな顔の皇太子妃の暗くなった顔を無視して聞く。

「理由ですか。その・・縁談が・・婚期が遅れていたんです。街ではそんなこと気にしないでしようが私にとっては重大事だったんで、村では結婚しない女性は一人前に扱われない雰囲気があつて。今はこうして子供達にも恵まれていますますがそのときの私は思い詰めていたのです」

自分の気持ちを他人に素直に言うのは辛いが今では笑顔をつくって話せるようになった。

女とはそういう生き物なのよとバラデールは軽く合槌を打つ。

「ヒドラのおばあ様はもう死んでいると思う？」

「ええ、他のオババも皆痩せて骨と皮ばかりになっていて。皆さん死んでいるのか生きているのか解らないくらいでしたの。何体かは奥のほうで動かない方がいましたから死んでいたのでしょうね」

オババが生きていたらこんなにうれしいことは無い

生きていればここに私は居なかったわと隣のルーサーを見る。

「女にとって結婚は大事だ、三年間競技に出ていたんだろう。これはって思う男はいなかったのか？」

皇太子妃が美男子の夫と目を合わせるのみて無粋な質問をして見る。

「居ました。でも振られたんです」

またもや素直にラティーフは答える。

「振られた!?! どうして!」
つい普通に聞いてしまう。

「私が年上だったから、考えられないって」
マイアーとの会話のようにぽんぽんとリズムが良い。

バラデイルに悪気は無いと感じている。

「もったいない!」
ラティーフは華やかさにはかけるがずっと見ていて飽きの来ない顔立ちである。

「ありがとう、今は子供に囲まれて幸せですわ」
思わず満面の笑みで答える。
ついでに夫は居ないけれど、と付け加えたい。

「そりゃ良かった」

食堂への扉が開かれるとぽつぽつと列席者は椅子を離れ
おいしそうな匂いに誘われるように立ち上がる。
朝早くから何も食べていないのである。

皇太子夫妻の後姿をウルバーノは見送りポケットの羽根飾りを無意識に撫でる。

「生き残りだと・・・まったく外に出た奴の考えはその場しのぎばかりで面白くないわい」
モラドの代表者の息子がご一緒しようとうるバーノの機嫌を伺いながら近づいてきた。

妻を忘れて食堂に入る夫を見送りながら長椅子にもたれかかる。
皇太子妃の話を聞いたウルバーノの様子が少しばかり変わったのを
バラデールは見逃さない。

夫は嘘つくときは必ず瞼が動く。

ウルバーノ 1

ガイネス国は中央の半島グリスを堺に
東は水も緑も豊かな土地なのにネグロ、マロン、モラドと
東へ行くほど荒涼とした景色が広がるのは上空を流れる気流せいである

長く荒地を見ながら育つとモラドに住む人間の性格が捻じ曲がっているのは
あながち気候のせいだとも思われる。

海に流れ落ちる水を荒地に引いてモラド半島の中心に
オアシスのように湖を作りその水を使って膨大な工業製品が作られている。

モラドの中心街は一棟数百メートルも有る長い工場が連なり、上空から見ただけではどの建物が何を生産しているのか解らないように皆同じ灰色に塗られている。
その灰色の屋根が延々と続く様は異様である。

空から見たら真四角のこれまた灰色の建物の五階。

時には民間人がグリス宮に負けない豪華な椅子に座るが
いつもは民間人に成りすました軍人が武器の説明を聞きに訪れている。

将校室の開いた窓の空に流れ行く雲を見ながら
終わったばかりの三千年祭をバラディールは思い返している。

皇太子妃は経歴の割には好んで人前に出るような嫌な女ではなかった

た。

本気で母親として自分に満足しているように見えた。
あの絵のように美しい皇太子のお妃にしてはかなり
見劣りがしたが会話を交わすほどに皇太子が魅かれた理由が解る気がした。

見飽きた景色に見切りをつけてバラディールは席を立った。
目的は地下の中央制御室。モラドの地下には国の軍事的中枢の全てがある。

西の端には列を成した巨大なパラボラアンテナ、世界の情勢を逐一地下のスーパーコンピュータに送り解析している。
国別部署ごとに分かれた分析官がコンピュータから齎された情報のランクづけを行い書類にまとめている。

分析官が仕事をしている部屋を通り過ぎ
ガイネスが打ち上げた衛星の画像が送られてきている
オペレーションルームにバラディールは入った。

近くに居た兵士がバラディールを敬礼をして迎える。
兵士は将軍がどの画像に興味を持つか視線を追うが彼女の視線は一つに定まらない。

その後ろから入ってきたのはウルバーノ。
兵士はチラリとウルバーノの顔色を見て衛星から送られてくるモニターに目をやる。
関わらないほうが得策と判断した。

「やあ」とバラディール。
顔を合わせるのは三千年祭以来である。

「おう来ていたのか」

にやけた顔に笑みを浮かべる。

「私が何処へ行って来たのか気にならないようだな」

ウルバーノの落ち着いた態度に嫌味を言う。

「聞いても教えないだろう。ベック中尉を知らないか。ここだと教えられたんだが見当たらないんだ」

「さあ私も今来た所だ。そうだ確かめたいことが有る。ユウジ、ファイルを。隣の部屋に行こうか」

ユウジ中尉は分厚いファイルを小脇に抱えた。

「なんだそれは衛星写真じゃないか」

しかもファイルに収まっているということは相当古い。

部屋を見回してベック中尉が居ないとわかると、不安なのかぎつしりと壁にはまり込んだ映像見ていたが諦めたように先に出て行ったバラディールの後を追うように部屋を出る。

出ればすぐそこにバラディールがたってウルバーノを待っている。ウルバーノが乗ってきたエレベーターの前にはユウジ中尉がファイルを持ってかしこまっている。

「さっさと入れ」 変わらない傍若無人なバラディールの声。

指令室のドアが閉まると透明ガラスの向こうに衛星の軌道修正に目を光らせている兵士が十人働いているのが見える。

角のテーブルにファイルを置いてユウジ中尉は一步下がって、ドアの前に立った。

ウルバーノ 2

何処に居ても押しの効く態度と物言いを通してきたバラディールがウルバーノのにやけ顔に合わせて薄ら笑いを浮かべている。

「通信諜報活動は上手く行っているか。長老達は各国の大臣達と腹の探りあいに長けているから今は表面上押さえ込んでいるがこれからは難しい。もっと効果的にガツンと黙らせる方法があれば良かったのだが最近各国の態度が横柄になってきている。そうは思わないか？」

と事項の挨拶を語るように突っ込んだ意見。

「さあ、俺は特殊諜報活動部隊だからな。情報は集めても交渉相手に直接会うことはないからな。やはり長老達が年を食って能力が落ちてきたのと違うか。ブラーズなどもう隠居してもいい年だ」

この手の話は常時ベックとヤーゴと交わすが今日はそのベックが見当たらない。

ウルバーノはベックを求めてオペレータールームに目を泳がせる。

ウルバーノの視線を冷めた目で見つめ、口をゆがめて気が付かれぬ様に笑う。

「そうだな。言って置くべきだったな。ヒドラにベックは入っている」

垂れた目が驚いて大きくなる。

「何！ヒドラに」

「そうだ。皇太子妃の言うヒドラではないぞ。皇太子妃のヒドラは

歳をとったものだけが行く。私の言うヒドラは」腰に手を置きゆったりと構える。

「知っている。なぜベック中尉がヒドラに拘束されねばならんのだ」ヒドラとはカヤンデル山脈の西の火口のそばにある死ぬまで出られない刑務所。

したり顔のバラディールとは反対にウルバーノの目に怒りが走る。

「私が気がつかないと思っていたのか？三人も妾を認めてやり地位までくれてやった。そうだ三人の妾たちはもうお前の屋敷には居ないぞ。モラドの港からセデル国に逃げ出しただろう。その後は何処に行くかわ知らないが。屋敷はもぬけの空だ」その手配をウルバーノに内緒で行なっていた。

「私の子供達に何をした！」

今まで何も口出ししなかったバラディールが突然愛人をたたき出すとは信じられない。

「何も。貴様の地位を剥奪したと伝えただけだ」

淡々と表情も変えないで、激昂するウルバーノの反応をバラディールは見ている。

「何処にそんな権限がある」

憎しみをこめてバラディールを睨む。

「ある。私はこの軍隊の総大将だ。もう十六年もお前のした事を立証しようとしていたがやっとその証人が現われた。ことの起ころはお前と私が婚姻をした後だ。特殊部隊を任されたお前は足蹴く王宮の書庫に入りセヴェール村の位置を特定した。訓練と称して何度も

山に入ったのは認めるな。そのときに村娘を一人いや一人ではなかったのかもしれない、さらってきている、それから何度も山に入っている。記録によると十八回。それからどういうわけかこの訓練をやらなくなった。どうしてだ？ユウジ、それを出せ」

ドアの前で踏ん張っていたユウジ中尉は持ち場を離れてファイルを持ってバラディールに渡し、すぐに小さなテーブルを二人の間において下がる。

「これは爆薬庫の管理者の持っていたファイルだ。知ってるよなベックだ。セムテックス爆弾を何処で使ったのか言って貰おうか最後の訓練中にこれを使って何をしたのか」

「ベックに聞いて知っているのだろう」

セヴェール村の名前がバラディールから出た途端ウルバーノの怒りは半減した。

ウルバーノがベックの身を案じていないのを確かめる。

「あいつは爆弾を横流しただけで、大したことはしちやいないさ」私にとってはな、国に多大な迷惑をかけているからヒドラには入れたが・・・と心の中でつぶやく

諸悪の根源はべつなのだから。

バラディールのふてぶてしい目が細くなる。

「最初からセヴェール村を消しに行ったのか何のために？鳥の羽を金の代わりに持っている奴等だぞまともなものなんぞあるわけが無い」

細かいことまでバラディールは知っているようだ訓練場所がセヴェ

ール村だと隊員の誰かに吐かせたに違いない。

「特殊訓練なんだ。作戦では隣の国の村の女をさらうつもりで。あの村は何度か女をさらうのに失敗してから警備が厳重になって、だがい訓練にはなる。村の男衆が邪魔だった。奥の寺院の裏に爆弾を取り付けて爆破した。最初の爆発で山に見回りに出ていた連中が戻ってきた。男達が奥に入ったのを見計らって二番目のスイッチを入れた。その爆発で大きな山が一つあの岩屋集落に落ちてきた。ものすごい土砂が後には残ったあの女が言うように柱一本生活用品一個も無かった。あれは計算ミスだったんだ。煙と音でひきつけている間に女をさらえるはずだった」

「あんたの研究対象はグエナエル伝承。どうしてセヴェール村がグエナエルだと判断したの」

一言もグエナエルのことは隊員にはしゃべらなかったのにあの女の出現で繋がってしまった。

「・・・洞窟の奥の寺院だ」

研究の成果を話すのは辛い。

「判断の理由は」淡々とバラデール。

「夢だった。絶対にカヤンデルの懐にあると解っていた。本物の王家の血筋だ。衛星からも探索したが見つからない、山に村は複数あるがどの山村も小さな祠は祭っていても大きいものは無い。あそこは洞窟の奥に寺院を構えて村人は統率が取れているまるで軍隊のようだった、あれはグエナエルそのものだ。俺が発見したんだ」
軍人から研究者の目になり最後は身の危険を感じて保身だけをウルバーノは考えている。

「そして今度はヒドラを探そうとしている」

「え？」

焦った目がバラディールを見る。

これまでは研究者のように振舞えば最後には条件付で見逃してくれていたはずが、もう一歩先を読まれていたらしい。

「特殊部隊の編成を変えただろう？ パラシュート部隊をメインにしている。違うのか？」

「そうだ・・・」

落下地点はもう何箇所かに絞ってある。

古いファイルから目を上げて、

「残念だがお前の行く所はプラテアドのヒドラだ」

バラディールは三行半を言い渡す。

「何を言っている。報告書を見たのか私が壊したのは訓練のための野山で、そりゃ勝手に爆弾を使用したことは悪かっただが、これも特殊な状況下の訓練をするためと書いてあるだろう。私は地位を剥奪されるようなことはしていない。この話もただの世間話に過ぎない。わたしの研究を話したただけだからな」

バラディールと話している間に罪をかぶせられる人間を見つけ出した。

筆頭はもうすでにヒドラに入っているベック中尉、次は長老達との会見の多いヤーゴ参謀。

こんなこともあるのかとウルバーノは矢面に立たないできている。

「最初に話したことを覚えているか」
ヒドラに行けと言われても余裕のあるウルバーノが腹立たしい。

「通信情報活動がなんとか」
逃げおおせる道が見えてきている。

バラデイルがファイルの下書類を見るようにあご上げる。

「そのファイルは貴様がコンタクトを取った要人ばかりだ。武器の売買だけに王様も怒り心頭だ。

どれだけ売ったんだ？ ガイネスの本業にまで食い込んでくるとはい度胸だ。自分が売った物には追跡装置がついていないと思っただろう？ 工場長をあなどるなかれ。お前の嘘を見抜いていたのさ国際基準に則って仕事をしていた。したがってお前の売ったものはガイネスの製造番号が打たれている、そしてすぐに調べられる。分かったか、この意味が」

黙り込んだウルバーノを冷ややかに見下ろしてユウジ中尉に合図を送る。

細かい確認作業は全て終わった。

「ユウジ、国賊をこの部屋から連れ出せ！ フン国賊という言葉ももっていない。墓荒らし。墓泥棒だな貴様はその名前が一番相応しい」
「知っているのか？ ならどうしてずっと黙っていた？」

垂れた目の皺が大きく引き伸ばされる。長老達を使って古い王家の墓から遺体を集めている。

ユウジがドアの外に合図を送ると待ち構えていた兵士が二人ウルバーノの両脇にたち腕をとる。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n0997x/>

－蘇芳－ （Caesalpinia sappan）

2011年12月7日12時48分発行